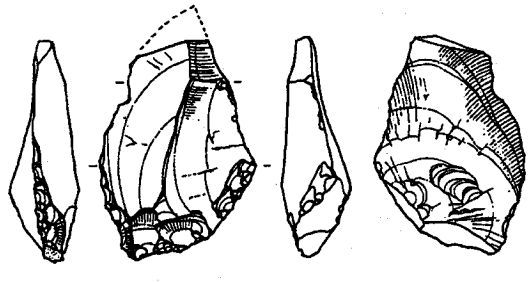
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第399 集

那　珂　14

— 那珂遺跡群第38次、41次、42次、46次調査報告 —



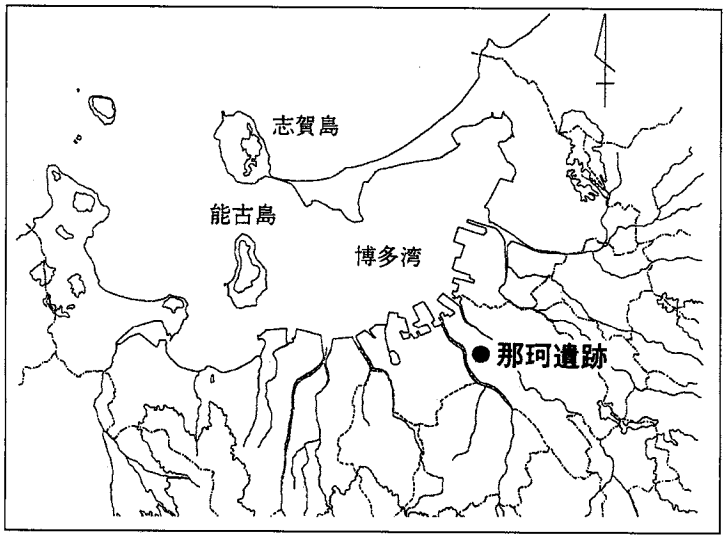
1 9 9 5

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第399 集

那　珂　14

— 那珂遺跡群第38次、41次、42次、46次調査報告 —



1 9 9 5

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な交流の窓口でした。その中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印にある「奴国」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会ではそれらの開発によって失われていく遺跡については、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群は「奴国」のもっとも重要な拠点集落でもあり、これまで50次の調査が実施され、数多くの貴重な遺構、遺物が発見されました。本書は民間開発に先立って行われた第38次、41次、42次、46次調査の報告であります。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

最後に調査にご協力を頂いた吉村ヨシエ様、桑原幸子様、山根久雄様、波多江忠雄様、川辺弘明様をはじめとする方々には厚くお礼申し上げます。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は1992年～1993年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した、那珂遺跡群第38次、41次、42次、46次調査の報告書である。各調査の担当は第38次は宮井善朗、第41次は菅波正人、第42次は下村智、第46次は加藤隆也である。

2．本書に使用した遺構の実測は山崎龍雄、下村智、佐藤一郎、宮井善朗、菅波正人、加藤隆也、林田憲三、英豪之、李タウン、上方高弘が、遺物の実測図は下村、小畑弘己、宮井、菅波、加藤、熊野御堂和香子、中暢子が行った。製図は下村、宮井、菅波、加藤、熊野御堂、林由紀子、中、吉田香代が行った。

3．本書に使用した遺構、遺物の写真は下村、宮井、菅波、加藤が撮影した。

4．本報告書の作成にあたっては石津玲子、岩崎加奈子、中願寺希、佐々木涼子、藤信子の協力を得た。

5．遺構番号は各調査地点ごとに付けられている。遺構略号は掘立柱建物→SB、竪穴住居跡→SC、溝→SD、井戸→SE、土坑→SK、柱穴→SPとした。

6．本書に使用した方位は磁北である。

7．本書の執筆は第３章は宮井、５章は下村、６章は加藤、１、２、４章は菅波が行った。また、第４章の旧石器時代の遺物については小畑弘己氏(埋蔵文化財センター)に整理報告、第６章の赤色顔料については本田光子氏に分析報告を依頼した。編集は各担当者と協議して、菅波が行った。

8．本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……（菅波正人）　1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　１．遺跡の立地 …… 2
　２．周辺の遺跡 …… 2
　３．これまでの調査成果 …… 4
第３章　第38次調査の記録 ……（宮井善朗）　7
　１．調査に至る経過 …… 7
　２．概要 …… 7
　３．調査の記録 …… 7
　　１）埋葬遺構 …… 7
　　(1)　甕棺墓 …… 7
　　(2)　土壙墓 …… 16
　　２）住居跡 …… 19
　　３）土壙 …… 21
　　４）その他の遺物 …… 30
　４．まとめ …… 33
第４章　第41次調査の記録 ……（菅波正人）　35
　１．調査の概要 …… 35
　２．調査の記録 …… 37
　　１）掘立柱建物(SB) …… 37
　　２）竪穴住居跡(SC) …… 38
　　３）土坑(SK) …… 39
　　４）井戸(SE) …… 45
　　５）溝(SD) …… 52
　３．旧石器時代の遺物 ……（小畑弘己）　59
　４．福岡市内の旧石器時代遺跡地名表 …… 69
　５．小結 ……（菅波正人）　75
第５章　第42次調査の記録 ……（下村　智）　76
　１．調査に至る経過 …… 76
　２．調査の記録位置・環境 …… 76
　３．検出遺構・遺物 …… 76
第６章　第46次調査の記録 ……（加藤隆也）　83
　１．調査に至る経過 …… 83
　２．調査の概要 …… 83
　３．遺構と遺物 …… 85
　　１）竪穴住居跡(SC) …… 85
　　２）井戸(SE) …… 94
　　３）土坑(SK) …… 96
　　４）溝(SD) …… 98
　　５）その他の遺物 …… 100
　４．那珂遺跡46次調査出土の赤色顔料について ……（本田光子）　100
　５．小結 ……（加藤隆也）　100

挿　図　目　次

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡(1／50000) …… 3
Fig. 2　那珂遺跡群調査地点位置図(1／8000) …… 5
Fig. 3　第38次調査区位置図(1／500) …… 8
Fig. 4　第38次遺構配置図(1／100) ……（折り込み8 ～9 ページ）
Fig. 5　甕棺墓12、13実測図（1／30）出土甕棺実測図（1／12） …… 11
Fig. 6　甕棺墓14、18実測図（1／30）出土甕棺実測図（1／12） …… 12
Fig. 7　甕棺墓20（1／30）出土甕棺実測図（1／12） …… 13
Fig. 8　甕棺墓23、45実測図（1／30）出土甕棺実測図（1／12） …… 14
Fig. 9　甕棺墓11、21実測図（1／30）出土甕棺実測図（1／12） …… 15
Fig.10　甕棺墓16、19、22、46実測図（1／30） …… 17
Fig.11　甕棺墓16、19、22、46出土甕棺実測図（1／12） …… 18
Fig.12　甕棺墓24、17、15実測図（1／30）出土甕棺実測図（1／8 、1／12） …… 19
Fig.13　土壙墓９、44実測図（1／30）出土土器実測図（1／4 ） …… 20
Fig.14　住居跡２、４、42実測図（1／60） …… 22
Fig.15　住居跡25、27実測図（1／60）出土遺物実測図（1／4 ） …… 23
Fig.16　土壙１実測図（1／60） …… 25
Fig.17　土壙１出土遺物実測図（1／4 ） …… 26
Fig.18　土壙28実測図（1／60） …… 27
Fig.19　土壙６実測図（1／40）出土遺物実測図（1／4 ） …… 28
Fig.20　土壙５、７実測図（1／40） …… 28
Fig.21　各遺構出土遺物（1／4 ） …… 29
Fig.22　那珂遺跡群における甕棺墓地（1／8000） …… 31
Fig.23　那珂遺跡群出土の甕棺（1／24） …… 32
Fig.24　第41次調査地点位置図(1／1000) …… 35
Fig.25　第41次調査地点遺構配置図(1／200) …… 36
Fig.26　掘立柱建物(SB)遺構実測図1(1／100) …… 38
Fig.27　掘立柱建物(SB)遺構実測図2(1／100) …… 39
Fig.28　掘立柱建物(SB)出土遺物実測図(1／4) …… 39
Fig.29　竪穴住居跡(SC)遺構実測図1(1／60) …… 41
Fig.30　竪穴住居跡(SC)遺構実測図2(1／60、1／40) …… 42
Fig.31　竪穴住居跡(SC)出土遺物実測図(1／4、1／3 、1／2) …… 42
Fig.32　土壙(SK)遺構実測図(1／40) …… 43
Fig.33　土壙(SK)出土遺物実測図(1／4) …… 44
Fig.34　井戸(SE)遺構実測図(1／40) …… 46
Fig.35　SE-016 出土遺物実測図1(1／4) …… 47
Fig.36　SE-016 出土遺物実測図2(1／4) …… 48
Fig.37　SE-016 出土遺物実測図3(1／6) …… 49
Fig.38　SE-029 出土遺物実測図1(1／4) …… 50
Fig.39　SE-029 出土木製品実測図(1／3) 及びSE-020 出土遺物実測図(1／4) …… 51
Fig.40　溝(SD)遺構配置図(1／300) …… 52
Fig.41　溝(SD)土層断面図(1／40) …… 53
Fig.42　SD-004 出土遺物実測図1(1／4) …… 54
Fig.43　SD-004 出土遺物実測図2(1／4 、1／6) …… 55
Fig.44　SD-004 出土遺物実測図3(1／4) …… 56

Fig.45　SD-004 、007 、003 、006 出土遺物実測図(1／4、1／2 、1／1)…… 58
Fig.46　那珂遺跡41次調査地点と周辺の旧石器出土地点の位置図(1／50000) …… 59
Fig.47　石器出土状況図(1／400、1／100)…… 61
Fig.48　旧石器時代の遺物実測図(1)(2／3) …… 63
Fig.49　旧石器時代の遺物実測図(2)(2／3) …… 64
Fig.50　石器の法量(長・幅) グラフ…… 66
Fig.51　石器・剥片の重量別ヒストグラム…… 66
Fig.52　旧石器時代の遺物実測図(3)(2／3) …… 67
Fig.53　福岡市内の旧石器時代遺跡分布図(1／200000) …… 70
Fig.54　市内各地出土の旧石器実測図(2／3) …… 72
Fig.55　第41次調査地点遺構変遷図(1／300) …… 76
Fig.56　第41次調査地点周辺遺構分布図(1／6000) …… 77
Fig.57　第20次、第23次調査地点遺構配置図(1／600) …… 78
Fig.58　那珂遺跡第42次調査遺構全体図 (1／90) …… 79
Fig.59　SC-01・02遺構実測図(1／40) …… 81
Fig.60　SK-04遺構実測図(1／20) 及び出土遺物実測図 (1／4) …… 82
Fig.61　第46次調査地点周辺測量図(1／1,000) …… 83
Fig.62　第46次調査地点遺構分布図(1／100) …… 84
Fig.63　SC-01 遺構実測図(1／50) …… 85
Fig.64　SC-01 出土土器実測図(1／3) …… 86
Fig.65　SC-02 遺構実測図(1／40) …… 87
Fig.66　SC-02 出土土器実測図(1／3) …… 87
Fig.67　SC-03 遺構実測図(1／40) …… 88
Fig.68　SC-03 出土遺物実測図(1／3・1／8) …… 88
Fig.69　SC-04 遺構実測図(1／40) …… 89
Fig.70　SC-05 遺構実測図(1／40) …… 90
Fig.71　SC-05 出土遺物実測図(1／3・1／4) …… 91
Fig.72　SC-13 遺構実測図(1／40) …… 92
Fig.73　SC-13 出土土器実測図(1／3) …… 93
Fig.74　SC-14 遺構実測図(1／40) …… 93
Fig.75　SC-14 出土土器実測図(1／3) …… 94
Fig.76　SC-18 遺構実測図(1／40) …… 95
Fig.77　SE-16 遺構実測図(1／50)・出土土器実測図(1／3) …… 95
Fig.78　SK-12･15･17･19･21 遺構実測図(1／30) …… 97
Fig.79　SK-20･22･24･25 遺構実測図(1／30) …… 98
Fig.80　SK出土遺物実測図(1／1・1／3 ・1／4) …… 99
Fig.81　SD-08 断面実測図(1／40) ・出土遺物実測図(1／3) …… 99
Fig.82　遺構面出土遺物実測図(1／2) …… 100

図 版 目 次

扉

PL. 1　1. 調査区全景（東半区　北から）　2. 調査区全景（西半区　北から）
PL. 2　1. 甕棺墓群（1）(北から)　2. 甕棺墓群（2）(北から)
PL. 3　1. 甕棺墓11、12（東から）　2. 甕棺墓13（東から）
PL. 4　1. 甕棺墓14（東から）　2. 甕棺墓18（西から）
PL. 5　1. 甕棺墓45（西から）　2. 甕棺墓20（東から）
PL. 6　1. 甕棺墓19（北から）　2. 甕棺墓21（南から）

PL.7　1. 甕棺墓22（南から）　2. 甕棺墓46（西から）
PL.8　1. 甕棺墓16（南から）　2. 甕棺墓24（西から）
PL.9　1. 甕棺墓13、14、15（西から）　2. 甕棺墓15（東から）
PL.10　1. 土壙墓9（西から）　2. 土壙墓44（南から）
PL.11　1. 甕棺墓17（西から）　2. 住居跡25と甕棺墓群(北から)
PL.12　1. 住居跡４（西から）　2. 住居跡４とカマド痕跡(南から)
PL.13　1. 住居跡25（西から）　2. 土壙28と甕棺墓群(北から)
PL.14　1. 土壙１（東から）　2. 土壙１土層(北から)
PL.15　1. 土壙28（西から）　2. 土壙28土層(北から)
PL.16　1. 土壙６遺物出土状況（南から）　2. 土壙７(北から)
PL.17　1. 第41次調査地点から見た那珂八幡古墳、剣塚古墳(南から)
　　2. 第41次調査地点(南東から)
PL.18　1. 第41次調査地点全景(西から)　2. 第41次調査地点東側全景(西から)
PL.19　1. SB-019 検出状況(西から)　2. SB-035 、036 検出状況(西から)
PL.20　1. SB-013 、022 ～024 検出状況(西から)　2. SC-009完掘(西から)
PL.21　1. SC-009遺物出土状況(東から)　2. SC-009中央炉(南から)
PL.22　1. SC-010完掘(西から)　2. SC-021完掘(南から)
PL.23　1. SC-009竈検出状況(南から)　2. SC-009竈遺存状況(南から)
PL.24　1. SE-016 上層遺物出土状況(南から)　2. SE-016 下層遺物出土状況(南から)
PL.25　1. SE-029 完掘(東から)　2. SE- 029 遺物出土状況(東から)
PL.26　1. SD-004 土層堆積状況（北から）
　　2. SD-004 、2 トレンチ第 2層下面遺物出土状況（南から）
PL.27　1. SD-004 、2 トレンチ第 3層遺物出土状況（南から）
　　2. SD-004 、3 トレンチ第 2層下面遺物出土状況（北から）
PL.28　1. SD-004 、3 トレンチ完掘（北から）　2. SD-002 完掘（西北から）
PL.29　1. SD-007 完掘（西から）　2. SD-007 土層堆積状況（西から）
PL.30　1. SD-006 完掘（西から）　2. SD-006 、1トレンチ土層堆積状況（南から）
PL.31　1. SD-006 、2 トレンチ土層堆積状況（南から）
　　2. SD-006 、3 トレンチ土層堆積状況（南から）
PL.32　1. SD-003 完掘（南から）　2. SD-001 完掘（西から）
PL.33　1. 旧石器出土状況(南から)　2. 旧石器時代の遺物1(表)
PL.34　1. 旧石器時代の遺物1(裏)　2. 旧石器時代の遺物3
PL.35　1. 調査区全景(東から)　2. SC01・02出土状況(南から)
PL.36　1. SK04出土状況(南から)　2. SK04遺物出土状況(南から)
PL.37　1. 第46次調査地点全景(南から)　2. SC-01 完掘状況(南から)
PL.38　1. SC-02 完掘状況(北から)　2. SC-03 完掘状況(北から)
　　3. SC-05 完掘状況(北から)　4. SC-13 完掘状況(東南から)
　　5. SC-14 完掘状況(北西から)　6. SC-18 完掘状況(南から)
PL.39　1. SC-05 遺物出土状況(東から)　2. SC-03 遺物出土状況(北西から)
　　3. SE-16 完掘状況(北から)　4. SK-12 完掘状況(西から)
　　5. SK-17 完掘状況(西から)　6. SK-22 完掘状況(西から)
PL.40　1. SK-19 完掘状況(南から)　2. SK-25 完掘状況(東から)
　　3. SD-08 断面(東から)
PL.41　1. SC-01 出土遺物　2. SC-02 出土遺物
　　3. SC-03 出土遺物　4. SC-05 出土遺物
PL.42　1. SC-13 出土遺物　2. SC-14 出土遺物　3. SE-16 出土遺物
　　4. SK出土遺物　5. SD-08 出土遺物　6. 遺構面出土遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

那珂遺跡群は昭和46年、森貞次郎氏によって、最初の調査が行われて以来、1994年度現在、50次に及ぶ調査が行われてきた。その結果、環濠をはじめとする様々な集落遺構、銅剣、銅矛、銅戈等の青銅器鋳型が発見され、弥生時代の代表的集落遺跡として知られることとなった。しかし、その一方で遺跡内での開発は顕著で、相次ぐビル建築で日々町並みは変化している。埋蔵文化財課では遺跡内及びその周辺で開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のための設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議の上、記録保存のための調査を実施している。本書には1992～1993年度に行われた那珂遺跡群第38次、41次、42次、46次調査地点の報告を掲載する。

調査一覧

調査地点	那珂遺跡群第38次調査	那珂遺跡群第41次調査	那珂遺跡群第42次調査	那珂遺跡群第46次調査
調査番号	9225　NAK38	9264　NAK41	9308　NAK42	9347　NAK46
地図番号	25-0085	38-0085	37-0085	38-0085
調 査 地	博多区那珂6丁目80-1	博多区竹下5丁目509	博多区那珂1丁目476	竹下5丁目432-2
開発面積	1004㎡	893㎡	396㎡	635㎡
調査面積	566㎡	550㎡	63㎡	250㎡
調査期間	1992.07.23～09.04	1993.03.15～05.21	1993.05.22～05.31	1993.11.01～12.08

2．調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、吉村ヨシエ様、桑原幸子様、山根久雄様、波多江忠雄様、川辺弘明様には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託　那珂第38次- 吉村ヨシエ、桑原幸子、第41次- 山根久雄、第42次- 波多江忠雄
第46次- 川辺弘明

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉(前任)、尾花剛
文化財部長　花田兎一(前任)、後藤直
埋蔵文化財課長　折尾学
埋蔵文化財第二係長　塩屋勝利(前任)、山崎純男

調査庶務　埋蔵文化財第一係　吉田麻由美(前任)、西田結香

調査担当　下村智、宮井善朗、菅波正人、加藤隆也

調査協力　山崎龍雄、佐藤一郎、小畑弘己

調査補助　林田憲三、李タウン、上方高弘

調査作業　上野龍夫　亀井好明　熊本交伸　大長正弘　谷英二　徳永静夫　中川敏男　野中辰雄
広田熊雄　藤野保夫　別府俊美　松井一美　吉住作美　河井健　石川洋子　岩瀬恵美子

古賀典子　澄川アキヨ　武田潤子　中村ふみ子　永松伊都子　西本スミ　野口ミヨ
日比野典子　森山キヨ子　脇山喜代子

整理作業　石津玲子　岩崎加奈子　大石加代子　太田順子　小森佐和子　佐々木涼子　田中依里
竹田千代　中願寺希　土斐崎ツヤ子　堂園晴美　藤信子　中暢子　林由紀子

なお、調査、整理に当たって、西谷正先生(九州大学)、小田富士雄先生(福岡大学)、吉留秀敏氏、小畑弘己氏、本田光子氏から多くの御教示を頂いた。

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地

福岡市の大半を占める福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狭義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。那珂遺跡群は両河川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵北端に立地する。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。2㎞先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約1.6㎞、東西約0.8㎞が予想され、現在の標高7～9ｍを測る。

2．周辺の遺跡

福岡平野では数多くの遺跡が知られているが、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代遺跡がほぼ全域に分布する。春日丘陵には須玖岡本遺跡をはじめとして、その周辺では須玖永田、須玖坂本、須玖唐梨、岡本バンジャク、赤井手、大谷遺跡等で青銅器工房、埋納遺構が検出されており、質、量ともに他の弥生時代集落を圧倒している。春日丘陵から北側では弥永原、井尻、五十川、比恵遺跡等の遺跡が間断なく続いていく。又、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、弥生時代後期の環濠、大型建物跡や多量の木製品が検出された雀居遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した甕棺墓が出土した諸岡遺跡等が存在する。一方、丘陵の北側の砂丘上に立地する博多遺跡群でも弥生時代前期には集落の形成が始まっている。

古墳時代においても、丘陵上の集落は継続していく。沖積地部分では那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡等で水田跡、大規模な井堰や水路が検出されている。一方、古墳は那珂川流域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳にはじまり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多1号墳、貝徳寺古墳、日拝塚古墳、剣塚古墳という系譜が想定されている。

古代においては福岡平野は那珂、御笠、席田の3郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。ところで、那珂郡衙の所在地はまだ限定しえないが、博多区那珂周辺に設けられた可能性がある。比恵遺跡群は那珂遺跡群の北側に位置し、弥生時代に始まる数多くの遺構、遺物が検出されている。そのなかで第8次、第7･13次、第39次調査地点では、6 世紀後半に位置づけられる大型の倉庫群、建物、柵が検出されている。これらは宣化元年(536)に、設置された「那津官家」に関連する遺構と考えられ

1. 博多遺跡群
2. 福岡城
3. 堅粕遺跡群
4. 箱崎遺跡群
5. 吉塚遺跡群
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居遺跡
12. 五十川高木遺跡
13. 井尻遺跡群
14. 曰佐遺跡群
15. 須玖唐梨遺跡
16. 須玖永田遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖四丁目遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目拈渡遺跡
23. 井相田遺跡群
24. 麦野遺跡群
25. 三筑生産遺跡
26. 南八幡遺跡群
27. 雑餉隈遺跡群

Fig. 1　福岡平野の主な遺跡(1/50000)

ている。「那津官家」の所在については福岡市南区三宅に置かれたという説もあるが、現在は前者が有力な推定地である。

3．これまでの調査成果

那珂遺跡群は昭和46年に森貞次郎氏による調査以来、1994年度現在、50次の調査が行われた。その結果、弥生時代の数多くの遺構、遺物が検出され、奴国の重要な拠点集落であることが認識された。また、古墳時代以降も那珂八幡古墳、東光寺剣塚古墳などの首長墓、古代の大型建物等が検出され、弥生時代以降連綿と続く複合遺跡であることが判明した。

遺跡の時期的変遷を簡単に見ていくと、那珂遺跡群で遺構、遺物が確認できるのは旧石器時代まで遡れる。第８次、第９次、第13次調査地点ではナイフ形石器が検出されている。また、第41次調査地点ではナイフ形石器等を含む包含層が検出されている。

続く縄文時代は突帯文土器期以前の出土例はほとんどない。集落は突帯文土器期に開始する。この時期の遺構、遺物は遺跡群の西側の縁辺部でまとまって見られる。アサヒビール工場内で行われた第10次、第21次調査地点では突帯文土器が貯蔵穴、包含層から出土している。また、第37次調査では突帯文土器期の二重環濠が検出されている。

弥生時代以後は遺跡は間断無く継続していく。弥生時代前期は遺跡群の東西の縁辺部で集落は形成される。東側では第4次、31次調査で甕棺墓、木棺墓が検出されている。西側では第21次調査で貯蔵穴が検出されている。中期になると、集落は台地の中央にも拡大する。遺構では環濠、竪穴住居跡、井戸等が多数検出されている。第20次、第23次調査では台地上を東西方向に延びる環濠が検出され、環濠からは多量の祭祀土器が出土している。また、第21次調査では墳丘墓と考えられる区画の溝を伴う甕棺墓群が検出されている。遺物では第1次、第20次、第23次調査では銅剣、銅戈等の鋳型が出土しており、青銅器生産が行われていたことが分かる。後期においても、集落は継続されていく。第18次、第41次、第49次調査では環濠が、第8次、第13、32、34次等で、竪穴住居跡、井戸も検出されており、拠点的な集落であったことが窺える。

古墳時代初頭では福岡平野の最初の首長墓である那珂八幡古墳が築造される。那珂八幡古墳からは第6 次調査で第２主体部から三角縁神獣鏡が検出されている。第34次調査や周辺の試掘では古墳の周溝が調査され、周溝は鍵穴形を呈し、墳丘の全長も約85mを測ることが分かった。また、古墳は直前まであった居住域に築造されたことも分かった。この時期の集落遺構では多量の外来系土器を伴う竪穴住居跡、井戸等が見られるようになる。しかし、これ以後、６世紀後半まで集落遺構についても、埋葬遺構についてもその数は激減する。

６世紀後半では福岡平野の最後の首長墓と考えられる東光寺剣塚古墳が築造される。それと同時に集落遺構も再び、見られるようになる。７世紀代では第18次、第23次調査で軒を連ねた総柱建物が検出された。また、第８次、第23次、第32次調査地点では南北方向の大溝が検出され、台地上に溝で区画された施設の存在が伺える。遺物では第22次、第23次調査では神ノ前窯の軒丸瓦が、第13次、第26次、第32次、第34次調査では百済系単弁軒丸瓦が出土している。比恵遺跡群に所在地が推定される那津官家以後の、官衙的施設の存在が予想される。その後の那珂郡衙についても本遺跡群に位置すると考えられるが、確証は得られていない。

以上、時期的変遷を簡単に触れたが、各調査地点の詳細は既刊の報告書を見て頂きたい。

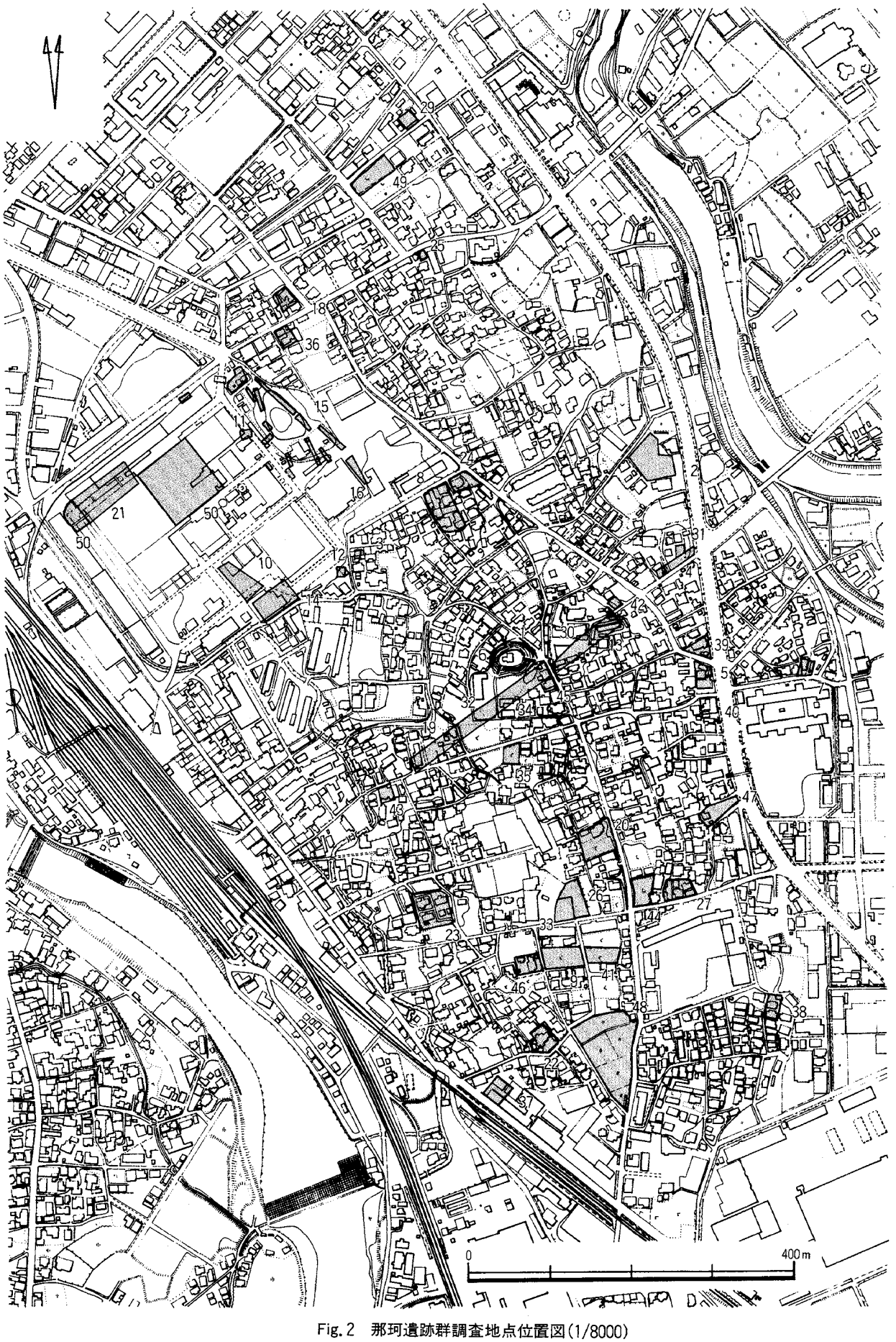


Fig. 2　那珂遺跡群調査地点位置図(1/8000)

那珂遺跡群　調査一覧

次数	番号	所　在　地（博多区）	面積(m²)	調査年	調査原因	備　　考
1	7901	那珂１丁目44番	24	1971	学術調査	「九州考古学」53号
2	7414	那珂１丁目237－１外	231	1974	倉庫建設	「福岡市歴史資料館報告」第２集
3	7705	那珂１丁目680番	2	1977	住宅建設	
4	8036	那珂１丁目277番外	300	1980	道路建設	福岡市報告書第82集
5	8328	那珂１丁目377－2,3	100	1983	ビル建設	
6	8505	那珂１丁目44番	534	1985	重要確認	福岡市報告書第141集
7	8530	那珂３丁目８番	495	1985	公民館建設	福岡市報告書第162集
8	8609	那珂１丁目601番外	1350	1986	共同住宅建設	福岡市報告書第153集
9	8703	竹下５丁目463番	1030	1987	共同住宅建設	
10	8727	竹下３丁目１－１	862	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
11	8732	竹下３丁目１－１	5	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
12	8733	竹下３丁目１－１	20	1987	倉庫建設	福岡市報告書第291集
13	8736	那珂２丁目地内	1536	1987	道路建設	福岡市報告書第222集
14	8832	竹下３丁目１－１	1200	1988	倉庫建設	福岡市報告書第291集
15	8802	竹下３丁目１－１	－	1988	重要確認	福岡市報告書第267集
16	8849	竹下３丁目１－１	240	1989	倉庫建設	福岡市報告書第291集
17	8850	竹下３丁目１－１	177	1989	変電所建設	福岡市報告書第291集
18	8855	東光寺１丁目23－５	463	1989	ビル建設	福岡市報告書第292集
19	8848	竹下５丁目地内	1600	1989	道路建設	福岡市報告書第323集
20	8906	那珂２丁目257番外	1406	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第324集
21	8923	竹下３丁目１－１	1988	1989	工場建設	福岡市報告書第291集
22	8935	竹下５丁目420	776	1989	共同住宅建設	福岡市報告書第253集
23	8936	竹下５丁目270－１外	1428	1989	保育所建設	福岡市報告書第254、290集
24	8982	那珂１丁目35	325	1989	共同住宅建設	
25	8983	東光寺１丁目218	100	1989	共同住宅建設	
26	9002	那珂２丁目249番	436	1990	共同住宅建設	福岡市報告書第407集
27	9003	那珂２丁目７－22	756	1990	共同住宅建設	
28	9008	東光寺１丁目312番外	150	1990	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
29	9026	東光寺１丁目162番外	313	1990	倉庫建設	福岡市報告書第361集
30	9046	那珂１丁目462－１	80	1990	倉庫建設	福岡市報告書第292集
31	9053	那珂沼口802－15	123	1991	共同住宅建設	福岡市報告書第292集
32	9115	那珂１丁目地内	1300	1991	道路建設	福岡市報告書第365集
33	9122	那珂２丁目249－１	275	1991	共同住宅建設	福岡市報告書第364集
34	9144	那珂１丁目地内	1100	1992	道路建設	福岡市報告書第365集
35	9145	那珂２丁目213－１	20	1992	住宅建設	福岡市報告書第365集
36	9217	東光寺１丁目332番外	154	1992	共同住宅建設	
37	9224	那珂６丁目314番外	1215	1992	倉庫建設	福岡市報告書第366集
38	9225	那珂６丁目80－１	690	1992	共同住宅建設	本報告書（399集）
39	9228	那珂１丁目362	493	1992	共同住宅建設	
40	9256	那珂２丁目５番	460	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第367集
41	9264	竹下５丁目509番	550	1993	共同住宅建設	本報告書（399集）
42	9308	那珂１丁目476番	63	1993	削平工事	本報告書（399集）
43	9315	竹下５丁目112－２	132	1993	倉庫建設	年報（1993年度）
44	9328	那珂２丁目122，123	821	1993	共同住宅建設	福岡市報告書第398集
45	9333	那珂１丁目829	200	1993	住宅建設	年報（1993年度）
46	9347	竹下５丁目432－２	250	1993	共同住宅建設	本報告書（339集）
47	9414	那珂２丁目100－１	450	1994	共同住宅建設	
48	9437	竹下５丁目412 外	2000	1994	共同住宅建設	
49	9438	東光寺１丁目148 外	723	1994	共同住宅建設	
50	9441	竹下３丁目１－１	6380	1994	工場建設	

第３章　第38次調査の記録

１．調査に至る経緯

1992年３月25日付けで、吉村ヨシエ氏、桑原幸子氏より、共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は那珂遺跡群内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて４月１日に試掘調査を行った。その結果申請地内には遺構、遺物が、良好に残っていることが判明した。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、吉村、桑原氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、1992年７月23日に着手し、９月８日に終了した。

また調査時には中村建設株式会社には多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

なお調査、整理に当たって、西谷正先生（九州大学）、小田富士雄先生（福岡大学）から多くの教示をいただいた。

２．調査の概要

調査地点は那珂遺跡群の南東端に近く、東側は小規模な崖面を成して沖積地に接する。赤褐色の鳥栖ローム上で弥生時代から古墳時代を中心とした遺構を検出した。弥生時代の遺構としては甕棺墓、土壙墓、土壙等がある。甕棺墓の時期は中期中頃から中期末に及ぶ。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡６基、土壙などがある。竪穴式住居は調査区南端に集中しており、集落の中心は南側であろう。また大規模な土壙（溝？）が調査区東端と南端に検出された。幅３ｍほど、深さ１～1.5ｍの大きなものである。Ｌ字型の一連の溝になる可能性もある。この他にも小規模な溝、土壙などが多数検出され、土壙のうちのいくつかは、埋葬遺構の可能性も考えられる。

３．調査の記録

１）埋葬遺構

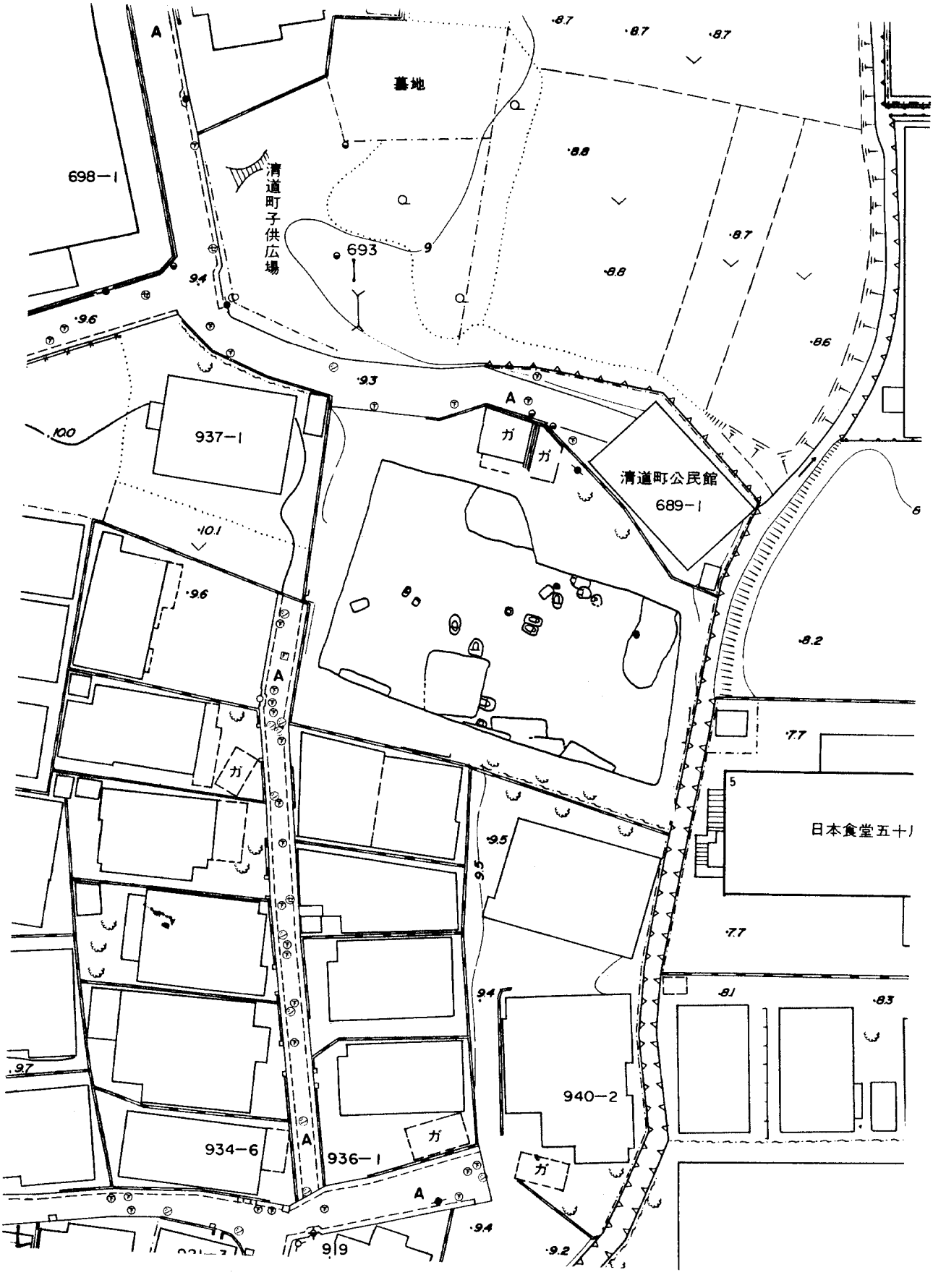
(1)　甕棺墓

甕棺墓は16基検出された。内、確実な小形棺は１基のみである。削平の著しいものがあるところから、浅い小形棺は既に削平を受けている可能性がある。甕棺墓については、検出時には他の遺構と共に検出順に番号を付したが、ここでは、出土甕棺の内大形棺を森貞次郎氏の分類に準じて須玖式と、立岩式に大別し、それぞれを遺構番号ごとに叙述し、小形棺と型式不明のものを最後にまとめて叙述する。

甕棺墓12（Fig. ５）

以下に記する甕棺墓12～45は須玖式に属する甕棺墓である。甕棺墓12は調査区のほぼ中央付近で検出した。甕棺墓11に切られる。主軸をＮ－117°－Ｅに取る。埋置角は32°である。上甕を大きく削平される。掘方は長楕円形である。一部後世の遺構に削平されるが長1.7ｍ、幅１ｍほどであろう。下甕底部側は、横に掘り込んでいる。

上甕　鋤先口縁の鉢である。口縁部はほぼ平坦で、上面がわずかに凹む。口縁部下に突帯を１条巡らす。復原径68cmを測る。


墓地
698−1
清道町子供広場
693
937−1
清道町公民館
689−1
日本食堂五十
940−2
934−6
936−1

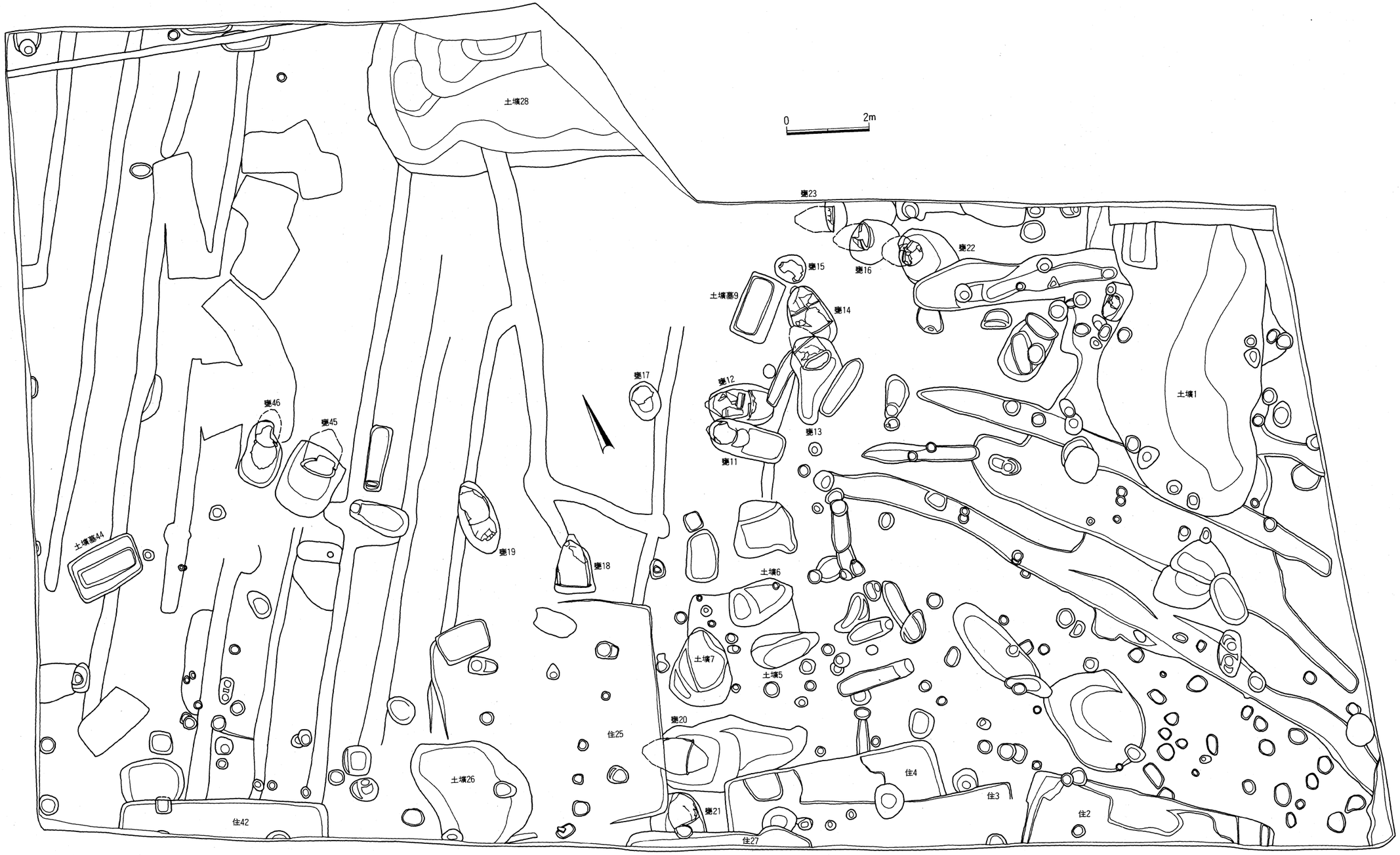


Fig. 4　那珂遺跡群第38次調査　遺構配置図(1/100)

下甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は厚く、内外に張り出す。端部は内外とも坦面をなす。口縁部下に１条、胴部中位に２条断面三角の突帯を施す。口径67.4cm、器高105cm、底径13cmを測る。

甕棺墓13（Fig. 5）

甕棺墓12の東側で検出した。甕棺墓14を切るが、13と14は甕棺の型式としてはほとんど差は無い。主軸はN－171°－Eにとる。埋置角は18°である。掘方は楕円形で、長1.5m、幅1.1mを測る。単棺で、底部側は横に大きく掘り込む。

甕棺　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は内側への張出しは小さい。外端部は坦面をなす。口縁下に１条、胴部中位に２条の三角突帯を巡らす。口径68.5cm、器高104.5cm、底径12.6cmを測る。

甕棺墓14（Fig. 6）

甕棺墓13の北側で検出した。甕棺墓13に切られる。主軸をN－178°－Eにとる。埋置角は４°で、ほぼ水平に近い。掘方は楕円形を呈し、長1.6m、幅１mを測る。甕棺に比して掘方が小さく、窮屈な感がある。単棺である。

甕棺　胴部径に比して、丈高の感がある大形甕である。口縁部は鋤先口縁で、内外ともそれほど大きく張り出さない。外端部は坦面をなす。口縁下に１条の断面台形の突帯、胴部中位に２条の断面三角突帯を巡らす。口径80cm、器高109cm、底径14cmを測る。

甕棺墓18（Fig. 6）

調査区の中央近く、甕棺墓11の南西側５mほどの地点で検出した。主軸はN－158°－Wにとる。埋置角はほぼ水平に近い。掘方は口縁部側に次第に広くなる楕円形で、長1.6m、最大幅1.1mを測る。底部側は横方向に掘り込み安定を図っている。単棺である。

甕棺　鋤先口縁の大形甕である。口縁外端は坦面をなし、内端は丸くおさめる。口縁下に１条、胴部中位に２条断面三角の余り高くない突帯を巡らす。底部付近にハケメが残る。口径89.8cm、器高117.4cm、底径８cmを測る。

甕棺墓20（Fig. 7）

調査区の中央南端に近い地点で検出した。現代の撹乱に大きく削平されており、掘方の形態にやや不明な点があるが、中段以下の、楕円形部分が本来の掘方であろう。主軸はN－125°－Eにとる。埋置角は２°で、ほぼ水平に近い。長2.1m、幅1.5mを測る。掘方は下甕部分を１段掘凹め、また底部側も横に掘り込んで棺の安定を図る。上甕は口縁を下甕内に差し入れている。

上甕　鋤先口縁の大形鉢である。口縁部外端は坦面をなす。体部は余り張らない。口縁部下に断面三角の低い突帯を１条巡らす。口径70.3cm、器高45cm、底径13.2cmを測る。

下甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は強く外傾する。外端部は坦面をなし、内端部は丸みを持つ。口縁部下および胴部中位にそれぞれ２条、断面三角の比較的高い突帯を巡らす。口径86.6cm、器高120.6cm、底径16.2cmを測る。

甕棺墓23（Fig. 8）

調査区の中央北端で検出した。掘方の北側は調査区外にでる。甕棺墓16に切られる。主軸はN－116°－Eにとる。埋置角はほぼ水平に近い。口縁部側に大きく空間を取り、胴部以下の大部分を横穴を掘って据えている。検出面での掘方は楕円形で、長1.2m、幅１mほどに復原できよう。横穴部は長0.75m、幅0.9mほどを測る。単棺である。

甕棺　鋤先口縁の大形甕である。口縁部はほぼ水平で、内側に強く張り出す。口縁下に断面台形の突帯を１条、胴部中位に断面三角の突帯を２条巡らす。器高に比して口径が小さくスマートな感がある。口径58.4cm、器高96.5cm、底径12.4cmを測る。

甕棺墓45（Fig. 8）

調査区西端近くで検出した。主軸はN－135°－Wにとる。埋置角は29°である。底部側に横穴を掘り、胴部中位以下をおさめる。掘方は楕円形で、口縁部側の端部に段を持つ。長1.8m、幅1.3mを測る。横穴部は長0.5mを測る。単棺である。

甕棺　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は内側にはほとんど張り出さず、L字状を呈する。わずかに外傾する。口縁部下に1条の断面三角突帯、胴部中位に2条の断面台形の突帯を巡らす。胴部は卵形に若干張る。外面の一部にハケメが残る。須玖式の中では後出的である。口径73.2cm、器高110cm、底径12.8cmを測る。

甕棺墓11（Fig. 9）

甕棺墓11、21は須玖式併行の丸みをもつ甕棺と考えられる例である。甕棺墓11は調査区中央付近で検出した。甕棺墓12を切る。上甕を大きく削平される。主軸はN－129°－Eにとる。埋置角は32°である。掘方は長楕円形であるが、底部側に横穴を掘込むものであった可能性もある。下甕部分が斜めに掘り込まれ段状を呈する。長1.9m、幅0.8mを測る。上甕が下甕にかぶさった状態で埋置されている。

上甕　中形の甕形土器である。口縁はやや「く」の字に近い鋤先状を呈する。内端部には明瞭な稜が立つ。胴部はかなり張るようである。口縁部下に断面三角突帯を1条巡らす。外面にはハケメが見られる。復原口径42cmを測る。

下甕　胴部のかなり張る鋤先口縁の大形甕である。口縁部は外傾する。最大径はほぼ中位にあり、そのわずか下位に2条の三角突帯を巡らす。口縁部下にも1条の三角突帯を巡らす。口径35.2cm、器高73cm、底径11.6cmを測る。

甕棺墓21（Fig. 9）

調査区南端で検出した。古墳時代住居跡と思われる遺構27によって削平されており、上甕が大きくずり落ちている。主軸はS－3.5°－Wにとる。埋置角は13°程である。掘方はほぼ楕円形に復原されよう。長1.2m以上、幅1m以上を測る。底部側はわずかに掘り込む。下甕部分は一段低くなるようである。

上甕　鋤先口縁の甕である。口縁部片のみ残っている。口縁は内外に強く張出し、外端は坦面を持ち、内端は丸くおさめる。口縁部下に断面三角の突帯を1条巡らす。胴部はかなり張るようである。口径46.4cmを測る。

下甕　口縁部を打ち欠くが、11号甕棺下甕と似た器形になると思われる。胴は強く張り、最大径は胴部中位にある。最大径付近に断面三角の突帯を2条巡らす。現状で器高75cm、底径11.2cm、打ち欠き部の径36cmを測る。

甕棺墓16（Fig.10.11）

甕棺墓16、19、22、46は立岩式の甕棺である。甕棺墓16は甕棺墓23の南側で検出した。甕棺墓23を切る。主軸はN－107°－Eにとる。埋置角は24°程である。掘方は不定円形で、横穴を掘り込む。径1.2mほどを測る。横穴部分は長50cmほどを測る。単棺である。

甕棺　鋤先口縁の大形甕である。口縁はわずかに内傾する。内外に張出し、外端は坦面をもつ。肩が強く張り胴部は丸みが強い。口縁部下に1条、胴部中位に2条、断面三角の突帯を巡らす。外面にはハケメが残る。口径60.5cm、器高86.8cm、底径13.2cmを測る。

甕棺墓19（Fig.10.11）

調査区中央で検出した。甕棺墓18の西側にあたる。主軸はほぼ南北方向、埋置角は5.5°程である。

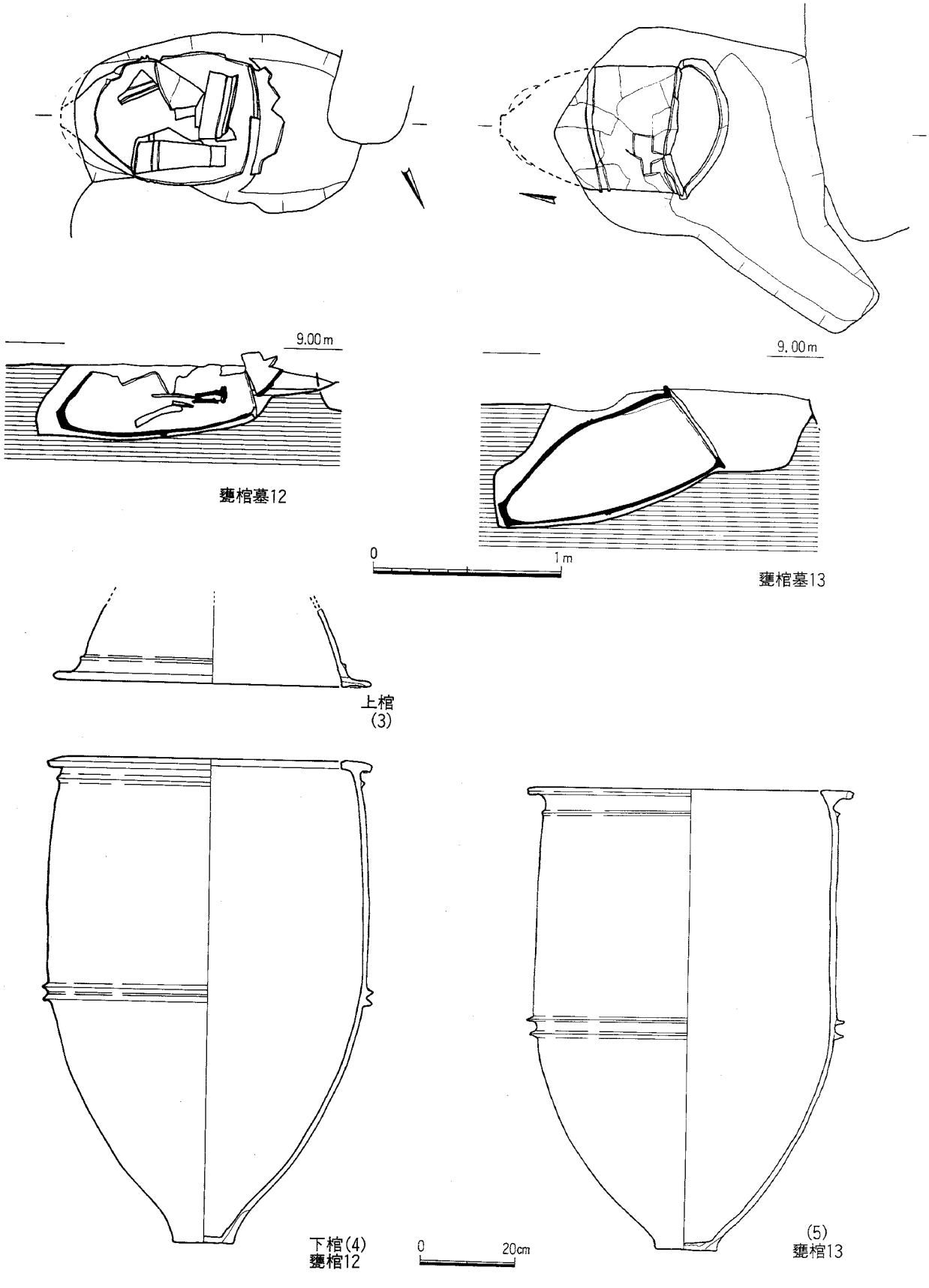


Fig. 5　甕棺墓12・13実測図(1/30)、出土甕棺実測図(1/12)

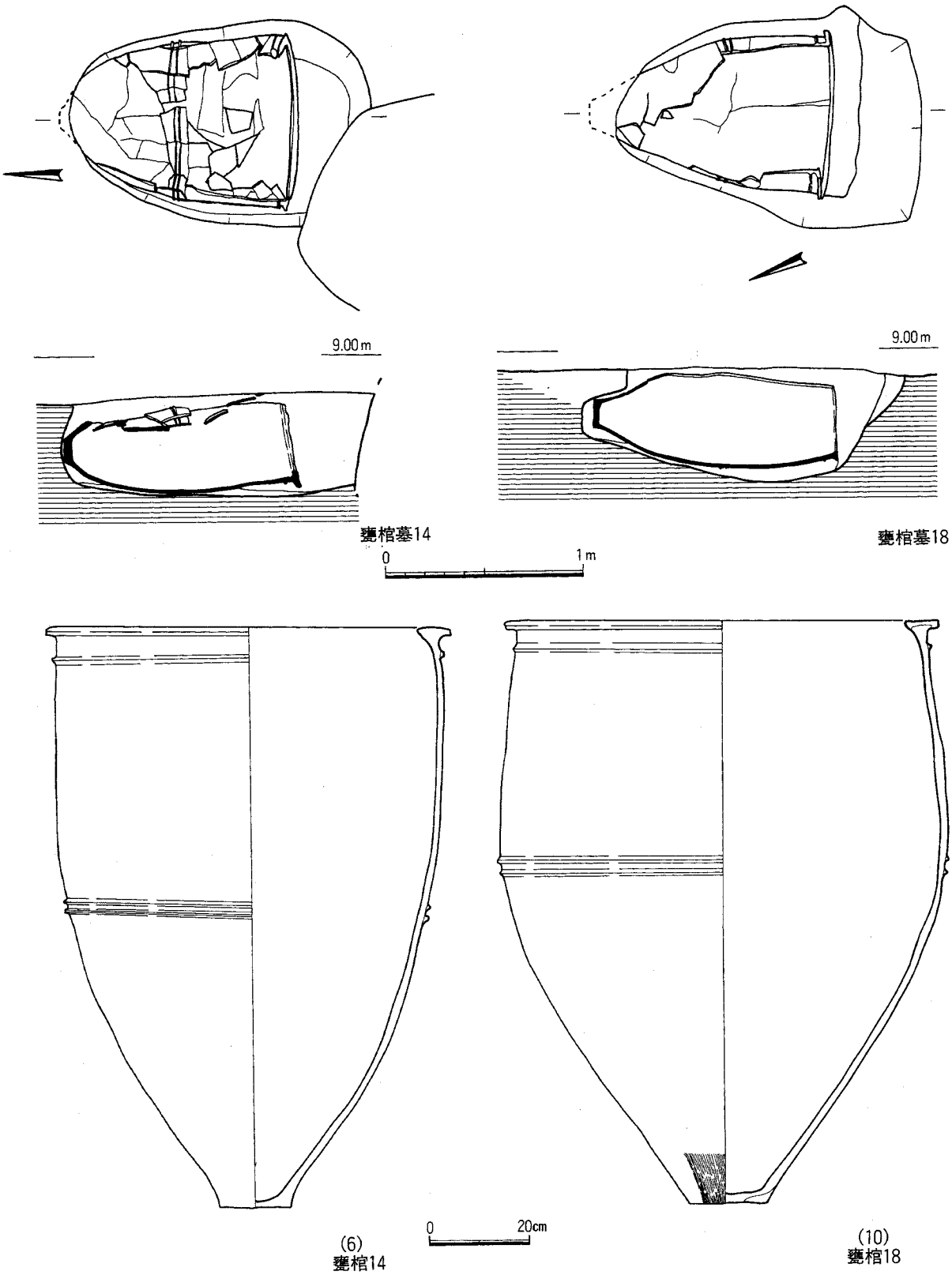


Fig. 6　甕棺墓14・18実測図(1/30)、出土甕棺実測図(1/12)

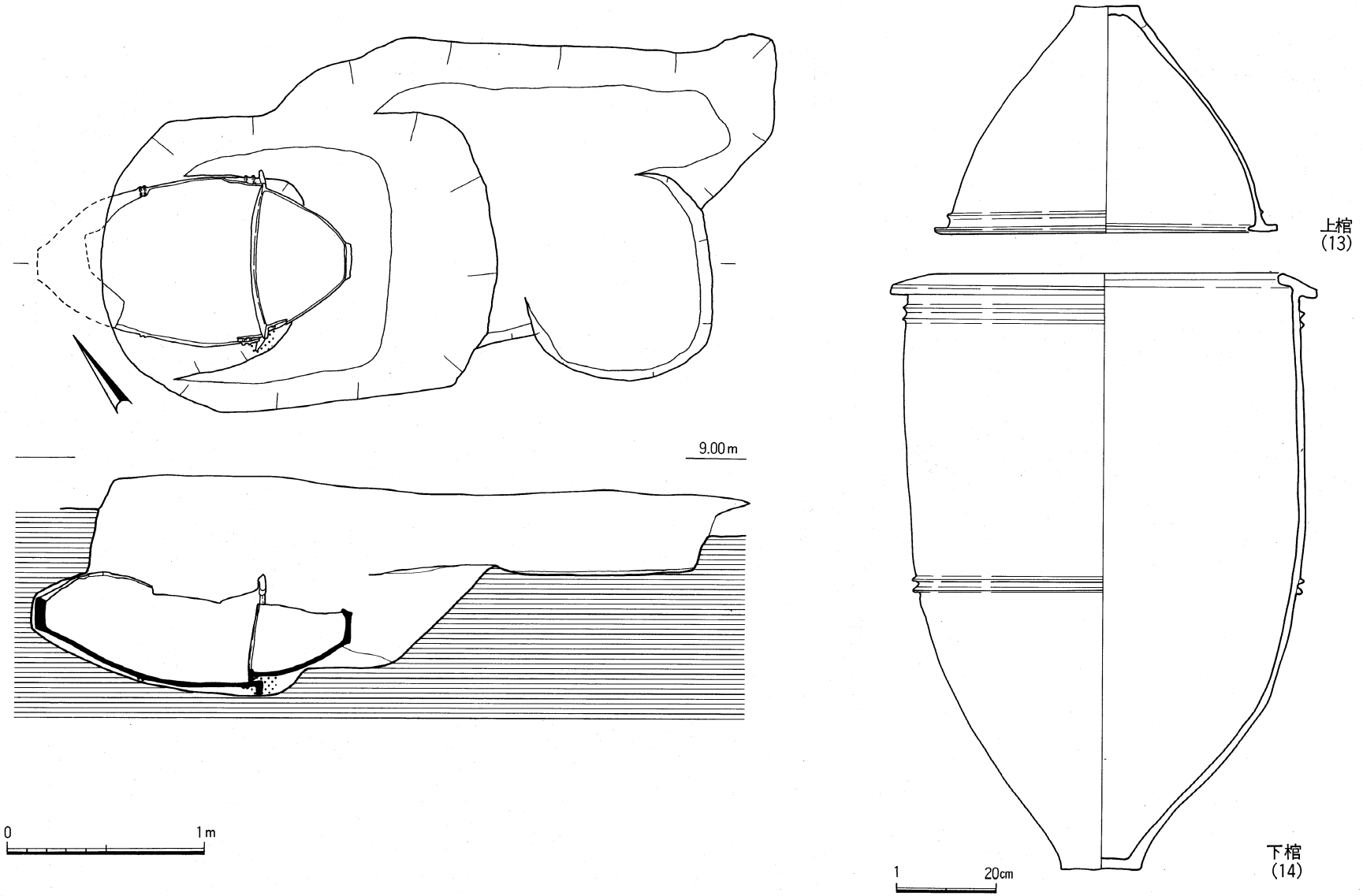


Fig. 7　甕棺墓20(1/30)、出土甕棺実測図(1/12)

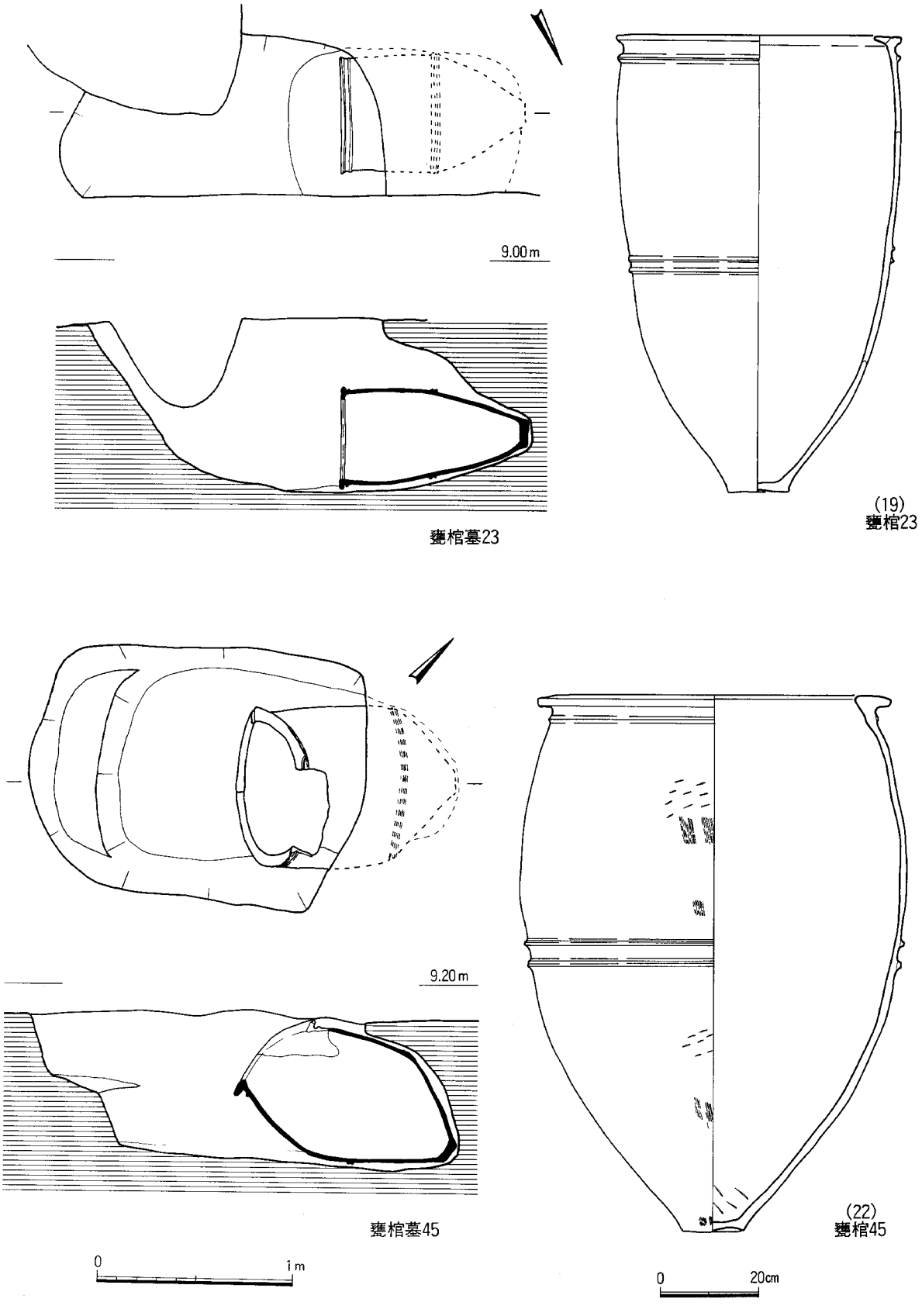


Fig. 8　甕棺墓23・45実測図(1/30)、出土甕棺実測図(1/12)

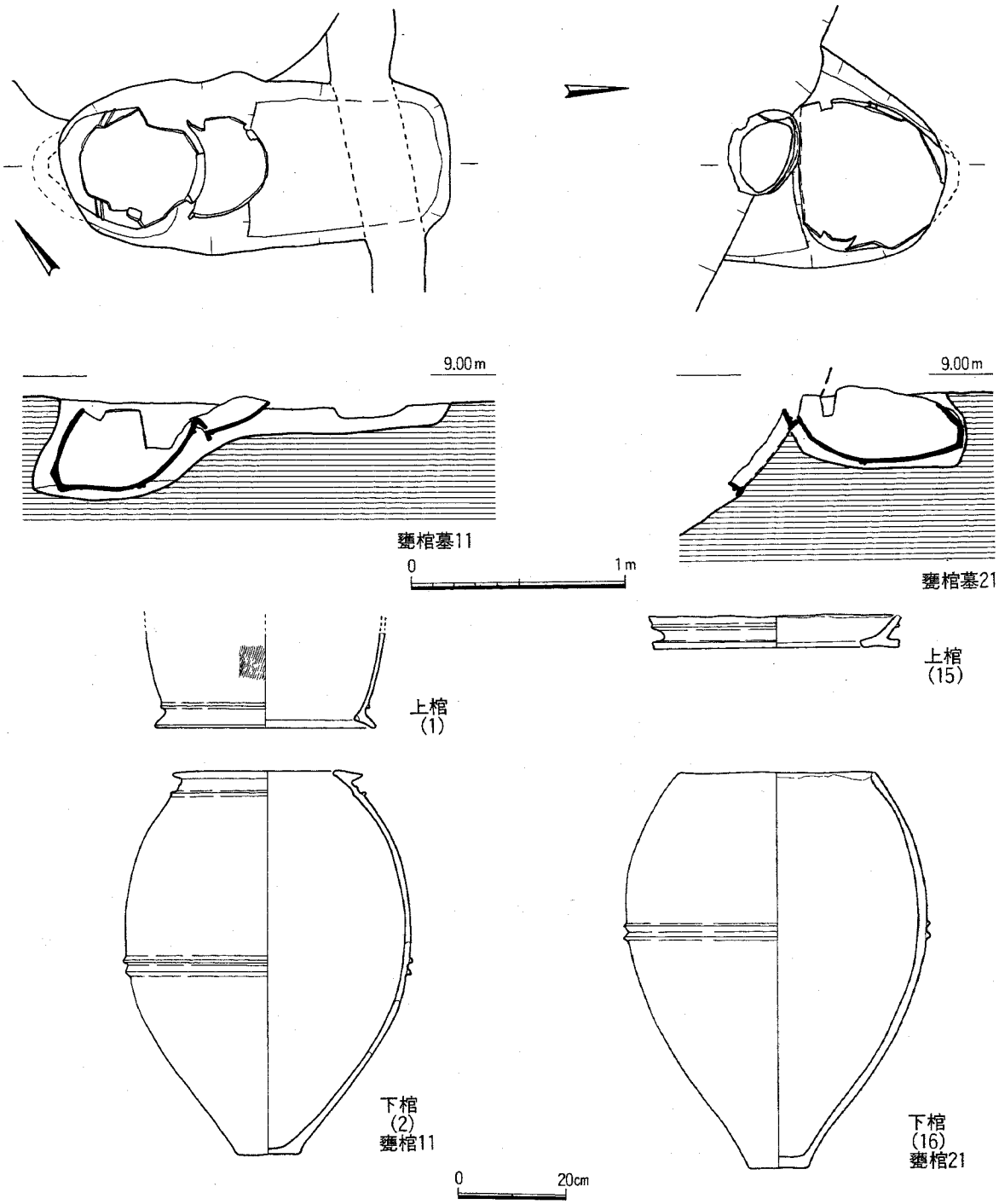


Fig. 9　甕棺墓11・21実測図(1/30)、出土甕棺実測図(1/12)

掘方は現状では長楕円形を呈するが、上半部を削平されており、本来は横穴を掘り込むものかも知れない。長1.8m、幅0.9mを測る。

上甕　口縁部を打ち欠いた大形甕である。底部は削平のため欠損する。最大径より下がった位置に2条の断面三角突帯を巡らす。打ち欠き部での復原径42cmほどを測る。

下甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は内傾し、内外に張り出す。端部は内外とも坦面をもつ。胴部は丸みを持ち、最大径は中位にあり、この位置に断面三角の突帯を2条巡らす。胴部下半は直線的にすぼまり底部にいたる。口径52cm、器高88.8cm、底径12cmを測る。

甕棺墓22（Fig. 10.11）

調査区北端、甕棺墓16の東側で検出した。主軸はN－126°－Eにとる。埋置角は37°程である。上半部を削平される。現状では掘方はやや卵形に近い円形で、横穴を掘り込む。長1.5m、幅1.3mを

測る。横穴部分は長0.5mを測る。床面は緩く傾斜する。
上甕　底部を削平で失うが、壷形土器の下半部を用いる。胴部の突帯の上部で打ち欠く。胴部最大径部に1条、その5cmほど上位に1条断面M字の突帯を巡らす。打ち欠き部での径48cmを測る。
下甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁部は強く内傾する。口縁部下に1条の断面三角の突帯を、胴部中位に断面台形の突帯を2条それぞれ巡らす。肩が強く張り胴部は卵形に近い。口径49.3cm、器高96.3cm、底径12.4cmを測る。

甕棺墓46（Fig.10.11）

調査区の西端、甕棺墓45の西側で検出した。主軸はN－143°－Wにとる。埋置角は23°程である。掘方は幅狭の長楕円形で、下甕部分を横穴を掘り込んでおさめたものであろう。長1.3m、幅0.9mを測る。横穴部分は0.6mほどに復原されよう。床面は緩く傾斜し、下甕下半付近で平坦になる。上下とも甕形土器を用いた合口棺である。
上甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁は内傾し、外側に強く張りだす。肩が強く張り、卵形を呈する。口縁下に1条、胴部中位に2条断面三角の突帯を巡らす。底部付近にハケメが残る。口径42cm、器高73.2cm、底径11.2cmを測る。
下甕　鋤先口縁の大形甕である。口縁は内傾し、外側に強く張りだす。肩は余り張らず、緩やかに丸みを帯びる。口縁下に1条断面三角の突帯、胴部中位に2条断面台形の突帯を巡らす。外面にハケメが残る。口径53.7cm、器高93cm、底径12.2cmを測る。

甕棺墓24（Fig.12）

調査区西端で検出した。合口の小形棺である。主軸はN－54°－Eにとる。埋置角は23°程である。掘方は長楕円形で、下甕の下半部を横穴を掘り込んで埋置する。長1.1m、幅0.6mを測る。
上甕　器高に比して口径の大きい甕形土器である。口縁部は内傾し、かなり「く」の字に近くなる。胴部は丸みが強く、広く安定した底部をもつ。外面にはハケメが見られる。口径29cm、器高22cm、底径9.6cmを測る。
下甕　甕形土器の口縁部を打ち欠いたものを用いている。胴部はかなり丸みを帯びる。底部は安定した平底である。突帯などは見られない。打ち欠き部の径23cm、器高37.5cm、底径10cmを測る。立岩期併行の小形棺である。

甕棺墓15（Fig.12）

調査区北端、甕棺墓14の北側で検出した。大きく削平され、下甕の下半しか残っていない。主軸はN－140°－E程であろうか。遺存した甕棺の大きさから大形棺であったと思われる。現状では掘方は楕円形で、長75cm、幅70cmを測る。
甕棺　下半部分のみの破片である。底部は安定した平底である。底径は13cm、胴部最大径は70cmほどに復原できよう。

甕棺墓17（Fig.12）

調査区中央、甕棺墓11、12の西側で検出した。甕棺墓15と同様大きく削平されている。主軸はN－176°－E程であろうか。埋置角は40°程であろう。掘方は現状では楕円形で、長90cm、幅75cmを測る。大形棺と考えられる甕棺墓15、17が他の甕棺に比べて非常に遺存が悪いのは奇妙であるが、調査区内では、この2基の甕棺墓から北西側にかけては、非常に遺構が希薄である。本来かなりの高まりがあり、平坦にするために大きな削平が行われたのであろう。
甕棺　下甕の下半部のみの破片である。底部は平底である。外面にはハケメが見られる。底径は12cm、胴部最大径は65～70cm程であろう。

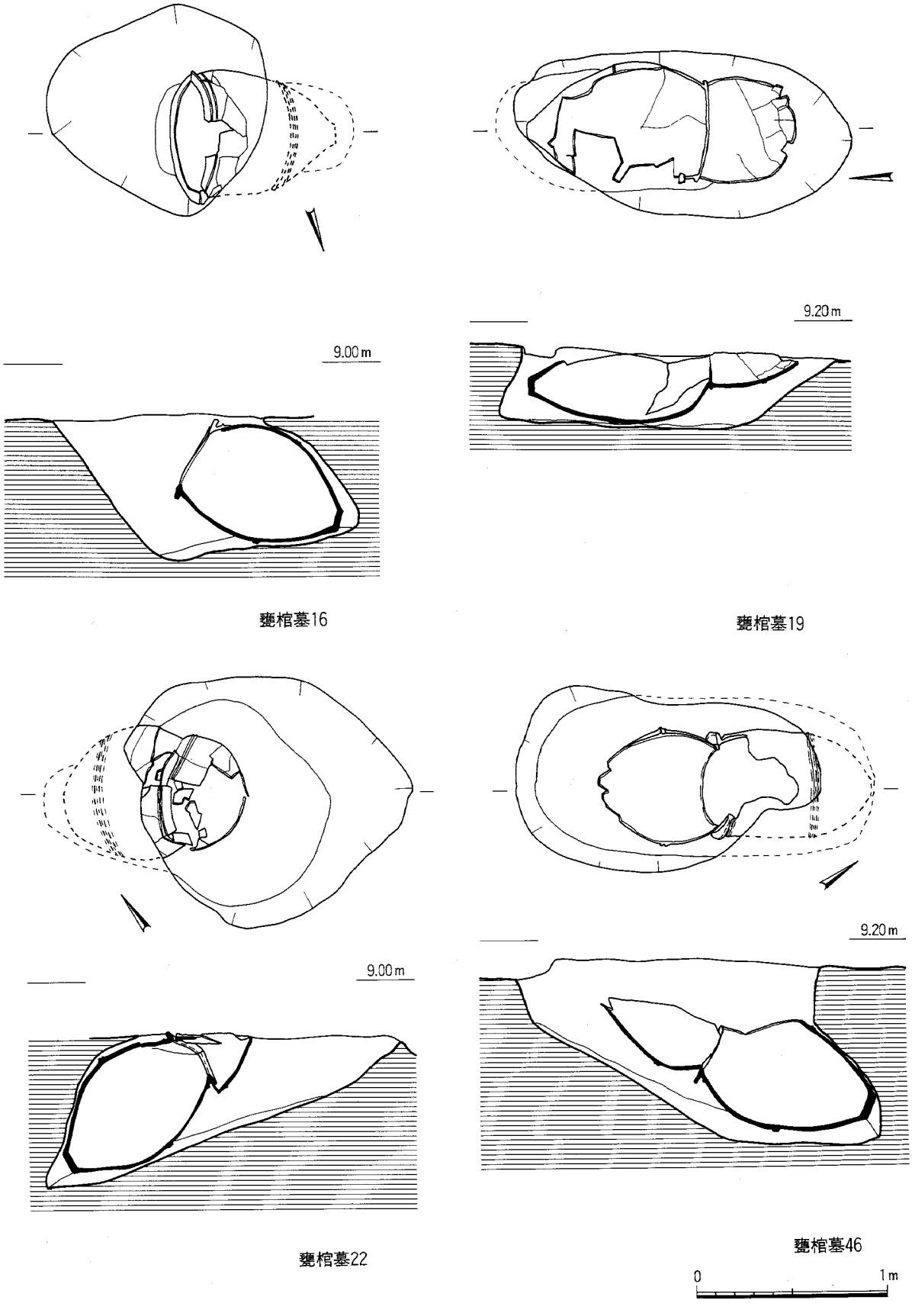


Fig. 10　甕棺墓16・19・22・46実測図(1/30)

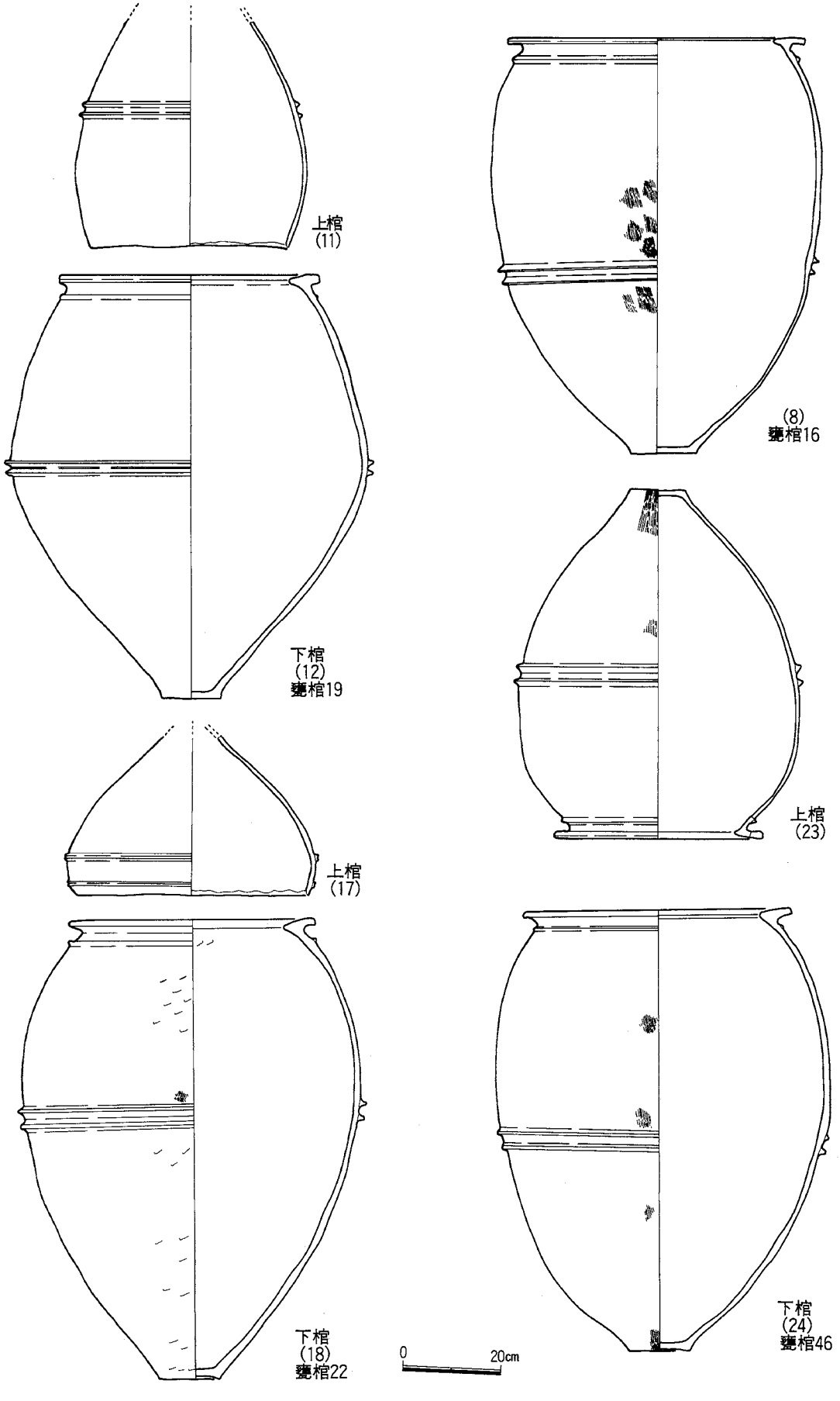


Fig. 11　甕棺墓16・19・22・46出土甕棺実測図(1/12)

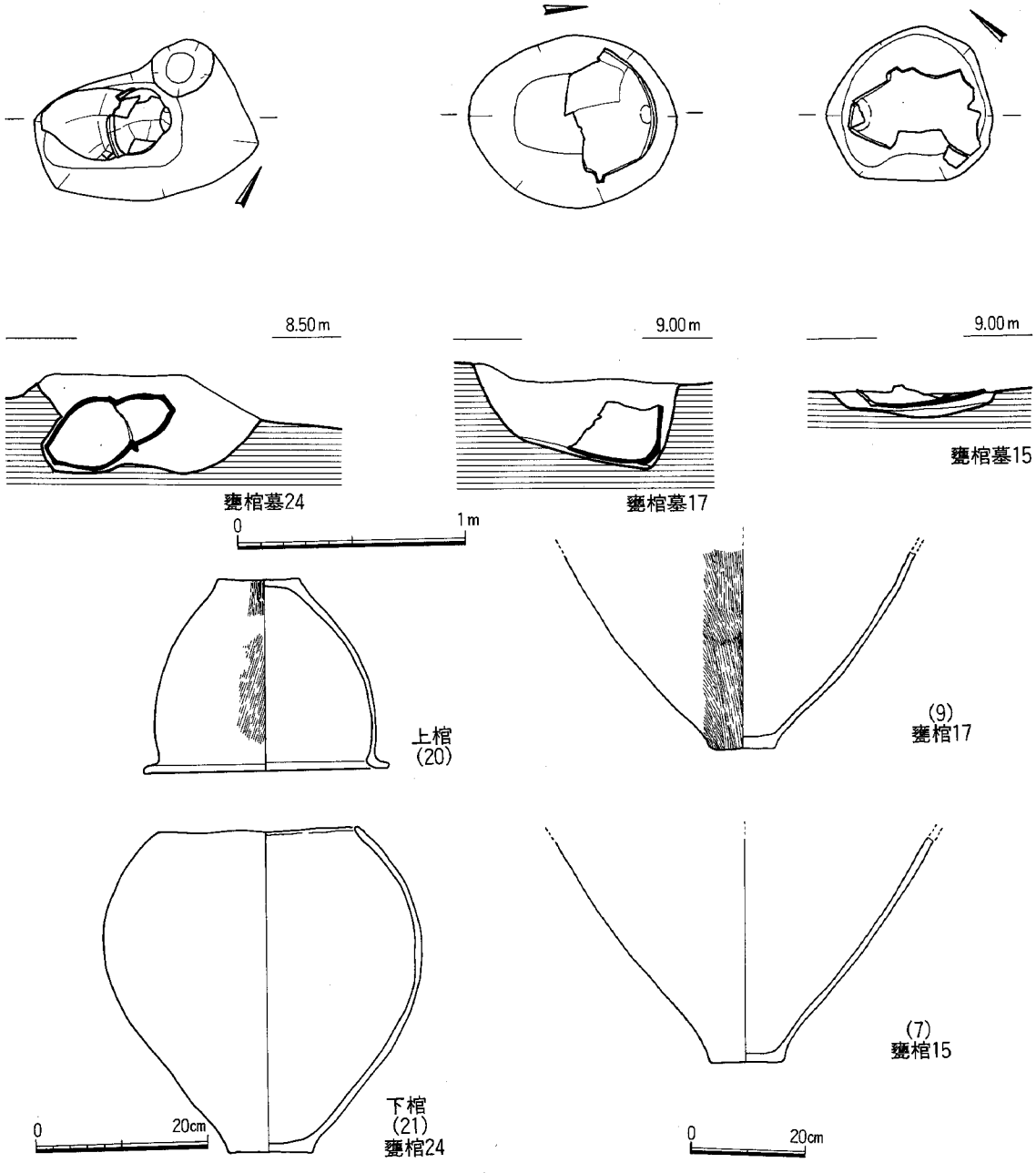


Fig. 12　甕棺墓24・17・15実測図(1/30)、出土甕棺実測図(1/8・1/12)

(2)　土壙墓

土壙墓は2基検出した。他の土壙の中にも埋葬に用いられたものがあるかも知れないが、ここでは確実なもののみ報告する。甕棺墓との切り合い関係がなく副葬遺物もないため、時期は不明であるが甕棺墓と近接して営まれており、甕棺墓と大きく隔たることは無いと考えられる。

土壙墓9（Fig.13）

甕棺墓14の西側で検出した。主軸はN－48°－Eを向く。2段掘りの土壙墓であるが、1段目は浅く不明確である。削平されている可能性もある。長方形を呈し、長2.1m、幅1.2mを測る。2段目は長1.8m、幅0.8mを測る。

出土遺物（Fig.13）

土壙墓覆土中の出土遺物である。副葬されたような状態で出土したのではない。弥生土器の甕である。鋤先口縁で、外側に大きく張り出す。口縁部端は坦面をなす。上端部は丸みを持つ。胴部は若干張り気味である。口縁部下に断面M字状の突帯を一条巡らす。内面も含めて遺存部全面に丹塗を施す。

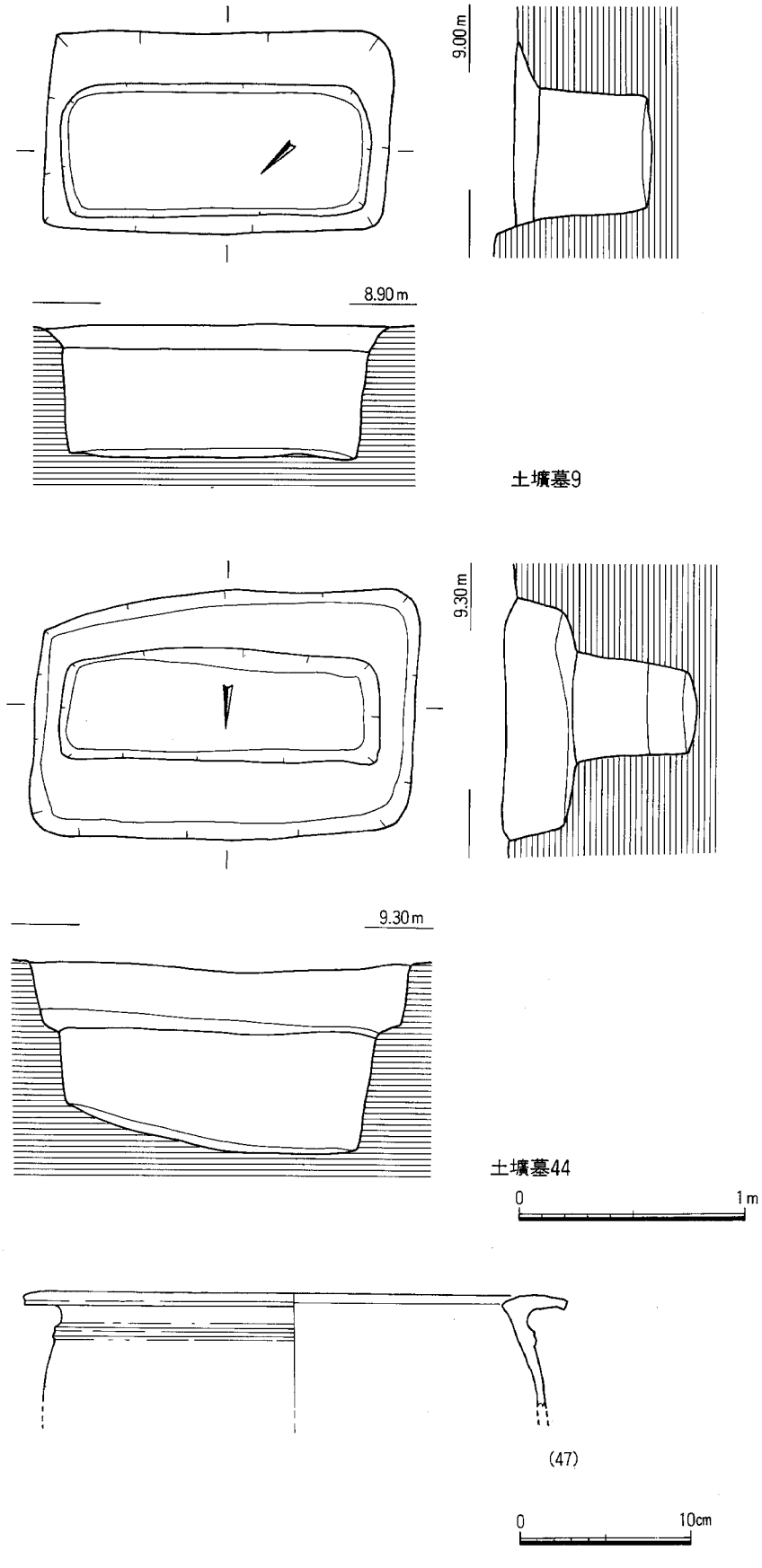


Fig. 13　土壙墓9・44実測図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

中期後半に属し、他の遺構からも点々と見られるように該期の甕棺墓に伴う祭祀土器と考えられる。復原口径32cmを測る。

土壙墓44（Fig.13）

甕棺墓14の西側で検出した。主軸はほぼ東西方向を向く。甕棺墓46の西側で検出した。2段掘りの土壙墓である。長方形を呈し、長2.2m、幅1.5mを測る。二段目は長1.9m、幅0.6mを測る。

2）住居跡

住居跡は不確実なものを含めて6基検出した。6基とも南端近くで検出し、ほとんどの住居跡は南側が調査区外へ出るので、集落の中心は調査区の南へ広がるのは間違いない。

住居跡2（Fig.14）

調査区の南東端で検出した。北壁のみの検出である。壁溝が北壁中央で乱れ、焼土の散布が見られるので、この位置に竈があったものと考えられる。北西のピットが主柱穴と考えられるので、四本柱であろう。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物（Fig.21）

9が住居跡2の出土の坏蓋である。端部は薄く尖らせる。天井部は回転ヘラ削りを施す。口径15cm、器高4cmを測る。

住居跡4（Fig.14）

住居跡2の西側で検出した。住居跡2よりは遺存がよいはずであったが、南側に表土除去時に堆積状況を見るために幅1mのトレンチをいれた際、掘り過ぎてしまい、削平してしまった。一辺5mほどの方形であろう。主柱穴は四本に復元される。北側に竈と考えられる粘土の集積が有った。粘土の上に支脚が置かれていたことから人為的に破砕されたのではないかと考えられる。古墳時代後期であろう。この住居跡を切る**住居跡3**を検出したが、前述した削平のため北東隅しか検出できなかった。

住居跡25（Fig.15）

住居跡4の西側で検出した。南西隅がわずかに調査区外に出るが、ほぼ全容を知りうる。遺存は極めて悪い。一辺5mの方形を呈する。主柱穴は四本である。北側壁際中央に焼土を包含する浅い凹みが有り、この位置に竈が有った可能性が高い。壁溝は見られない。古墳時代後期の住居跡であろう。**土壙26**は住居跡25の床面で検出したもので、住居跡25に切られる遺構である。弥生時代の土壙と思われる。

出土遺物（Fig.15）

1は坏身である。かえりは直線的に内傾する。内底部は静止ナデを施す。口径11cm、器高3.3cmを測る。2も坏身である。焼け歪みが大きい。3は甕の口縁である。口縁は玉縁状を呈する。内外面とも回転ナデ調整され、文様はない。復元口径18.4cmを測る。

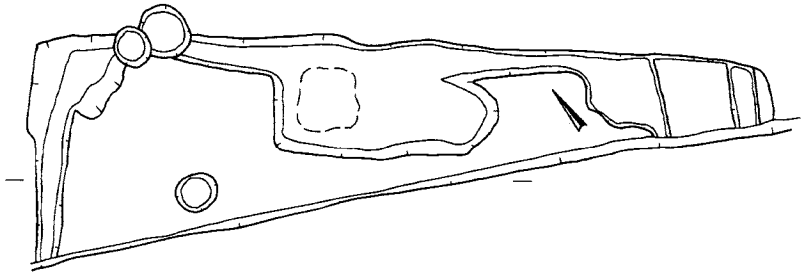
住居跡27（Fig.15）

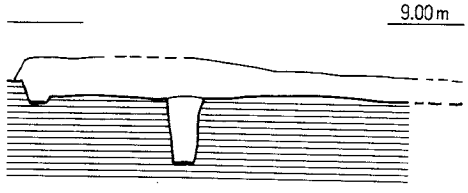
調査区北端中央付近で検出した。甕棺墓21を切る。住居跡4も切ると思われる。方形の住居跡の壁と思われる落ち込みを検出したのみで、壁溝や竈の痕跡など、確実に住居であることを示す施設は検出していない。北辺は4.5mを測る。

出土遺物（Fig.15）

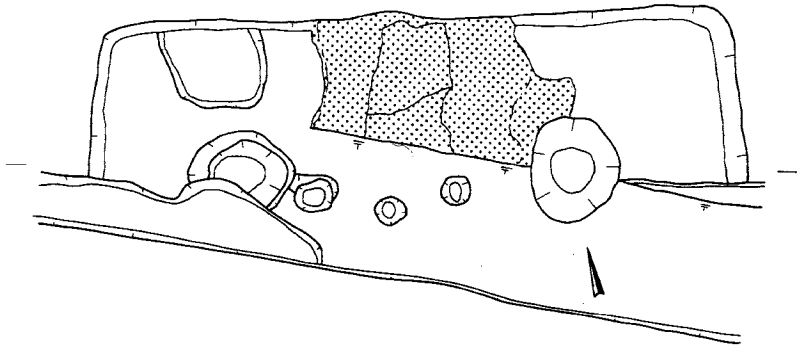
4は坏蓋である。天井部と口縁部の境付近に幅広の沈線状の段が巡る。天井部に回転ヘラケズリを施す。古墳時代後期のものである。

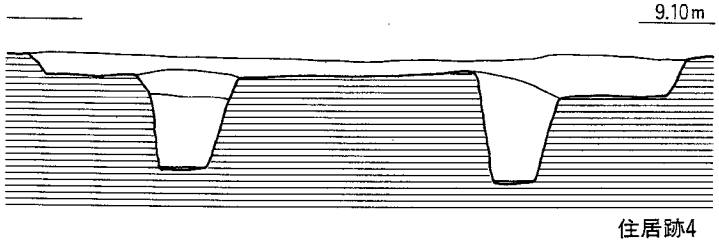
住居跡42（Fig.14）



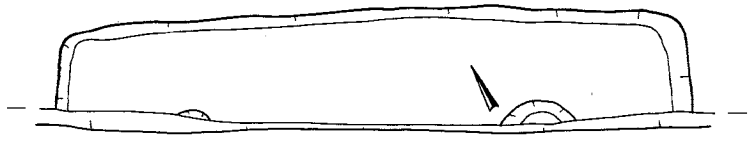


住居跡2





住居跡4



住居跡42

Fig. 14　住居跡2・4・42実測図(1/60)

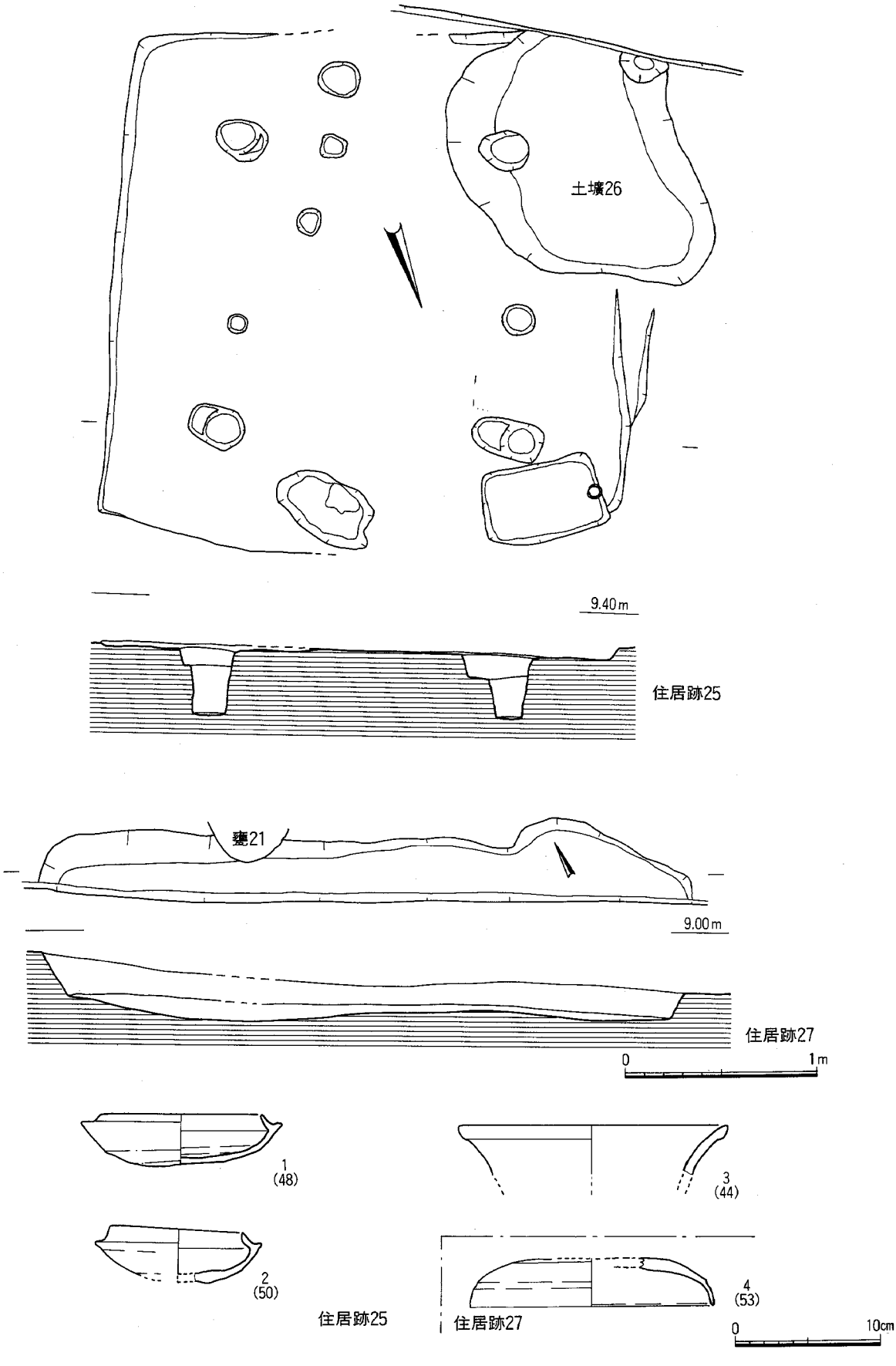


Fig. 15　住居跡25・27・実測図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

調査区南西隅で検出した。遺存はよくない。北壁のみの検出であるが、一辺５ｍほどの方形に復原できよう。調査区境界壁際に見られるピット２基が主柱穴と見られ、四本柱に復元できよう。壁溝は見られない。竈は痕跡も見られない。図化に耐える出土遺物はないが、他と同様古墳時代後期のものであろう。

３）土壙

土壙は数多く検出した。中には埋葬に関わる土壙ではないかと考えられるものも有るが、多くは性格不明の不定形土壙である。ここでは紙幅の関係から大形の土壙２基をはじめ、主なものについてのみ報告する。

土壙１（Fig.16）

調査区の東端で検出した。南側は調査区外に出る。幅広の溝状を呈する。覆土は大きくは上下二層に分れる。上層は古墳時代後期の遺物が多く、下層は弥生時代の遺物が多いが、厳密には分れないようである。壁は緩やかで、底面に近くなるにつれて狭くなる。長7.6m以上、幅４ｍほどを測る。深さは60cm～１ｍほどで、南端部に近づくにつれて浅くなる。横断面図に示した付近が最も深く、北側にいくにつれて若干浅くなっていくようである。

出土遺物（Fig.17）１、２は須恵器である。１は高坏である。坏部はかえりを持ち、直線的に内傾する。坏部外底部はカキメを施す。内底部にヘラ状工具を押しつけたような痕があるが、脚と坏の接合に伴う調整痕であろうか。脚部は短い柱状部を持つ。突帯風の段が巡り、その部位付近から大きく開く。脚端部は欠く。口径12.1cmを測る。２は甕である。口縁部の上端部は回転ナデによる凹面状を呈し、外端部は坦面をなす。したがって、口縁端部の断面は方形を呈する。頸部は直線的に大きく開き、強い回転ナデによる凹凸が著しく見られる。肩部が強く張る。胴部の外面はカキメを巡らした後平行タタキを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。口径26.2cmを測る。胴部最大径48cmを測る。

３は手づくね土器である。器形は円筒状を呈する。すぼまり気味の口縁部を持ち、平底に作る。口径３cm、器高４cmを測る。

４～８は土師器把手である。９は土師器甕である。直線的に短く開く口縁部を持つ。外面はハケメ、内面はケズリを施す。10も同様な土師器甕である。11～18は弥生土器である。11は胴部の張る小形甕である。口縁部は「く」字形を呈する。口縁部内側には稜を持つ。胴部は偏球形で、底部は平底である。底部の立上りはやや外反気味に立ち上がる。口径12.8cm、器高14.9cm、底径７cmを測る。弥生時代後期前半に属する。12も甕である。口縁は「く」字形を呈し、胴部は偏球形を呈する。内外面縦方向のハケメを施す。11よりはやや新しい特徴を示す。口径14cmを測る。13は鋤先口縁を呈する甕である。外側に張り出す口縁部を持ち、胴部はほとんど張らない。口径は23.4cmを測る。14も同様な器形の甕である。口縁部の下に突帯を一条巡らせる。15は丹塗を施す甕である。口縁部外端は坦面をなし、刻目を施す。胴はかなり張るようである。16～18は弥生土器の底部である。いずれも甕底部と考えられる。16、17は外反しつつ立ち上がる平底であるが、18はやや内湾気味に立ち上がる。後期に属するものであろう。

土壙28（Fig.18）

調査区北西端で検出した。北側と東側が調査区外にでる。幅広の溝状を呈する。幅2.4m以上、長6.6m以上を測る。底面や壁には段や凹凸が多い。溝の覆土からは弥生時代から古代の土器が出土しているが、最上層からは陶磁器も出土している。土壙１と合わせてＬ字状に巡る溝になる可能性もある。

出土遺物（Fig.21）１は高台を持つ青磁の椀である。見込等に文様などは見られない。胎土は暗灰色、

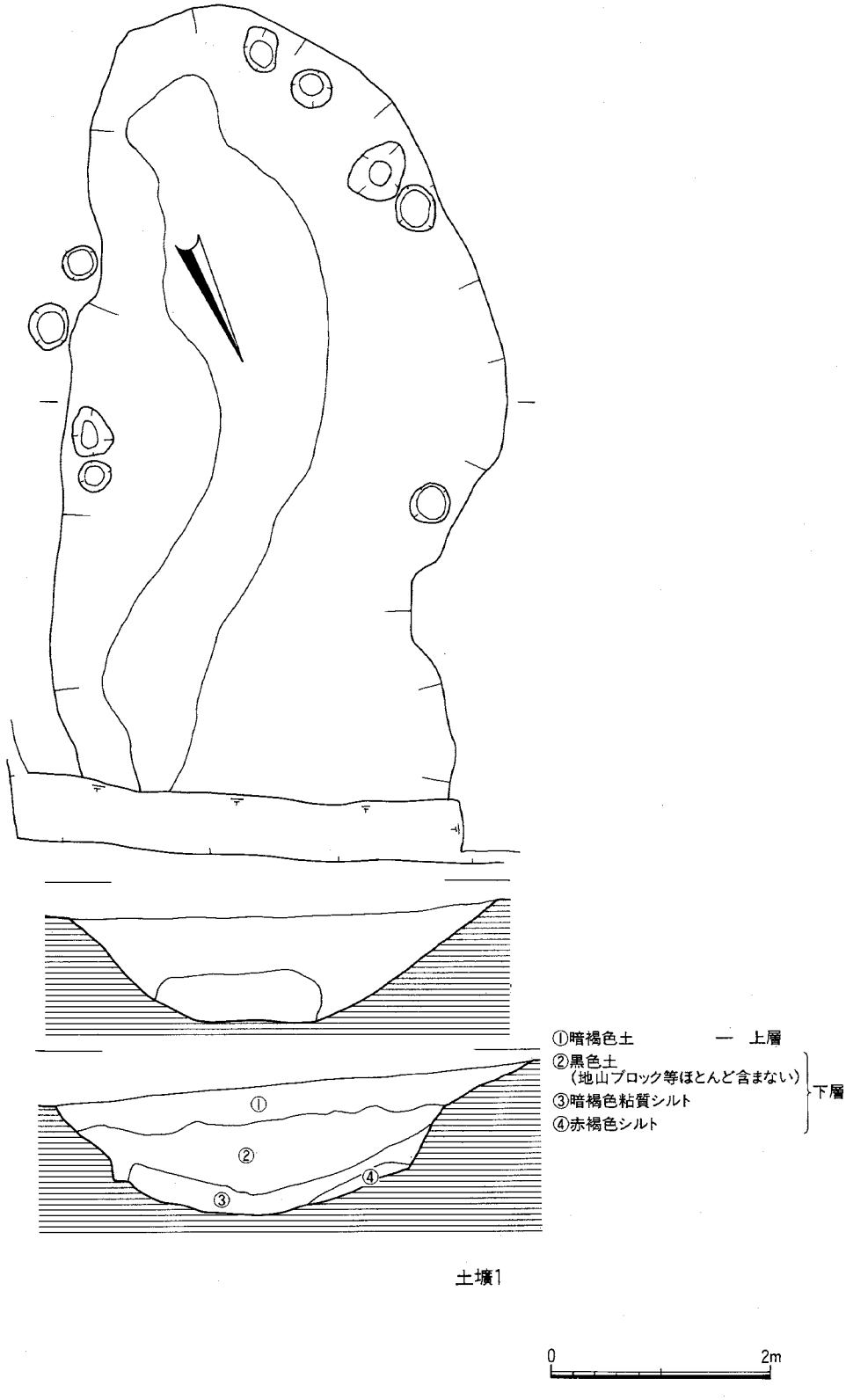


Fig. 16　土壙1実測図(1/60)

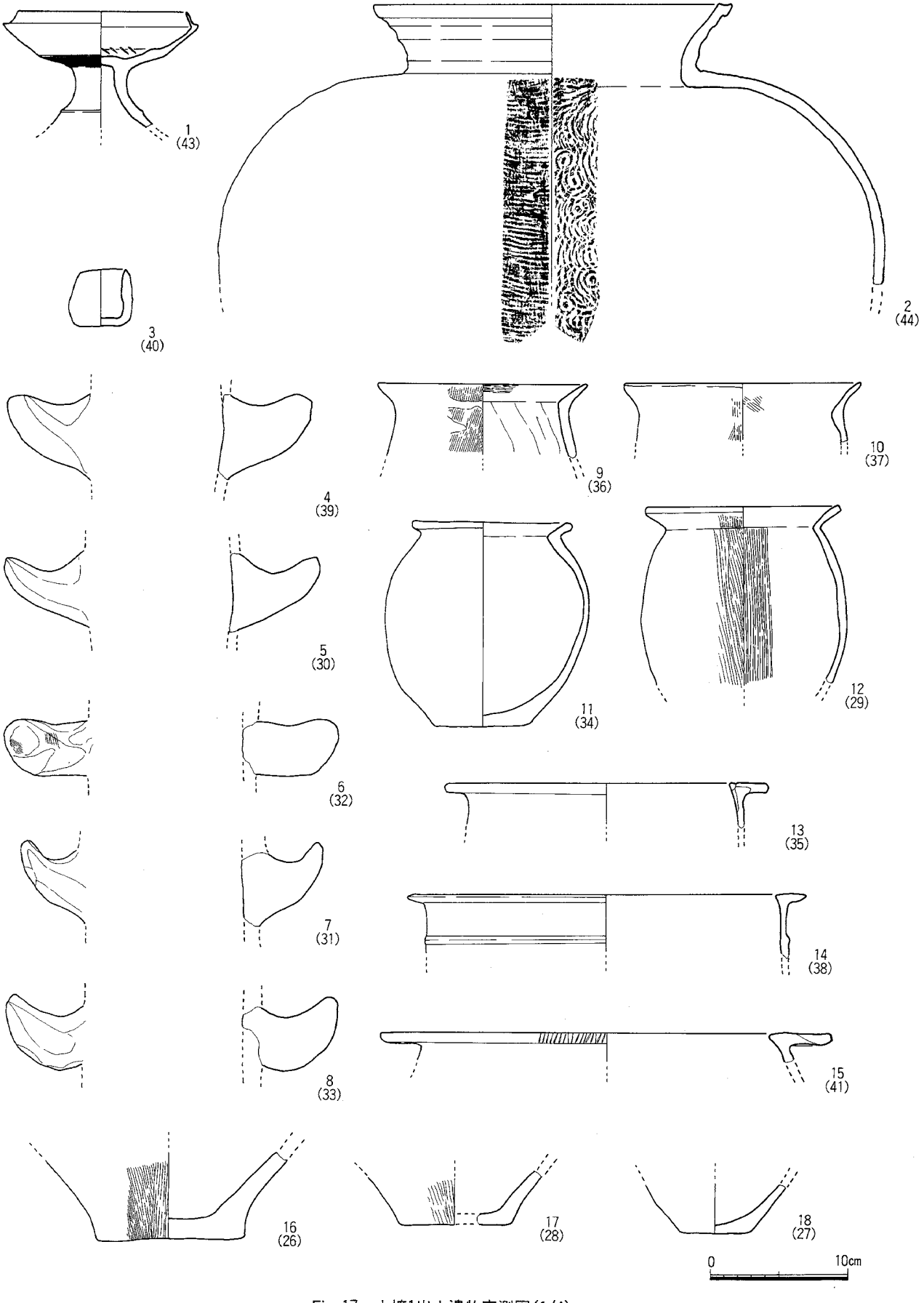
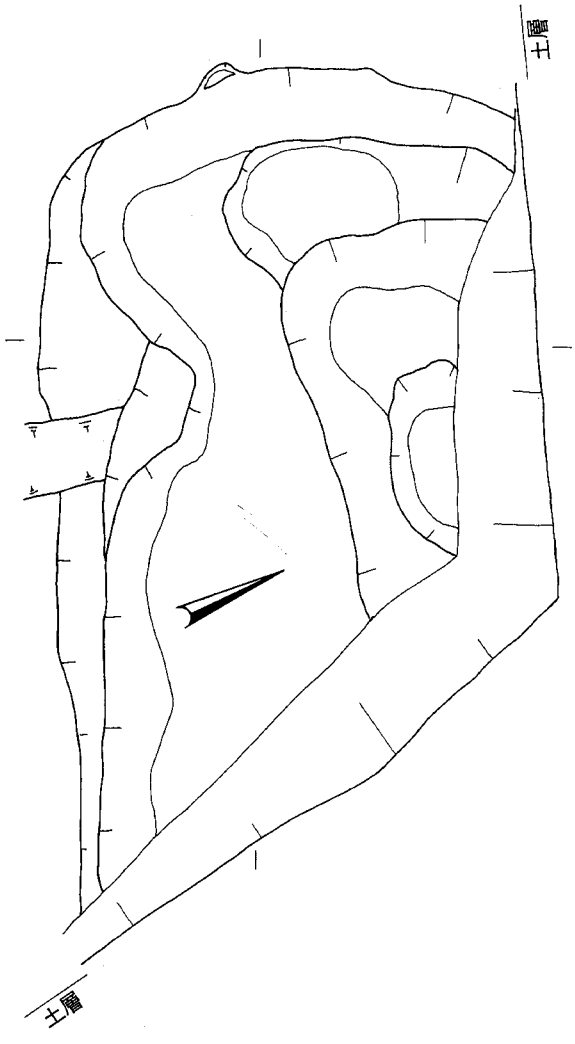
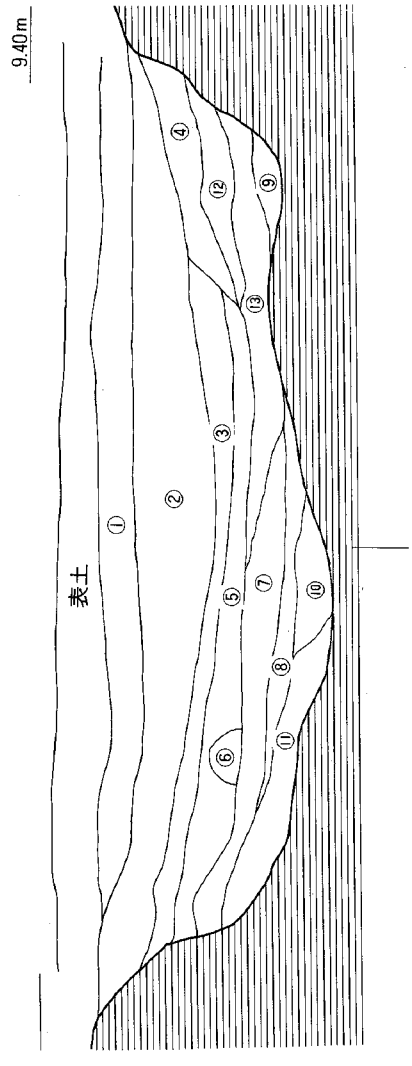
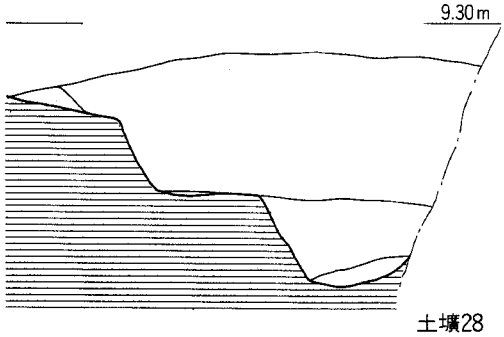


Fig. 17　土壙1出土遺物実測図(1/4)







土壙28

①暗褐色シルト
②黒色シルト
③地山ロームブロック　黒色シルト多
④地山ロームブロック　黒色シルト少
⑤黒色シルト　地山ブロック多
⑥暗褐色土ブロック
⑦暗褐色シルト、地山ロームブロック少
⑧暗褐色シルト、地山ロームブロックほとんど含まず
⑨黒色シルト
⑩暗褐色シルト、地山ロームブロックほとんど含まず
⑪黒色シルト
⑫暗褐色シルト、ロームブロック多
⑬暗褐色シルト、ロームブロック少

0　2m

Fig. 18　土壙28実測図(1/60)

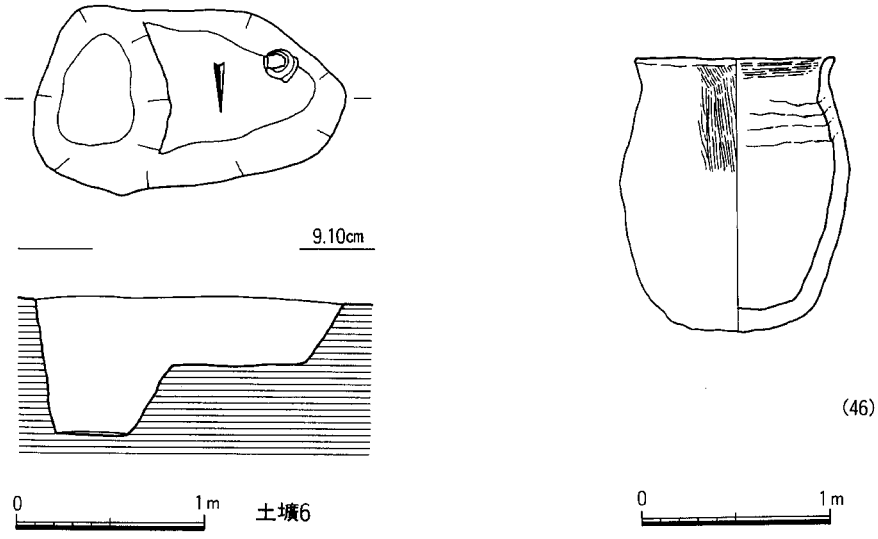


Fig. 19　土壙6実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

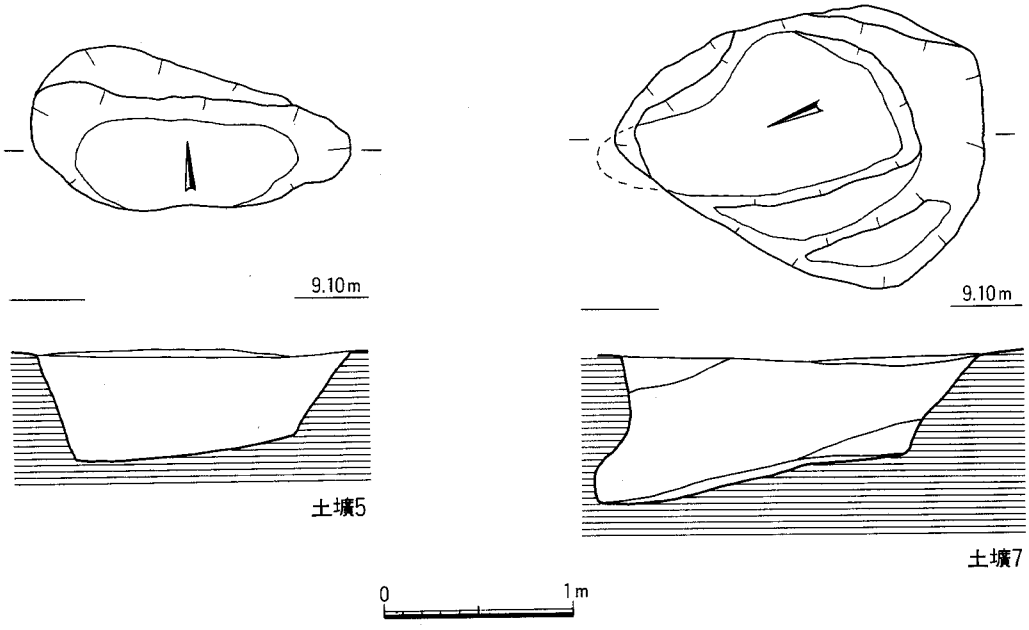


Fig. 20　土壙5・7実測図(1/40)

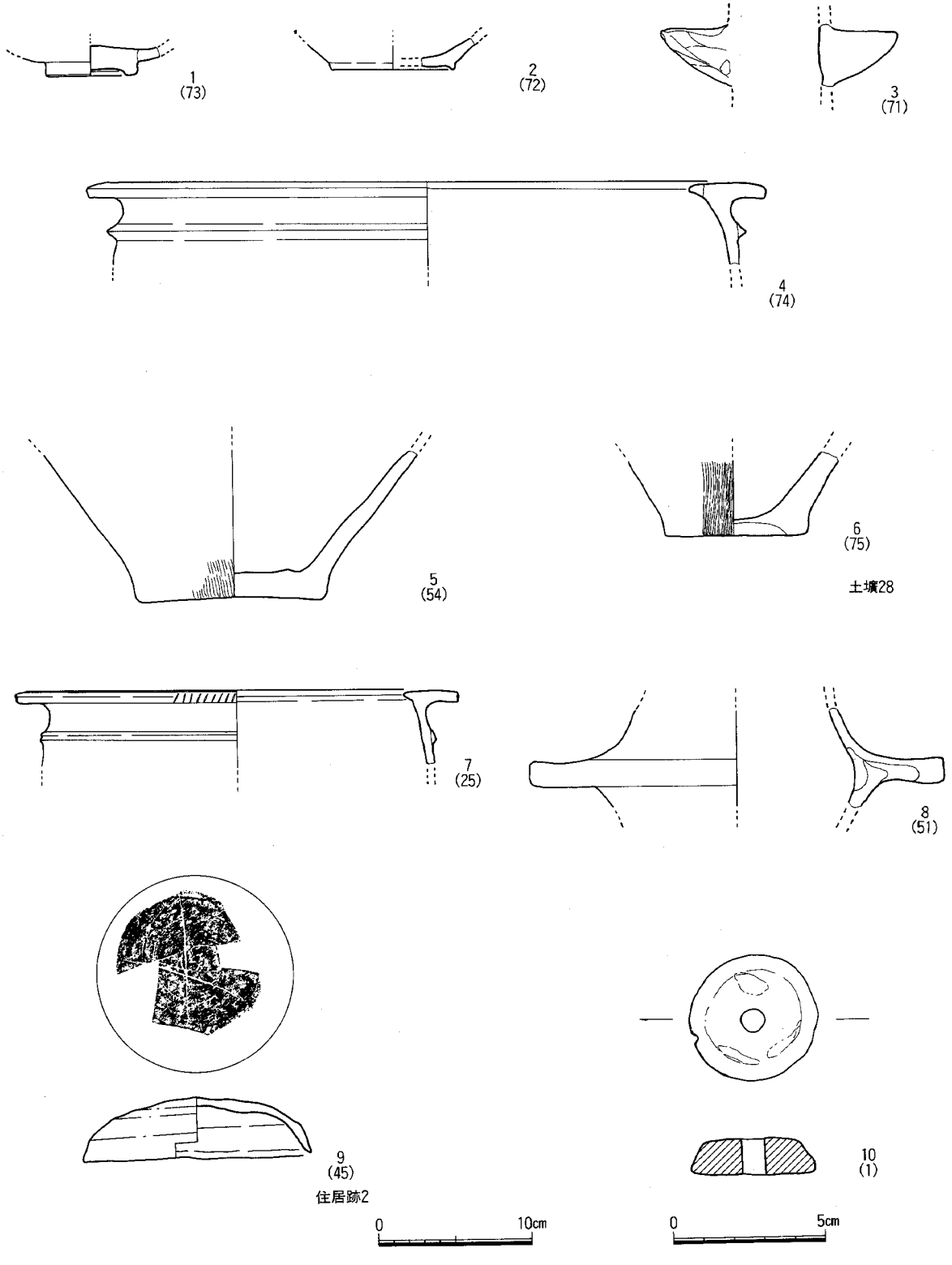


Fig. 21　各遺構出土遺物(1/4・1/2)

釉は深緑色に発色する。体部はかなり厚手である。2は土師器の底部である。椀と思われる。内面は黒変している。3は土師器把手である。これら古代～中世と思われる土器はいずれも最上層出土である。4から6は下層（5層以下）出土の土器である。いずれも弥生土器である。4は鋤先口縁の甕である。口縁はほぼ水平で、外端部は坦面をなし、内端は尖らせる。口縁部下に突帯を1条巡らせる。復原径44.8cmを測る。5は甕の底部であろう。安定した厚い平底で、外反しながら立ち上がる。外面にはハケメを施す。底径12cmを測る。6は5よりやや小形の甕底部である。平底で、わずかに外反気味に立ち上がる。外面にはハケメを施す。底径9.2cmを測る。いずれも弥生時代中期前半～中頃の土器である。

土壙6（Fig.19）

近接して見つかった土壙5、6、7は覆土も共通し、形状、大きさにも似たところがあるので、共通した性格の遺構ではないかと考えられる。図化に耐え得る遺物を包含していた遺構は土壙6のみである。土壙6は長楕円形を呈し、長1.6m、幅1mを測る。床面の西側に一段深くなる部分を持つ。土壙墓の可能性もあると思うが、図示した土師器甕は、かなり上位からの出土であり、副葬品としては疑問も残る。

出土遺物（Fig.19）

ほぼ完形で土壙6の検出面近くで出土した。土師器の甕である。口縁部は短く余り広がらない。胴部は偏球形を呈する。底部は歪みの多い丸底であるが、胴部との境は意識して作りだしていると思われる。内外面とも器面がかなり荒れているが、口縁から胴部の外面にはハケメが認められる。内面は下半部はケズリを施しているようである。上半部には粘土接合痕が顕著に認められる。口径10.6cm、器高14.3cmを測る。古墳時代後期に属すると考えられる。

土壙5（Fig.20）

土壙6の南側で検出した。長楕円形を呈する。長1.7m、幅0.7mを測る。深さは現状で50cmほどを測る。

土壙7（Fig.20）

土壙6の西側で検出した。平面形は卵型を呈する。長1.9m、幅1.4mを測る。床面付近で二段掘り状になる。

4）その他の遺物（Fig.21）

7は甕棺墓16の墓壙覆土から出土した弥生土器の甕である。鋤先口縁で、口縁部はほぼ水平である。外側に大きく張出し、端部は坦面をなす。外端部に刻目を施す。胴部は余り張らないようである。口縁部の下に端部のくぼむ断面「コ」字状の低い突帯を1条巡らせる。内外面には丹塗を施す。復原口径30cmを測る。祭祀土器と思われ、甕棺墓祭祀に関わる土器と考えられるが、覆土中の出土でもあり、甕棺墓16に直接関わる遺物かどうかは疑問である。

8は住居跡25出土の弥生土器の筒形器台である。つばの部分のみの遺存である。つばは外側に大きく張出し、ほぼ水平である。端部に近づくにつれてやや厚くなる。丹部は坦面をなす。器台の体部はつばの基部で大きく屈曲し、それぞれ口縁部、脚部へいたる。ごく一部に丹塗の痕跡が見られ、本来丹塗土器であったと思われる。つば部での径27.4cmを測る。中期後半に属する土器と考えられるので、この土器も甕棺墓祭祀に関わる遺物と考えられよう。この遺物は古墳時代住居である住居跡25の出土であるが、住居跡25の床面からは弥生時代遺物を包含する土壙26が検出されており、本来こちらに伴う遺物であろう。土壙26は深さ40cmほどの不定形の土壙であるが、甕棺墓に伴う祭祀土壙であるかもしれない。ただ遺物は覆土中から弥生土器が散漫に出土したのみであり、とくに丹塗土器が多いということもない。

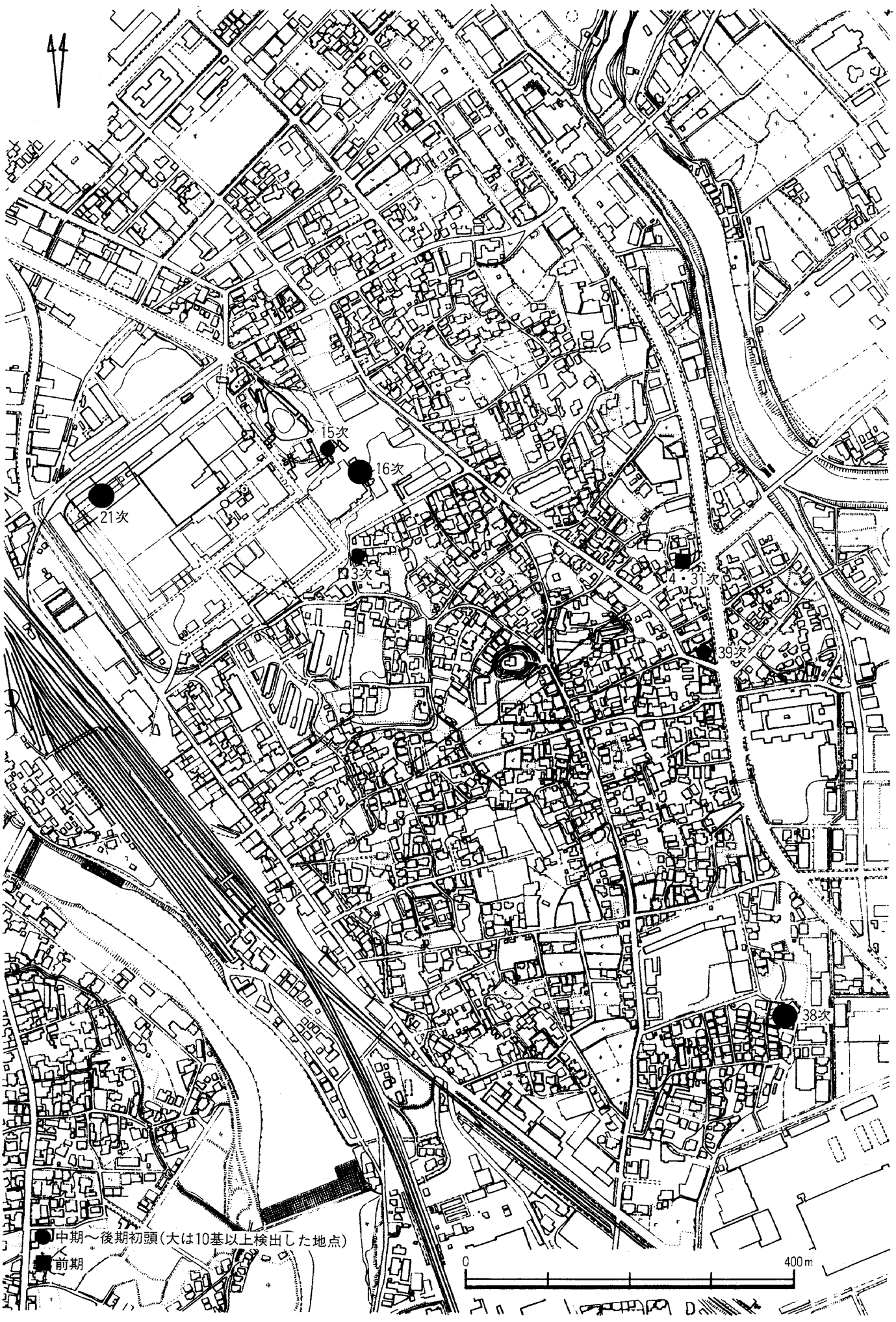


Fig. 22　那珂遺跡群のカメ棺墓地

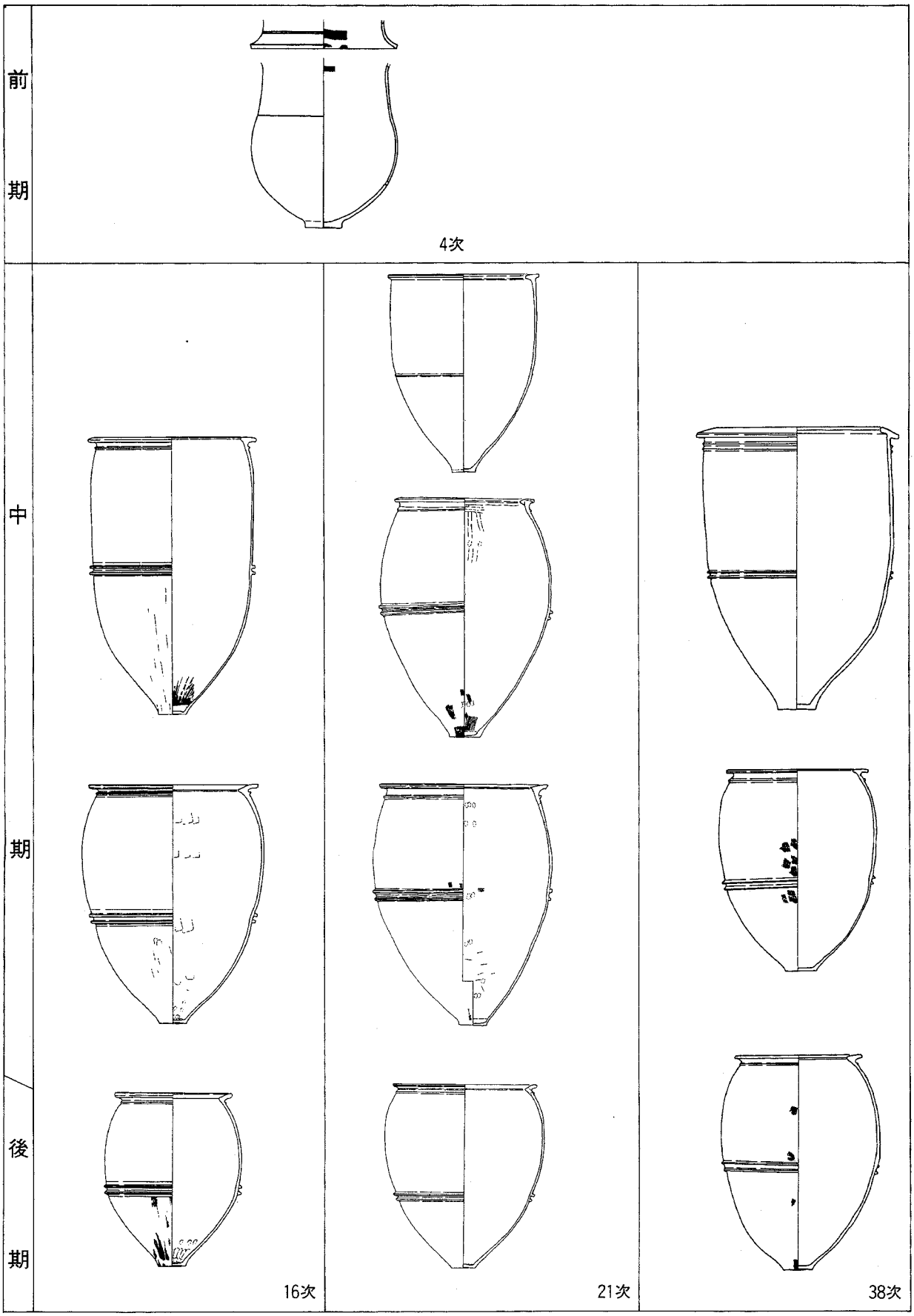


Fig. 23　那珂遺跡出土の甕棺(1/24)

10は表土から出土した滑石製紡錘車である。上面の径3.2㎝、下面の径４㎝を測り、断面は薄い台形を呈する。中央に穿孔を施す。両面ともわずかに丸みを帯びる。石質は、やや緑がかった石材である。厚さは１㎝ほどを測る。

４．まとめ

那珂遺跡群38次調査では16基の甕棺墓を始めとする弥生時代～古墳時代の遺構、遺物が出土した。まとめとして現在までに検出されている那珂遺跡群内の甕棺墓について見ておきたい。

３次調査（1977年度　那珂１丁目680番）

専用住宅建設に伴い調査が行われた。中期の甕棺墓が１基発見されている。

４次調査（1980年度　那珂１丁目277番外）

那珂八幡古墳の東200ｍの位置にある。竹下駅前線の拡幅に伴い調査が行われた。前期後半の甕棺墓が２基発見されている。

15次調査（1988年度　竹下３丁目１－１）

アサヒビール博多工場内にある東光寺剣塚古墳の重要確認調査に伴い、墳丘南側に設定したトレンチから甕棺墓が出土している。甕棺墓は中期前半のもの２基、中期後半のもの６基である。小範囲の調査であるため甕棺墓の数は更にふえると思われる。

16次調査（1988年度　竹下３丁目１－１）

アサヒビール工場建て替えに伴う調査の一つである。甕棺墓35基、土壙墓、木棺墓14基が検出されている。甕棺墓は中期中頃から後期初頭のもので、土壙墓、木棺墓は甕棺墓に先行すると考えられている。南北２群の単位が見られるという。15次調査地点の50ｍほど南に位置する。

21次調査（1989年度　竹下３丁目１－１）

アサヒビール工場建て替えに伴う調査の一つである。那珂遺跡群の北西端に位置する。甕棺墓28基、土壙墓６基が出土している。時期は中期前半から後期初頭に及ぶ。中期後半には甕棺墓を取り巻く溝状の土壙が掘られ、墓域が方形の区画を持つようなる。削平の度合いから、調査者は墳丘墓と考えている。区画のほぼ中央にある21号甕棺墓は棺内に朱を持っている。この甕棺墓の被葬者を中心とした特定集団墓であると考えられる。区画溝内からは多量の丹塗土器などの遺物が出土している。

31次調査（1990年度　那珂字沼口802－１外）

４次調査の北側に接する地点である。甕棺墓１基、木棺墓２基が出土している。甕棺墓は前期後半で木棺墓は甕棺墓に先行すると考えられている。

38次調査（1992年度　那珂６丁目80－１）

今回報告地点である。共同住宅建設に伴う調査である。那珂遺跡群の南東端に位置する。甕棺墓16基、土壙墓２基を検出した。中期中頃から中期末に及ぶ墓地である。

39次調査（1992年度　那珂１丁目362）

４、31次調査の南に位置する。中期前半頃の小形棺が３基検出されている。

以上列挙した、那珂遺跡郡内の甕棺墓出土地点をＦｉｇ．２２に図示しておいた。那珂遺跡群は都市化が進んでおり、一つの調査地点における調査面積が小さいため、なかなか遺跡の全貌を知るのは困難である。現時点でのという条件つきで甕棺墓を中心とした那珂遺跡群内の弥生時代埋葬遺構について概観しておこう。

まず墓域の分布であるが、現状では４ないし５か所に分布することがわかる。

１．まず第一群は21次調査地点である。前期前半から後期初頭に及び中期後半には墳丘墓が築かれ

る。墳丘墓以前の状況に不明な点もあるが、範囲、基数とも墳丘墓周辺から大きくは広がらないようである。

2．第2群は15次、16次、3次を中心とする地点である。15、16次は同一の墓域と考えられ、中期前半から後期初頭に及ぶ墓地であろう。3次調査地点は南へ若干離れており、16次調査地点でも甕棺墓は北半部に偏っており、別の墓域になる可能性もある。

3．第3群は4、31、39次を中心とする地点である。前期後半と、中期前半の甕棺墓が検出されているが、間断なく継続しているかどうかは不明である。なお4次調査担当の力武卓治氏は中原志外顕氏からの聞き取として、「第4次調査区の南方80mの地点では、戦前農家建築の際、甕棺墓が数十基出土し、忌み嫌って叩き壊して一箇所に埋めたという。」（福岡市教育委員会「那珂遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集 1987）と指摘している。南80mとは39次調査地点の北側に当る。また39次調査地点に南接する6次調査地点には甕棺墓が見られないことから、39次地点を南限、31次を北限とする範囲がこの地点の墓域であろう。

4．第4群は今回調査の38次調査地点である。中期中頃から中期末に及ぶ。この地点では周辺の調査がほとんどなされていないので墓域の範囲などは不明である。今回の甕棺墓の分布からは北側へ広がる可能性は高いと考えられる。

これらの甕棺墓地のうち、第1、3、4群はいずれも遺跡の端部近くに位置している。第1群は北西端、第3群は東端、第4群は南東端である。いずれも集落の縁辺部が選地されたのであろう。これに対し第2群は遺跡のほぼ中央部に位置している。この墓域の選地の違いにどのような背景があるのかは今後の検討課題である。

またいずれの地点でも土壙墓、木棺墓を伴うことも指摘できよう。これらの土壙墓、木棺墓は切り合いのある場合はいずれも甕棺墓が切っている。各墓域では、甕棺墓の造営が始まる以前に木棺墓、土壙墓による墓地の造営が開始された可能性があろう。

（文献）　第3次調査　　未報告。第153集に概要がある。
第4次調査　　「那珂沼口遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第82集　1982
第15次調査　　「東光寺剣塚古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告第267集　1991
第16次、21調査　「那珂5」福岡市埋蔵文化財調査報告第291集　1992
第31次調査　　「那珂6」福岡市埋蔵文化財調査報告第292集　1992
第39次調査　　未報告。福岡市埋蔵文化財年報Ｖｏｌ．7に概要。

第４章　第41次調査の記録

１．調査の概要

1992年（平成４年）９月28日、山根久雄氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年10月８日に試掘調査を行った。調査前の現況は畑で、やや東側に傾斜している。約30～50㎝の表土・包含層を除去すると地山の鳥栖ローム層となり、その面で竪穴住居跡、土坑、柱穴等を検出した。この成果を基に地権者、施工者と協議を重ね、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1993年（平成５年）３月15日から５月21日までの約2カ月間にわたって行った。

本調査地点は那珂遺跡群の南側に位置する。西側隣接地では第9次調査が、北側50ｍでは第26次、第33次調査が行われている。調査前の標高は約9.9ｍを測る。調査は約30～50㎝の表土を除去した後の鳥栖ローム層を遺構面として行った。遺構は弥生時代中期～後期の掘立柱建物、竪穴住居跡、土坑、井戸、溝、古墳時代の方形周溝、掘立柱建物、竪穴住居跡、奈良時代の溝、中世の井戸、溝等を検出した。また、遺構面の鳥栖ローム層の上面でナイフ型石器、彫器等を含む包含層を検出した。遺物は各遺構から、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器等が出土した。

２．調査の記録

１）　掘立柱建物（SB）

今回の調査では200個を越える柱穴を検出した。そのうち建物として復元できたのは10棟である。建物の分布は調査区西側にも更に広がるものと予想される。

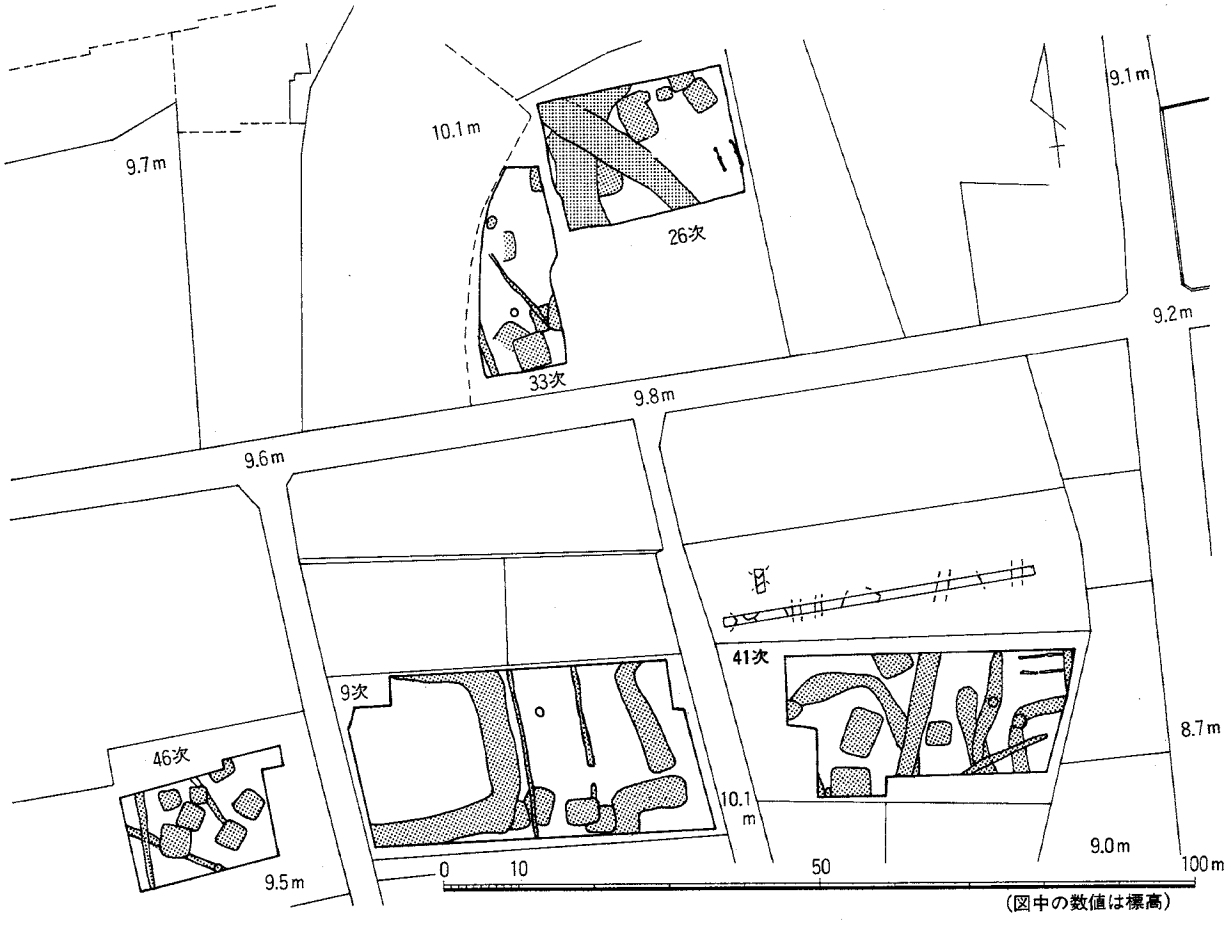


Fig. 24　第41次調査地点位置図(1/1000)

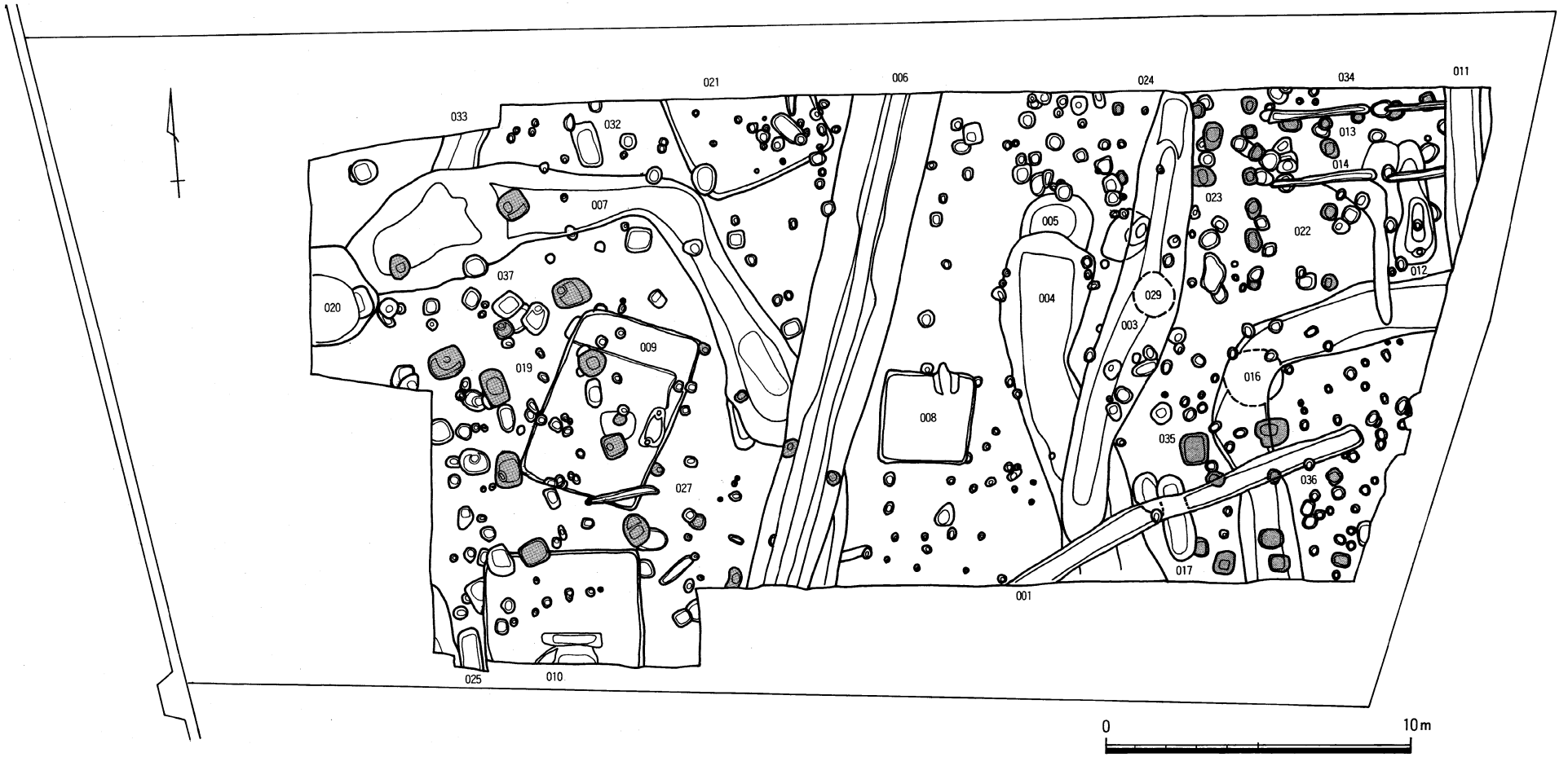


Fig. 25　第41次調査地点遺構配置図(1/200)

SB-027（Fig. 26）

調査区西側に位置する1×3 間の建物である。主軸方位はN-33°-Wを測る。SC-009 に切られる。柱穴は一辺30～40cmの不整方形プランで、深さ90cmが残存する。規模は梁行の全長3.6m、桁行の全長6.3mを測る。遺物は弥生土器が出土した。時期は切り合い関係から弥生時代中期に位置づけられると考える。

SB-019（Fig. 26）

調査区西側に位置する1×2 間の建物である。主軸方位はN-10°-Wを測る。SC-009 を切る。柱穴は一辺80～120cmの隅丸長方形プランで、深さ100cmが残存する。規模は梁行の全長3.6m、桁行の全長5.8 mを測る。遺物は弥生土器が出土した。時期は切り合い関係から弥生時代後期に位置づけられると考える。

SB-037（Fig. 26）

調査区西側に位置する１×２間の建物である。主軸方位はN-64°-Eを測る。SD-007に切られる。柱穴は一辺70～120cmの隅丸長方形プランで、深さ90cmが残存する。規模は梁行の全長3.3m、桁行の全長4.4mを測る。遺物は弥生土器等が出土した。時期は切り合い関係から弥生時代後期に位置づけられると考える。

SB-022（Fig. 26）

調査区東側に位置する１×２間の建物である。主軸方位はN- 1°-Wを測る。柱穴は一辺40～60cmの不整方形プランで、深さ50cmが残存する。規模は梁行の全長2.4m、桁行の全長4.4mを測る。遺物は弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期～後期に位置づけられると考える。

SB-023（Fig. 26）

調査区東側に位置する１×２間の建物である。主軸方位はN- 0°-Wを測る。柱穴は一辺40～60cmの不整方形プランで、深さ50cmが残存する。規模は梁行の全長2.5m、桁行の全長4.4mを測る。遺物は弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期～後期に位置づけられると考える。

SB-024（Fig. 26）

調査区東側に位置し、主軸方位はN- 1°-Eを測る。柱穴は4個、1×2 間分を検出した。柱穴は一辺40～80cmの不整方形プランで、深さ50cmが残存する。規模は梁行の全長2.6m、桁行の柱間2.1mを測る。遺物は弥生土器等が出土した。SP-183からは完形の器台（Fig. 28-1、2 ）が出土した。柱の抜き取り後の祭祀と考えられる。時期は弥生時代中期後半～後期に位置づけられる。

SB-035（Fig. 27）

調査区東側に位置する１×１間の建物である。主軸方位はN- 3°-Wを測る。SK-017、SD-002に切られる。柱穴は一辺60～110cmの方形プランで、深さ70cmが残存する。規模は梁行の全長3.0m、桁行の全長3.5mを測る。遺物は弥生土器等が出土した。時期は切り合い関係から弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

SB-036（Fig. 27）

調査区東側に位置する１×２間の建物である。主軸方位はN-91°-Eを測る。SD-002に切られる。柱穴は一辺40～70cmの方形プランで、深さ70cmが残存する。規模は梁行の全長2.8m、桁行の全長3.8mを測る。遺物は弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

SB-013 、014（Fig. 27）

調査区東側に位置し、東西方向に平行して延びる２条の溝である。溝の両端にそれぞれ柱穴があり、何らかの建物と考えられる。調査区北側に同様の溝が存在する可能性もあり、構造は不明確だが、目

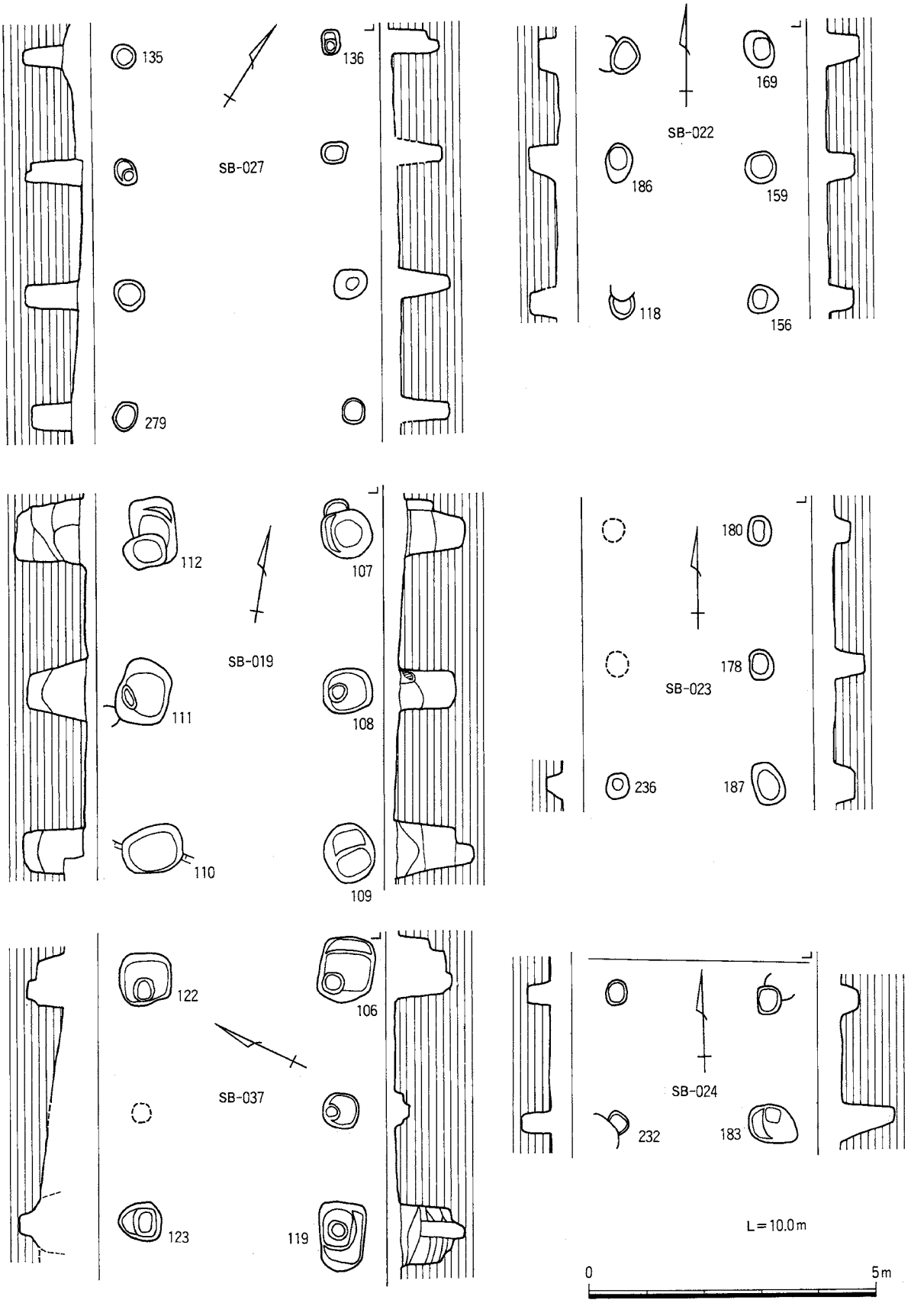


Fig. 26　掘立柱建物(SB)遺構実測図1(1/100)

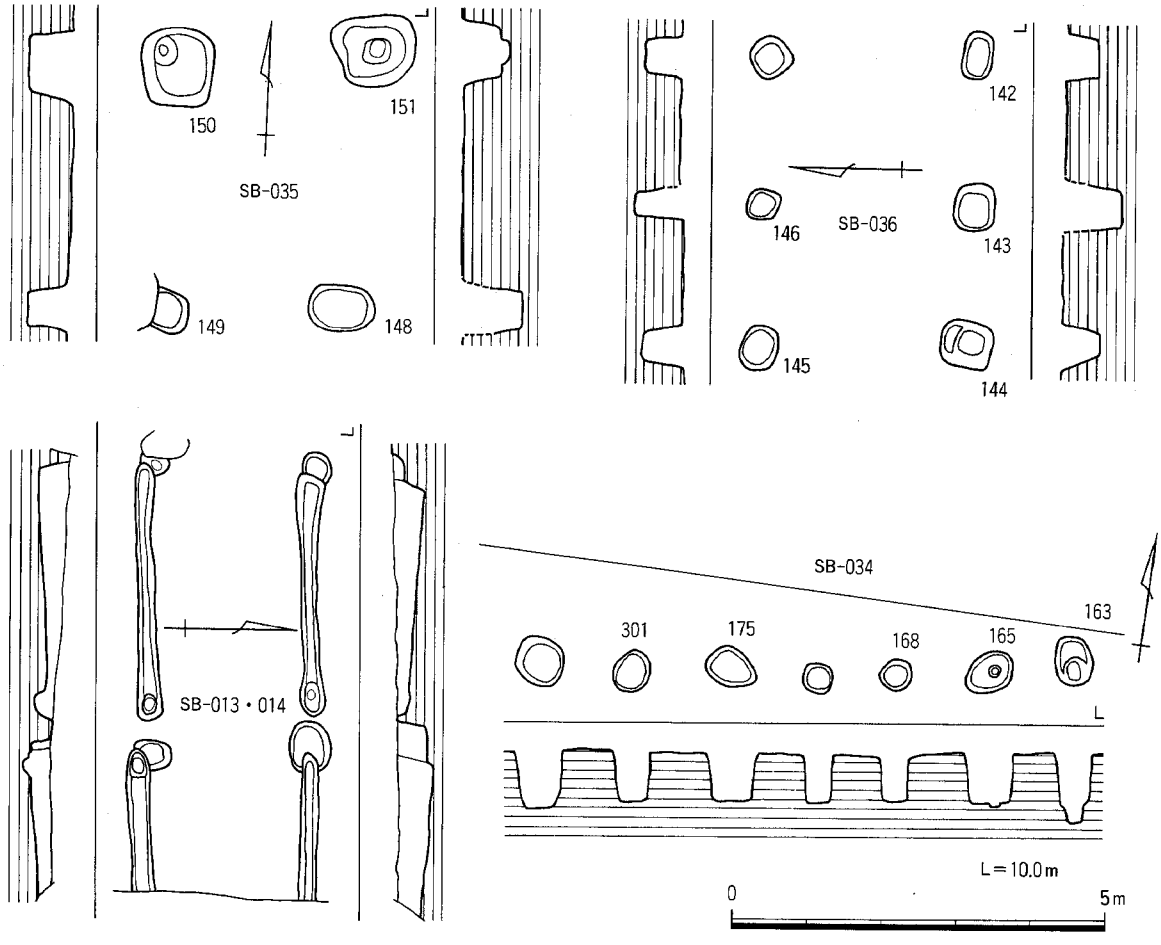


Fig. 27　掘立柱建物(SB)遺構実測図2(1/100)

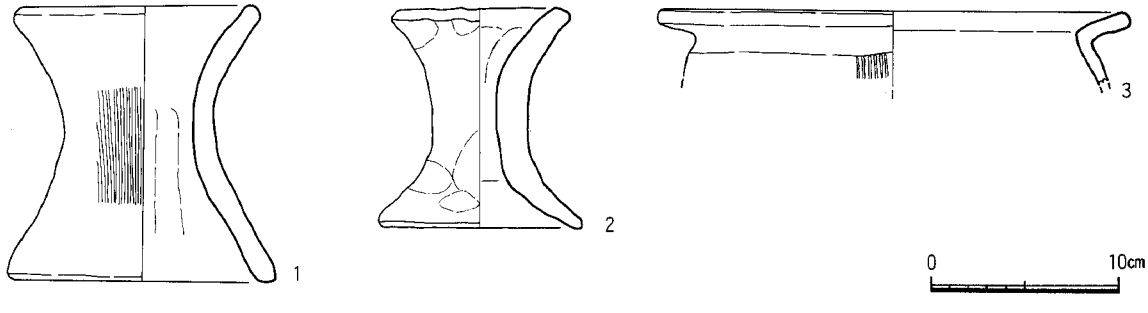


Fig. 28　掘立柱建物(SB)出土遺物実測図(1/4)

隠し塀的なものも考えられる。溝の幅約30cm、溝の間隔は2.2mを測る。遺物は弥生土器、黒曜石、須恵器片等が出土した。時期は不明確だが、古墳～古代に位置づけられると考える。

SB-034 (Fig. 27)

調査区東側に位置し、南北軸方位はN- 5°-Wを測る。柱穴は7個、桁行6間分を検出した。梁間は不明である。建物は北側に展開する。柱穴は一辺40～70cmの不整円形プランで、深さ70cmが残存する。柱間は桁行は1.2mを測る。遺物は弥生土器、黒曜石、須恵器等が出土した。時期は不明確だが、古墳～古代に位置づけられると考える。

2） 竪穴住居跡(SC)

今回の調査では4 基の竪穴住居跡を検出した。住居跡は調査区中央から西側に分布する。そのうち、SC-010、021は調査区外側に遺構が広がる。遺構の時期はSC-009、010、021は弥生時代、SC-008 は7世紀代に位置づけられるものである。

SC-009（Fig. 29）

調査区西側に位置する。平面形は長方形を呈し、南北長6.0m、東西長4.2m、深さ15cmを測る。壁際には幅5cmの壁溝が巡る。住居の北側には幅120cmのベッド状遺構をもつ。中央には100×110cmの炉がある。東側の壁際には70×140cm、深さ30cmの土坑があり、坑底の両側には小柱穴が見られる。出入りのための施設と考えられる。主柱穴は2本で、住居の床面には焼土が見られる。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。また、西側の壁際で砥石と石包丁を検出した。時期は弥生時代中期末～後期に位置づけられると考える。

出土遺物（4～8）

4 ～6は弥生土器である。4は丹塗りの鋤先口縁の広口壺である。5、6は甕である。7は輝緑凝灰岩製の石包丁である。端部の一方が欠損している。現存長9.5cm、幅5.5cm、厚さ0.9cmを測る。8は砥石で、3面を研ぎ面として使用している。

SC-010（Fig.29）

調査区西南に位置し、遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は方形もしくは長方形を呈する。東西長5.2m、南北長3.7m以上を測る。深さは20cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期～後期に位置づけられると考える。

出土遺物（9、10）

9、10は弥生土器で、9は鉢の口縁、10は甕の底部である。

SC-021（Fig.29）

調査区西南に位置し、遺構の南側は調査区外に延びる。平面形は方形もしくは長方形を呈する。東西長4.7m、南北長3.8m以上を測る。深さは15cmが残存する。壁際には幅15cmの壁溝が巡る。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、石包丁、黒曜石等が出土した。時期は弥生時代中期～後期に位置づけられると考える。

出土遺物（11～12）

11は弥生土器の甕である。12は輝緑凝灰岩製の石包丁である。端部の一方が欠損している。現存長10.1cm、幅5.0cm、厚さ0.6cmを測る。

SC-008（Fig.30 ）

調査区中央に位置する。平面形は方形を呈し、南北長3.0m、東西長3.2m、深さ30cmを測る。主柱穴は不明である。北壁には竈が取りつく。北側の壁際には白色粘土が広がっているが、竈は完全に潰れており、袖部が残る程度である。袖は白色粘土で構築される。焚口には炭と焼土が見られる。また、竈の対面には白色粘土のまとまりが見られる。遺物は埋土から須恵器、土師器等が出土した。この他、壊れた竈の中から土師器の椀、甕等を検出した。時期は7世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（13～16）

13、14は須恵器、15、16は土師器である。13は埋土の上面、14は床面、15、16は竈内で出土した。13は坏身である。短く内湾する受け部で、端部は丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリを施す。器高3.8cm、口径12.0cmを測る。14は坏蓋である。口縁内側には短いかえりがつく。天井部は丸みを帯びており、回転ヘラケズリを施す。器高3.0cm、口径10.2cmを測る。15は坏で、口縁は直線的に立ち上がる。

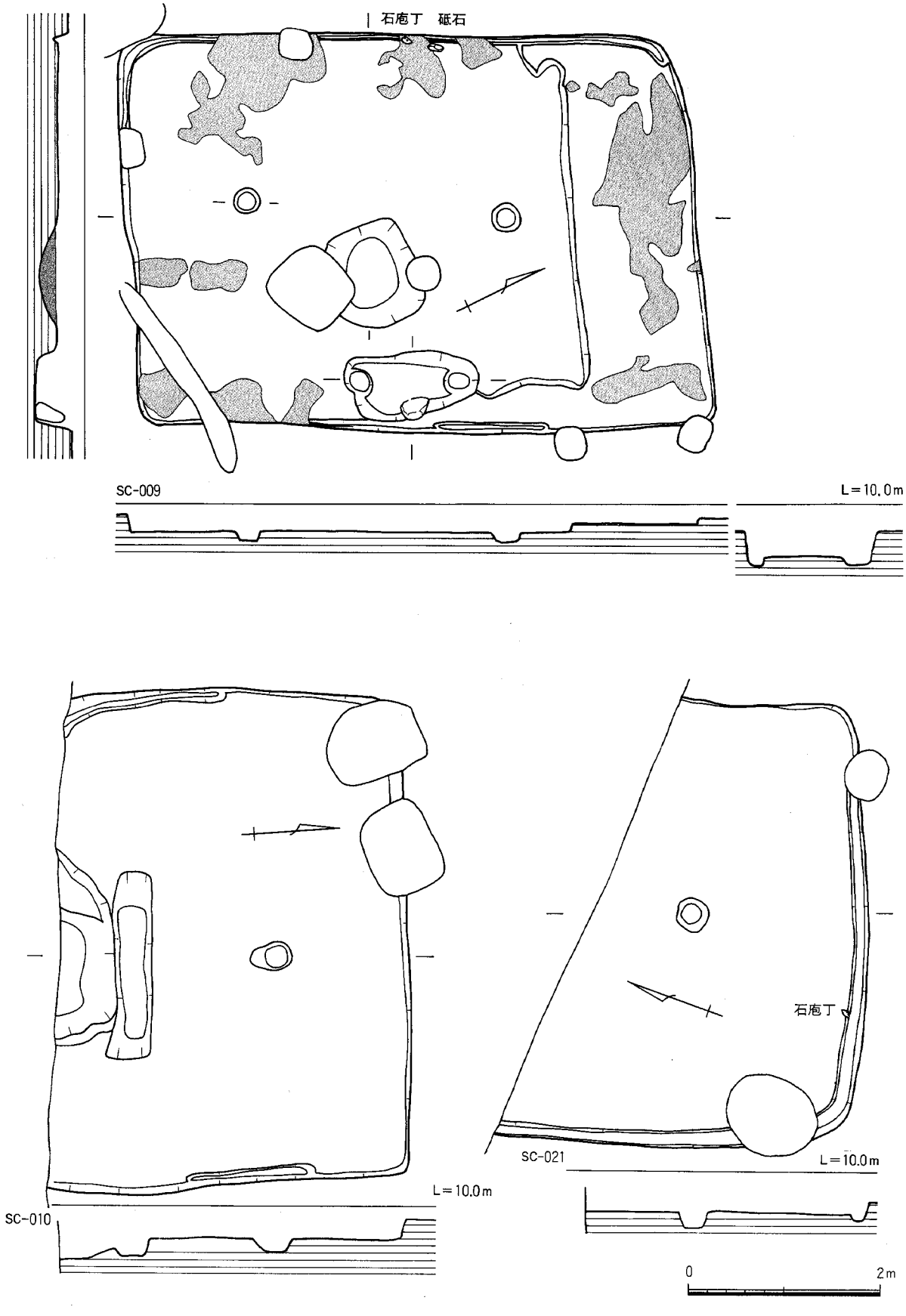


Fig. 29　竪穴住居跡(SC)遺構実測図1(1/60)

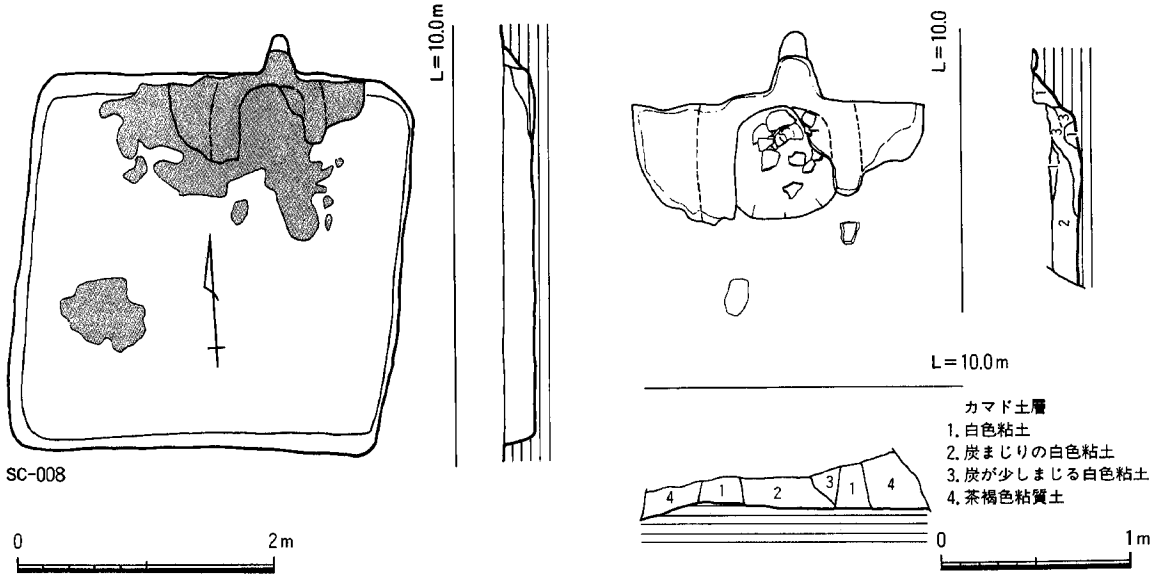


Fig. 30　竪穴住居跡(SC)遺構実測図2(1/60・1/40)

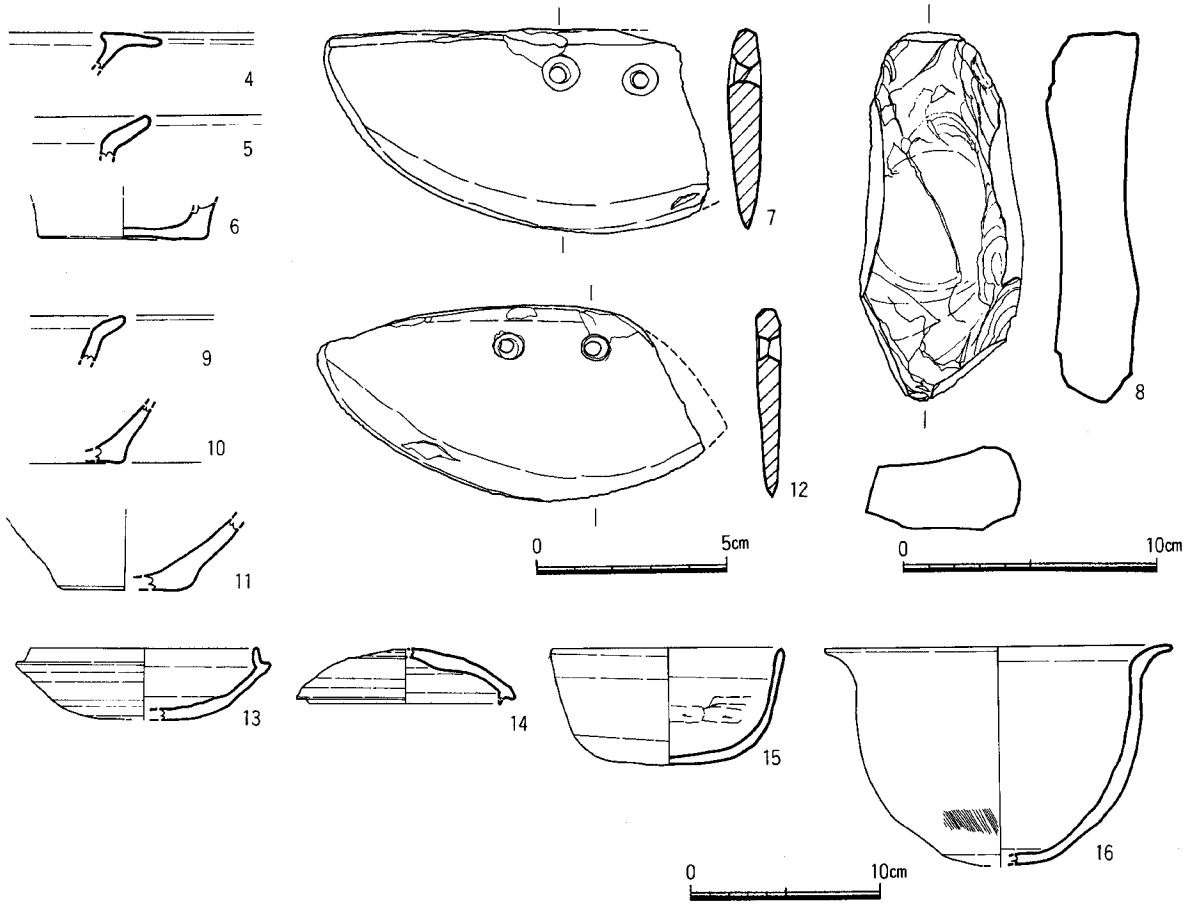


Fig. 31　竪穴住居跡(SC)出土遺物実測図(1/4・1/3・1/2)

底部は丸みを帯びた平底である。内面にはヘラケズリを施す。16は甕で、口縁は緩やかに外反する。底部は丸底である。

3） 土坑(SK)

土坑は7 基検出した。ここでは主な土坑について述べていく。

SK-012 (Fig.32)

調査区北東に位置する。平面形は長楕円形を呈し、中央より南側を更に掘り下げている。掘り下げた中央には径30～40cmのピットがあり、柱が据えられていた可能性がある。これに関連する建物、柱穴等は確認できなかった。長さ405cm、幅145cm、深さ70cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、埋土から弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

出土遺物 (17、18)

17、18は弥生土器で、17は甕の口縁、18は鉢の口縁である。

SK-017 (Fig.32)

調査区南東に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。長さ235cm、幅95cm、深さ110cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期末～後期に位置づけられると考える。

出土遺物 (19～24)

19～23は弥生土器である。19は丹塗りの甕である。24は粘板岩製の石包丁である。大半が欠損し、刃部の一部が残存するのみである。

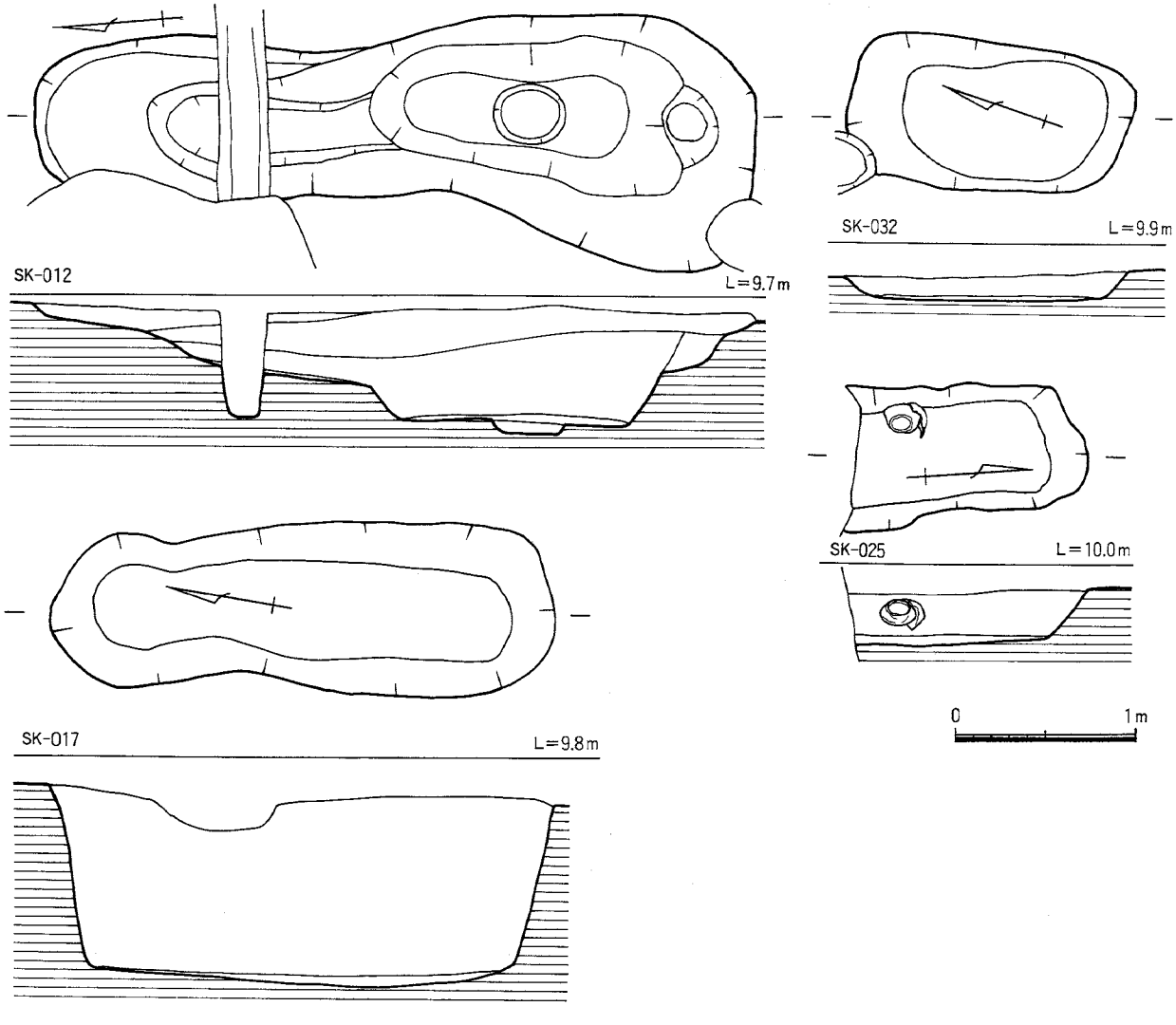


Fig. 32 土壙(SK)遺構実測図(1/40)

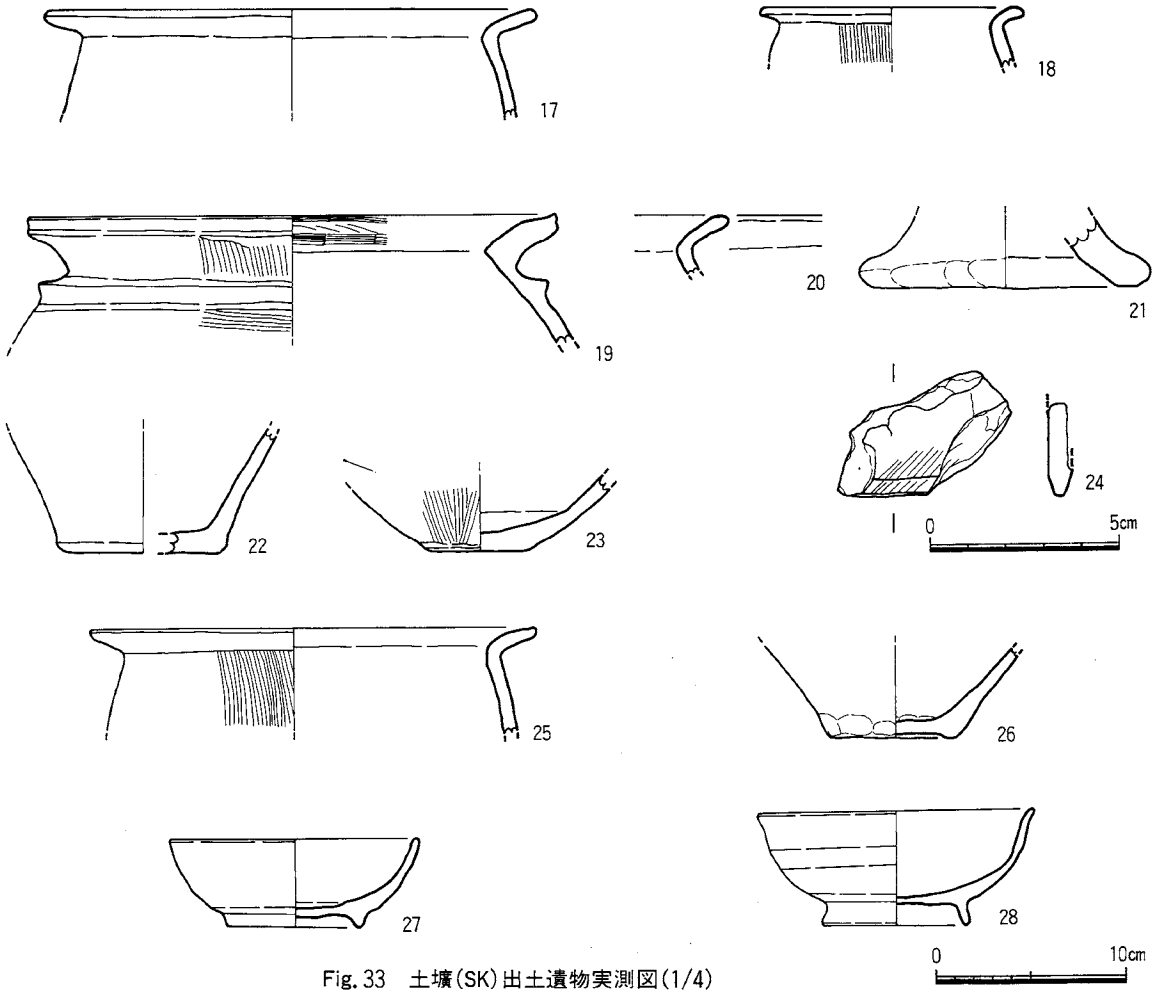


Fig. 33　土壙(SK)出土遺物実測図(1/4)

Fig.33

SK-032（Fig.32）

調査区北西に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。長さ160cm、幅85cm、深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期末～後期に位置づけられると考える。

出土遺物（25、26）

25、26は弥生土器の甕である。

SK-025（Fig.32）

Ⅲ区の南西に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。遺構は調査区南側に広がる。検出した長さ130cm、幅70cm、深さ30cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物は土坑の壁際で重なった状態の土師器椀が出土した。土壙墓の可能性もある。時期は11世紀後半に位置づけられると考える。

出土遺物（27、28）

27、28は土師器椀である。27は底部に断面三角形の低い高台が付く。底部の切離しはヘラ切りである。28はハの字形に開く高台が付く。口縁は緩やかに外反する。底部の切離しはヘラ切りである。

4） 井戸（SE）

井戸は3基検出した。調査区の東側と西端に位置する。そのうち、SE-016、029は弥生時代後期中期末～後期前半に位置づけられ、素掘りである。井戸の底は八女粘土層まで達している。SE-020は西端で検出したが、半分以上が調査区の外側に広がるため、上面から1.5m程掘り下げたのみである。時期は12世紀後半に位置づけられる。

SE-016（Fig.34）

調査区東側に位置し、SD-002に切られる。平面形は円形を呈し、直径130～150cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ375cm、底面の標高5.75mを測る。埋土は上面から200cmは暗褐色粘質土が、そこから100cmはローム、八女粘土ブロックまじりの茶褐色粘質土が堆積する。底面から80cmでは暗褐色粘質土まじりの八女粘土が堆積する。遺物は特に中層の茶褐色粘質土から完形の弥生土器が多量に出土した。時期は弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

出土遺物（29～53）

29～53は弥生土器である。29～31は袋状口縁壺である。口縁と頸部の境に三角突帯を施す。29、30は丹塗りである。30は肩部に2条の三角突帯を施す。31は短い頸部に袋状口縁がつく。法量はそれぞれ、器高21.3cm、24.3cm、25.0cm、口径9.5cm、9.0cm、9.0cmを測る。32～34は小型壺である。32～34は丹塗りである。32は口縁はやや外反気味に開く。頸部には円形の穴を穿つ。33、34は緩やかに外反し、34は口縁は水平をなす。肩部には三角突帯を施す。法量はそれぞれ、器高17.0cm、18.5cm、20.5cm、口径14.5cm、15.0cm、12.5cmを測る。35、36は瓢形土器である。口縁は緩やかに外反する。頸部と胴部の境には三角突帯を施す。胴部上半には2 条のコの字形突帯を施す。器面には丹が塗られている。法量はそれぞれ、器高37.0cm、35.5cm、口径20.0cm、20.5cmを測る。37は広口壺である。口縁は緩やかに外反する。頸部と胴部の境には三角突帯を施す。胴部上半には三角突帯を施す。瓢形土器が退化した形式と考えられる。器高30.0cm、口径17.0cmを測る。38は広口壺で、胴部は欠損している。口縁はやや外反気味に開く。肩部には三角突帯を施す。39～45は小、中型の甕である。39は口縁はくの字形で、胴部は球形を呈する。40～45は口縁はくの字形を呈する。口縁内面の稜は明確ではない。胴部はやや丸みを帯びており、中位に最大径をもつ。46～52は大型の甕である。46は口縁はくの字形を呈し、口縁下に三角突帯を施す。口縁内面の稜は明確である。47は口縁はやや内湾し、くの字形を呈する。口縁下には三角突帯を施す。胴部最大径は中位よりやや上にある。底部には穿孔を施す。器高48.4cm、口径33.4cmを測る。48～52は底部である。52は底部に穿孔を施す。53は匙形の土製品である。先端の部分は欠損している。

SE-029（Fig.34）

調査区東側に位置し、SD-003に切られる。平面形は円形を呈し、直径110～115cmを測る。底面は八女粘土層を更に掘り下げている。深さ315cm、底面の標高6.2mを測る。埋土は上面から170cmはロームまじりの茶褐色粘質土が、それ以下は八女粘土まじりの茶褐色粘質土が堆積する。遺物は主に坑底付近で弥生土器、木製容器が出土した。時期は弥生時代後期前半に位置づけられる。

出土遺物（54 ～61）

54～61は弥生土器である。54は袋状口縁壺である。短い頸部に袋状口縁がつく。胴部中位に最大径がある。底部は平底である。器高23.0cm、口径13.0cmを測る。55～57は複合口縁壺である。55は口縁のみである。口縁はくの字形を呈する。内外面に明確な稜がつく。56は口縁はくの字形を呈し、屈曲部の稜は不明確である。頸部と胴部の境に三角突帯がつく。57は口縁はくの字形を呈し、屈曲部の稜は明確である。頸部と胴部の境に三角突帯を施す。底部は平底である。器高39.0cm、口径15.0cmを測

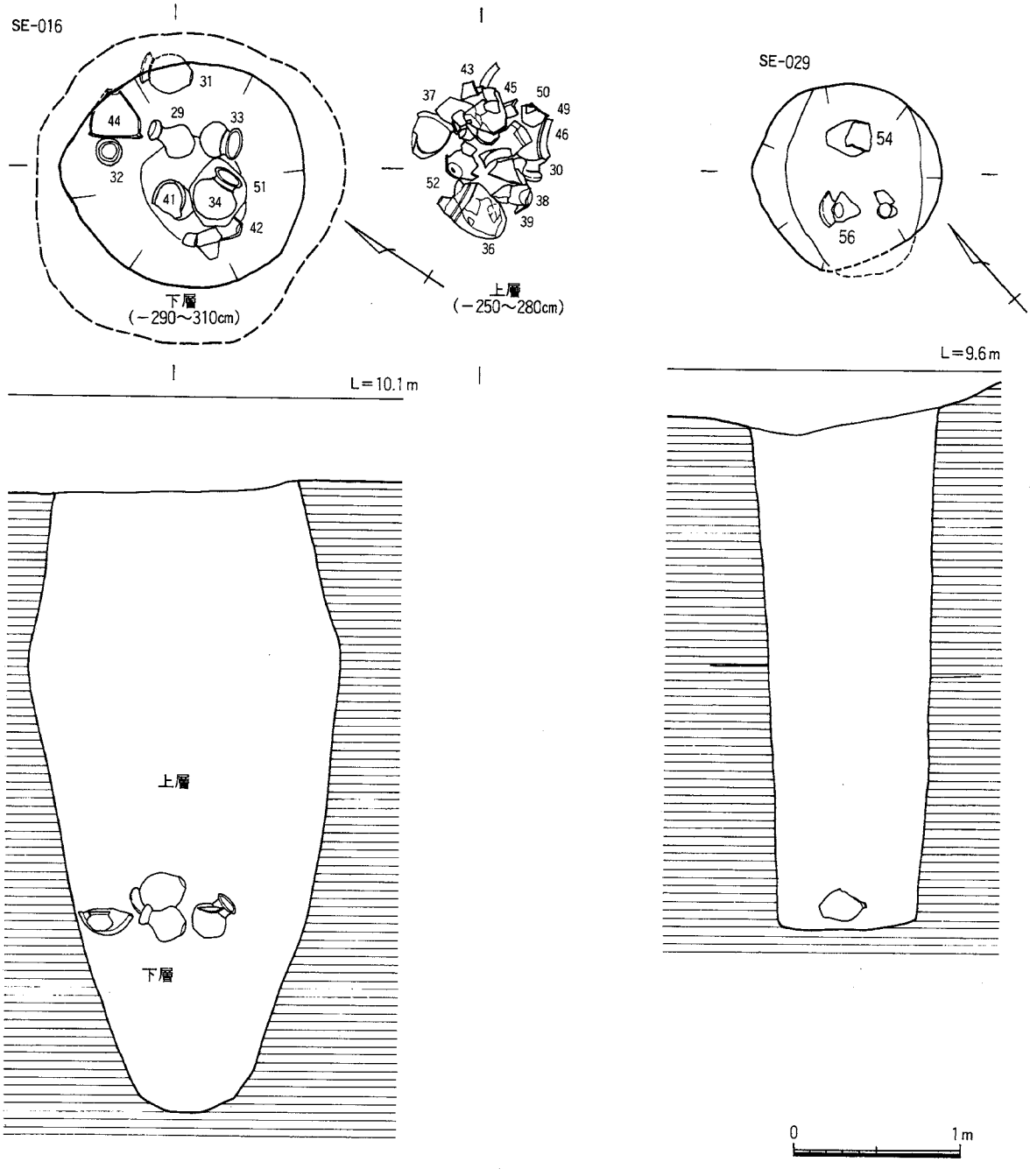


Fig. 34　井戸(SE)遺構実測図(1/40)

る。58は複合口縁壺の胴部と考えられる。最大径は中位より上にある。59は壺の胴部である。口縁は欠損している。外面にはヘラミガキを施す。60は手捏ね土器である。小型の高坏と考えられ、脚部のみ残存する。器面には指頭痕が残る。61は木製の容器である。スギの芯持ち材を側面からくり抜き、両側には円形の穴を穿った把手を作りだす。一方の把手は欠損している。平面形は楕円形を呈する。底部は丸底である。器面には削り痕が見られる。器高12.7cm、内径約20cm、厚さ約2cmを測る。

SE-020（Fig.14）

調査区西端に位置する。SD-007を切る。遺構が調査区に西側に更に広がるため、上面から150cm程掘り下げたのみで完掘はしていない。遺物は埋土から白磁、瓦器、土師器坏等が出土した。時期は12世紀後半に位置づけられる。

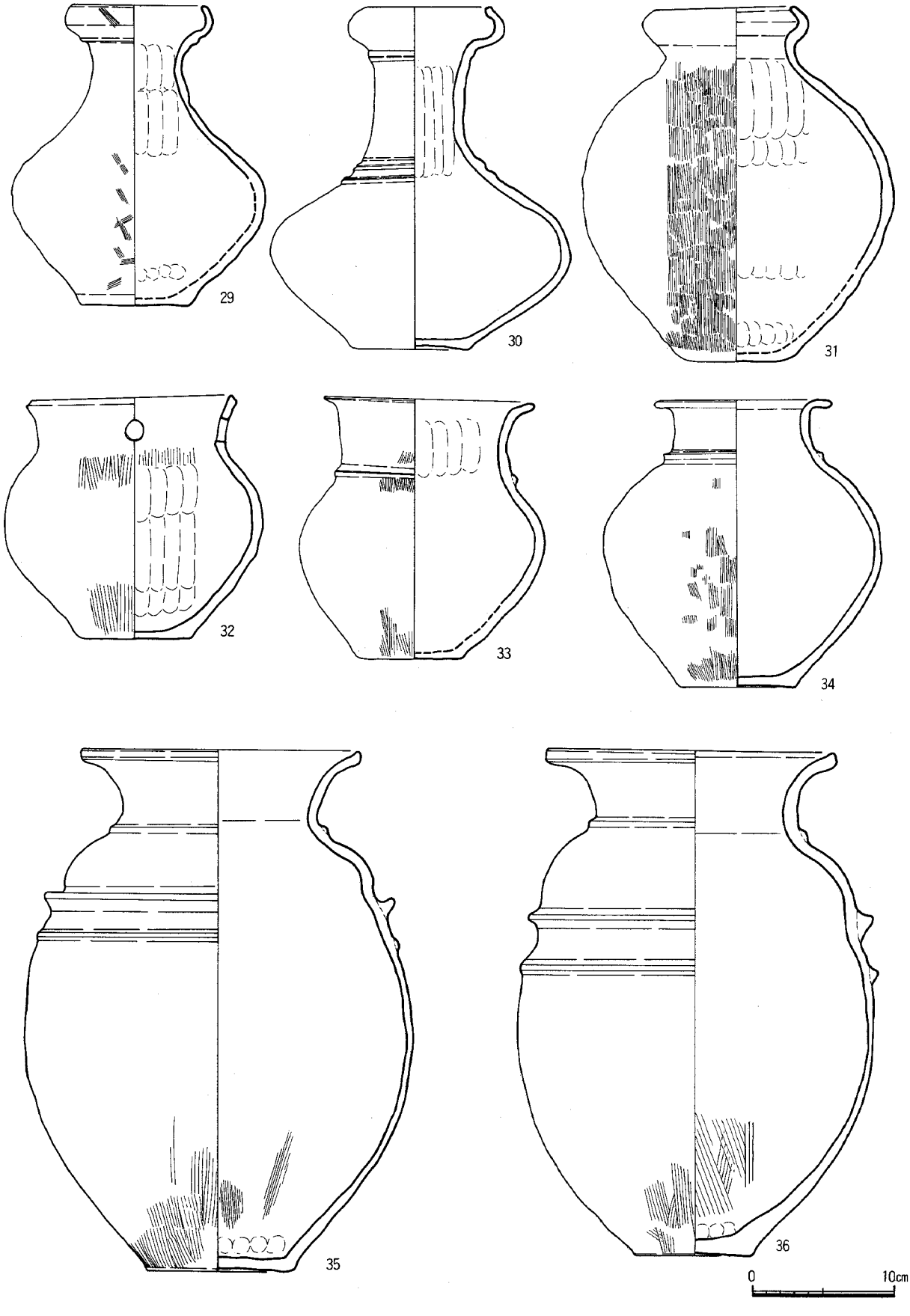


Fig. 35　SE-016出土遺物実測図1(1/4)

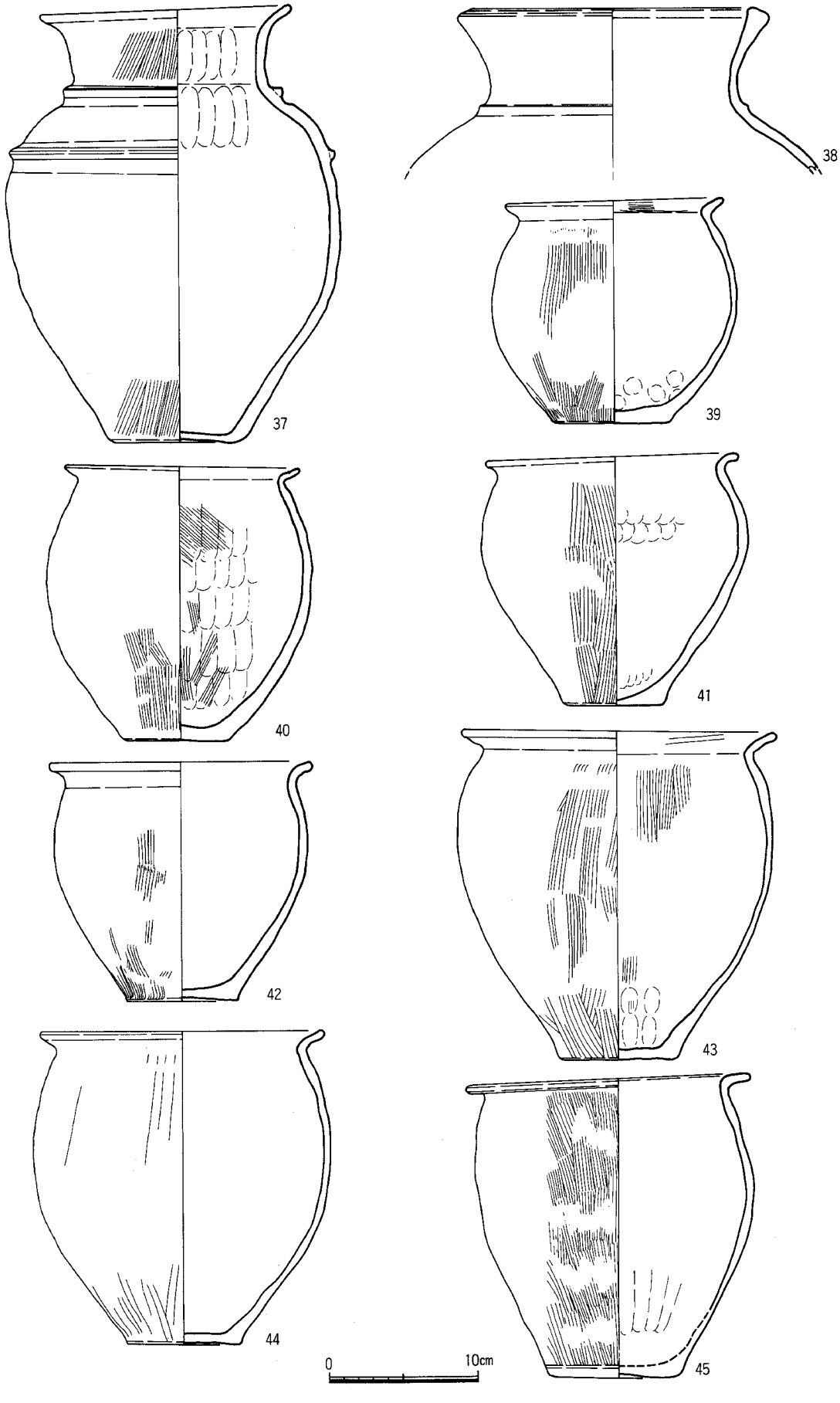


Fig. 36　SE-016出土遺物実測図2(1/4)

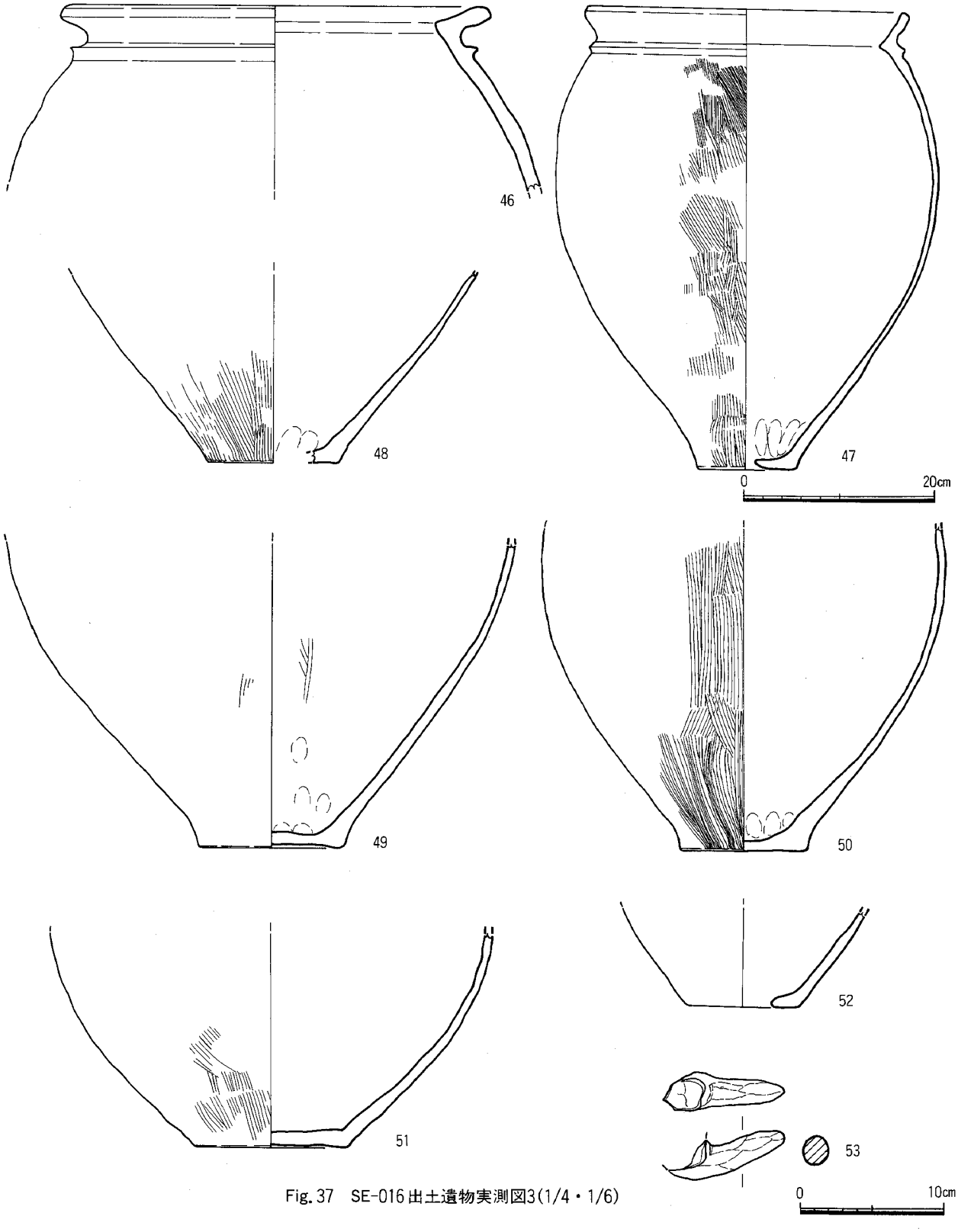


Fig. 37　SE-016出土遺物実測図3(1/4・1/6)

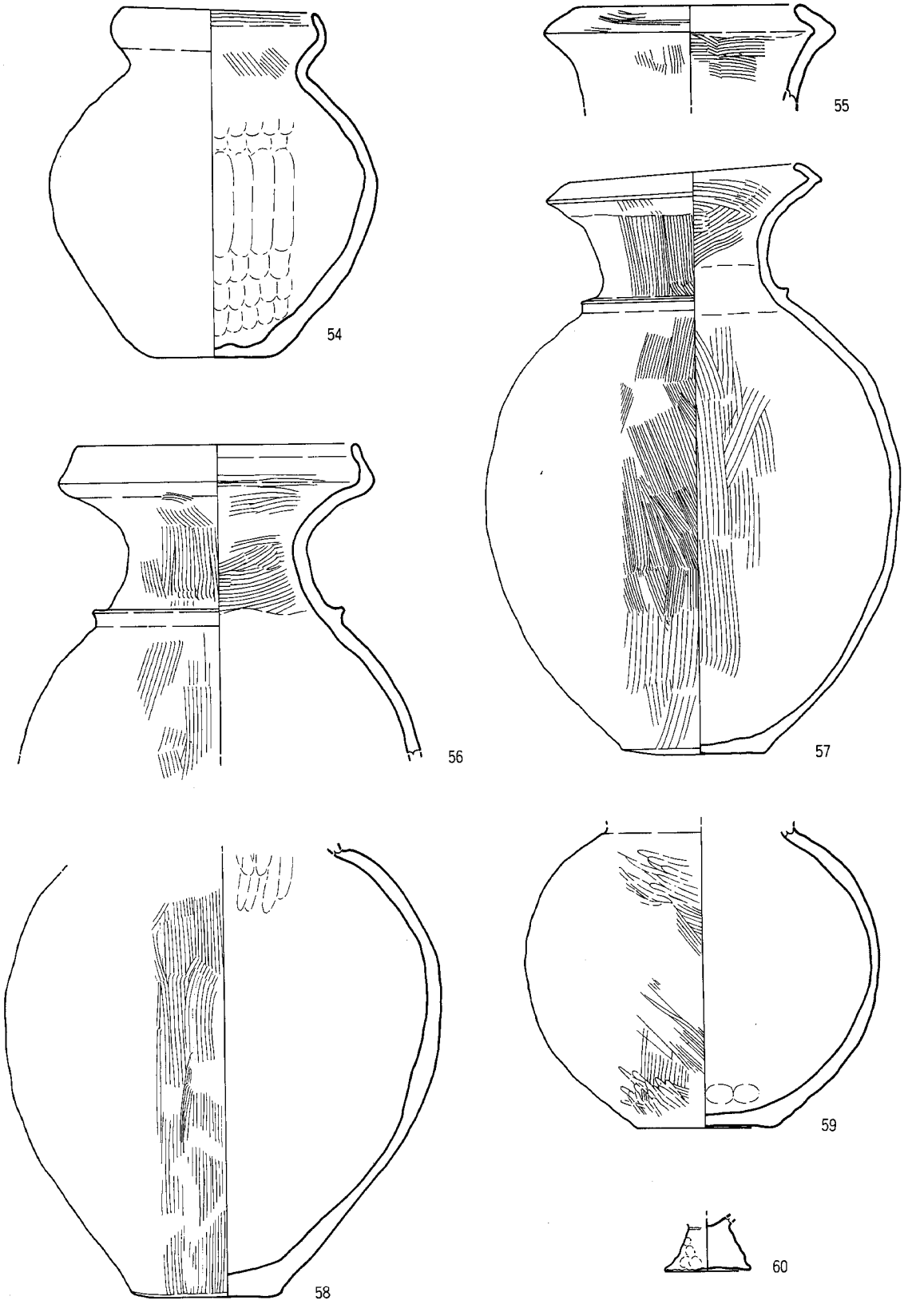


Fig. 38　SE-029 出土遺物実測図1(1/4)

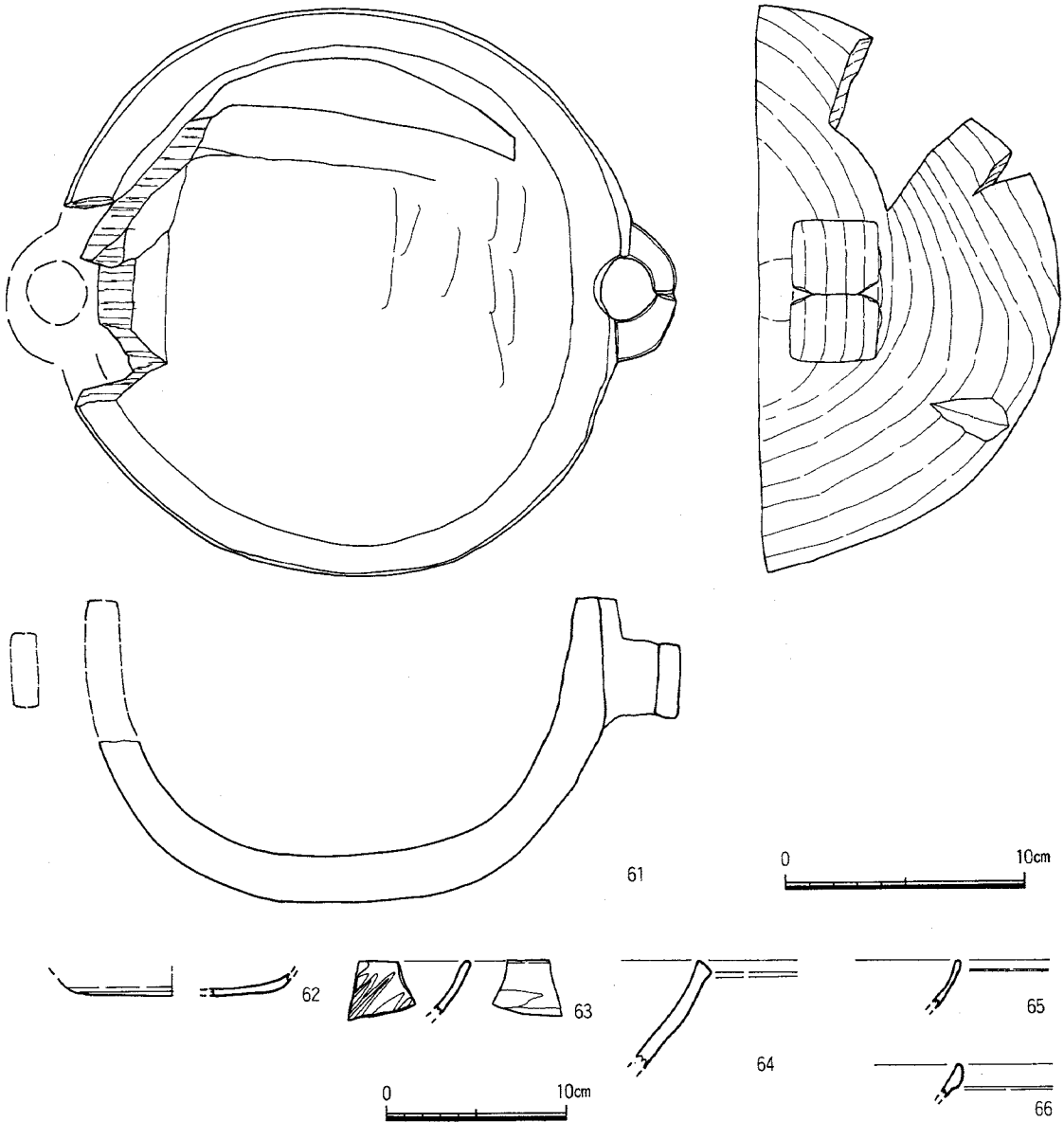


Fig. 39　SE-029出土木製品実測図(1/3)及びSE-020出土遺物実測図

出土遺物（62～66）

66は土師器坏である。口縁は欠損している。底部の切離しは回転糸切りである。63は瓦器である。内外面にヘラミガキを施す。64は須恵質の鉢である。口縁は玉縁を呈する。65、66は中国製白磁である。口縁は玉縁を呈する。65はⅡ類、66はⅣ類である。

5）溝(SD)

今回の調査では7条の溝を検出した。遺構の時期は弥生時代後期から中世まで至る。ここでは時期毎に記述していく。

SD-004（Fig.40、41）

調査区中央に位置し、東側にやや曲がりながら南北方向に延びる溝である。SD-004は更に南側に延びるが、北側は溝の立ち上がりを検出した。環壕の陸橋部分にあたるものと考える。北側の隣接地での試掘ではSD-004を延長した位置に溝は検出されておらず、東側に折れて曲がることも考えられる。溝の断面形は逆台形を呈する。幅250～300cm、深さ約140cmを測る。検出された溝の長さは約11mを測る。遺物は第2 層と第3層の間で破砕して投棄した状態の弥生土器を大量に検出した。この他、石包丁、ガラス小玉等が出土した。出土土器は小型の鉢が多い。溝は土器の大量投棄後まもなく廃絶したと考えられ、廃絶の時期は弥生時代後期前葉に位置づけられる。掘削の時期は不明確だが、周囲の遺構の分布状況から弥生時代中期末までは遡ると考える。

出土遺物（67～117）

67～115は弥生土器である。67、68は複合口縁壺である。屈曲部は緩やかである。肩部には三角突帯もしくはM字形の突帯を施す。69、70は広口壺である。肩部には三角突帯がつく。外面と口縁内面には丹が塗られる。71は瓢形土器である。肩部に三角突帯を施す。胴部上半にはコの字形の突帯が2条施す。外面に丹が塗られている。72は壺である。口縁は欠損している。73は長頸壺と考えられる。胴部中位には4 条のコの字突帯がつく。74～78は無頸壺である。79～86は大型の甕である。口縁はくの字形を呈する。83～85は口縁下に突帯がつく。87～92は小型の甕である。93～107は鉢である。96、97は口縁の一部を打ち欠いて、注ぎ口を作る。108～112は器台である。113～115は高坏である。116は輝緑凝灰岩製の石包丁である。ほぼ半分が欠損する。残存長6.8cm、厚さ0.5cmを測る。117はガラス小玉である。1 個の穿孔を施す。径0.3cm、厚さ0.2cmを測る。

SD-002、007（Fig. 40、41）

SD-002、007はいずれも調査区の両端に位置するため、遺構の全容が不明確であるが、方形に巡る溝と考えられる。遺構の性格として方形周溝墓等が考えられるが、今回の調査では溝の内側に主体部等が検出できなかったため、遺構の性格は特定できていない。

002は北西のコーナーを検出した。SE-016を切る。幅約 2 m、深さ約20cm～40cmで、溝のコーナー

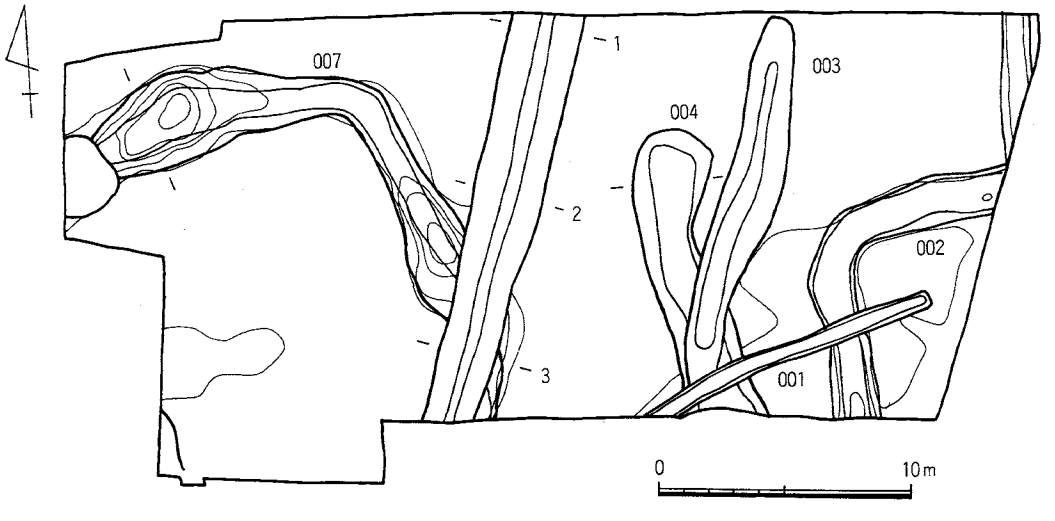
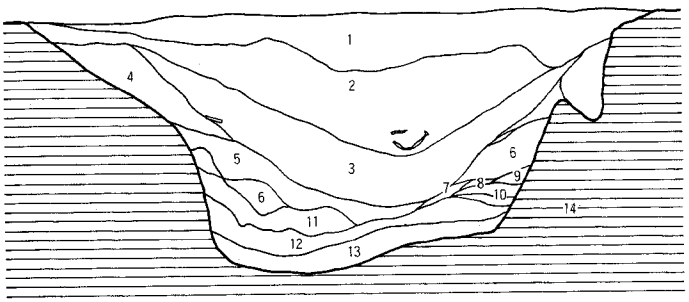


Fig. 40　溝(SD)遺構配置図(1/300)

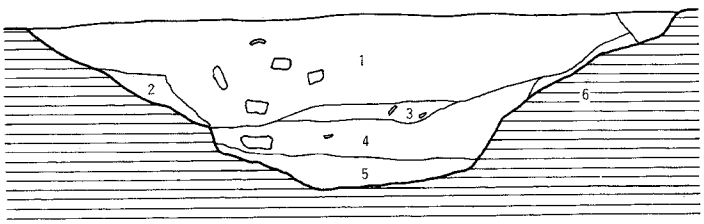
SD-004　　L=10.0m



SD-004土層

1 茶褐色粘質土(炭をわずかに含む)
2 暗褐色粘質土(炭を多く含む、土器を多く含む)
3 茶褐色粘質土
(ローム粒子を多く含む、土器を多く含む)
4 やや淡い茶褐色粘質土(ローム粒子を少し含む)
5 茶褐色粘質土(ローム粒子を多く含む、鉄分が沈着)
6 暗褐色粘質土(ローム まじり)
7 ローム粒子まじりの茶褐色粘質土
8 黒色粘質土
9 ローム粒子まじりの茶褐色粘質土
10 暗褐色粘質土まじりのローム
11 ローム(汚れている)
12 暗褐色粘質土まじりのローム
13 ローム(汚れている)
14 鳥栖ローム(地山)

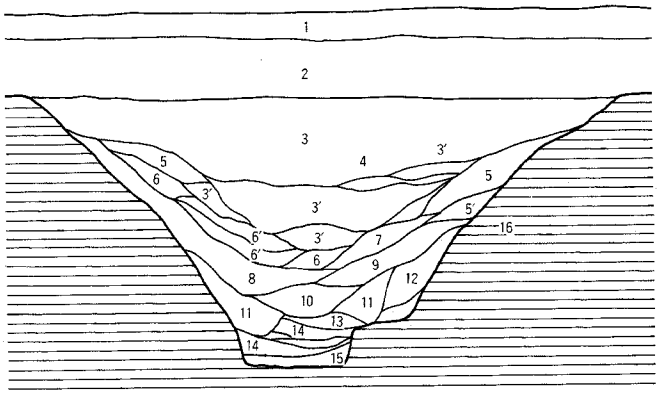
SD-007　　L=10.0m



SD-007土層

1 茶褐色粘質土
2 ローム粒子まじりの茶褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 茶褐色粘質土
5 暗灰色粘質土まじりのローム
6 鳥栖ローム(地山)

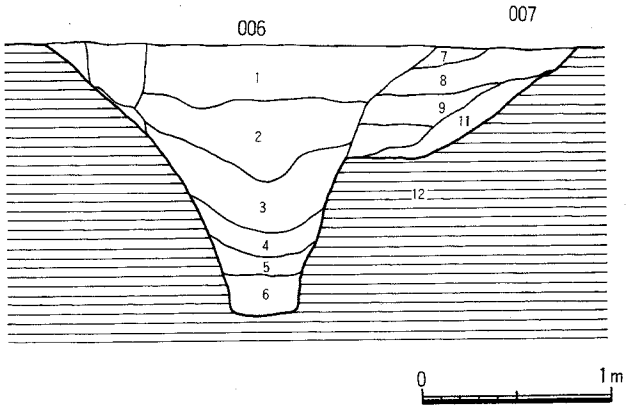
SD-006



SD-006・3トレ土層

1 耕作土
2 茶褐色粘質土(古代～中世の包含層)
3 暗灰色粘質土まじりのローム(ブロック状)
3' 暗灰色粘質土まじりのローム(ブロックが小さい)
4 暗灰色粘質土
5 茶褐色粘質土
6 暗灰色粘質土
6' 暗灰色粘質土(ローム粒子まじり)
7 灰褐色粘質土
8 茶褐色粘質土(ローム粒子まじり)
9 暗灰色粘質土(ローム粒子まじり)
10 暗灰色粘質土
11 茶褐色粘質土(ローム粒子まじり)
12 やや淡い茶褐色粘質土(ローム粒子まじり)
13 茶褐色粘質土
14 暗灰色粘質土(ローム粒子まじり)
15 ローム
16 鳥栖ローム(地山)

L=10.3m



SD-006・3トレ土層

1 暗褐色粘質土(ローム粒子を含む)
2 暗褐色粘質土(ローム粒子を多く含む)
3 暗褐色粘質土(ローム小ブロックまじり)
4 暗灰褐色粘質土(ローム粒子を含む)
5 灰褐色粘質土(ローム粒子を含む)
6 暗灰色粘質土まじりのローム
7 ロームまじりの暗褐色粘質土
8 暗茶褐色粘質土
9 暗褐色粘質土質土
10 ロームブロック
11 暗灰褐色粘質土
12 鳥栖ローム(地山)

Fig. 41　溝(SD)土層断面図(1/40)

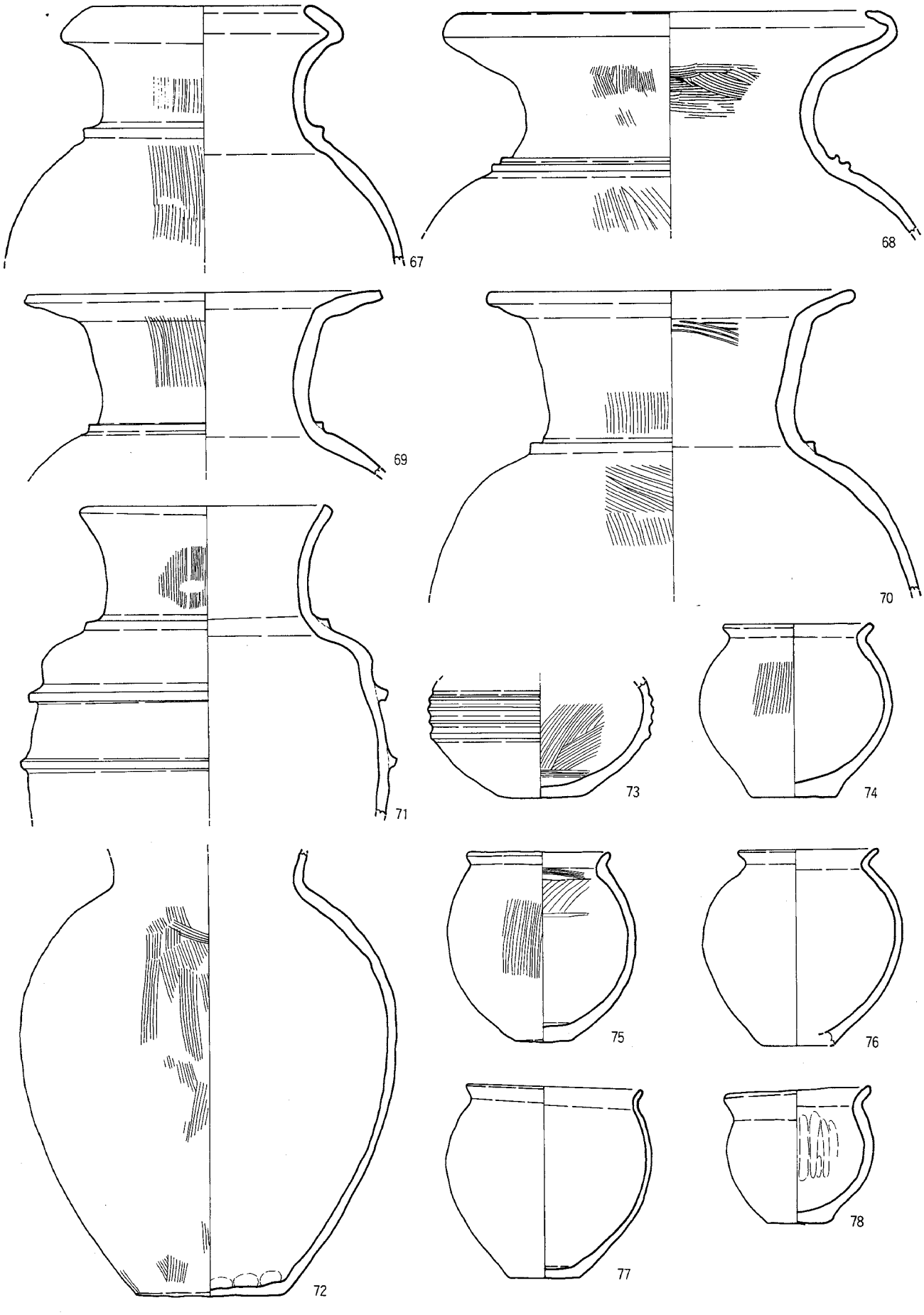


Fig. 42　SD-004出土遺物実測図1(1/4)

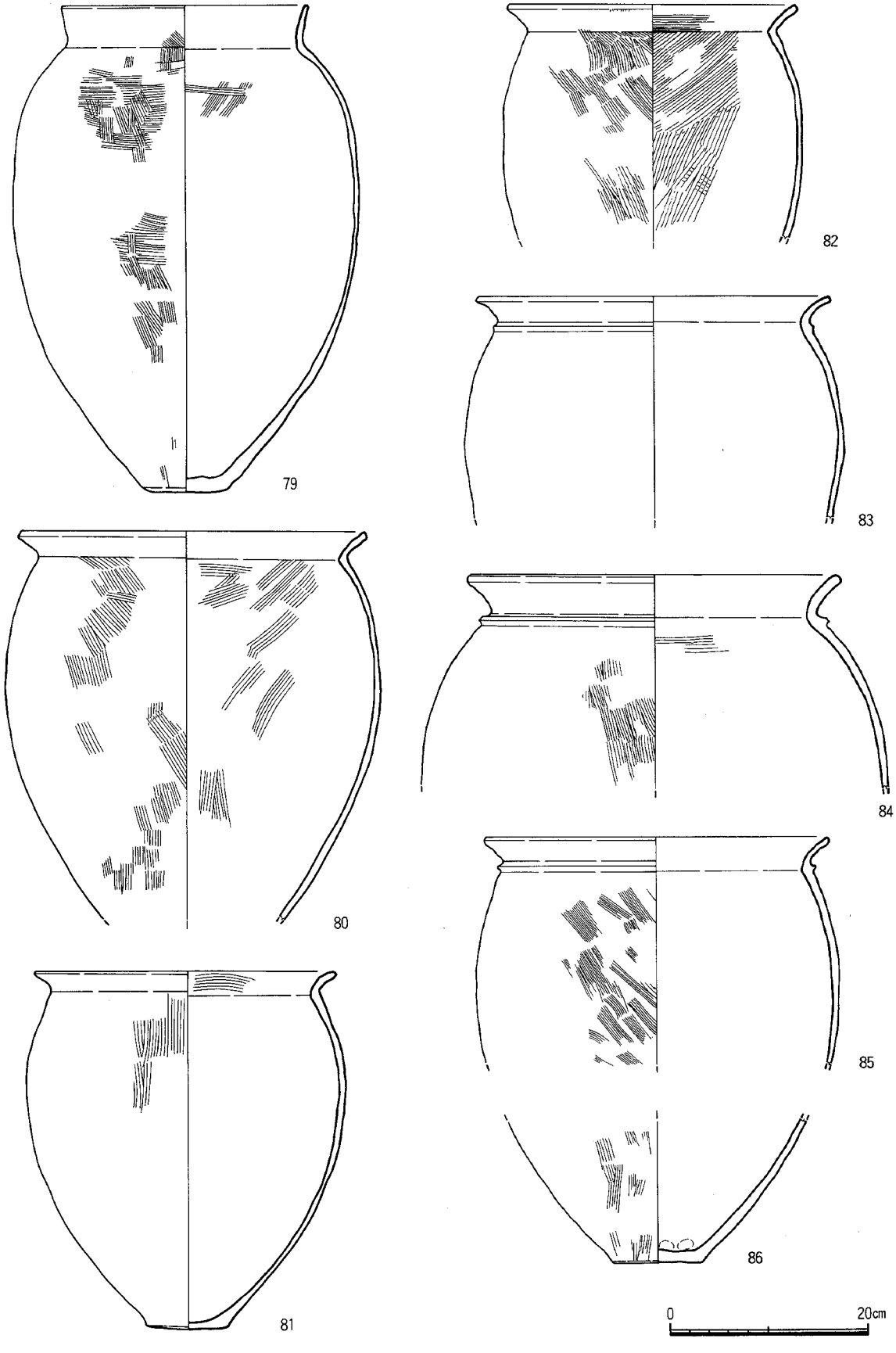


Fig. 43　SD-004出土遺物実測図2(1/6)

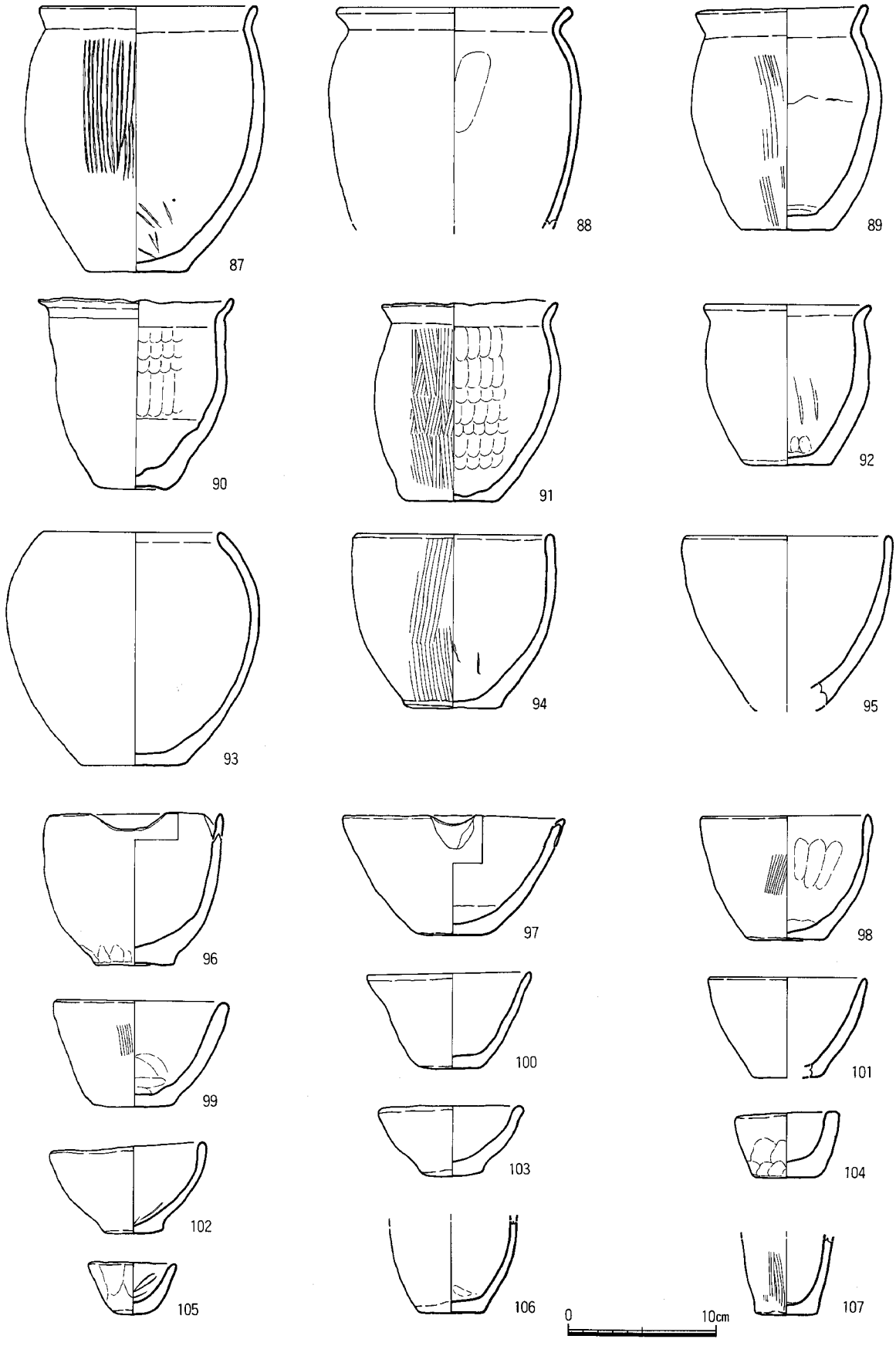


Fig. 44　SD-004出土遺物実測図3(1/4)

より中央部分が深く掘られている。これは007にも共通する。遺物は埋土から弥生土器、土師器等が出土した。時期は特定しがたいが、古墳時代初頭と考える。

007は東側半分をを検出した。西端はSE-020に切られる。幅1.5～3.5m、深さ約20cm～90cmで、002同様、溝のコーナーより中央部分が深く掘られている。遺物は埋土の上面では須恵器等が出土したが、底で土師器壺、小型器台、椀等を検出した。この他、ガラス小玉、石包丁等が出土した。時期は古墳時代初頭に位置づけられると考える。

出土遺物（118～124）

118～122は土師器である。118は壺である。口縁は直線的に開く。撫で肩で、肩部に波状文を施す。119は甕である。口縁は緩やかに外反する。内面はヘラケズリを施す。120、121は小型器台である。122は椀である。123はガラス小玉である。2個の穿孔を施す。径0.5cm、厚さ0.5cmを測る。124は輝緑凝灰岩製の石包丁である。ほぼ半分が欠損する。残存長5.2cm、厚さ0.6cmを測る。

SD-003（Fig.40、41）

調査区東側に位置する南北溝である。SD-004を切り、SD-001に切られる。N-16°-Eの方位をとる。北側隣接地の試掘では延長する方向に溝が検出されており、この溝に関連するものと考えられる。断面形はU 字形を呈する。長さ15m、幅150～200cm、深さ30cmを測る。遺物は主に土師器、須恵器等が出土した。出土遺物に時期幅があるが、時期は8世紀代に位置づけられると考える。

出土遺物（125～133）

125～131は須恵器である。125は坏身である。受け部は内湾気味に短く立ち上り、端部は丸く仕上げる。底部の約1／2に回転ヘラケズリを施す。器高3.3cm、口径11.4cmを測る。126～129は高台付の坏である。口縁は欠損している。130は甕である。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部は面取りして水平面をなす。口縁下には三角突帯を施す。突帯の下には3 本一組の櫛状工具による波状文を施す。131は盤である。底部はヘラケズリ後ナデである。132、133は土師器である。132 は高台付の坏である。体部は直線的に立ち上がる。器高7.0cm、口径18.0cmを測る。133は甕である。内面はヘラケズリを施す。

SD-006（Fig.40、41）

調査区中央に位置する南北溝である。SD-007を切る。調査区の南北に更に延びる。N-18°-Eの方位をとる。断面形はV字形を呈する。検出した長さ16m、幅230～280cmを測る。深さ135～145cmで、底は北側に向かって傾斜していく。遺物は非常に少ないが、埋土から土師器、須恵器等が出土した。出土遺物に時期幅があるが、時期は8世紀代に位置づけられると考える。

出土遺物（134～137）

134～136は須恵器である。134、135は坏蓋である。口縁は下垂する。136は高台付の坏で、底部外寄りに断面方形の高台がつく。137は投弾である。両端の一方が欠損している。

SD-001（Fig.23）

調査区南東に位置する東西溝である。 SD-003、002を切る。東端は立ち上がっている。N-72°-Eの方位をとる。検出した長さ12m、幅80cm、深さ20cmを測る。遺物は主に土師器、須恵器等が出土した。遺物が少ないため、時期は確定しがたいが、SD-003以降、8世紀～9世紀と考える。

SD-011（Fig.40）

調査区東側に位置する南北溝である。調査区の南北に更に延びる。N-2°-Eの方位をとる。検出した長さ4.5m、幅120cm、深さ30cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は土師器、瓦器等が出土した。時期は特定しがたいが、13世紀以降と考える。

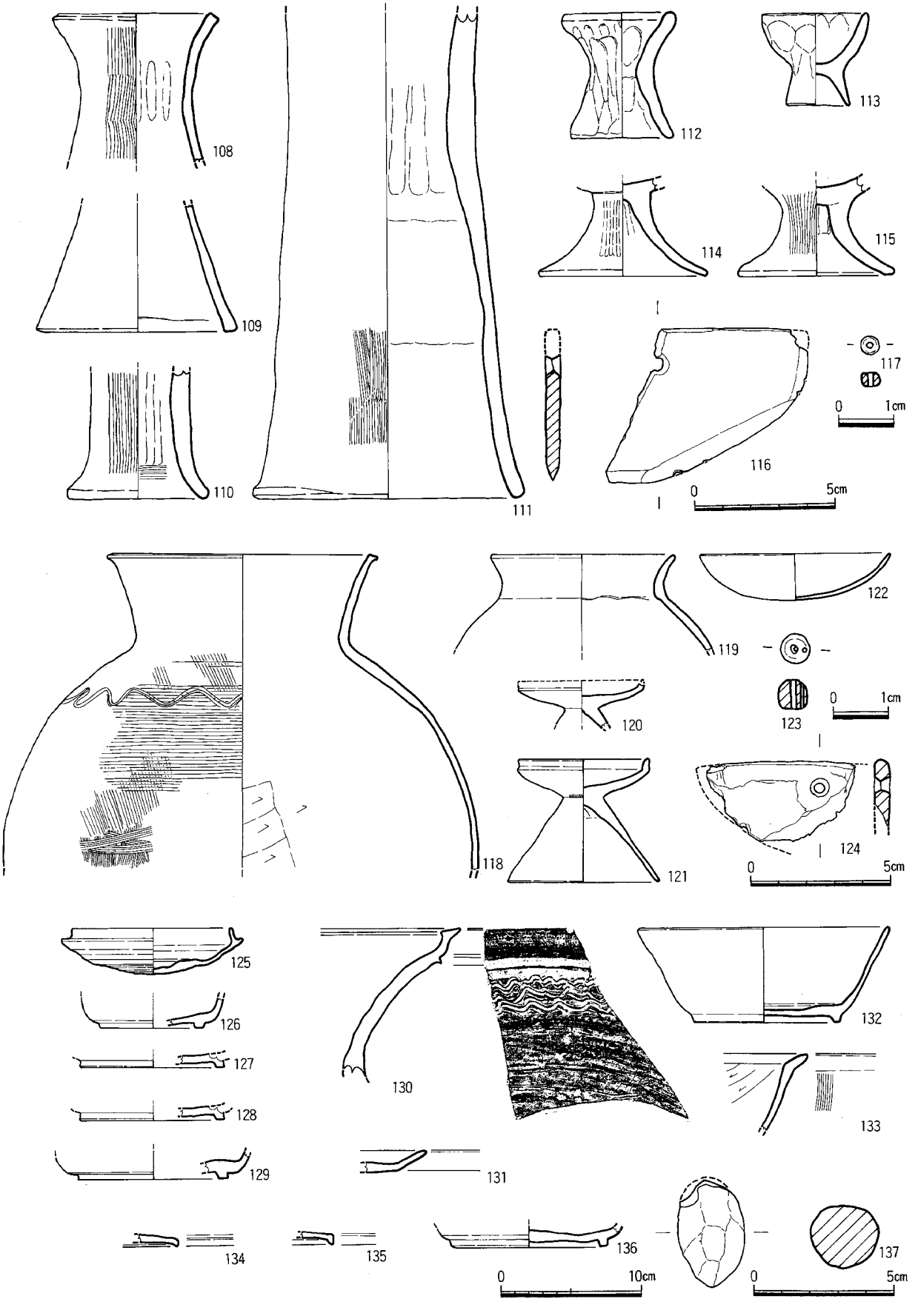


Fig. 45　SD-004・007・003出土遺物実測図(1/4・1/2・1/1)

3．旧石器時代の遺構と遺物

1）遺跡の立地と周辺の関連遺跡

那珂遺跡群は、福岡平野のほぼ中央部の那珂川と御笠川に挟まれた、春日丘陵から延びる中位段丘の北端に位置する。本調査地点はこの那珂台地の東斜面にあたり、標高は10.5～10.9mである。調査地点の東側は2mほどの段差があり、段丘の変換点に位置している。調査地点の座標は、東経130°26′35″、北緯33°33′84″である。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に比恵遺跡群があるが、数地点で若干の遺物が発見されているにすぎない。那珂遺跡群では、7次調査で百花台型台形石器が、8・13・18・23次（Fig.54.7）でナイフ形石器が出土しているが、その点数はわずかである。13次調査から出土したナイフ形石器は、本調査地点から出土した「今峠型ナイフ形石器」と似たタイプの製品である。23次調査地点からはこの他に石刃（Fig.54.9）や両面加工の黒曜石の槍形尖頭器（Fig.54.8）が出土している。縄文時代草創期に属する可能性もあるが、該期の土器は発見されていない。また、南西1kmにある板付遺跡でも数地点で石器が出土しているが、これらも後世の時期の遺構や再堆積層からの出土であり、明確な包含層は確認されていない。これに対して、その西0.5kmに位置する諸岡B遺跡では、2地点でナイフ形石器文化期を主体とした包含層が確認されている。

この那珂41次調査地点は、この一帯で旧石器時代の遺物包含層が確認された唯一の例と言えよう。

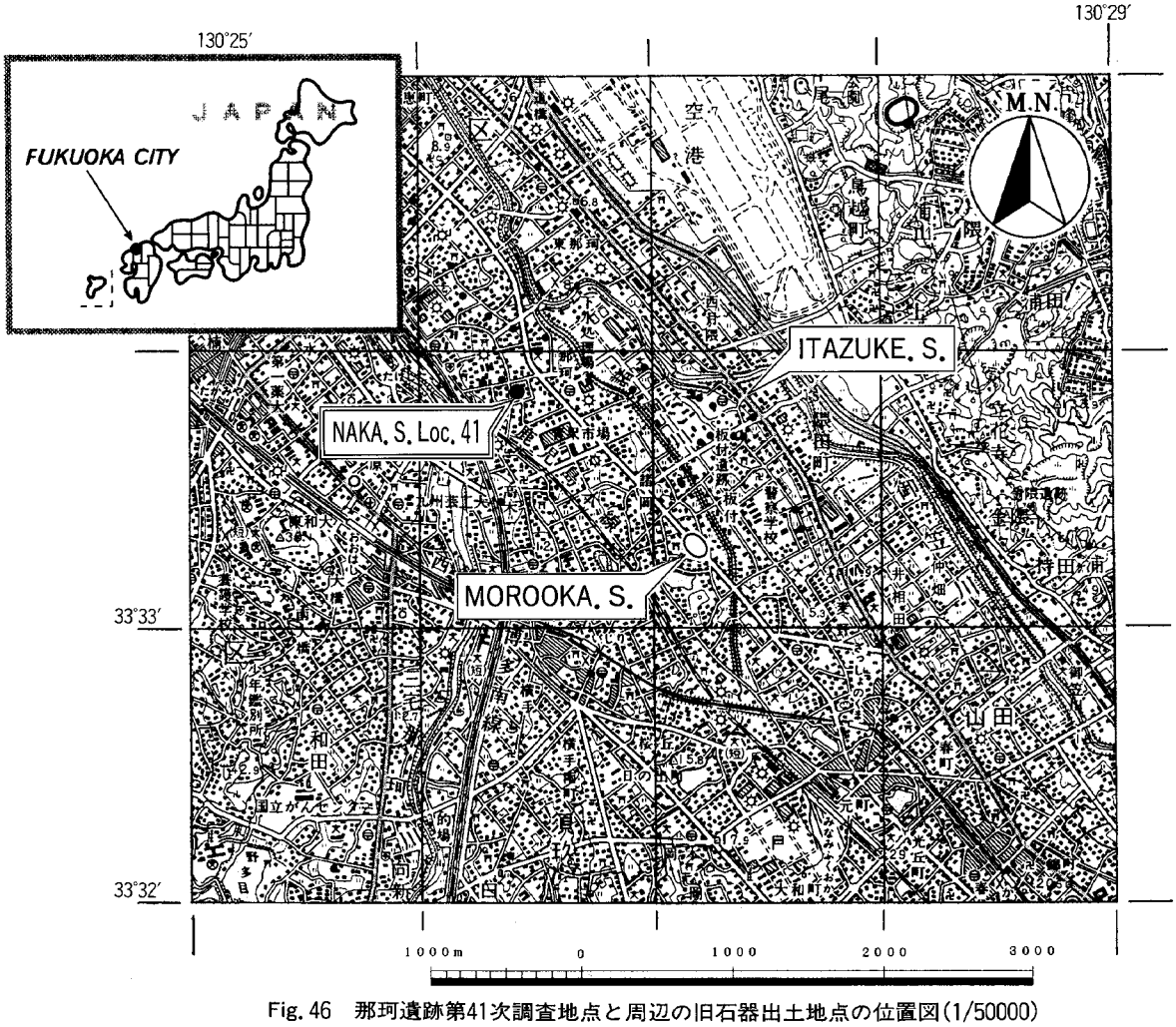


Fig. 46　那珂遺跡第41次調査地点と周辺の旧石器出土地点の位置図(1/50000)

2）遺物の出土状況〔Fig.47〕

遺物は地山とされる鳥栖ロームの上部に堆積した赤褐色のローム質土壌に含まれる。この土壌は大陸起源の黄土が降下し土壌化したものである。本調査地点の基本層序は、耕作土（厚さ15cm）の下に古代～中世の包含層である茶褐色土層（厚さ30cm）が堆積し、その下がこの赤褐色ローム質土層（遺構検出面）となる。この地点は台地の緩斜面にあたるため、本層の残りがよかったものと推察される。

しかし、古代から中世の時期に削平を受けているので、プライマリーな包含状態は復元できない。また、弥生時代以降の深い溝や住居の覆土から石器が包含層を遊離した状態で発見されており、かなりの部分が破壊されている可能性が高い。

調査グリッドは、遺物を多く包含していた遺構の周辺に任意に設けたもので、調査区全体を調査していない。2mグリッドを基本とし、遺物の出土状況をみながら順次拡張していった。結果的に、時間上の制約からおよそ55m²の調査にとどまった（調査区の12%）。しかし、2つのグリッドを除くA～C区（Fig.47）において包含層中から石器を検出することができた。とくにA区のG3・4とG11・12グリッドでは石刃やナイフ形石器を含む遺物集中区を発見した。包含層からの石器の出土点数は63点で、本調査区で発見された旧石器総数の約半数にあたる。B・C区では1グリッドに最高4点と、きわだった石器の集中部を形成してはいないが、ナイフ形石器や微細剥離のある剥片などが出土している。なお、砕片（1cm以下の剥片）は、すべて包含層の調査によって検出されている。

石器の垂直分布は、10～15cmの幅をもっているが、層厚からみてほぼ同一の文化期に属するものと考えられる。

3）出土遺物〔Fig.48.49.52.PL33･34〕

旧石器時代に属すると思われる石器の総点数は、包含層出土品63点に弥生時代以後の遺構から出土したものや遺構検出時に包含層から遊離した遺物59点を加えた112点である（表1）。

遺物の種類と点数

石器の内容は、ナイフ形石器3点、彫器2点、スクレイパー1点、微細剥離のある剥片4点、剥片76点、石刃10点、砕片22点、石核4点である。

ナイフ形石器〔Fig.48.1～3〕　1・2はいわゆる「今峠型ナイフ形石器」である。背面にポジティブな大きな剥離面を残し、素材の剥片が石器の主軸とずれるのが特徴である。素材の打面（石器の基部）の背面に平坦な加工を施す。石器の左側基部側はブランティング状の急角度の加工である。刃部は素材の形状をそのまま利用し、端部は尖る。3は縦長の石刃素材の二側辺加工のナイフ形石器である。基部を欠損するが、裏面に加工の痕跡が認められる。

彫器〔Fig.48.4・5〕　3は石刃素材の彫器である。素材の両端部をブランティング加工によって打面を形成し、側辺に向けてファッシットを入れる。基部側で両側辺、先端側で左側辺に刃部を作り出している。このタイプの彫器は松浦地方をはじめとする北部九州に顕著な製品であるが、本品もその使用痕跡と同じ特徴をもつ。小口部に使用の痕跡は認められず、腹面側に大小の刃こぼれが認められる。これは本製品が、溝切り具としてではなく、削る道具として機能したことを示唆している。5は珪質砂岩製の外表皮のある厚いファーストフレイクを素材にして、その端部に打面を形成し、側辺にファッシトを入れている。

スクレイパー〔Fig.48.6〕　6は剥片の末端を背面から3～4回の調整剥離によって凹形の刃部を作り出したスクレイパーである。側辺にも細かい刃潰れが認められる。

微細剥離のある剥片〔Fig.48.7～13〕　7は小型剥片の1側辺に連続する微細な剥離痕をもつ。

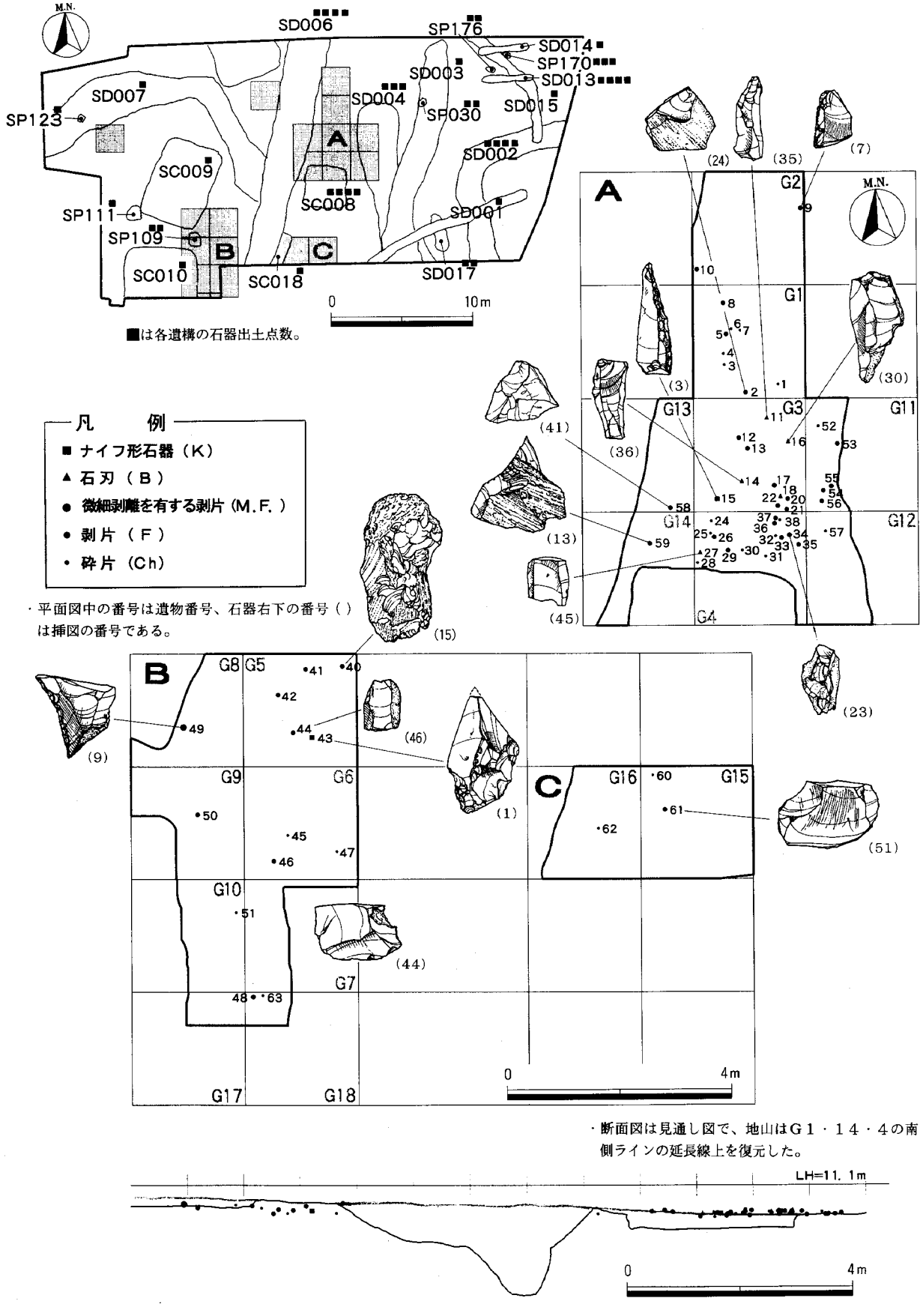


Fig. 47　石器出土状況(1/400・1/100)

8は厚めの石刃を使用したものである。左側面は垂直方向の剥離痕跡があり、打面再生の剥片である可能性が高い。9は石刃状の剥片を使用したもので、頭部半分が欠損している。左側辺に細かい連続する剥離が認められる。10は不定型な小型剥片の切断端部にわずかな使用痕跡が認められるものである。11は幅広の石刃状の剥片を使用したものである。両側辺に微細な連続する刃こぼれが認められる。12は小型の砕片の一部に使用痕跡が認められる。13は切断された剥片の先端に細かな使用の痕跡が認められる。その程度は少ない。

石刃・剥片〔Fig.49・52.14～52〕　石刃は10点出土しているが、真正な形態のものは少ない。唯一ガラス質安山岩製の真正な小石刃（49）がある。黒耀石の場合、大きさや形態からみてナイフ形石器などの石器の素材となる石刃は30を除けば存在しない。剥片は幅広の不定形なものがほとんどで、原礫の外表皮をとどめるものが多い。52は薄い角板状の原礫の一部が折れたもので、14～23などの背面に大きく礫面をとどめる資料と考え合わせると、剥片剥離の初期工程の資料が多く認められる。珪質砂岩の場合は、31と32のように無加工の石刃状の剥片があり、彫器5のように礫面をとどめる資料と同一母岩であることから、原礫からの素材獲得作業が実施されたと考えられる。

打面の形状は、42の資料を除いて、そのほとんどが平坦な無調整打面もしくは点状の小さな打面である。

石核〔Fig.52・53～55〕　53は剥片素材の偏平な形の石核で、正面から大きな剥片を数枚剥離している。傾斜打面で打面調整の痕跡はない。54はサイコロ形の石核で、正面と左側面に剥離痕跡がある。右側面は自然面を残す。打面調整の痕跡はない。55は打面再生剥片を利用した石核で、打面を形成しないまま剥片の主要剥離面側に数回の剥離を行っている。左側面に旧石核の自然面打面からの剥離痕が観察される。打面調整は実施されていない。

石材と母岩別資料

本調査地点で使用された石材は、黒耀石（ob）、珪質砂石（q.s.）、ガラス質安山岩（an）で、その点数別の割合は118（96.7%）、3（2.5%）、1（0.8%）である。重量別では320.52g（77.5%）、91.56g（22.2%）、1.52g（0.3%）で、黒耀石が圧倒的に多く使用されている。黒耀石の砕片や小型の剥片29点を除いて、肉眼観察により以下の母岩別資料に分類した。

母岩別資料1（ob-1）　透明感のある黒色の黒耀石で、斑晶はほとんど含まない。黒色部分と透明部分の明瞭でない流理構造をもつ。原礫の形状は角礫である。4・50・55などに代表される。点数は17点（36.68g）。

母岩別資料2（ob-2）　1に似て光沢があるが、細かい縞状の流理構造をもつ黒耀石。原礫の形状は角礫である。2・25に代表される。点数は8点（28.13g）である。

母岩別資料3（ob-3）　橙色の風化面を形成するもので、縞状の流理構造が認められる黒耀石。原礫の形状は角礫である。11・15に代表される。点数は16点（57.02g）である。

母岩別資料4（ob-4）　3に比べ風化の程度が少ない黒耀石。白色の縞状の部分が表出している。原礫の形状は角礫である。52・53の2点（39.64g）のみである。

母岩別資料5（ob-5）　橙色の風化面を形成し、3に似るが縞状の流理構造が明確でない黒耀石。原礫の形状は角礫である。1・54に代表される。点数は9点（48.5g）である。

母岩別資料6（ob-6）　風化面が厚く、縞状の流理構造がほとんど見えない黒耀石。光沢をもたず、青色味を帯びた色彩をもつ。原礫の形状は角礫である。3・29を含む3点（13.82g）がある。

母岩別資料7（ob-7）　6と同じく風化が著しいが、縞状の流理構造が明確に表出している黒耀

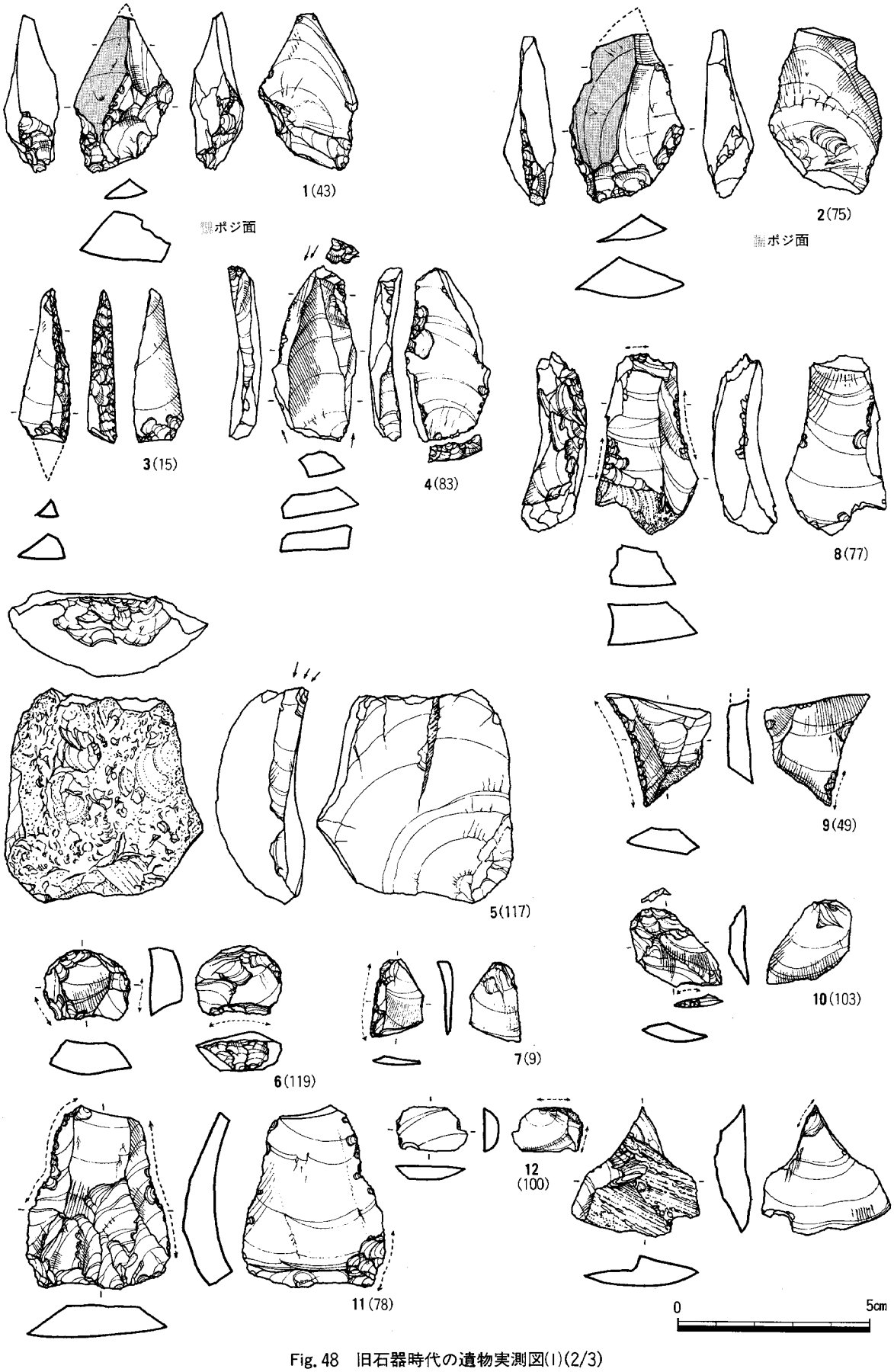


Fig. 48　旧石器時代の遺物実測図(1)(2/3)

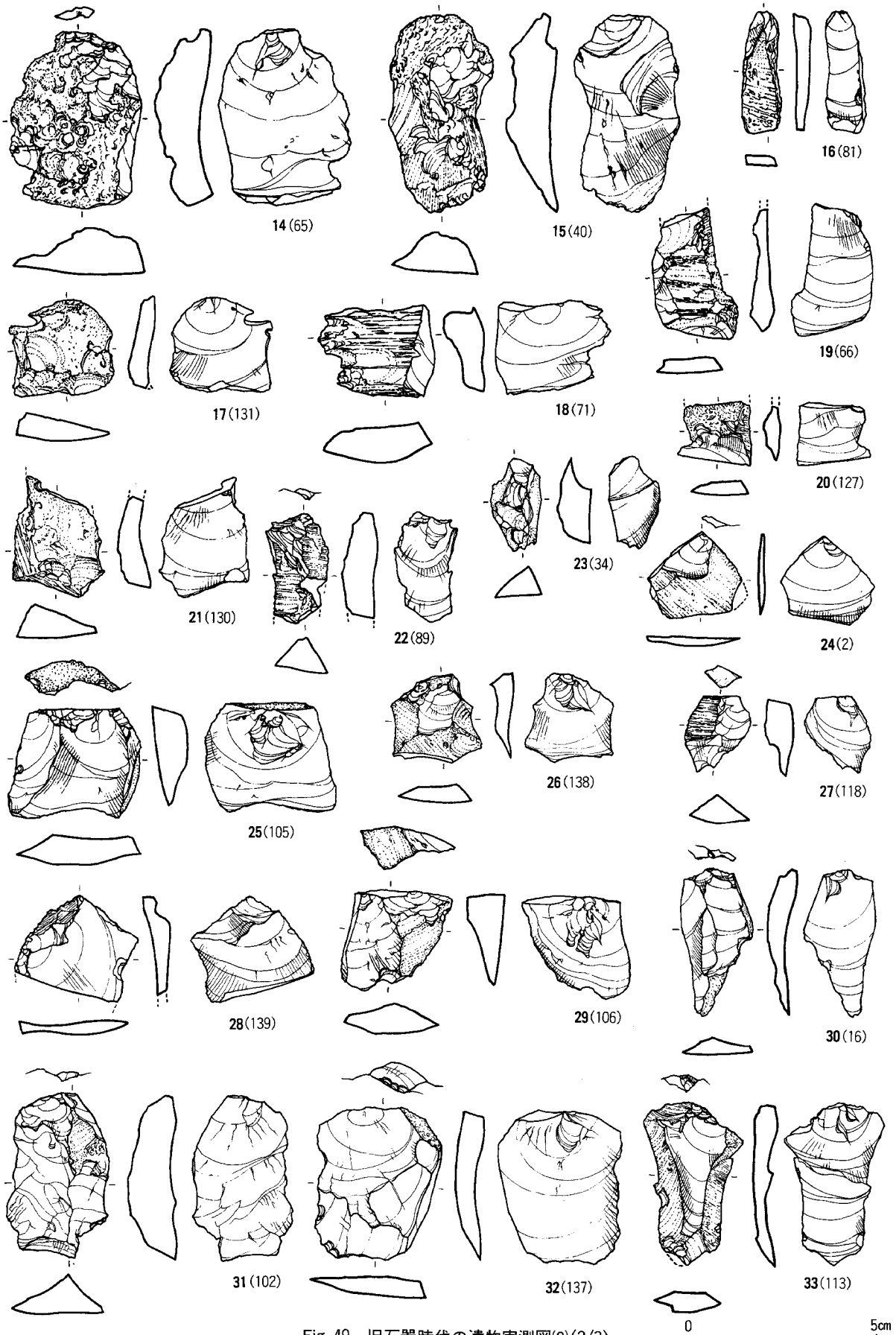


Fig. 49　旧石器時代の遺物実測図(2)(2/3)

遺物番号	挿図番号	区	出土遺構	取上番号	器種	法量（mm, g）				母岩	礫面	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
1		Ⅰ	G1	1	Ch	7.9	12.2	1.8	0.16	ob-10		
2	24	Ⅰ	G1	2	F	22.4	25.2	2.6	1.32	ob-12	有	
3		Ⅰ	G1	3	Ch	5.0	3.8	1.4	0.02	ob		
4		Ⅰ	G1	4	Ch	7.9	7.5	1.0	0.06	ob		
5		Ⅰ	G1	5	F	11.0	8.8	3.3	0.02	ob	有	欠損
6		Ⅰ	G1	6	Ch	2.8	1.8	1.0	0.02	ob		
7		Ⅰ	G1	7	Ch	4.0	8.6	1.0	0.02	ob		
8		Ⅰ	G1	8	F	17.2	15.7	4.0	0.88	ob-5	有	欠損
9	7	Ⅰ	G2	1	M.F.	20.0	16.2	3.4	0.68	ob-5	有	
10		Ⅰ	G2	2	F	16.5	9.3	7.6	0.94	ob-9	有	欠損
11	35	Ⅰ	G3	1	B	29.7	9.7	3.0	0.76	ob-8		欠損
12		Ⅰ	G3	2	F	19.8	7.6	3.6	0.46	ob-13	有	
13		Ⅰ	G3	3	F	12.0	7.3	1.8	0.12	ob		
14	36	Ⅰ	G3	4	B	28.2	11.9	3.4	1.26	ob-8		
15	3	Ⅰ	G3	5	K	40.0	13.1	6.3	2.52	ob-6		欠損
16	30	Ⅰ	G3	6	B	39.6	19.2	6.1	3.16	ob-3	有	
17		Ⅰ	G3	7	F	15.4	21.9	4.1	1.00	ob-2	有	
18	46	Ⅰ	G3	8	B	18.3	13.5	4.2	1.32	ob-2	有	
19	48	Ⅰ	G3	9	B	13.5	11.1	3.3	0.54	ob-12		
20		Ⅰ	G3	10	F	10.2	4.4	2.3	0.14	ob		
21		Ⅰ	G3	11	F	18.0	14.6	3.1	0.86	ob-12		
22		Ⅰ	G3	12	F	12.5	9.7	1.5	0.14	ob-1	有	欠損
23		Ⅰ	G3	13	F	18.2	9.9	1.4	0.26	ob-1		
24		Ⅰ	G4	1	Ch	7.0	7.9	1.9	0.06	ob		
25		Ⅰ	G4	2	Ch	7.7	7.7	0.9	0.02	ob		
26		Ⅰ	G4	3	F	18.7	7.7	1.9	0.36	ob-12		欠損
27	45	Ⅰ	G4	4	B	17.7	14.8	2.3	0.62	ob-11		欠損
28		Ⅰ	G4	5	Ch	4.6	5.1	1.0	0.02	ob		
29		Ⅰ	G4	6	F	16.7	12.5	3.0	0.62	ob-2	有	欠損
30		Ⅰ	G4	7	Ch	4.8	8.4	1.6	0.12	ob-11		
31		Ⅰ	G4	8	Ch	5.9	4.6	1.2	0.02	ob	有	
32		Ⅰ	G4	9	Ch	9.0	12.1	2.5	0.06	ob		
33		Ⅰ	G4	10	F	18.7	13.2	2.2	0.56	ob-11	有	
34	23	Ⅰ	G4	11	F	25.0	13.7	8.8	2.16	ob-1	有	欠損
35		Ⅰ	G4	12	F	13.3	9.2	1.8	0.10	ob		欠損
36		Ⅰ	G4	13	F	15.8	14.9	1.6	0.26	ob-1	有	
37		Ⅰ	G4	14	F	24.6	11.4	3.5	0.76	ob-13	有	欠損
38		Ⅰ	G4	15	Ch	4.1	4.1	1.9	0.02	ob		欠損
39		Ⅰ	G4	16	Ch	8.3	3.1	1.3	0.02	ob		欠損
40	15	Ⅱ	G5	1	F	52.5	29.9	12.4	14.92	ob-3	有	
41		Ⅱ	G5	2	F	18.6	13.2	4.3	0.68	ob-1		
42		Ⅱ	G5	3	F	15.6	11.5	4.8	0.58	ob-3		
43	1	Ⅱ	G5	4	K	40.8	25.4	11.8	9.28	ob-5		欠損
44		Ⅱ	G5	5	F	13.0	15.9	?	0.68	ob		粉砕
45		Ⅱ	G6	1	Ch	5.8	9.1	1.0	0.06	ob		欠損
46	44	Ⅱ	G6	2	F	21.7	30.3	9.7	5.36	ob-6	有	欠損
47		Ⅱ	G6	3	Ch	9.6	8.5	2.6	0.14	ob		
48		Ⅱ	G7	2	F	14.1	5.9	2.6	0.14	ob		
49	9	Ⅱ	G8	1	M.F.	30.5	29.2	6.4	3.84	ob-13	有	欠損
50		Ⅱ	G9	1	F	18.7	9.5	2.2	0.26	ob-5	有	
51		Ⅱ	G10	1	Ch	3.9	4.6	0.9	0.02	ob		
52		Ⅱ	G11	1	Ch	6.2	18.3	4.4	0.42	ob		
53		Ⅱ	G11	2	F	22.5	10.4	4.1	0.64	ob	有	欠損
54		Ⅱ	G11	3	F	16.5	9.1	2.0	0.32	ob-1		欠損
55		Ⅱ	G11	4	F	15.9	21.5	5.6	1.60	ob-3	有	欠損
56		Ⅱ	G11	5	F	12.8	8.0	1.7	0.14	ob		
57		Ⅰ	G12	1	Ch	9.0	8.3	1.5	0.06	ob		
58	41	Ⅰ	G13	1	F	25.6	21.7	6.7	2.58	ob-15		
59	13	Ⅰ	G14	1	F	34.2	33.9	9.1	5.32	ob-8	有	
60		Ⅰ	G15	1	Ch	10.0	8.5	1.6	0.12	ob		
61	51	Ⅰ	G15	2	F	24.4	36.6	12.8	9.86	ob-13		欠損
62		Ⅰ	G16	1	Ch	5.8	4.3	2.7	0.10	ob		
63		Ⅱ	G7	3	Ch	9.1	4.5	4.0	0.08	ob		欠損
64		Ⅰ	SD001	ベルト	B	7.2	12.4	1.2	0.16	ob-3	有	欠損
65	14	Ⅰ	SD002	1	F	47.9	35.9	13.0	22.08	ob-7		
66	19	Ⅰ	SD002	2	F	35.7	21.5	6.5	4.08	ob-2	有	欠損
67		Ⅰ	SD002	3	F	11.3	13.4	2.0	0.22	ob		
68	39	Ⅰ	SD002	4	F	23.5	19.6	6.2	2.54	ob-5		
70		Ⅰ	SD003	2	F	17.5	12.2	5.4	0.86	ob-13	有	
71	18	Ⅰ	SD004	T1	F	24.8	31.4	9.3	7.38	ob-13	有	
75	2	Ⅰ	SD004	T3-1,2層	K	42.2	29.4	10.9	10.26	ob-2	有	欠損
76	52	Ⅰ	SD004	T2-3層	F	62.8	26.0	22.3	29.60	ob-4	有	
77	8	Ⅰ	SD006	T1-1	M.F.	47.5	27.4	10.8	15.54	ob-5	有	欠損
78	11	Ⅰ	SD006	T1-2	M.F.	48.1	38.0	8.8	15.86	ob-3		欠損
81	16	Ⅰ	SD006	T2上面	F	32.7	10.5	4.2	1.50	ob-1	有	欠損

遺物番号	挿図番号	区	出土遺構	取上番号	器種	法量（mm, g）				母岩	礫面	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ			
83	4	Ⅱ	SD007	T1	BR	45.9	22.1	6.2	7.38	ob-1		
88	53	Ⅰ	SC008	1	C	33.5	24.8	9.9	10.04	ob-4	有	
89	22	Ⅰ	SC008	2	F	27.5	16.4	10.4	3.96	ob-9	有	
90		Ⅰ	SC008	3	F	14.6	11.0	3.3	0.50	ob-3	有	
91		Ⅰ	SC008	(-20cm)	F	?	?	?	1.84	ob-2	有	粉砕
94		Ⅱ	SC009	埋土中	F	28.7	33.3	6.2	4.82	ob-13		
96		Ⅱ	SC010	貼床中	F	10.6	13.6	2.8	0.26	ob-1	有	
97	34	Ⅰ	SD013	1	F	30.8	12.3	2.6	1.32	ob-8	有	
98	47	Ⅰ	SD013	2	B	17.8	19.7	5.2	1.96	ob-5		
99	38	Ⅰ	SD013	3	F	19.8	17.0	2.4	0.62	ob-1		
100	12	Ⅰ	SD013	4	M.F.	11.6	18.8	4.0	1.02	ob-3	有	
101	42	Ⅰ	SD015		B	16.3	14.3	6.2	1.54	ob-3	有	
102	31	Ⅰ	SD017	1	F	44.5	26.9	10.9	11.50	q.s.	有	
103	10	Ⅰ	SD017	2	F	24.0	24.0	4.5	1.60	ob-1		
104		Ⅰ	SC018	埋土中	F	18.5	12.2	2.7	0.52	ob-13	有	
105	25	Ⅱ	SB019	P-109	F	29.6	34.9	9.0	8.36	ob-2	有	
106	29	Ⅱ	SB019		F	27.4	29.5	12.0	5.94	ob-6	有	
111	40	Ⅱ	SP111		F	26.8	20.4	4.6	2.10	ob-12		
112	54	Ⅱ	SP128		C	30.3	29.1	21.9	15.90	ob-5	有	
113	33	Ⅰ	包含層	1	F	44.2	26.3	7.8	5.52	ob-3	有	
114	43	Ⅰ	包含層	2	F	19.8	22.9	4.7	2.50	ob-11	有	欠損
116	50	Ⅰ	包含層	4	C	47.5	11.1	11.3	6.06	ob-1	有	
117	5	Ⅰ	包含層		BR	56.2	51.1	20.4	69.00	q.s.	有	
118	27	Ⅰ	包含層	1	F	20.3	17.8	7.5	1.68	ob-9	有	
119	6	Ⅰ	包含層	2	E.S.	17.6	22.4	9.1	4.26	ob-1		欠損
124		Ⅰ	試掘トレンチ	1	F	17.1	11.8	1.5	0.26	ob-12		欠損
125		Ⅰ	試掘トレンチ	2	F	13.2	9.5	1.9	0.24	ob-1	有	
126		Ⅰ	東端		F	16.5	11.6	4.7	0.90	ob-10		欠損
127	20	Ⅰ	廃土		F	17.2	20.6	4.7	1.50	ob-9	有	
128	55	Ⅰ	遺構面	1	C	29.0	28.1	12.0	8.08	ob-1	有	
129	37	Ⅰ	遺構面	2	F	24.6	25.9	4.1	1.46	ob-5		
130	21	Ⅰ	遺構面	3	F	28.2	27.8	9.3	6.04	ob-8	有	
131	17	Ⅰ	遺構面	4	F	26.0	30.3	6.5	5.02	ob-8	有	
133		Ⅱ	遺構面	007西隅	F	32.9	21.5	6.8	4.50	ob-3		
134		Ⅰ	遺構面	008北側	F	16.2	10.0	2.6	0.40	ob-8	有	欠損
135	49	Ⅱ	遺構面	南側拡張部	B	35.1	9.6	3.7	1.52	an	有	
136		Ⅰ	C13	2	Ch	9.9	9.0	2.2	0.12	ob		
137	32	Ⅱ	SP30	1	F	41.0	34.1	7.9	11.06	q.s.	有	
138	26	Ⅰ	SP176	1	F	23.4	25.3	7.2	2.65	ob-1	有	
139	28	Ⅰ	SP176	2	F	29.6	33.7	6.5	3.87	ob-3	有	
140		Ⅱ	SP123		F	19.9	14.1	17.3	2.69	ob-3	有	
141		Ⅰ	SD006	T1-5	F	23.0	19.7	4.0	1.41	ob-14		
142		Ⅰ	SP170	1	F	11.0	18.3	1.7	0.26	ob-3	有	
143		Ⅰ	SP170	2	F	14.5	10.4	1.6	0.21	ob-1	有	
144		Ⅱ	SD14		F	13.0	18.3	3.1	0.65	ob-2		
145		Ⅱ	SD30	2	F	15.8	8.6	2.9	0.28	ob-3		
146		1	SP170		F	15.4	12.9	4.6	0.58	ob-3	有	

〈凡例〉 石器 K ：ナイフ形石器
BR ：彫器
E.S.：エンドスクレイパー
M.F.：微細剥離のある剥片
B ：石刃
F ：剥片
ch ：砕片
石材 ob ：黒耀石
an ：ガラス質安山岩
q.s. ：珪質砂岩

表1　石器観察表

石。斑晶を含む。14の1点（22.08g）のみの出土である。原礫の形状は黒耀石の中では唯一の円礫である。

母岩別資料8（ob-8）　脂分の少ないパサパサした質感をもつ黒耀石。黒色の斑晶を多く含み、縞状の流理構造が発達している。原礫の形状は角礫である。13・35・36などに代表される7点（20.12g）がある。35と36は接点はないが、一連の剥離作業によって剥離された石刃である。

母岩別資料9（ob-9）　8に似るがより細かな縞状の流理構造をもつ黒耀石。原礫の形状は角礫である。20・22を含む4点（8.08g）がある。

母岩別資料10（ob-10）　9に比べやや斑晶が少なく、脂分の少ない黒耀石。2点（1.06g）あるが、原礫の形状は不明。

母岩別資料11（ob-11）　脂分が少なく、明瞭な細かい縞状の流理構造をもつ黒耀石。斑晶は少ない。43・45を含む4点（3.8g）がある。原礫の形状は角礫の可能性が高い。

母岩別資料12（ob-12）　黒色の斑晶を多く含み、脂分の少ないパサパサの質感がある黒耀石。8にも似るが流理構造が8に比べて明瞭でない。原礫の形状は不明。24・40に代表される。点数は6点（5.44g）である。

母岩別資料13（ob-13）　白色の縞模様が大きな間隔で表出する黒耀石。8や12に比べると脂分や黒色の斑晶は少ない。原礫の形状は角礫である。9・18に代表される。点数は8点（28.5g）である。

母岩別資料14（ob-14）　青灰色を呈する緻密な流理構造をもつ黒耀石。外面は灰色に風化している。脂分がやや少ない。1点（1.41g）の剥片がある。

母岩別資料15（ob-15）　14に似るが斑晶が多く、風化の激しい黒耀石。41の剥片1点（2.58g）がある。

母岩別資料16（q.s.）　外表面が橙褐色に変色した拳大の円礫で、内面は青灰色の緻密な生地層中に石英の密集した細層が縞状に入り込む。変成作用を受けた砂岩と考えられる。8のファーストフレイクを利用した彫器と剥片2点に接合関係はないが、8の剥片除去によって形成された打面から剥離されたものが32の剥片と考えられ、31も一連の剥離工程によって得られたものと考えられる。この3点（91.56g）のみで、中間の石核などは発見されていない。

母岩別資料17（an）　風化の著しいガラス質安山岩の石刃（49）が1点（1.52g）ある。

包含層から出土した製品のみを母岩別にその分布状況を追ってみると、A区の遺物集中地点に重な

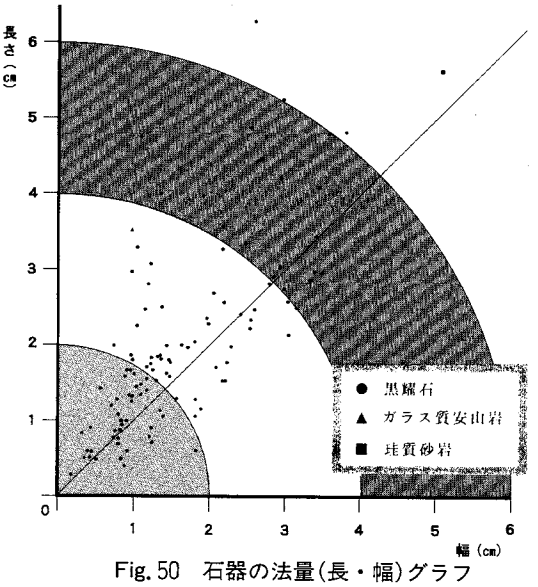


Fig. 50　石器の法量(長・幅)グラフ

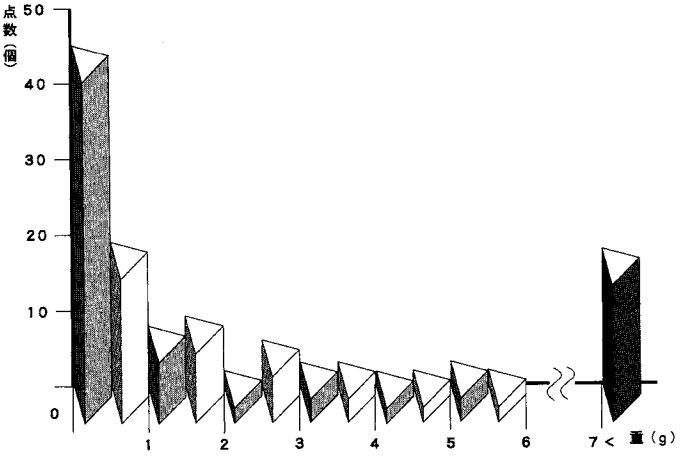


Fig. 51　石器・剥片の重量別ヒストグラム

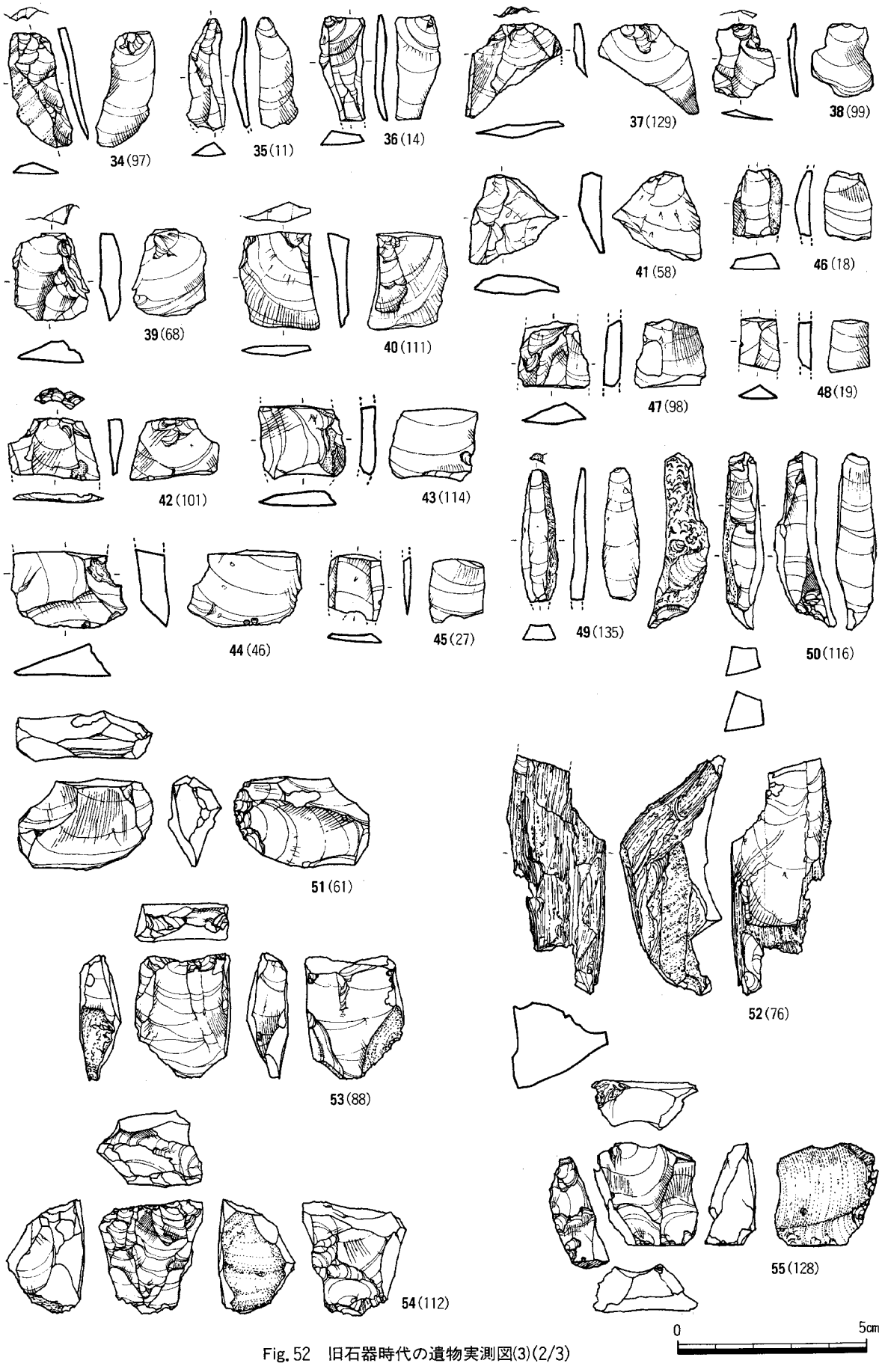


Fig. 52　旧石器時代の遺物実測図(3)(2/3)

り合うような分布をもつものは母岩１・２・３と８・10・11・12で、これらはそれぞれ同一母岩である可能性もある。うち母岩１・３・６はＢ区にも広がりをもつ。また、母岩５もＡ区の北部とＢ区に２つの分布域をもっており、これらが同一母岩の広がりであるのか別母岩であるのか、肉眼観察の限界のためいまのところ検証不能である。その特徴の最大公約数でこれらを分類するならば、Ａ群（１～６）、Ｂ群（７）、Ｃ群（８～13）、Ｄ群（14・15）の４種類に分けることができ、Ａ区の集中区においてＡ群とＣ群の２種類の母岩が消費されたことがわかる。母岩の広がりについては、あきらかに同一母岩に属する母岩15の珪質砂石の剥片が10m離れたSD017とSP030から出土しており、これが後世の移動でなければ、黒耀石の同一母岩のＡ区とＢ区への広がりも肯首できる。

なお、石材の原産地であるが、黒耀石Ａ・Ｃ群は伊万里市腰岳産、黒耀石Ｄ群が佐世保市淀姫海岸産と考えられる。黒耀石Ｂ群は西北九州系の石材であるが、細かい産地は推定できない。珪質砂岩およびガラス質安山岩についても同様である。

４）まとめ

本石器群は二次的な攪乱を受け、本来的な姿を示していないが、現状で考察できる諸点について述べてみたい。

本石器群においては３種類の石材が使用されていたが、黒耀石製石器群の特徴をみると、剥片および石刃の打面は、自然面打面か無調整の打面がほとんどで石核も同様な特徴をもつ。平坦な打面から同一方向へ剥離を進行し、打面転移も行われる。しかし、１と２のような今峠型のナイフ形石器の石核や素材剥片は存在していない。本石器群においては、縦長のナイフ形石器や彫器の素材を供給した石刃技法と今峠ナイフ形石器に代表される横長剥片の剥離技法の２者が混在している。

この２様の剥片剥離技術が同時期のものであるかが問題となるが、石器の出土状況からみればあえて両者に時間的な差異はつけられない。これまで４のタイプの彫器は松浦地方や上場台地を中心とした西北九州のＡＴ降灰以後の遺跡で数多く発見されている[1]。これに対し今峠型ナイフ形石器は、大分県今峠遺跡[2]や岩戸遺跡[3]、熊本県西原Ａ遺跡[4]、長崎県百花台遺跡[5]、百花台Ｄ遺跡[6]、福岡県八並遺跡[7]などから発見されている。これまで今峠遺跡に対する評価[8]や百花台遺跡の層位的検出例[9]などから、その所属年代がＡＴ以後のナイフ形石器文化の後半期でも終末に近い時期と考えられていた。しかし、岩戸Ｄ文化や岩戸Ｉ文化に属する層からも剥片尖頭器や三稜尖頭器などとともに発見されており、さほど新しい様相とばかり言えない。また、百花台遺跡出土品は、打面を急角度のブランティングによって極度に刃潰ししており、技術的には原の辻型台形石器に近似している。この百花台遺跡の資料を除けば、その他の出土資料は技術的にも形態的にも共通点が多く、素材生産から整形加工まで一貫して斉一的な技法が存在した可能性が高い。その素材獲得の技法は板状素材から打点を移動させながら連続して斜軸の剥片を生産する技法であったと考えられ、瀬戸内技法にも共通する要素をもっている。

以上の諸点から、これらの石器群はナイフ形石器文化の後半期の前半段階に位置づけられるものと考える。

＜註＞
（１）文献（67）
（２）文献（68）
（３）文献（69）・（70）
（４）福田正文氏表採資料
（５）文献（71）
（６）文献（72）
（７）鬼木和憲氏採集資料
（８）文献（68）・（73）・（74）
（９）文献（71）

4．福岡市内の旧石器時代遺跡地名表

1）遺跡数と概要

現在までに、福岡市内において発見された旧石器時代の遺跡の総数は、表2に示したとおり、85地点にもおよぶ。隣接する調査地点を一まとめにしても80遺跡ほど存在している。この数は調査件数の増加に伴って年々増加している。

福岡市の同期の遺跡の特徴としては、本報告の例にもあるように弥生時代以降の営みによって、ほとんど破壊を受けている点である。遺物のほとんどは数例の包含層検出例を除いて、後世の時期の遺構から発見されている。しかし、那珂・比恵遺跡、板付遺跡、諸岡遺跡、有田遺跡などの立地する更新世台地においては、とくに削平を免れた斜面部において良好な遺物包含層が確認されるケースがまれに存在する。これ以外に市街化の波をかぶっていない羽根戸原遺跡や吉武遺跡などのような山稜から続く丘陵地帯にも大規模な遺跡群が残されている。また、特異な例としては玄海灘に面した古砂丘上に営まれた雁ノ巣遺跡などのような立地をもつものもある。しかし、このような遺跡も進行する宅地化や波風蝕により消滅の一途を辿っており、早急な措置が望まれている。

時期的には、大きくナイフ形石器文化期に属するものが63地点、細石刃文化期に属するものが29地点、草創期2地点、時期不明2地点で、圧倒的にナイフ形石器文化期の遺跡数が多い。

細かい時期区分やその石器群の特徴については、山口譲治氏の報告[1]に詳しいのでそちらに譲るが、若干の新しい知見があるので述べておく。まず、福岡市内で最も古く位置づけられる石器群は、有田遺跡131地点の台形様石器を主体とする石器群であろう。これは山口氏が位置づけたＡＴ以前の最も古い諸岡Ｂ遺跡第17次調査地点（諸岡館跡）発見の石器群に先行する。また、諸岡Ｂ遺跡第２・４調査地点と同第17調査地点を時期的に異なるものとしているが[2]、この両地点は石核にみられる剥離技法などの類似からＡＴ以後のほぼ同じ時期に属する石器群と考えられる。両者を異なる時期と考える根拠としては、同第17次調査地点が大分県駒形古屋遺跡に共通する特徴をもち、同第２・４調査地点に百花台形台形石器が存在すること[3]、そして局部磨製石斧に類する資料をもつこと[4]などであるが、同石器群中には真正な台形石器も存在しておらず、両者を分ける積極的な根拠としては弱い。時期的な位置づけは保留するが、ほぼ近接した時期に属する石器群と考える。

＜註＞

（１）文献（63）　　（３）文献（63）

（２）文献（63）・（73）　　（４）文献（73）

2）　遺物紹介

これまで、整理段階で新たに発見されたものや筆者が気づいた未報告の資料を中心に報告する。

１は羽根戸原Ｃ遺跡３次調査地点（76）出土の石刃素材の彫器である。素材端部を基部側に設定し、そこと１側辺、および先端辺に背面よりブランティングを施す。その先端の左側方からファッシト形成を行っている。素材背面に残る礫面は円礫で、周辺の２次調査地点で出土した黒耀石製品の石質や風化の度合いなどが一致する。おそらく松浦星鹿半島産の黒耀石と考えられる。

２は三宅廃寺遺跡（44）出土の黒耀石製の細石刃石核である。側面に礫面をとどめる剥片を素材として、周辺に調整剥離を施した楔形の石核を、打面を転移してかつての下縁を潰して打面を形成している。図下に残る側方連続剥離痕がかつての打面である。泉福寺型の楔形細石刃核である。

３～６は笠間谷古墳群第４地点（73）からの出土品である。３は黒耀石製の台形石器で、幅広の横

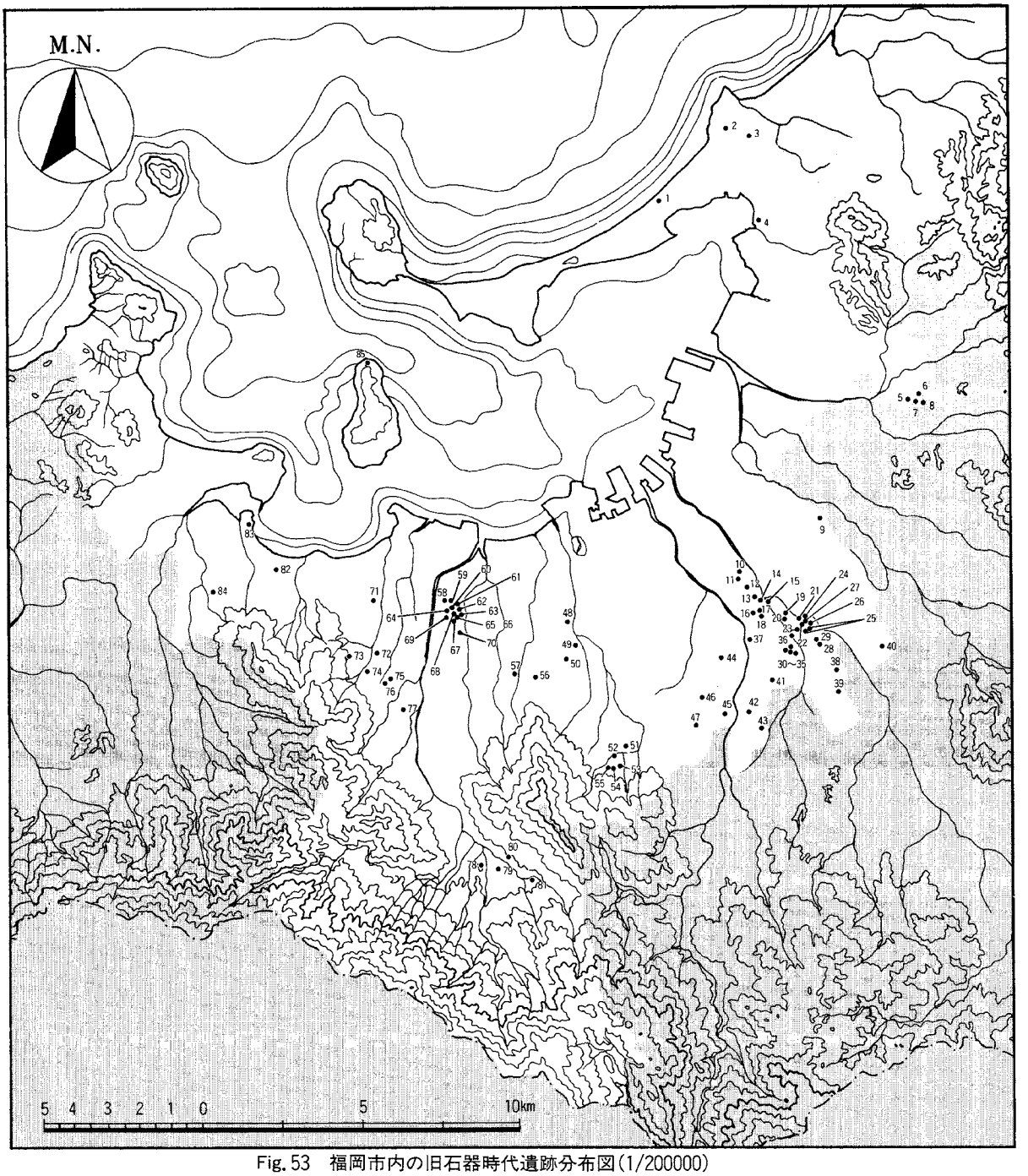


Fig. 53　福岡市内の旧石器時代遺跡分布図(1/200000)

番号	調査番号	遺　跡　名	所　在　地	調査の有無	立地	標高	出土遺物	文献	保管場所	出土状況
1		雁ノ巣	東区大字奈多	表採	砂丘	20	MB,K,T	62・66	宇美歴・個人	
2	9362	永浦	東区三苫平原５丁目	940215～940331	丘陵	10	K,F	未報告	福市埋文課	
3	8401	唐原	東区唐原２丁目	841024～851229	砂丘	5	MB	36	福市埋C	
4	7012	下和白Ⅲ区a地点	東区下和白	700427～700620	丘陵	36	3P	1	福市埋C	
5	7215	蒲田(部木)A地点	東区大字蒲田北熊	720508～730615	丘陵	20	MC,MB,C,K,T,TZ	5・60	福市埋C	包含層
6	7215	蒲田(部木)B地点	東区大字蒲田薬師	730616～730811	丘陵	20	K,TZ,SS	5・60	福市埋C	包含層
7	7215	蒲田(部木)D地点	東区大字蒲田北熊	720511～730610	丘陵	18	K	5・60	福市埋C	
8	7215	蒲田(部木)E地点	東区大字蒲田北熊	720815～730315	丘陵	40	MC,MB,K,T,TZ	5・60	福市埋C	包含層
9	9206	席田青木	博多区空港前３～５丁目外	920406～921015	丘陵	32	K	50	福市埋C	
10	8717	比恵17次	博多区博多駅前６丁目10-36	880620～880831	台地	7	F	41	福市埋C	
11	8828	比恵19次	博多区博多駅前４丁目88	880831～881008	台地	7	K	47	福市埋C	
12	8855	那珂18次	博多区東光寺町１丁目23-5	890125～890314	台地	9	K	48	福市埋C	
13	8609	那珂８次	博多区那珂１丁目601他	860421～860703	台地	9	K,F,C	31	福市埋C	
14	8736	那珂13次	博多区那珂２丁目地内	871104～880330	台地	9	K,B	39	福市埋C	

K：ナイフ形石器、T：台形石器、TZ：台形様石器、FP：剥片尖頭器、3P：三稜尖頭器、P：尖頭器、AX：石斧、BR：彫器、S：スクレイパー
SS：サイドスクレイパー、CS：コンケイブドスクレイパー、MF：微細剥離のある剥片、B：石刃、F：剥片、C：石核、MB：細石刃、MC：細石刃核

番号	調査番号	遺　跡　名	所　在　地	調査の有無	立地	標高	出土遺物	文献	保管場所	出土状況
15	8530	那珂７次	博多区那珂３丁目８	851106～860127	台地	7	T,F	32	福市埋C	
16	8936	那珂23次	博多区竹下５丁目270-１他	890710～900104	台地	9	K,P,F	44・46	福市埋C	
17	9122	那珂33次	博多区那珂２丁目249-１	910902～911014	台地	11	S	52	福市埋C	
18	9264	那珂41次	博多区竹下５丁目509	930315～930520	台地	11	K,C,F	56	福市埋文課	包含層
19	8336	那珂君休３次	博多区那珂４丁目	830527～840126	埋没段丘	7	K	27	福市埋C	河川堆積
20	8604	那珂君休４次	博多区那珂４丁目23他	860522～861122	埋没段丘	6	TZ,K,3P	37	福市埋C	河川堆積
21	7102	板付６次Ⅰ区	博多区板付２丁目	710816～740410	台地	8	K,T	6	福市埋C	
22	7102	板付６次Ⅱ区	博多区板付３丁目	710816～740410	埋没段丘	6	MC	6	福市埋C	河川堆積
23	7102	板付６次Ⅲ区	博多区板付３丁目	710816～740410	埋没段丘	6	K	6	福市埋C	
24	7608	板付17次	博多区板付２丁目10-４	760700～761000	台地	8	K	9	福市埋C	
25	7609	板付18次	博多区板付２丁目	760705～761019	台地	10	K,T,MC	10	福市埋C	
26	7934	板付34次	博多区板付２丁目13-13	790709～791104	台地	7	TZ,MC	17	福市埋C	
27	9050	板付60次	博多区板付２丁目９	901105～	台地	8	K,B,MC	57	福市埋文課	
28	8220	高畑８次	博多区板付６丁目	820416～820602	台地	12	K,CS	23	福市埋C	
29	8436	高畑10次	博多区板付６丁目	840505～840714	台地	9	MC	25	福市埋C	
30	7314	諸岡B2次	博多区諸岡岡ノ前453・454	730710～731030	台地	15	K,TZ,C,B,F,SS	2	福市埋C	包含層
31	7410	諸岡B4次	博多区諸岡岡ノ前453・439	740701～740930	台地	20	K,TZ,C,B,SS,MC	3	福市埋C	包含層
32	7510	諸岡B6次	博多区諸岡岡ノ前454-３	751000～751100	台地	10	K,B	7	福市埋C	包含層
33	7511	諸岡B7次	博多区諸岡２丁目10-７	750900～750900	台地	8	K,3P	7	福市埋C	包含層
34	7935	諸岡B9次	博多区諸岡２丁目９-15・19	790600～790812	台地	11	MC,MB,B	14・61	福市埋C	包含層
35	8029	諸岡B12次	博多区諸岡２丁目	800529～800619	台地	12	K	16	福市埋C	包含層
36	8222	諸岡B17次	博多区諸岡１丁目17-31	870726～821023	台地	12	K,CS,MF,S,MB,C	23	福市埋C	包含層
37		五十川高木B地点	南区高木１丁目15	710901～711015	沖積地	8	K	4	福市埋文課	河川堆積
38	8502	井相田C	博多区井相田２丁目12-６	850527～851227	微高地	13	3P,T	30	福市埋C	河川堆積
39	8949	麦野C1次	博多区麦野６丁目11-４	891011～891118	丘陵	16	B,MF,F	51	福市埋C	
40	8541	堤ヶ浦古墳群	博多区大字金隈字堤ヶ浦地内	860115～860508	丘陵	50	MF	29	福市埋C	
41	8610	井尻B	南区井尻５丁目175-１	860418～860531	台地	15	K,MC,MB,BR	33	福市埋C	包含層
42	8638	曰佐	南区曰佐４丁目512他	860905～861110	台地	14	MC	33	福市埋文課	
43	7209	弥永B地点	南区弥永４丁目６	720311～730700	沖積地	17	K,T,MC	4福市埋C		
44	7703	三宅廃寺	南区大字三宅字コクフ1170-２	771124～780327	丘陵	12	MC	13	福市埋C	
45	8022	野多目拮渡	南区大字野多目字拮渡	810800～811000	河岸段丘	15	3P,TP	20	福市埋C	包含層
46	9313	和田B・A-４地点	南区野多目３丁目地内	931517～831117	丘陵	40	K,TZ,C,B,F	59	福市埋文課	包含層
47		野多目池	南区野多目４丁目30外	表採	丘陵	20	MB,F		個人	
48	7807	田島B(尾子森)	城南区田島４丁目403-１	781100～790200	丘陵	8	MC		福市埋文課	
49	7704	神松寺	城南区片江神松寺	770500～770600	丘陵	25	P	11	福市埋C	
50	7610	カルメル修道院	城南区片江神松寺３丁目	760700～760700	丘陵	25	3P	11	福市埋C	
51	8347	柏原N	南区柏原字上原田	1983年調査	河岸段丘	48	K,MC,TZ	35	福市埋C	再堆積
52	8045	柏原K	南区柏原字ゴソ	1982年調査	河岸段丘	65	MB,K	35	福市埋C	
53	8152	柏原C	南区柏原６丁目62	1981年調査	丘陵	70	T	35	福市埋C	
54	8044	柏原F	南区柏原６丁目	1984年調査	丘陵	72	K	19	福市埋C	包含層
55		柏原H	南区柏原６丁目		丘陵	80	TZ	35	福市埋C	
56		五ヶ村池	城南区七隈７丁目42外	表採	丘陵	20	MB,F		個人	
57	9108	飯倉F3次	城南区梅林３丁目地内	910501～910911	丘陵	25	K	54	福市埋C	
58	8314	有田86次	早良区小田部５丁目143-３	831011～831107	台地	7	K?	24	福市埋文課	
59	8953	有田152次	早良区小田部５丁目48・49	871027～871121	台地	7	MC	45	福市埋C	
60	7710	有田４次	早良区小田部２丁目139	770609～770819	台地	14	T	53	福市埋C	
61	8742	有田131次	早良区小田部２丁目131	871216～880106	台地	9	TZ,MF,C,F,	42	福市埋C	包含層
62	8851	有田145次	早良区小田部２丁目90	890119～890331	台地	10	MF	49	福市埋C	
63	7822	有田８次	早良区有田１丁目13-12	780317～780515	台地	15	K	18	福市埋文課	
64	8961	有田154次	早良区有田１丁目24-２	891205～900122	台地	10	UB	48	福市埋C	
65	7712	有田６次	早良区有田１丁目20-３	770818～771013	台地	15	K,FP,TZ,F	53	福市埋C	包含層
66	7914	有田19次	早良区有田１丁目24-２	790616～790708	台地	13	K(3P)	21	福市埋文課	
67	8510	有田100次	早良区有田３丁目８-２	850823～851027	台地	13	TZ	38	福市埋C	
68	8602	有田107次	早良区有田１丁目31-１外	860424～860801	台地	13	B,TZ,F	42	福市埋C	
69	7711	有田５次	早良区小田部２丁目704	770620～771123	台地	15	K,SS,F	24	福市埋C	
70	8655	有田115次	早良区有田３丁目８-53	870204～870316	台地	5	K		福市埋文課	
71		湯納	西区大字拾六町	711124～730420	沖積地	5	MC	8	福県埋文課	
72	7904	野方勧進原	西区大字野方勧進原388	791210～800419	丘陵	30	K,MB	15	福市埋C	
73	8821	笠間谷古墳群第４地点	西区字笠間谷	880516～880919	丘陵	80	MB,MC	40	福市埋C	包含層
74		羽根戸原A	西区大字羽根戸	表採	扇状地	58	K,T,MC	28	個人	
75	8303	羽根戸原C2次	西区大字羽根戸	840202～840915	扇状地	22	T,MF,C,F	28	福市埋C	包含層
76	8526	羽根戸原C3次	西区大字羽根戸	850701～850927	扇状地	30	BR	34	福市埋C	
77	8535	吉武大石	西区大字吉武字大石	850801～860331	扇状地	28	MC,MB,SS	64	福市埋C	包含層
78		馬立山	早良区大字西	表採	丘陵	120	K,P		個人	
79	8816	脇山A3次	早良区大字脇山字会田	880926～881215	丘陵	82	3P	43	福市埋C	
80	8722	脇山A2次	早良区脇山字川原・会田	870804～871228	丘陵	69	MC	44	福市埋C	
81	9371	志水A	早良区小笹木地区	930701～940430	丘陵	103	K	59	福市埋文課	
82	8406	今宿五郎江１次	西区今宿五郎江	840829～840925	台地	5	K,T	26	福市埋C	
83		今山	西区今宿横浜２丁目	表採	丘陵	82	3P	22	福岡市博	
84	8921	飯氏Ⅲ区	西区大字飯氏字鏡原	890815～900815	丘陵	30	MC,MB,F	55	福市埋C	
85		能古A	西区能古世良岬	表採	台地	100	AX	65	個人	

表２　福岡市内の旧石器時代地名表（番号はFig.53の地図に対応　　文献番号は文末の文献一覧に対応）

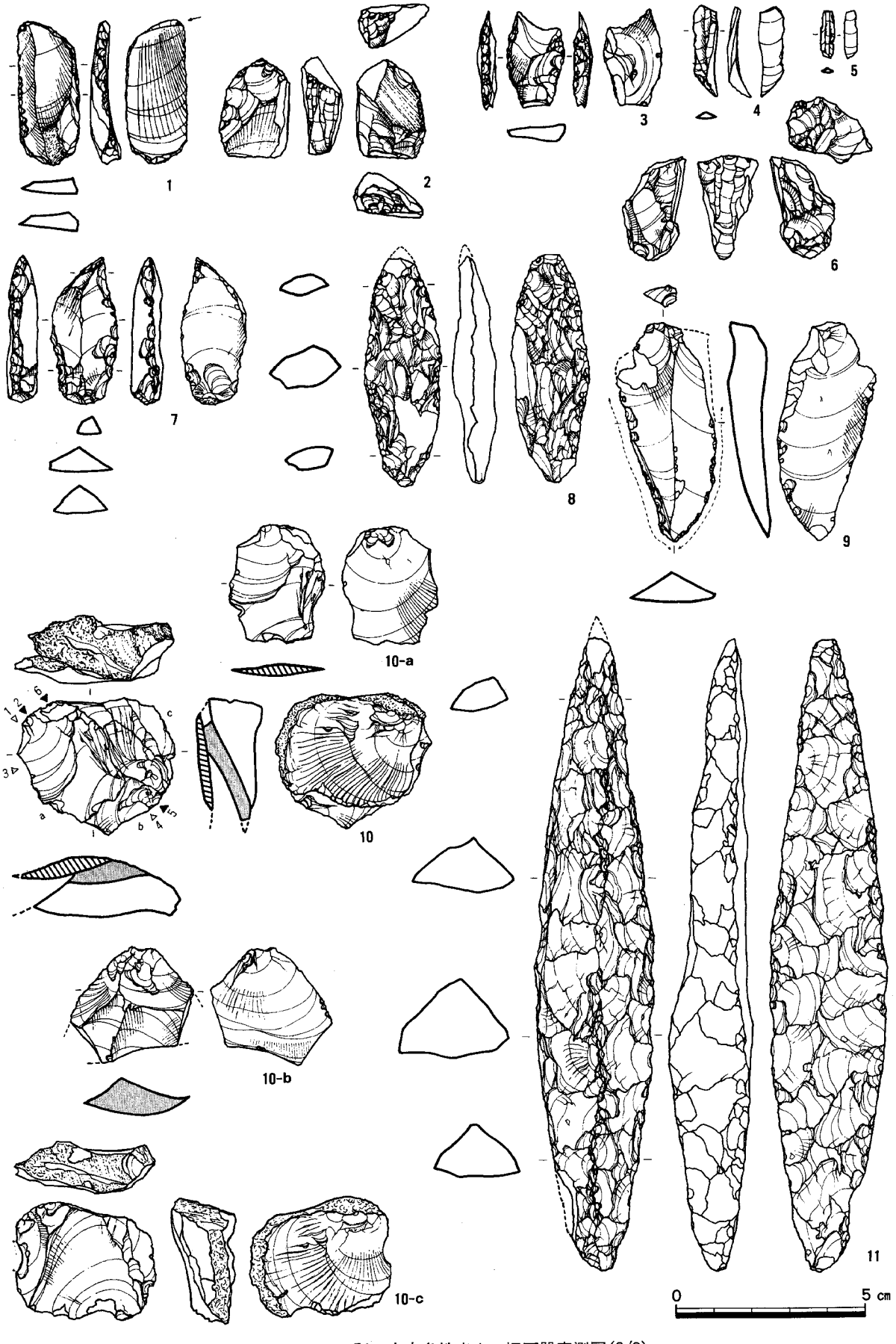


Fig. 54　市内各地出土の旧石器実測図(2/3)

長剥片を素材に用い、打面側と端辺にブランティングを加えて成形している。4～6は黒耀石製の細石刃と細石核である。6は再実測の掲載である。

7～9は那珂遺跡第23次調査地点（16）から出土した資料である。7は黒耀石の石刃製の尖頭状の石器で、基部と先端部を中心にブランティング加工を施す。シンメトリーでなく、先端がやや右側にずれている。8は黒耀石製の両面加工の尖頭器である。基部側に打面となった平坦な礫面がわずかに残る。9は黒耀石製の広い平坦打面をもつ石刃で、両側辺の一部に微細剥離痕を残す。

10は有田遺跡第131調査地点（61）から出土した3枚の剥片の接合例である。かつて報告した10-Cの資料に、新たに追加された遺構（SC-01）出土品の中から2点が接合した。円礫を2分割し、その分割面を打面にして剥離された肉厚の剥片石核から剥離された3枚の剥片である。打面は側辺の礫面をそのまま打面とし、剥離方向は求心的ではあるが、ほぼ対立する2方向を基調としている。この剥離方向はこの調査地点の主要石器である台形様石器の背面構成や主要剥離面の方向などとよく符合している。10-Cの剥片が剥離されるまでに計6回の剥離が実施されており、うち1回目と3回目と4回目の剥離による剥片が欠落している。

11は今山遺跡（83）から採集された三面加工尖頭器である。素材はガラス質安山岩の横長剥片であろう。先端を5㎜ほど欠損しているが、長さ15.9㎝、幅3.1㎝、厚さ2.1㎝、重量87.5gの大型品で、本石器出土例のうちでは最大級に属する資料である。

本地名表の製作にあたり、渡辺和子・吉留秀敏・平ノ内幸治の各氏にお世話になった。

＜文献一覧＞

(1) 福岡市教育委員会　『和白遺跡群』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集　1971
(2) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書（1）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集　1974
(3) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書（2）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　1975
(4) 福岡市教育委員会　『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集　1975
(5) 福岡市教育委員会　『蒲田遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集　1975
(6) 福岡市教育委員会　『板付－市営建設に伴う発掘調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976
(7) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書（3）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　1976
(8) 福岡県教育委員会　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第4集　1976
(9) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡の調査』（4）　福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集　1977
(10) 福岡市教育委員会　『板付』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集　1977
(11) 福岡市教育委員会　『神松寺遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集　1978
(12) 福岡市教育委員会緊急調査有田班　『速報有田遺跡』　現場説明パンフレット　1979
(13) 福岡市教育委員会　『三宅廃寺発掘調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集　1979
(14) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書』6　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980
(15) 福岡市教育委員会　『福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告』1　福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集　1981
(16) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書』7　福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集　1981
(17) 福岡市教育委員会　『板付 板付会館建設に伴う発掘調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集　1981
(18) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第2集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集　1982
(19) 福岡市教育委員会　『柏原遺跡群Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集　1983
(20) 福岡市教育委員会　『野多目拈渡遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集　1983
(21) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第4集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983
(22) 福岡市教育委員会　『今山遺跡－現地説明会パンフレット』　1984
(23) 福岡市教育委員会　『諸岡遺跡－第14・17次調査報告－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集　1984
(24) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第6集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985
(25) 福岡市教育委員会　『板付周辺遺跡調査報告書』10　福岡市埋蔵文化財調査報告書第115集　1985
(26) 福岡市教育委員会　『今宿五郎江遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集　1986
(27) 福岡市教育委員会　『那珂久平遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集　1986
(28) 福岡市教育委員会　『羽根戸遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集　1986
(29) 福岡市教育委員会　『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集　1987

(30) 福岡市教育委員会　『井相田C遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集　1987
(31) 福岡市教育委員会　『那珂遺跡－那珂遺跡群第８次調査の報告－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集　1987
(32) 福岡市教育委員会　『那珂』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集　1987
(33) 福岡市教育委員会　『井尻B遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集　1988
(34) 福岡市教育委員会　『羽根戸遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集　1988
(35) 福岡市教育委員会　『柏原遺跡群Ⅴ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集　1988
(36)福岡市教育委員会　『唐原遺跡２』－集落址編－　福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集　1989
(37) 福岡市教育委員会　『那珂君休遺跡Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集　1989
(38) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第10集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集　1989
(39) 福岡市教育委員会　『那珂』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集　1990
(40) 福岡市教育委員会　『生松台』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集　1990
(41) 福岡市教育委員会　『比恵遺跡群（９）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集　1990
(42) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第11集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集　1990
(43) 福岡市教育委員会　『脇山１』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集　1990
(44) 福岡市教育委員会　『那珂遺跡４（その１）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第254集　1991
(45) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第13集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第265集　1991
(46) 福岡市教育委員会　『那珂遺跡４（その２）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集　1992
(47) 福岡市教育委員会　『那珂』６　福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集　1992
(48) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第15集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第307集　1992
(49) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第18集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集　1993
(50) 福岡市教育委員会　『席田青木遺跡１』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集　1993
(51) 福岡市教育委員会　『西南部（３）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第361集　1994
(52) 福岡市教育委員会　『那珂遺跡９』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第364集　1994
(53) 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第19集　福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集　1994
(54) 福岡市教育委員会　『飯倉F遺跡１』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第379集　1994
(55) 福岡市教育委員会　『飯氏遺跡群』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集　1994
(56) 福岡市教育委員会　『那珂　14』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第399集　1995
(57) 福岡市教育委員会　『板付遺跡－環境整備に伴う調査報告書－』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集　1995
(58) 福岡市教育委員会　『野多目台』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第413集　1995
(59) 福岡市教育委員会　『小笠木』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第425集　1995
(60) 国平健三・井上直樹　「福岡県部木遺跡出土の石器」　『考古学ジャーナル』70　1972 ニュー・サイエンス社
(61) 山口譲治　「諸岡遺跡」　『日本の旧石器文化』３　1984 雄山閣出版社
(62) 山下実　「福岡県雁ノ巣砂丘遺跡の旧石器資料」『旧石器考古学』35　1987 旧石器文化談話会
(63) 山口譲治　「福岡平野における先土器時代の様相」『井尻B遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集　1988 福岡市教育委員会
(64) 山口譲治　「各県の動向福岡県」　『九州旧石器』創刊号　1989 九州旧石器文化研究会
(65) 吉留秀敏　「能古島採集の「神子柴石斧」について」『能古島』福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集　1993 福岡市教育委員会
(66) 平ノ内幸治・高橋慎二・松尾健二　「福岡県粕屋郡の旧石器」　『福岡考古』16　1994 福岡考古懇話会

＜参考文献一覧＞

(67) 小畑弘己　「九州における彫器の研究（１）」　『九州考古学』60　1986 九州考古学会
(68) 橘昌信　「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1)」『別府大学博物館研究調査報告』２　1978 別府大学博物館
(69) 芹沢長介・柳田俊雄　『岩戸』　1978 東北大学文学部考古学研究室
(70) 坂田邦洋　『大分県岩戸遺跡』　1980 広雅堂
(71) 同志社大学文学部文化学科　『百花台東遺跡』　同志社大学文学部考古学調査報告 第８冊　1994
(72) 長崎県教育委員会　『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』　長崎県文化財調査報告書第116集　1994
(73) 木崎康弘　「九州ナイフ形石器文化の研究－その編年と展開－」『旧石器考古学』37　1988 旧石器文化談話会
(74) 綿貫俊一　「東九州における瀬戸内系の人類遺物」　『旧石器考古学』25　1982 旧石器文化談話会

5．小結

本調査地点は調査前の状況は畑で、後世の攪乱などが少なかったため、遺構の遺存状態は比較的良かった。そのため、今回の調査では弥生時代から中世にわたる遺構、遺物を数多く検出した。また、ナイフ形石器、彫器等を含む包含層を検出できたことは大きな成果であった。それらの遺物については前項で小畑氏が詳細を触れているので、ここでは弥生時代以降の遺構、遺物について時期毎に概要を述べていく。今回の調査で検出した遺構の変遷を見ていくと、大きく3時期に分けられる。Ⅰ期は弥生時代中期後半～古墳時代初頭、Ⅱ期は古墳時代後期～奈良時代、Ⅲ期は中世である。

Ⅰ期

この時期の遺構は掘立柱建物、竪穴住居跡、土坑、井戸、溝等がある。

竪穴式居跡は3軒検出した。調査区の西側に集中している。平面形は長方形を呈し、時期は弥生時代中期末～後期に位置づけられると考える。

井戸は調査区東側で2基検出した。SE-016、029はいずれも素掘りで、時期は中期末から後期前葉に納まるものである。

掘立柱建物は8棟検出した。調査区の西側には掘り方が1m近い柱穴が幾つか見られ、更に西側に建物は広がるものと考えられる。建物は1×2間、1×1間の規模である。調査区東側にあるSB-022、023、024、035、036は建物方位も一致しており、近い時期の建て替えと考える。出土遺物や切り合い等から中期末から後期前葉に納まるものと考えられる。一方、西側の建物はSC-009との切り合い関係から、SB-027は009以前、SB-019は以後と考えられる。SB-037は柱穴の掘り方等から019に近い時期と考える。時期は東側の建物群より若干下るもので、後期前葉以降と考える。

SD-004は調査区中央で検出した溝である。幅250～300cm、深さ140cmを測る。断面形は逆台形を呈する。溝は北側で立ち上がっており、環壕の陸橋部分に当たるものと考える。溝からは埋土の中位で弥生時代の後期前葉の土器が多量の廃棄が認められた。完形の土器は少なく、甕、壺等はほとんど破砕されている。溝の廃絶はこれに近い時期と考えられる。西側のSC-009、010、021と東側の掘立柱建物や井戸はこの溝と同時期と考えられ、この溝はそれらを画するものであったと考えられる。今後の調査を待たなければならないが、西側の第9次調査、第46次調査や北側の隣接地の試掘調査などから東側に溝に区画された空間が予想される。

SD-002、007は調査区の東端と西端で検出した方形に巡る溝である。出土遺物が少ないが、古墳時代初頭に位置づけられる。主体部は検出できなかったが、方形周溝墓の可能性がある。

Ⅱ期

この時期の遺構には掘立柱建物、竪穴住居跡、溝等がある。SC-008は7世紀後半に位置づけられる。住居の北側に竈がつくが、破砕されている。

SD-006は調査区中央に位置し、幅230～280cm、深さ135～145cmを測り、断面形はV字形を呈する。出土遺物は少ないが、8世紀代に位置づけられる。SD-003も同時期と考えられる。北側の試掘調査でこれらの溝に対応する溝が検出されており、更に北側に延びるものと考えられる。今回の調査ではこれらの溝に関連する遺構は検出できなかった。

Ⅲ期

この時期の遺構は少なく、井戸、土坑、溝等がある。柱穴にこの時期に含まれるものもあるが、建物として復元できたものはない。SE-020は調査区西端で検出したもので、12世紀後半のものである。調査区東端で検出したSD-011も同時期のものと考えられる。

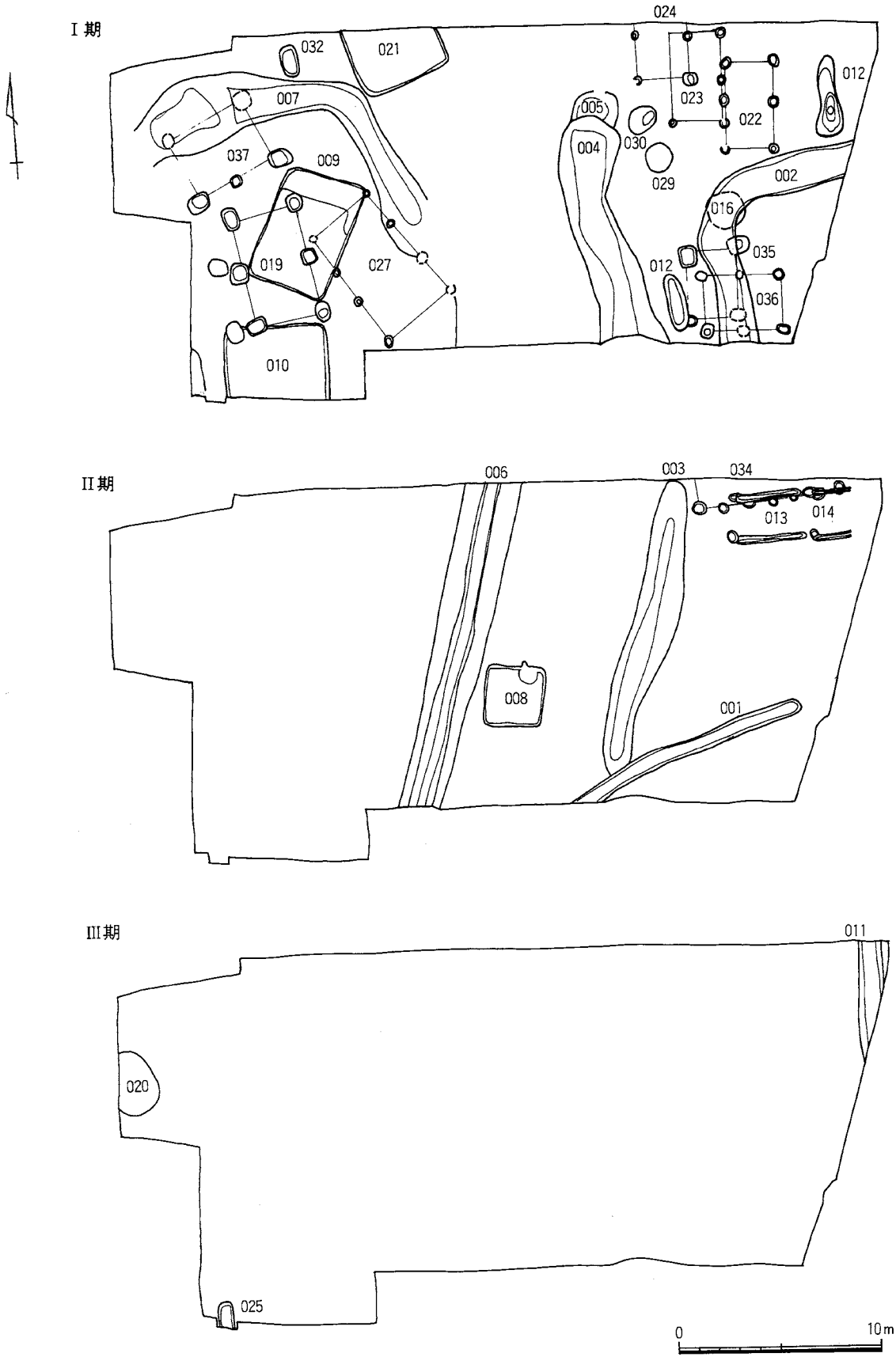
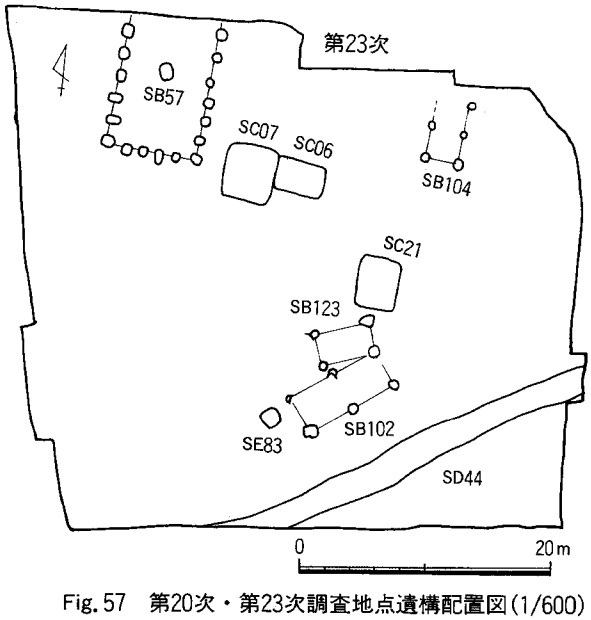
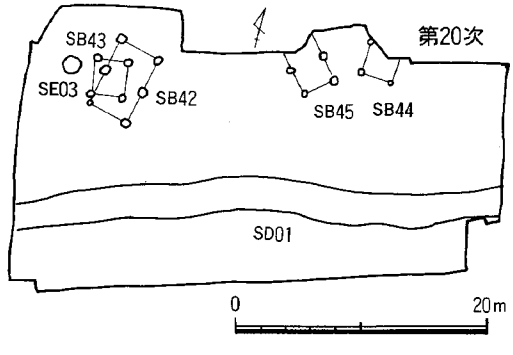


Fig. 55　第41次調査地点遺構変遷図(1/300)

Fig. 56　第41次調査地点周辺遺構分布図(1/6000)





※弥生時代中期後半～後期前半の遺構分布

Fig. 57　第20次・第23次調査地点遺構配置図(1/600)

那珂遺跡群の弥生時代の環壕について

今回の調査で検出したSD-004は弥生時代後期前葉に埋没した環壕である。掘削の時期は明確ではないが、中期末までは遡るものと考えられる。那珂遺跡群ではこれまでの調査でこの時期の環壕が検出されている。ここではそれらの環壕について見ていく。

第20次調査地点（Fig.57）

本調査地点の北側100mの位置にある。この調査では調査区中央を東西方向に横切る溝（SD-01）が検出された。溝は幅2.7cm、深さ1.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝からは弥生時代中期後半から後期前葉の丹塗りの壺、甕、筒形器台、高杯等の祭祀土器が多量に出土した。同時期の遺構は溝の北側に集中し、SB-42、43、45、SE-03等がある。

第23次調査地点（Fig.57）

本調査地点の北西側200mの位置にあり、20次調査地点の西側の延長上にある。また、台地の西側縁辺にあたる。この調査では調査区南側で東西溝（SD-44）が検出された。溝は調査区西側で北側に曲がっていくことが確認されている。溝は幅2.5m、深さ1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝からは第20次調査と同様、弥生時代中期後半から後期前葉の祭祀土器が多量に出土した。この調査では溝の北側で５×６間以上の大型建物SB-57が検出されている。久保園遺跡や雀居遺跡などで、同様の建物が検出されている。この他、SC-06、07、21やSB-102、123、SE-83等がSD-44と同時期の遺構に比定されている。SD-44はこれらの遺構を取り囲むものであったと考えられる。

今回の調査で検出したSD-004は第20次、23次調査で検出された溝と比べると、埋没の時期は若干新しく位置づけられるが、これらの溝は同時期に存在していたと考えられる。第20次、第23次調査で検出された溝は台地を南北に分断するようにあり、更に両者の溝は繋がり、北側に曲がって東西約300mを囲む溝ととも考えられる。しかし、周辺の調査の状況を見ると、溝の南側の第26次、41次、46次調査地点でも同時期の竪穴住居跡、井戸等があり、集落の分布は南側にも認められる。したがって、両者の溝は台地を分断して集落を大きく囲む環壕ではなく、それぞれが50～60m程度を囲む環壕であったのではないかと考える。溝と同時期の遺構の分布を見ると、その内部に掘立柱建物が配置されていることがわかる。第23次調査で検出された大型建物のSB-57の性格は確定しがたいが、それ以外の建物の規模は１×２間、１×１間で、高床倉庫と考えられる。さらに溝に廃棄された多量の祭祀土器の状況を見ると環壕の内部はある種の祭祀空間でもあったと推測できる。

那珂遺跡群では第37次調査で見られた突帯文土器期に現れた環壕はそれ以後、見られなくなる。以後の環壕は今回検出したSD-004や第20次、第23次調査で検出された東西溝の時期である弥生時代中期末である。環壕の出現の意味は今後の重要な課題であるが、それらの環壕は集落全体を囲むものではなく、住居域と画して倉庫等を囲むものと考えられる。さらにその内部は多量の丹塗土器が使用された祭祀の空間でもある。ここで見られる祭祀土器は前代に見られない袋状口縁壺や筒形器台、瓢形土器等である。それらの存在も環壕出現の意味を考える上で重要な問題であろう。雑多な小結であるが、今後の調査の課題としたい。最後に今回の調査、整理に当たって山口譲治、下村智、吉留秀敏、荒牧宏行、小畑弘己、宮井善朗の各氏に多くのご教示を頂いた。記して謝意を表する。

第５章　第42次調査の記録

１．調査に至る経過

1993年３月16日付で、那珂川町片縄４丁目74の波多江忠雄氏から、博多区那珂１丁目476番地における倉庫兼事務所建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が、教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、那珂遺跡の範囲内であり南側隣接地は道路新設に伴い1987年度に発掘調査を実施していることから、３月31日に試掘調査を行なった。試掘の結果、申請地は大部分が削平を受けていたものの西側は旧地形が残っており遺構の存在が確認できた。西側部分は、他の敷地レベルに地下げ工事が行なわれる予定になっていたので、工事によって破壊される西側部分を発掘調査することにした。発掘調査は、波多江忠雄氏と委託契約書を締結し、93年５月22日から調査に着手した。

２．位置・環境

調査地点は、那珂遺跡群の中央部に位置し、標高9.0～9.3mを測る。これまでにも周辺で発掘調査を実施しており、北側の４次調査では弥生前期末の金海式甕棺を中心とする墓地群が発見されている。南側隣接地の13次調査では、弥生中期後葉から後期にわたる円形及び方形の竪穴住居址23軒、掘立柱建物21棟、袋状竪穴１基、井戸４基、古墳時代前期の竪穴住居址、石棺墓、古墳時代後期の竪穴住居址、掘立柱建物、溝、井戸、中世の溝、木棺墓など各時期の遺構・遺物が濃密に出土している。42次調査もこれらの遺構の連続が予想された。

３．検出遺構・遺物

遺構は、地表下－0.6mの鳥栖ローム上で検出できた。発掘面積は63.4㎡と狭まかったが、竪穴住居址２軒、土壙墓１基、柱穴131個と竪穴住居址に伴うと考えられる短い溝３条、土坑１基がある。

SC01（Fig59、PL35）調査区北側で検出した竪穴住居址である。SC02を切っており４分の１程が確認できた。１辺５m前後の隅丸方形を呈するものと考えられる。床には貼床を施し、東壁には白粘土でカマドを構築している。全体に削平が激しく、壁の立ち上りは15㎝程度であった。

Fig60－５はSC01から出土した須恵器坏身である。復元口径10.8㎝、受部径13㎝を測る。淡青灰色を呈し、堅緻な焼きあがりである。口縁の立ち上りは直立気味で、底面には３分の１程度回転ヘラケズリが施される。小田編年の須恵Ⅳaに相当しよう。３は土師器の甕である。

SC02（Fig59、PL35）SC０１の南側に位置し、SC01に切られている。大部分は未調査区へ広がっており４分の１程度しか確認できていない。５m前後の方形竪穴住居址になるものと考えられる。

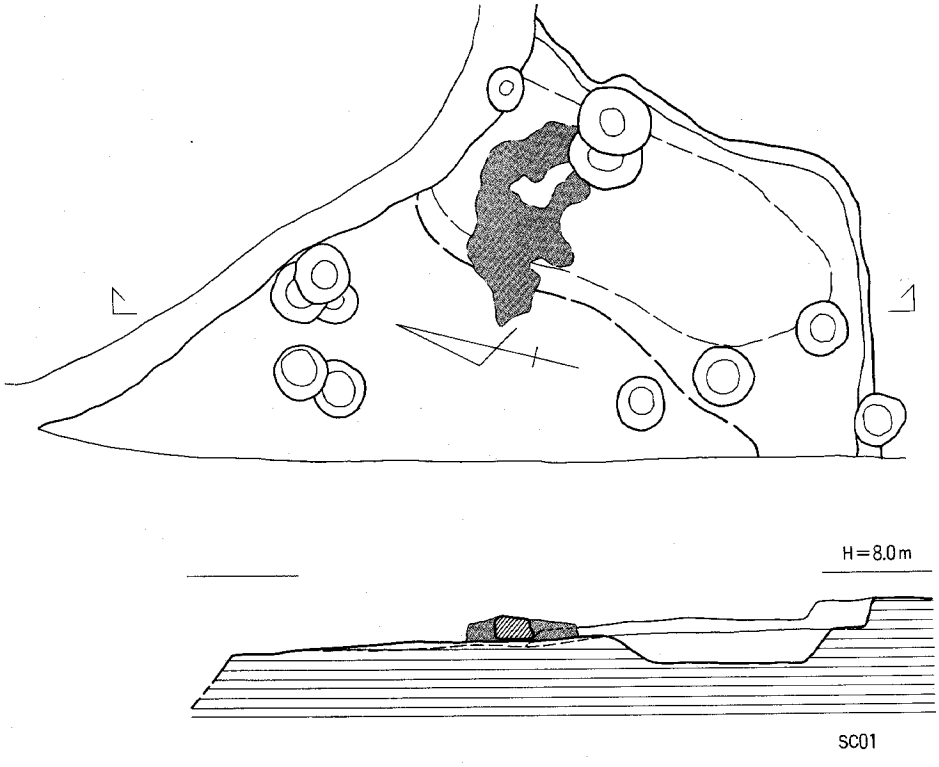
Fig60－１・２・４はSC・01・02検出時に出土した遺物である。１・２は混入した弥生中期の甕である。２は口縁端部に刻み目を施し丹塗りされている。４は須恵器坏蓋で復元口径11.8㎝、器高3.1㎝を測る。頂部のヘラケズリは３分の１程度である。

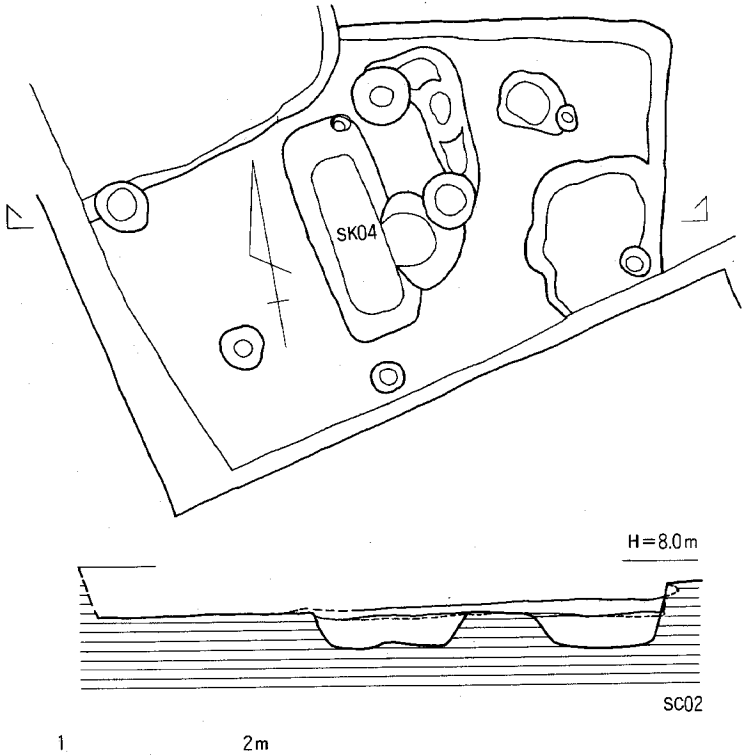
SD03　SC01の東側で検出した細長い溝である。別な住居址に伴うものかも知れない。

SK04（Fig60、PL36）SC01を切って掘り込まれた土壙墓である。長さ1.2m、幅0.5m弱、深さ0.2mを測る。北側に内黒土師器椀が２個体副葬されていた。

Fig60－６は底径6.3㎝、７は口径14.9㎝、底径6.4㎝、器高5.5㎝を測る。外面はヨコナデ、内面にはヘラミガキが施される。10世紀中葉頃のものであろう。８はSP43から出土した粘土紐巻き上げの土師皿、９はSP47から出土した古墳時代後期の甑である。口径は32.8㎝を測る。

Fig. 58　那珂遺跡　第42次調査遺構全体図(1/90)





0 1 2m

Fig. 59 SC01・02 遺構実測図(1/40)

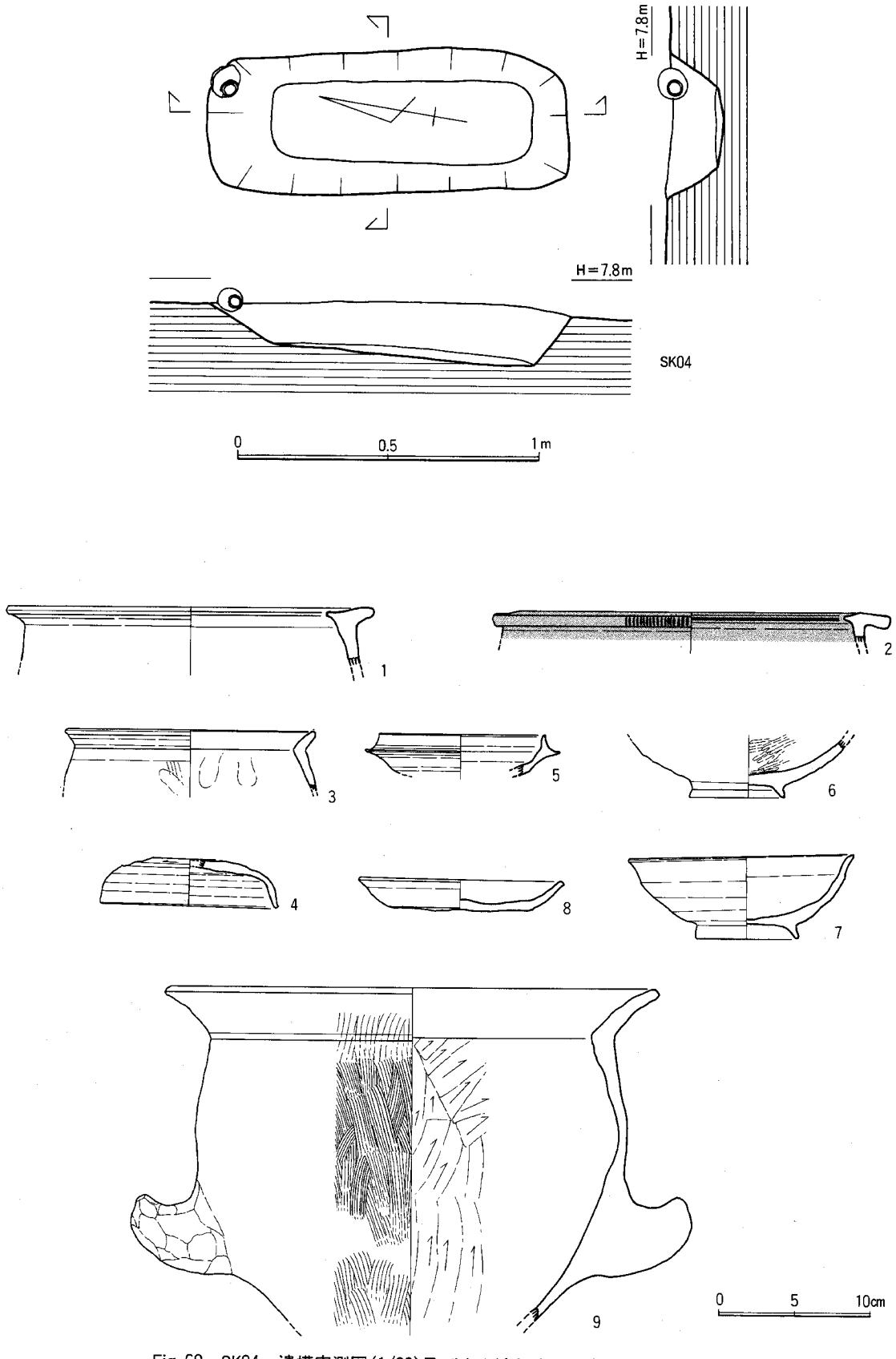


Fig. 60　SK04　遺構実測図(1/20)及び出土遺物実測図(1/4)

第６章　第46次調査の記録

１．調査に至る経過

1993年（平成５年）３月11日付けで、川邉 弘明氏から博多区竹下５丁目432－２地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願いが教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、那珂遺跡の範囲内であり、古墳時代の住居跡など遺構が濃密に分布する第９次調査区の西側に位置することから、事前に遺跡の有無確認が必要であると判断した。試掘調査は、関係者と協議のうえ同年５月20日に実施した。試掘の結果、表土下約50cmで鳥栖ロームに到達し溝、竪穴住居、柱穴などが検出された。そこで、試掘結果をもとに遺構の取り扱いについて協議を重ね、工事によってやむなく破壊される範囲については、記録保存のための本調査を実施することになった。

２．調査の概要

本調査地点は、那珂遺跡の西端部に位置し、調査区は開発予定地にあわせて設定し、工事対象外の北東部を残土置場とした。調査前の状況は宅地であった。

調査は約15～35cmの盛土と20～35cmの暗褐色遺物包含層を調査期間の関係から除去すると、基盤の鳥栖ロームとなり、その上面で遺構の検出作業を行った。鳥栖ローム上面の標高は約8.7～9.0ｍである。遺構は竪穴式住居８基、井戸１基、土坑９基、溝６条を検出した。

Fig. 61　第46次調査地点周辺測量図(1/1,000)

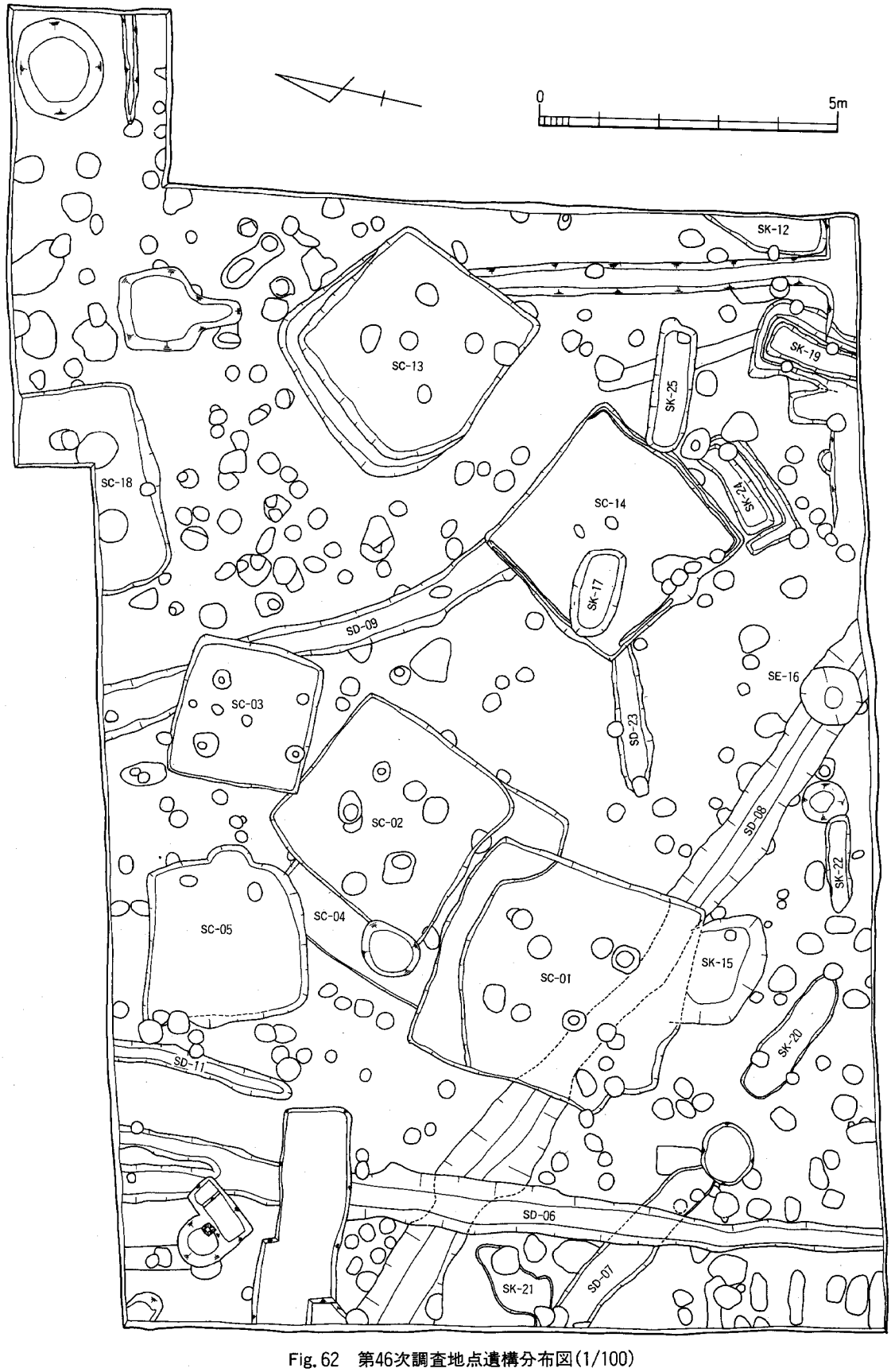


Fig. 62　第46次調査地点遺構分布図(1/100)

3．遺構と遺物

1）竪穴住居跡（ＳＣ）

全部で８基検出した。調査区西側は台地の落ち際になると思われ住居跡は調査区中央部と東側において検出された。

SC-01（Fig.63,PL.37）

調査区西寄りに位置する平面が方形の建て替えがおこなわれている住居跡である。平面プランと主柱穴、また炭化材と焼土の残存位置から北側に建て替えられたと考える。SC-04・SD-08を切ってい

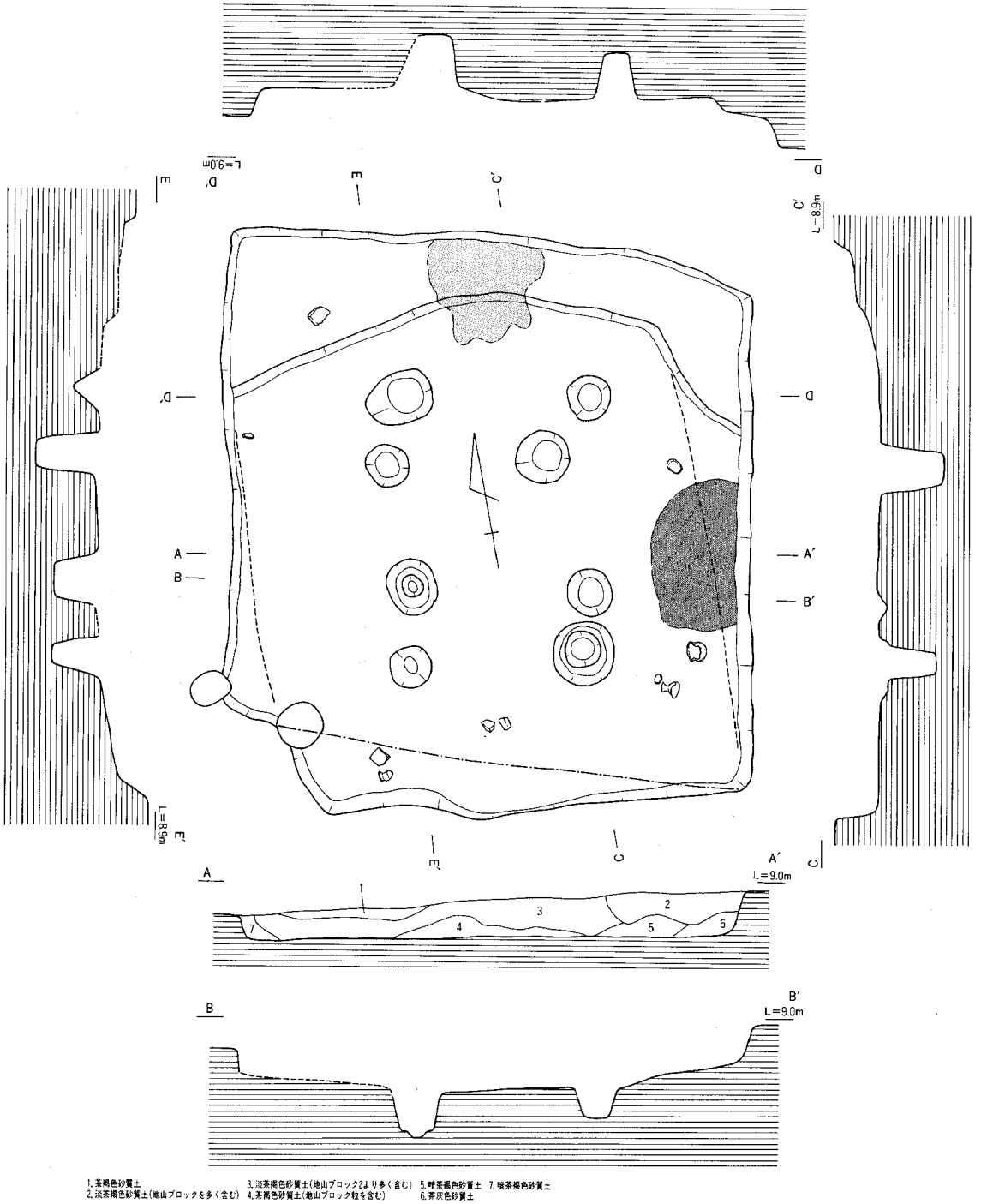


Fig. 63　SC-01遺構実測図(1/50)

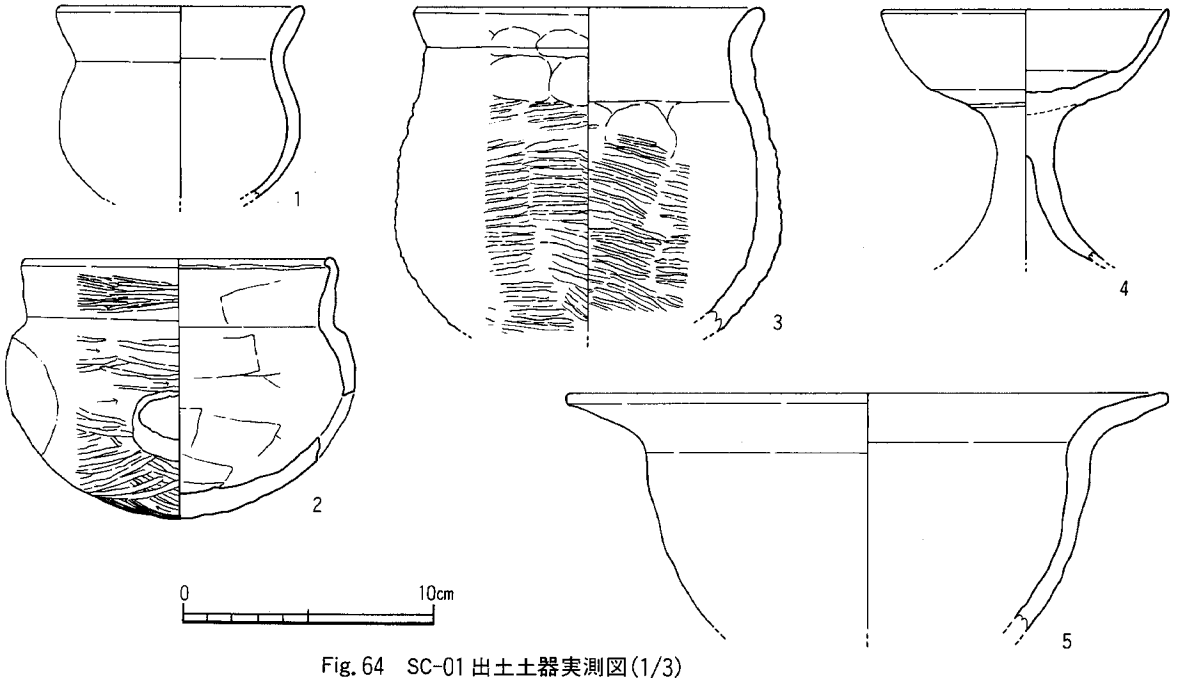


Fig. 64　SC-01 出土土器実測図(1/3)

る。建て替え後の住居跡の主柱穴は4本で主軸をほぼ南北にとり規模は南北3.5m、東西3.8mを測る。残りは悪く残存壁高は最大で17cmを測る。北壁下には灰白色粘土や焼土・炭化物が散布していた。また東壁際においても炭化物の散布する場所がみられる。建て替え前の住居跡も平面形が方形の4本柱の住居と思われ主軸の方向はやや西に振っている。推定される規模は南北3.6m、東西3.4mであったと思われ、建て替え後の床面積はやや広くなっている。

出土遺物（Fig.64、PL.41）

本住居跡からは整理箱1／4箱程度の遺物が出土した。いずれも小片が多く、また、溝や住居跡の切り合いのために遺物の混入した疑いもある。出土遺物は土師器が多いが、他に弥生時代の遺物も含まれている。土師器には高坏、壺、甕、鉢がある。1の甕は口径9.6cmを測り、口縁を直線的に外反させる。摩滅が著しく器面の調整は不明である。2は丸底の壺で口径12.2cm、器高10.3cmを測る。胴部中央に外側に剥離した穿孔があり、頸部は真っすぐ立ち上がり、口縁端部は内側に丸くおさめる。外面はミガキ、内面はヘラケズリをおこなっている。3の甕は胴部の最大口径をやや下におき、頸部はゆるやかに外反する。胴部の内外面には粗いタタキを施し、外面の頸部に指頭圧痕が残る。4の高坏は口縁部の約半分を欠き、脚部の端部をすべて欠く。口径は復元推定で約11.5cmを測る。内外面の器壁は摩滅しており、器壁調整は不明である。 5の鉢は口径24.2cmを測る。胴部から頸部の境をやや内湾させ口縁は直線的に外反させるものである。出土遺物から5世紀の前半に位置づけられる。

SC-02（Fig.65、PL.38）

調査区中央北よりに位置する平面が方形の住居跡である。主柱穴は4本で主軸を南西から北東にとる。規模は南北3.3m、東西3.2m、深さ11cmを測る。北側壁にはカマドがあったとみられ焼土が散布していた。

出土遺物（Fig.66、PL.41）

本住居跡から出土した遺物の点数は多くない。坏身6は口径12.7cm、器高3.7cmを測る。底部を回転ヘラケズリしている以外は全面を回転ナデで仕上げている。坏蓋7は口径11.6cm、器高3.6cmを測

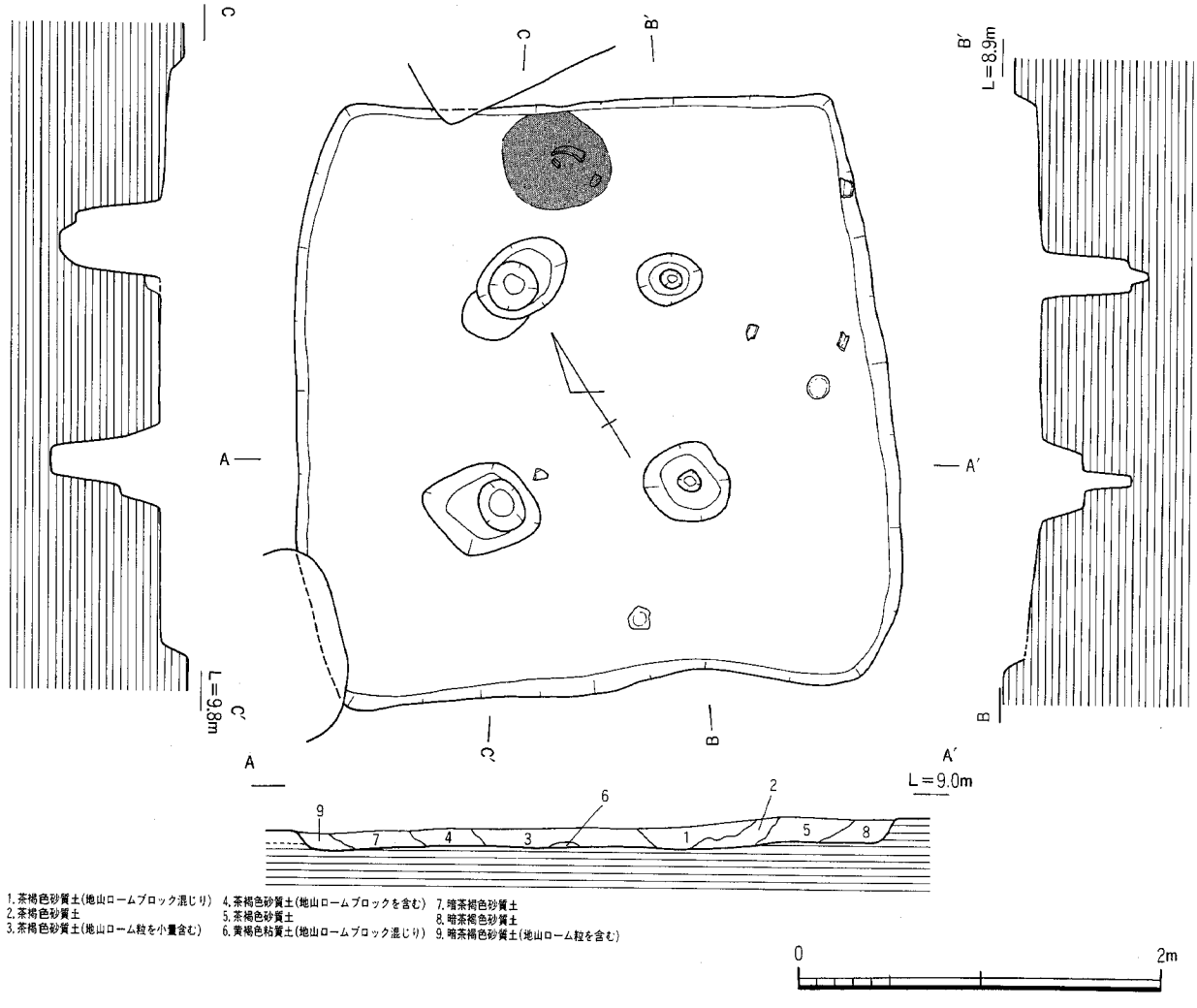


Fig. 65　SC-02 遺構実測図(1/40)

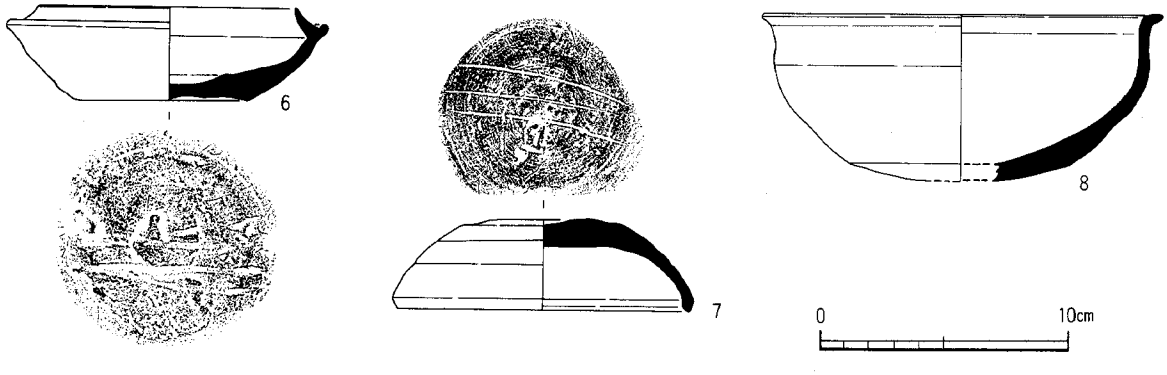


Fig. 66　SC-02出土土器実測図(1/3)

り、焼成も良く、6の坏身とセット関係にあると思われる。須恵器鉢8は口径16.0cm、器高6.6cmを測る。口縁端部を水平に外反させるもので、外面底部を回転ヘラケズリし口縁までの外面と内面の器面は回転ナデで仕上げている。その後内面底部にはヨコナデをおこなっている。

SC-03（Fig.67、PL.38）

調査区北側に位置する平面が方形の住居跡である。SC-02を切っている。主柱穴は4本で主軸をほぼ南北にとる。規模は南北2.3m、東西2.4m、深さ18cmを測る。住居跡内東側に炭化物が散布する部

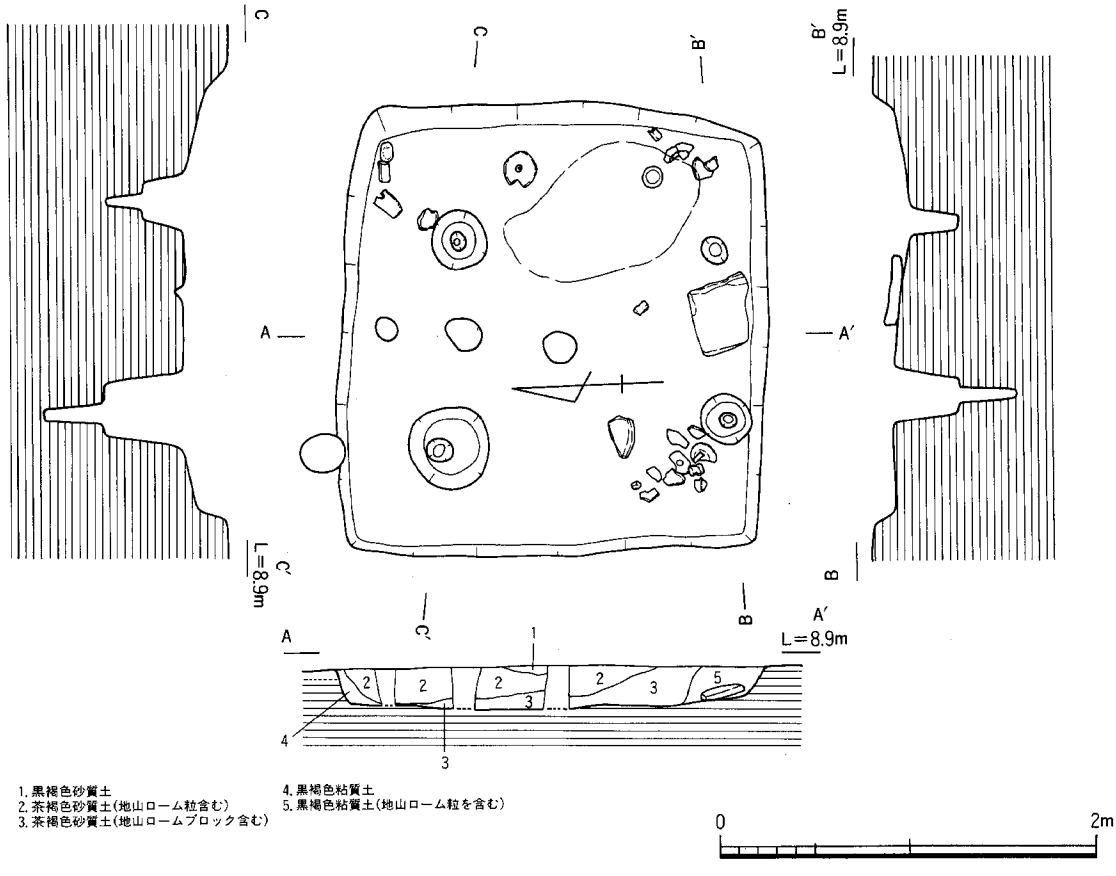


Fig. 67　SC-03 遺構実測図(1/40)

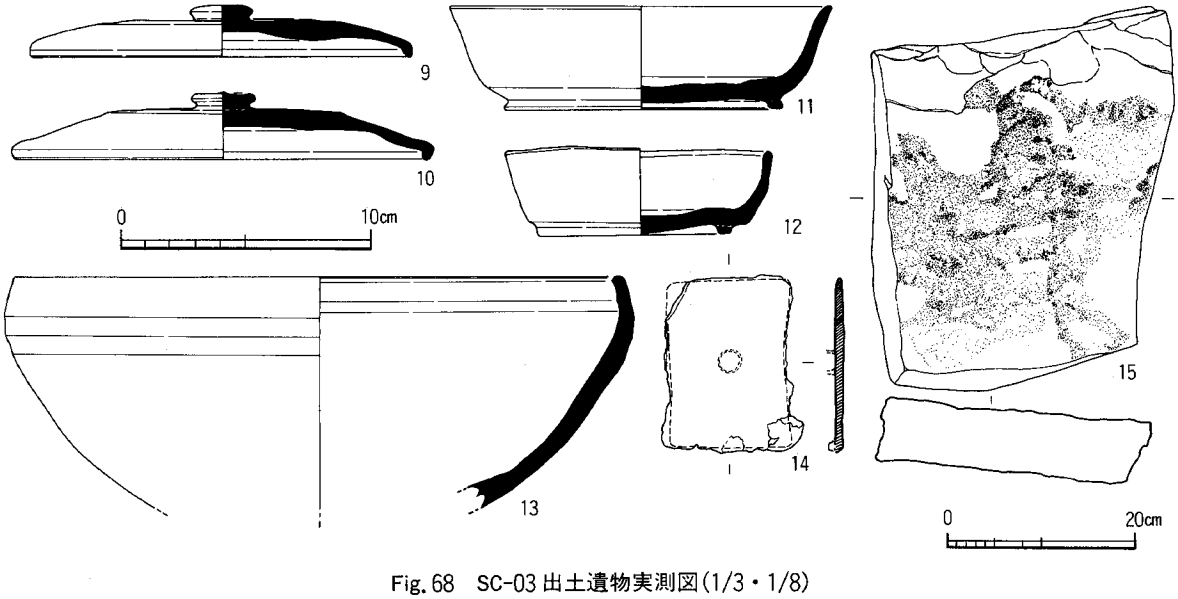


Fig. 68　SC-03 出土遺物実測図(1/3・1/8)

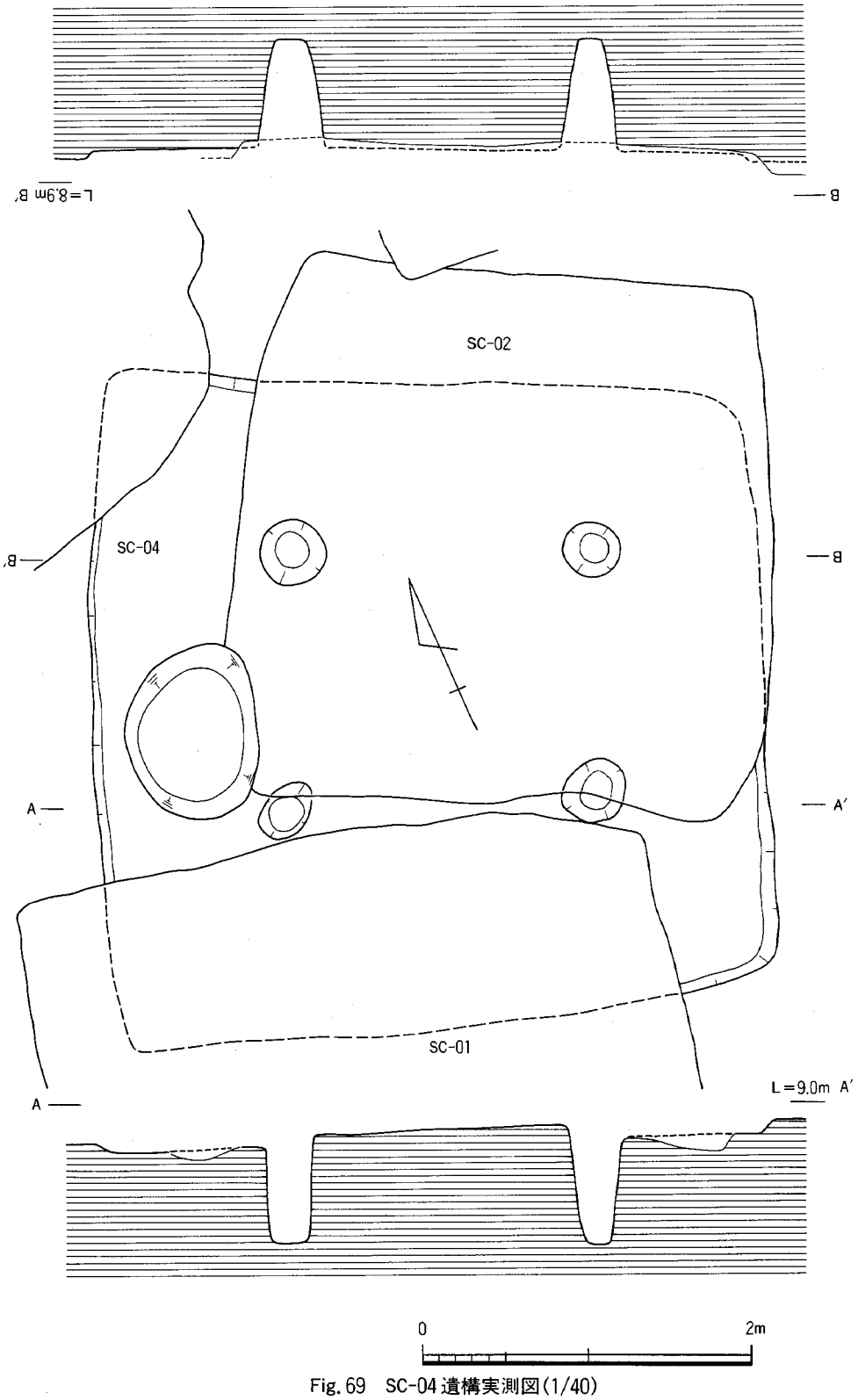


Fig. 69　SC-04 遺構実測図(1/40)

分がみられるが、炉に相当する施設はみられない。南壁際ほぼ中央に作業台か、踏み台に使用されたと思われる平石が床面に接して出土している。

出土遺物（Fig.68、PL.41）

住居跡内からは整理箱約1／2箱程度の須恵器・土師器が出土している。坏蓋９は口径15.2cm、器高2.0cm を測り焼成は非常に悪い。坏蓋10は口径16.7cm、器高2.6cmを測る。坏11は口径15.2cm、器高4.1cmを測る。口縁部は緩やかに外反させるものである。坏12は口径10.7cm、器高3.6cmを測る。焼き歪みが著しく、高台も中心をはずれて張り付けられている。須恵器鉢13は口径24.2cmを測るもので焼成は良好だが、焼き歪みが著しい。口縁を緩やかに内反させ、内外面を回転ナデで仕上げている。外面の口縁下1.5cmから２条の回転ヘラケズリをおこなっている。不明鉄製品14は長辺7.0cm、短辺4.6cm、厚さ３mmの板状をしており、中央に直径８mmの円形の接合痕がある。平石15は長辺38cm、短辺32cm、厚さ７cmを測り、表面に火を受けたと考えられる赤褐色に変色した部分がある。

SC-04（Fig.69、PL.37）

調査区西側に位置する平面が方形の住居跡である。SC-02・SC-01・SC-05に切られている。主柱穴は４本で主軸を南西から北東にとる。規模は南北3.9m、東西4.1m深さ10cmを測る。住居跡の大半を他の遺構に切られており、残存は悪くこの遺構に伴うと思われる良好な遺物は検出されなかった。

SC-05（Fig.70、PL.38）

調査区北西に位置する平面が方形の住居跡である。SC-04を切っており、北西隅をピットに切られ、西壁にカマドを有する。規模は南北2.6m、東西2.7m、深さ27cmを測る。カマドの付近において遺物が集中する部分があり瓦が１枚出土している。住居埋没後と思われるが北側にまとまった遺物が面をもって検出されたが、遺構は確認されなかった。

出土遺物（Fig.71、PL.41）

本住居跡は今回の住居跡の中で最も遺物の出土が多かったもので整理箱約１箱の遺物がある。住居跡北側の床面から浮いた遺物溜りの遺物は下の16・17・20・21・23・24・25である。坏蓋16は口径17.3cm、器高2.6cmを測る。焼成は悪く、白灰色を呈する。坏蓋 17は口径19.4cm、器高3.6cmを測る。くびれの小さいつまみを有する蓋である。坏18は口

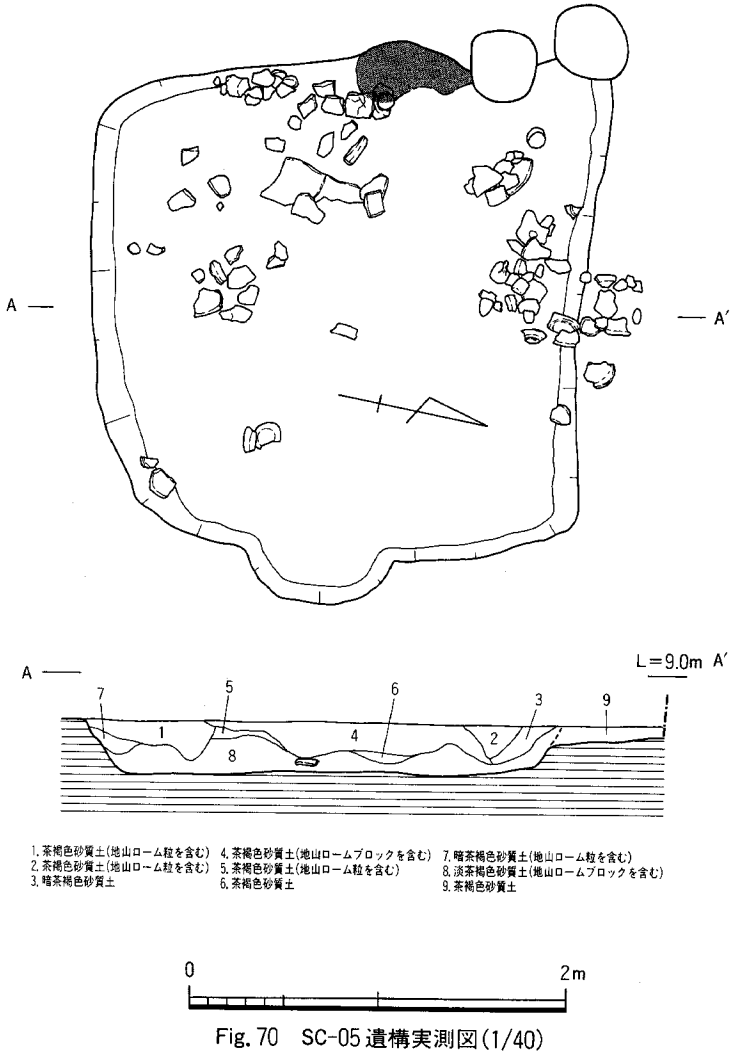


Fig. 70　SC-05 遺構実測図(1/40)

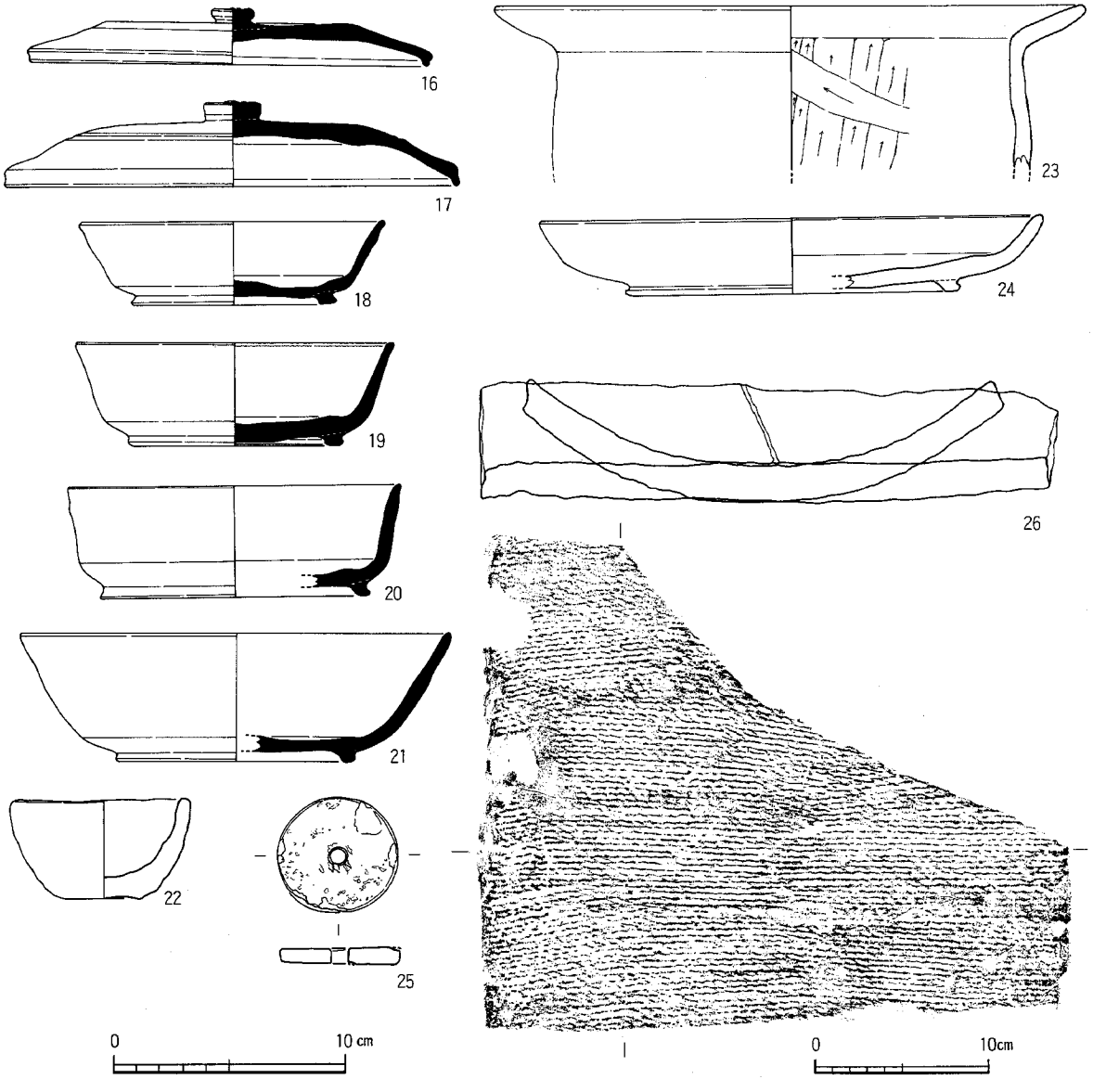


Fig. 71　SC-05出土遺物実測図(1/3・1/4)

径13.2cm、器高3.6cmを測る。やや外側に張る高台を有するもので器壁は直線的に真っすぐ立ち上がる。坏19は口径13.6cm、器高4.4cmを測り、口縁内面に煤の付着がみられる。坏20は口径14.2cm、器高4.7cmを測り、器壁が直線的に立ち上がる。坏21は口径18.4cm、器高5.5cmを測り器壁は丸みをもって立ち上がる。焼成は悪く灰白色を呈する。手づくね土器22は口径7.4cm、器高4.2cmを測り器面はナデで仕上げている。色調は暗黒灰褐色である。甕23は復元口径25.4cmを測り内面はヘラケズリをおこなっているが、外面の器壁調整は摩滅しており不明である。盤24は口径23.6cm、器高3.0cmを測る。器面調整は摩滅が著しく不明である。紡錘車25は直径5.2cm、厚さ 7mm、孔直径 7mmを測る。残存は良好だが剥離した面がある。瓦26は長辺32.5cm、短辺27.6cm、厚さ1.9cmを測る。凹面は摩滅しており凸面には縄目がついている。

SC-13（Fig.72、PL.38）

調査区東側に位置する平面が方形の住居跡である。規模は南北3.0m、東西3.2m、深さ20cmを測る。主柱穴は４本で主軸を南西から北東にとる。住居ほぼ中央にピットがあるが深さが30cmほどあり、住居に伴うとは考えられない。北西壁に低い段をもつが主柱穴の間合いから住居跡の施設であるとは考え難い。

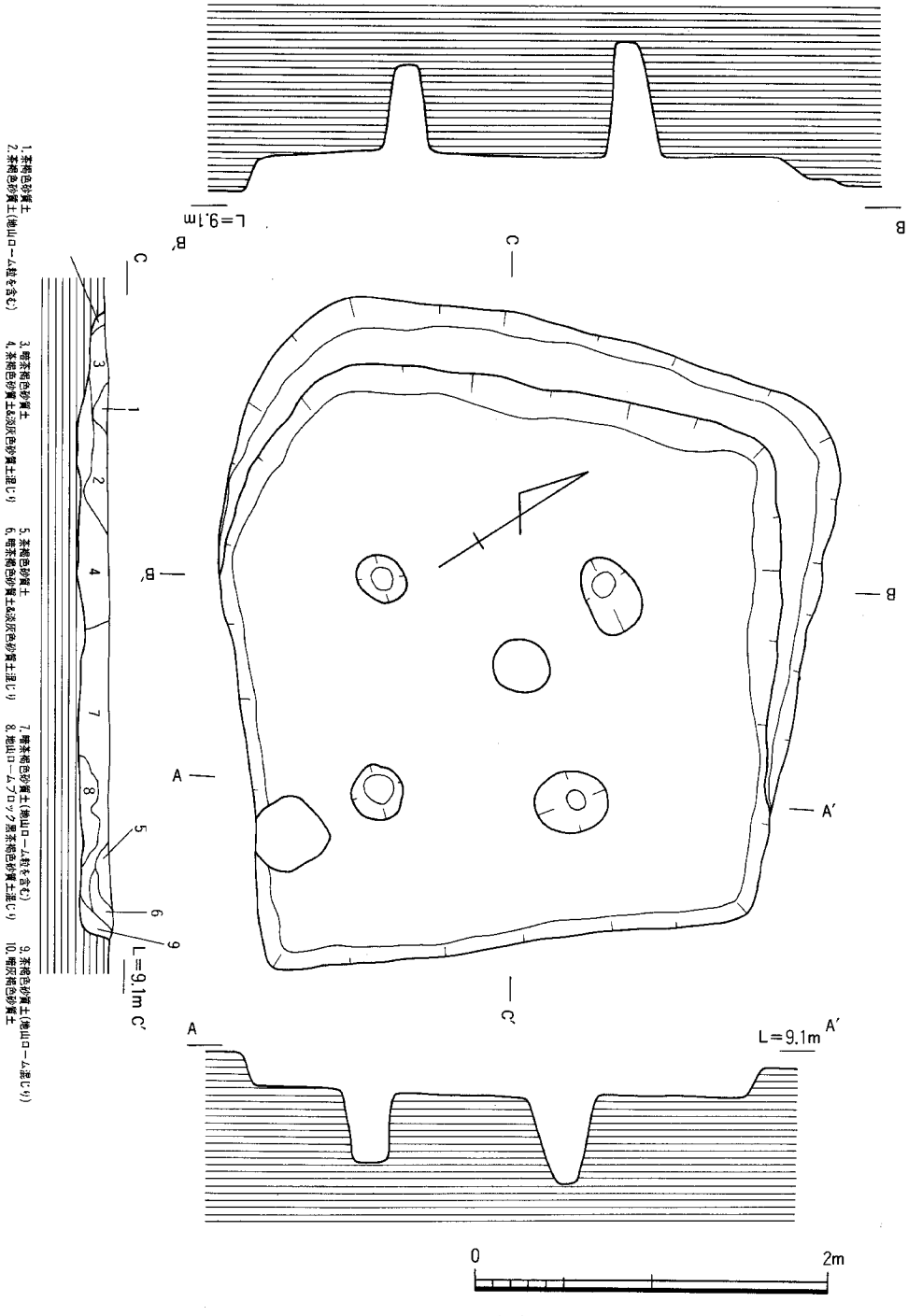


Fig. 72　SC-13 遺構実測図(1/40)

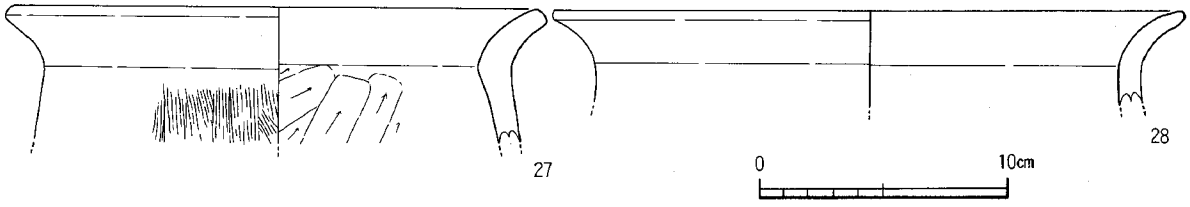


Fig. 73　SC-13出土土器実測図(1/3)

出土遺物（Fig.73、PL.42）

出土遺物には良好なものは少なく土師器が数点出土している。土師器甕27は口径21.4cmを測り、外面をハケで器面調整し、内面はヘラケズリをおこなっている。内面の胴部と頸部の境には明瞭な稜を残す。土師器甕28は口径25.3cmを測り、外面はヨコナデをおこなっている。どちらも焼成は良好である。

SC-14（Fig.74、PL.38）

調査区西東よりに位置する平面が方形の住居跡である。主柱穴と思われるものは確認されなかった。規模は南北3.2m、東西3.2m、深さ15cmを測る。住居跡の三方に浅い周溝をもつがカマドがあったと想定される壁にはみられない。

出土遺物（Fig.75、PL.42）

遺物の大半はカマドがあったとされる住居跡北東部より出土している。遺物は土師器が多いが須恵器の坏蓋なども混じる。土師器の器種は甕が大半を占め他に羽釜、皿等も含まれる。羽釜29は口径25.4cmを測り、胴部下半を欠く。口縁下6.5cmに鍔をほぼ水平に貼り付けるもので、鍔の下面では煤の付着が著しい。外面は縦ハケ、内面はヘラケズリを施している。類例として、同遺跡群第21次調査第55号井戸出土のものがある。甕30は復元口径27.2cmを測り内面に明瞭な稜を残す。甕31は復元口径25.6cmを測り外面と口縁内面にハケ、内面にヘラケズリをおこなっている。甕32は復元口径30.4cmを測り外面と口縁内面をハケ、内面にはヘラケズリをおこなっている。甕33は復元口径16.8cmを測り器面調整は摩滅が著しく不

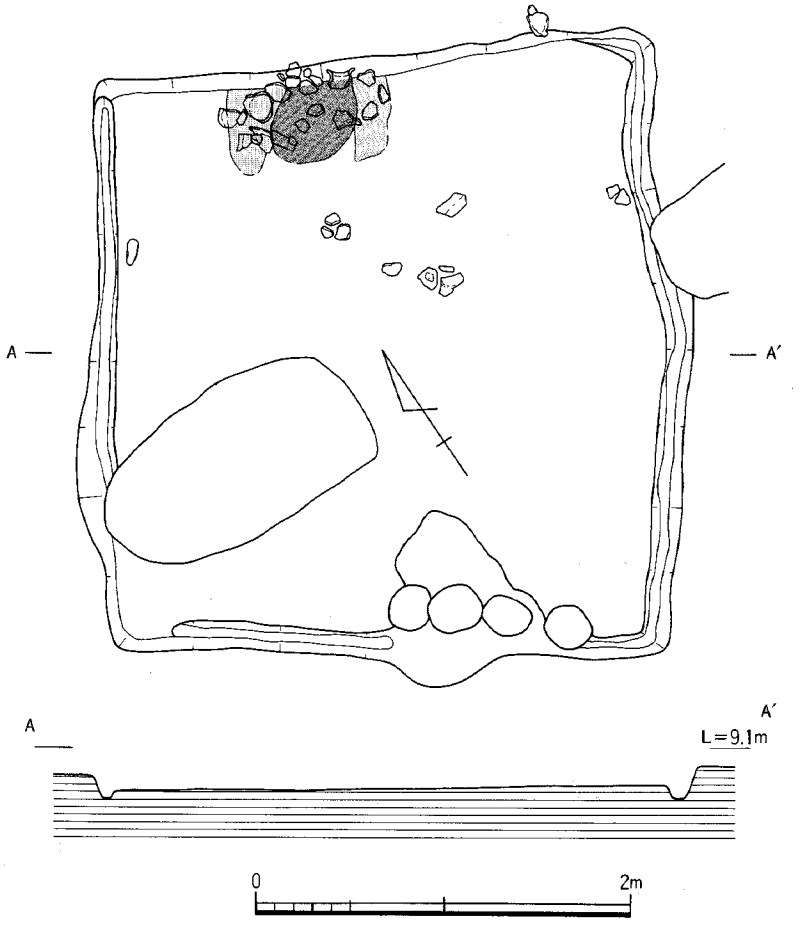


Fig. 74　SC-14 遺構実測図(1/40)

明である。甕34は復元口径17.5cmを測り器面調整は摩滅しており不明である。内面頸部に指頭圧痕がみられる。皿35は口径15.5cm、器高2.5cmを測る。摩滅が著しく、外面底部に粘土帯接合痕がみられるのみで、器面調整は不明である。

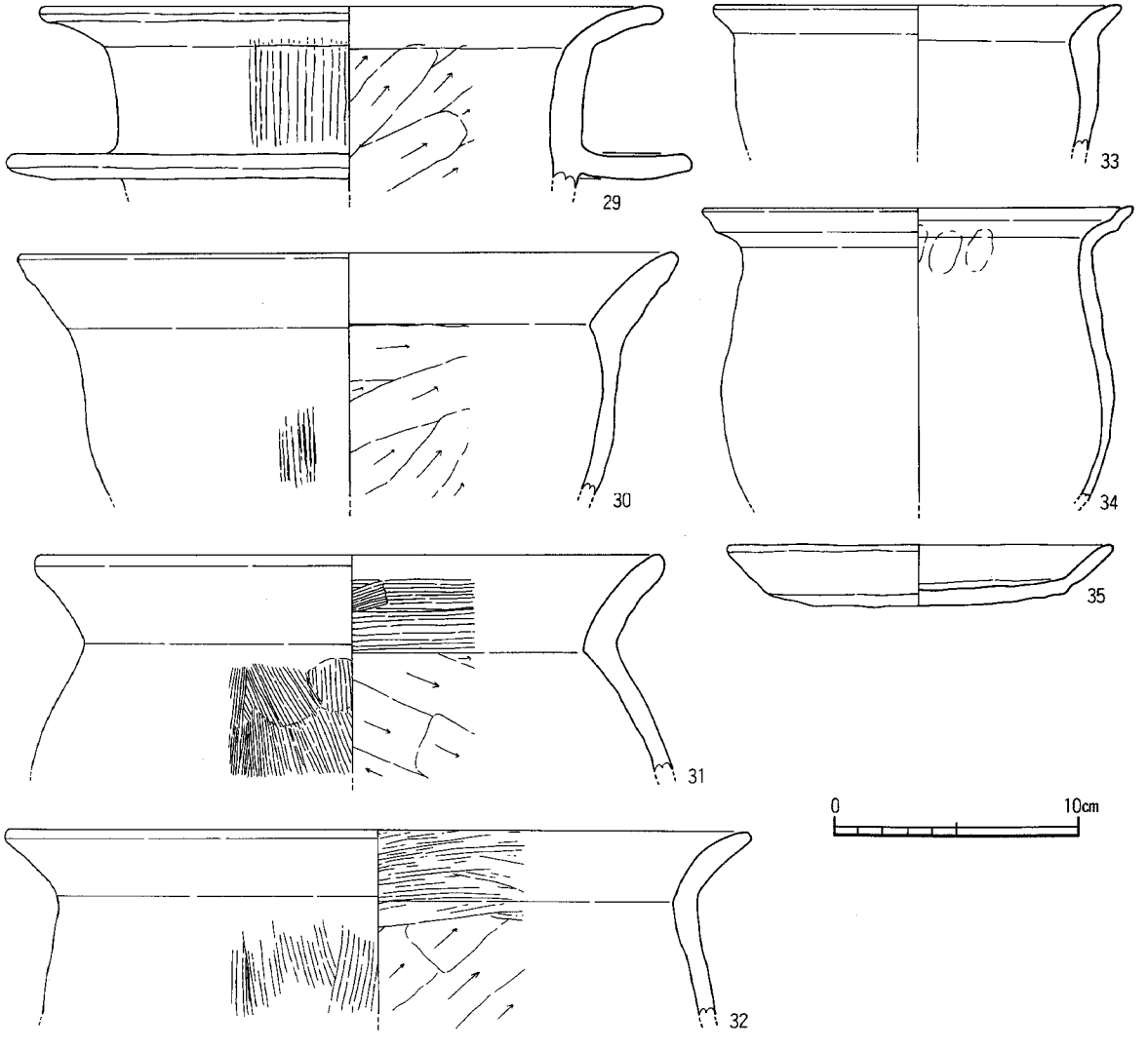


Fig. 75　SC-14 出土土器実測図(1/3)

SC-18（Fig.76、PL.38）

調査区北境界地に位置する。平面が方形と思われる住居跡である。主柱穴は４本と思われ主軸をほぼ南北にとる。規模は東西3.5m、深さ25cmを測る。調査した範囲においては炭化物や焼土等、炉・カマドの施設は確認されなかった。本住居跡出土の遺物は、すべてが小片である。遺物は胎土の観察により土師器が多いと思われるが、他に弥生時代の遺物も含まれている。図化できるものはない。

２）井戸（ＳＥ）

SE-16（Fig.77、PL.39）

調査区南端に位置し、SD－08に切られている。平面形は円形を呈し、直径1.1～1.2mを測る。底面は八女粘土層を更に掘り込んでいる。深さ3.6m、底面の標高5.4mを測る。覆土は上面から1mは暗茶褐色砂質土が、そこから1.5mは暗茶褐色粘質土が堆積する。底面から60cmでは灰白色粘土が多く混入している。壁面は直線的に立ち上がり、井筒等の痕跡はみられない。上面から1.6m下において小型の壺が1点出土しており、底面において図化できる遺物は確認されなかった。

出土遺物（Fig.77、PL.42）

図化できる遺物は小型壺36の1点のみである。完形で天地を逆にした状態で出土した。器高8.6cm口径10.0cmを測る。胴部最大径は胴部上半にあり、胴部と頸部の境界に明瞭な稜線をもつ。頸部は短く、口縁は強く外反する。底径は6.0cmで安定した平底である。外面は細かい縦ハケ、内面は指押サエ後板ナデである。この壺は口縁部の特徴、底部が安定した平底である点などから弥生時代中期末から後期初頭に位置づけられよう。

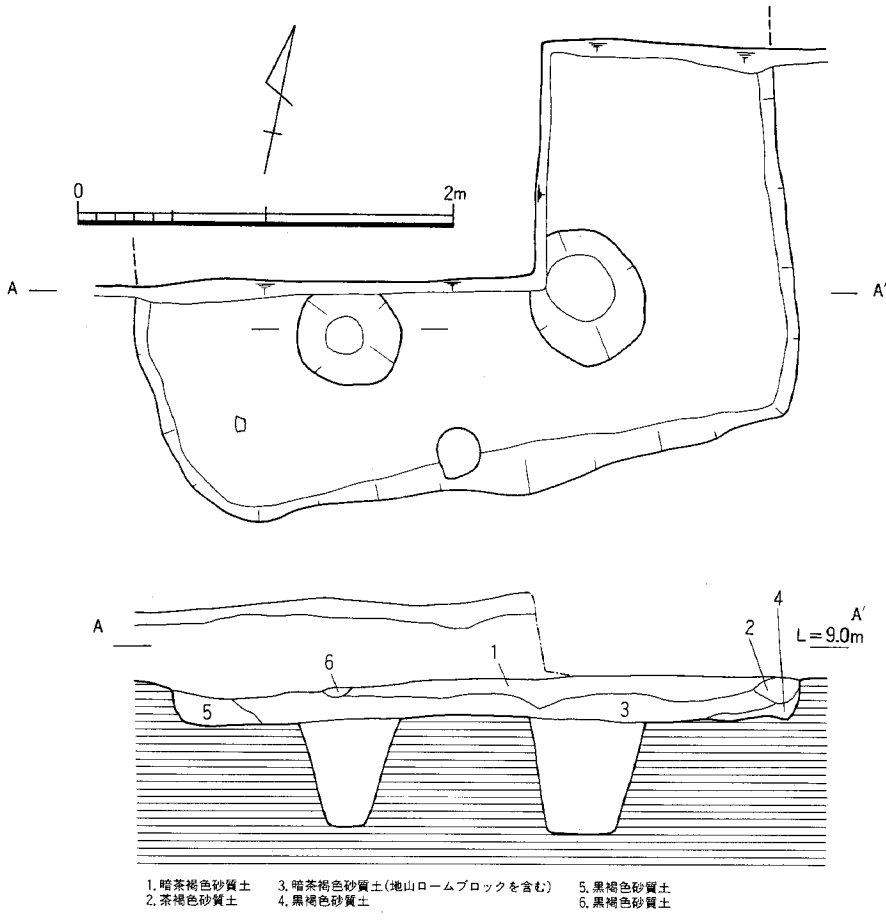


Fig. 76　SC-18 遺構実測図(1/40)

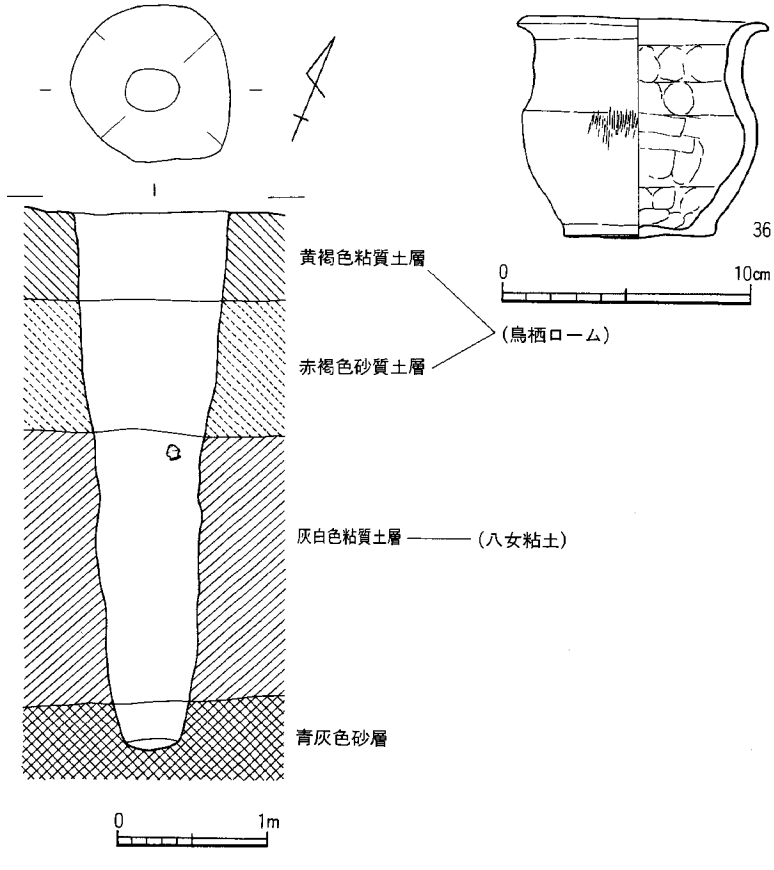


Fig. 77　SE-16 遺構実測図(1/50)・出土土器実測図(1/3)

3）土坑（SK）

全部で9基検出した。

SK-12（Fig.78、PL.39）

調査区東壁、南端にて検出された。不定形の平面をもつと思われ東側調査区外へとのびる。深さは約15cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は土師器の坏、皿等がある。

出土遺物（Fig.80、PL.42）

坏37は口径14.6cm、器高3.0cmを測る。直線的に広がる口縁をもつ。皿38は口径15.9cm、器高2.0cmを測る。丸みをもって立ち上がり、やや外反する口縁である。椀39は口縁を欠くもので、高い高台をもつ。　須恵器坏40は高台部分の小破片である。

SK-15（Fig.78）

SC-01の南に位置し住居跡を切っている。深さは18cmを測り不定形の平面を呈すると思われ、壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物（Fig.80、PL.42）

ガラス小玉46が1点覆土上層から出土している。

SK-17（Fig.78、PL.39）

SC-14を切る土坑である。長辺1.5m、短辺80cm、深さ26cmを測る長円の平面形をもつ。

出土遺物（Fig.80、PL.42）

遺物には土師器片が数点出土している。砥石47は半環状のもので3面において使用の痕跡が認められる。また土坑内西端で断面形三角で残存長6.8cmの刀子45が1本出土しており、墓壙の可能性が考えられる。

SK-19（Fig.78、PL.40）

調査区南壁境界に位置し、遺構は調査区外へのびる。検出平面南側を現代の撹乱によって削られている。幅1.3m、深さ25cmの規模をもつ。平面は隅丸長方形を呈し、断面「U」字の船底形の土坑の周囲に溝を付設しており、北側底面に赤色顔料（ベンガラ）が確認されたことから、刳抜式木棺墓の可能性が考えられる。

出土遺物（Fig.80、PL.42）

遺物は複合口縁壺の口縁端部小片43、壺又は甕の底部小片44が埋土中より出土した。

SK-20（Fig.79）

調査区南東に位置する。平面は長円形を呈し、規模は長辺2.3m、短辺70cm、深さ8cmを測る。特に図化できる遺物は出土していないが、遺構断面形と方向からSD-07と同一遺構の可能性がある。

SK-21（Fig.78）

調査区西調査区境界で検出された不定形の土坑である。遺構底面はほぼ水平であり、残存している深さは5cmを測る。図化できる遺物は出土していない。

SK-22（Fig.79、PL.39）

調査区南側に位置する長辺1.6m、短辺40cm、深さ30cmの土坑である。平面は長円形を呈し、遺構内西より底面から約15cm浮いた位置に平石があった。標石としての使用も考えられる。遺物にはつまみをもつ須恵器坏蓋の破片、土師器片などが出土しており、奈良時代に位置づけられる。

SK-24（Fig.79）

SC-14の南に位置する。削平が及んでおり残存はよくない。平面は不整長方形を呈し、長辺2.1m、短辺50cm、深さ10cmを測る。土坑の2辺に幅約20cmの溝が付設する。図化できる遺物は出土しな

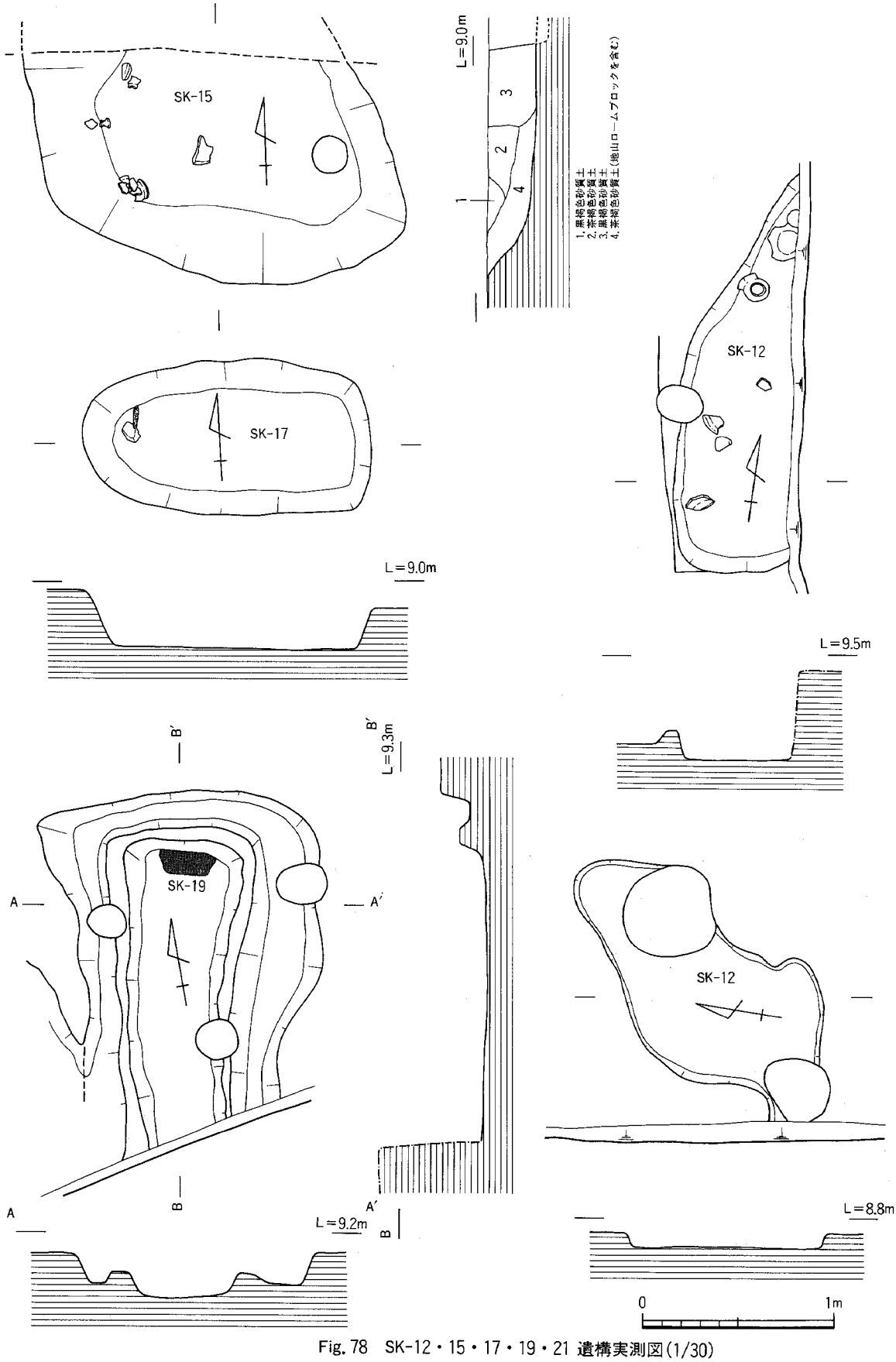


Fig. 78　SK-12・15・17・19・21 遺構実測図(1/30)

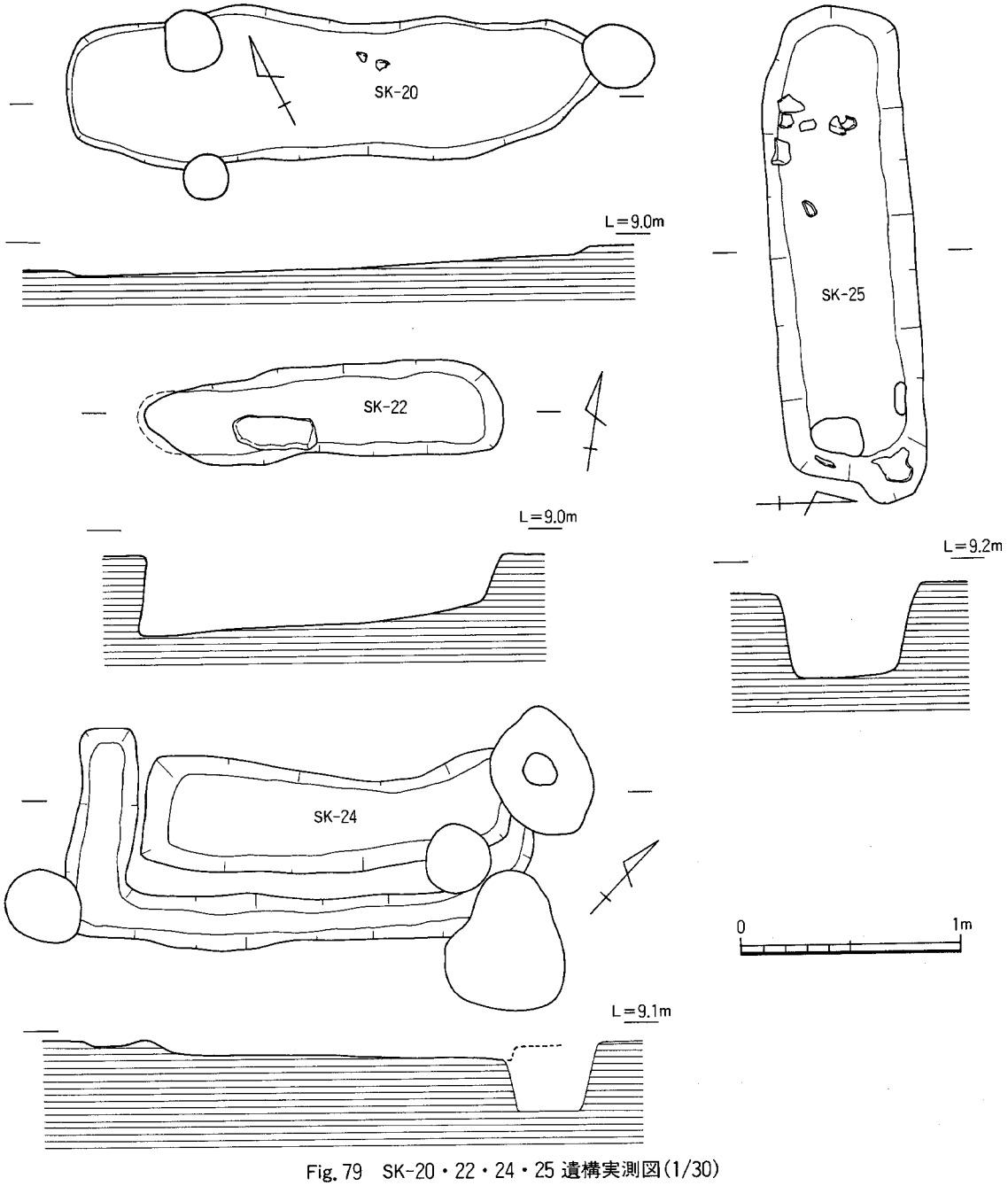


Fig. 79　SK-20・22・24・25 遺構実測図(1/30)

かったが覆土は灰茶褐色を呈しSK-19とは時期と性格を異にする遺構と考える。

SK-25（Fig.79、PL.40）

調査区の南東に位置しSC-14を切る。平面は隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。規模は長辺2.2m、短辺60cm、深さ45cmを測る。

出土遺物（Fig.80、PL.42）

遺構内東端より鉄釘42が１点出土している。断面形は四角であり、長さは9.4cmを測る。須恵器坏蓋41は口径11.8cm、器高3.6cmを測り、かえりを有し、天井部にヘラ記号をもつ。坏身の可能性もあるものである。鉄釘１点のみの出土であるが墓壙の可能性を考えたい。

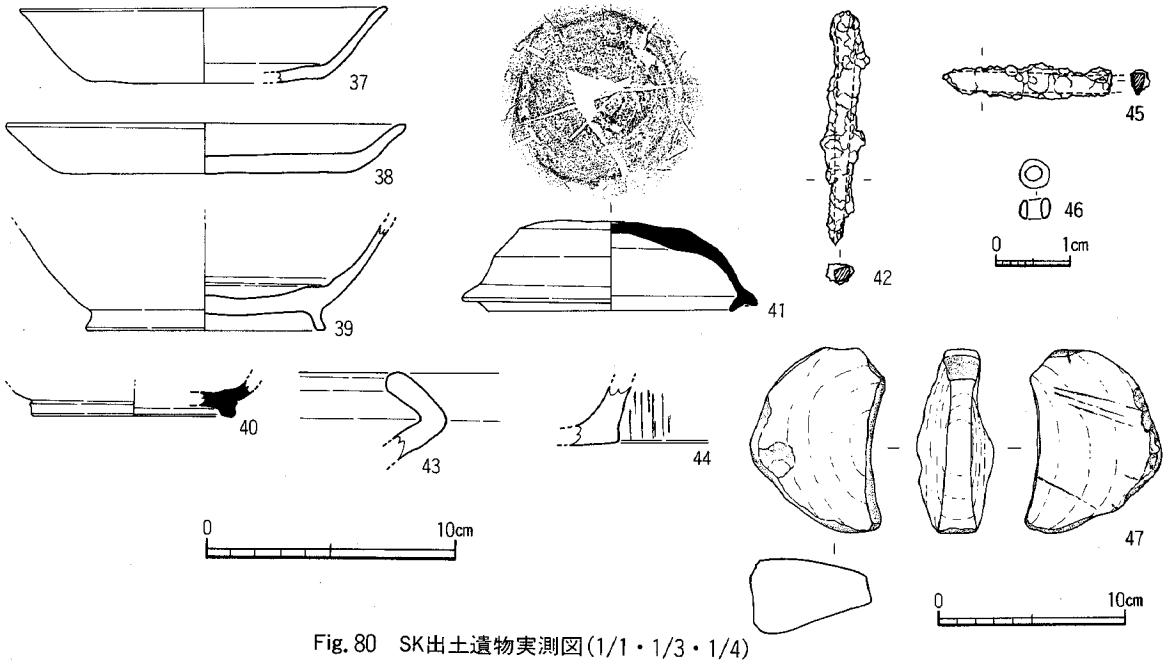


Fig. 80　SK出土遺物実測図(1/1・1/3・1/4)

4）溝（SD）

全部で6条検出した。ほとんどが残存が悪く今回の調査においては溝における良好な資料は得られなかった。

SD-06

調査区西側に位置し南から北に向かって流れる。規模は最大幅80cm、深さ12cmを測り、調査区北側において2条に分かれる。SD-07・SD-08を切る。図化できる遺物はない。

SD-07

調査区西壁境界に位置しSD-06に切られる。幅70cm、深さ17cmの規模をもち、SD-08とほぼ方向を同じくする。遺物としては須恵器坏の小破片が出土しているが図化できるものはない。

SD-08（Fig.81、PL.40）

調査区の南壁から西壁の方向に流れる溝である。溝の底面における比高差はあまりない。規模は最大幅1.2m、深さ70cmを測る。SE-16を切り、SC-01に切られる。断面形は「V」字である。

出土遺物（Fig.81、PL.42）

石包丁48が1点出土しており、厚さは7㎜を測る。図化できる土器はないが弥生土器破片、複合口縁壺の小破片が出土している。

SD-09

調査区ほぼ中央に位置しSC-03に切られる。南から北に流れると思われる幅80cm、深さ20cmの溝である。SC-14との切り合いは土層で確認できなかったが、SC-14の北側において同一と思われる溝は確認できない。図化できる残存の良好な遺物は出土しなかった。

SD-11

北壁西よりの調査区境界において確認された溝

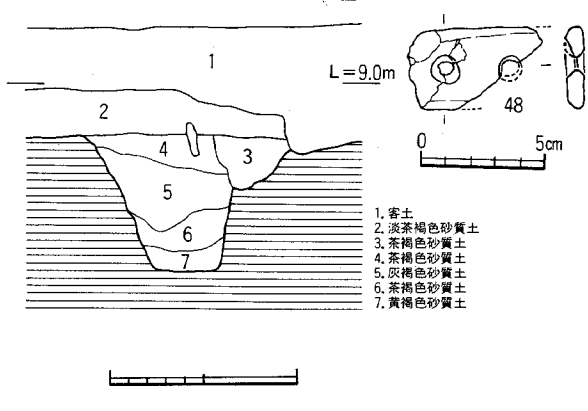


Fig. 81　SD-08 断面実測図(1/40)・出土遺物実測図(1/3)

である。幅40cm、深さ12cmを測る。遺物は図化できるものはないが、弥生土器小片・高台を有する須恵器坏小片が数点出土している。

SD-23

SC-14に接する幅50cm、深さ10cmの溝である。図化できる遺物はないが、土師器小破片が出土している。

5）その他の遺物（Fig.82、PL.42）

遺構上面の遺物包含層から石包丁が1点出土している。擦り切りによる穿孔がされており厚さ5㎜を測る製品端部である。

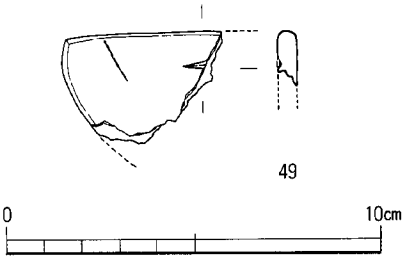


Fig.82　遺構面出土遺物実測図(1/2)

4．那珂遺跡46次調査出土の赤色顔料について

那珂遺跡46次調査SK-19出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察とX線分析を行い、その種類や特徴を調査した。赤色物の出土状況はFig.78のようであり、赤色の粉末が凝集した小塊が混じった土砂である。これを実体顕微鏡下で調整（混入土砂等の除去）し、針先に付く程度を採り検鏡した。残りを研和したものを、蛍光X線分析の試料とした。

光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の赤色顔料としてはベンガラ（Fe_2O_3）、朱（HgS）、鉛丹（Pb_3O_4）の3種が考えられるが、三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。今回の試料には、赤色顔料としてはベンガラ粒子だけが認められ、朱粒子は認められなかった。赤色顔料の主成分元素の検出を目的として蛍光X線分析を実施した。理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；Cr対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；LiF、検出器；SCの条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄が検出され、水銀は検出されなかった。以上の結果から、本試料はベンガラと考えられる。

北部九州地方の弥生時代後期以降の墳墓では、埋葬施設内面全体にベンガラを塗り、床面あるいは遺骸全体にもベンガラを撒き、頭胸部には朱を施す「朱とベンガラの使い分け」が始まる。この約束ごとは、ベンガラを使わずに「朱だけを使う」場合、「朱とベンガラを使う」場合、朱は使わずに「ベンガラだけを使う」場合と様々な状況を見せながらも、基本的には古墳時代に全国的な風習となり、墳墓の性格の一面を表すようになる。本例もこの範疇で捉えることができよう。

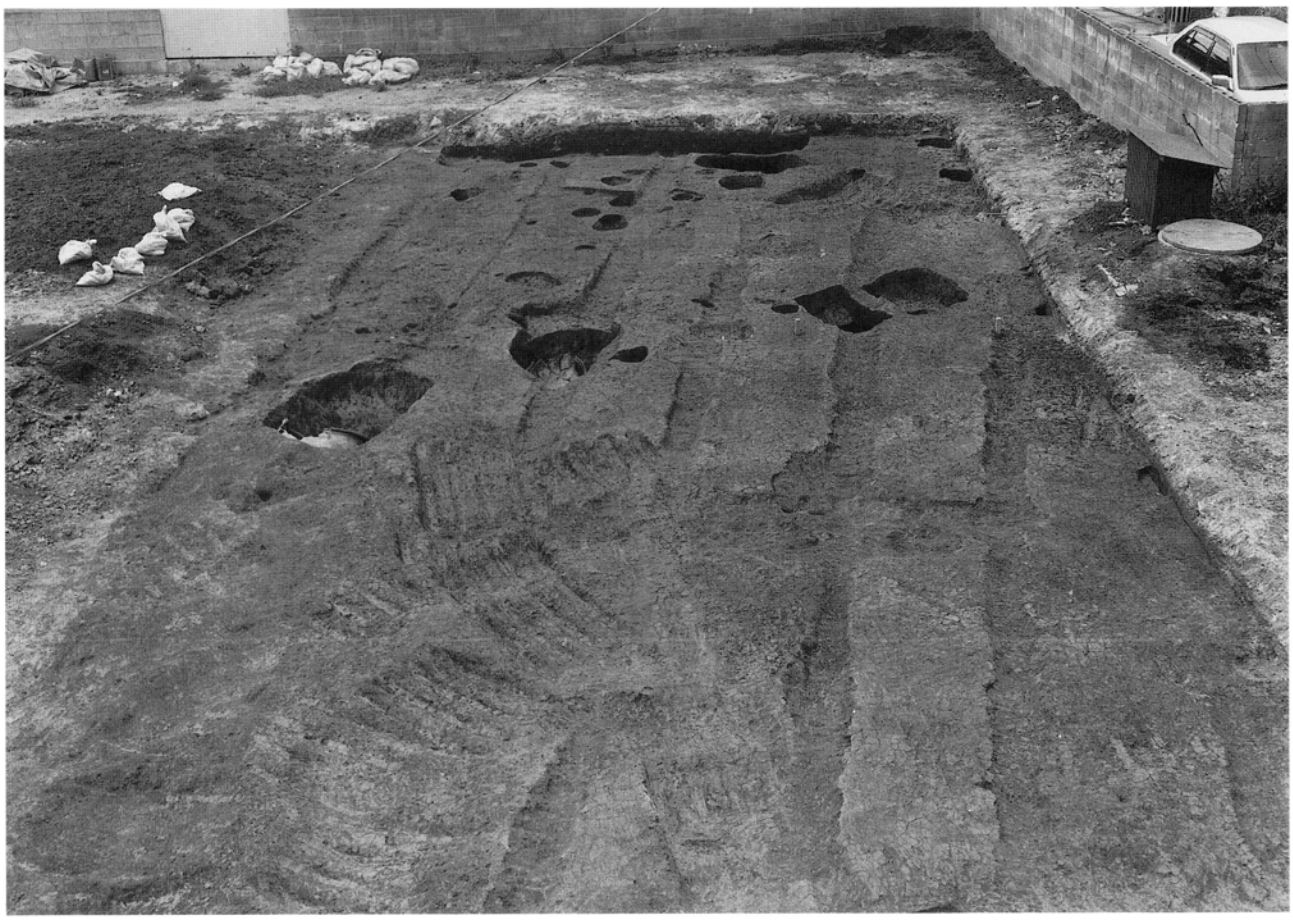
（本田　光子）

5．小結

本調査地点は那珂丘陵の西端部にあたる。今回の調査において最も古い遺構としてSE－16があるがそれと同時期の遺構は確認されなかった。井戸は生活に密着した遺構であるが住居跡等の遺構が確認できないのは、それが台地の沿辺部に位置するためか、遺構が削平されてしまったためかの判断はできなかった。南方向約100mの22次調査、北西約150mの23次調査においては「神ノ前窯」出土瓦ときわめて類似する瓦が出土している。時期的に下る今回調査した奈良時代の住居跡から平瓦が出土しており、瓦を有する建物との共存が留意される。那珂遺跡は市街化が進み、旧地形の復元や遺構の広がりは断片的な調査に頼らざるをえないが、今後の調査成果の増加を待って、検討を進めていきたい。

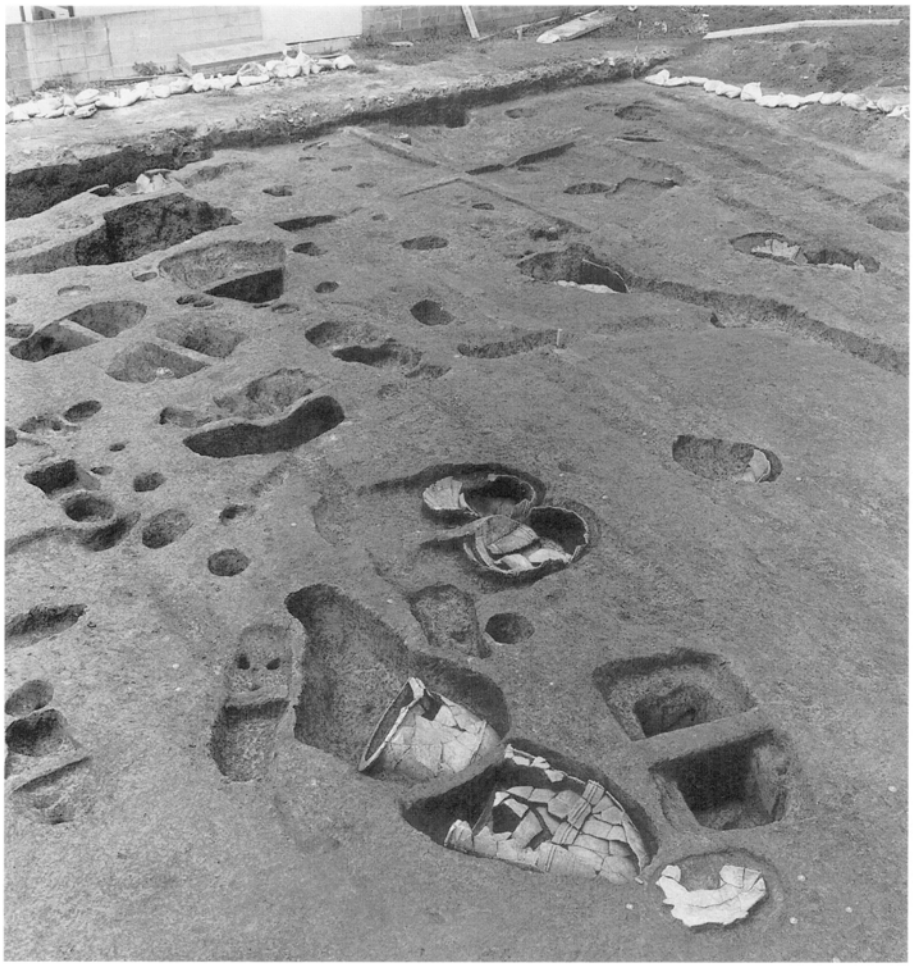
図　版

1



2

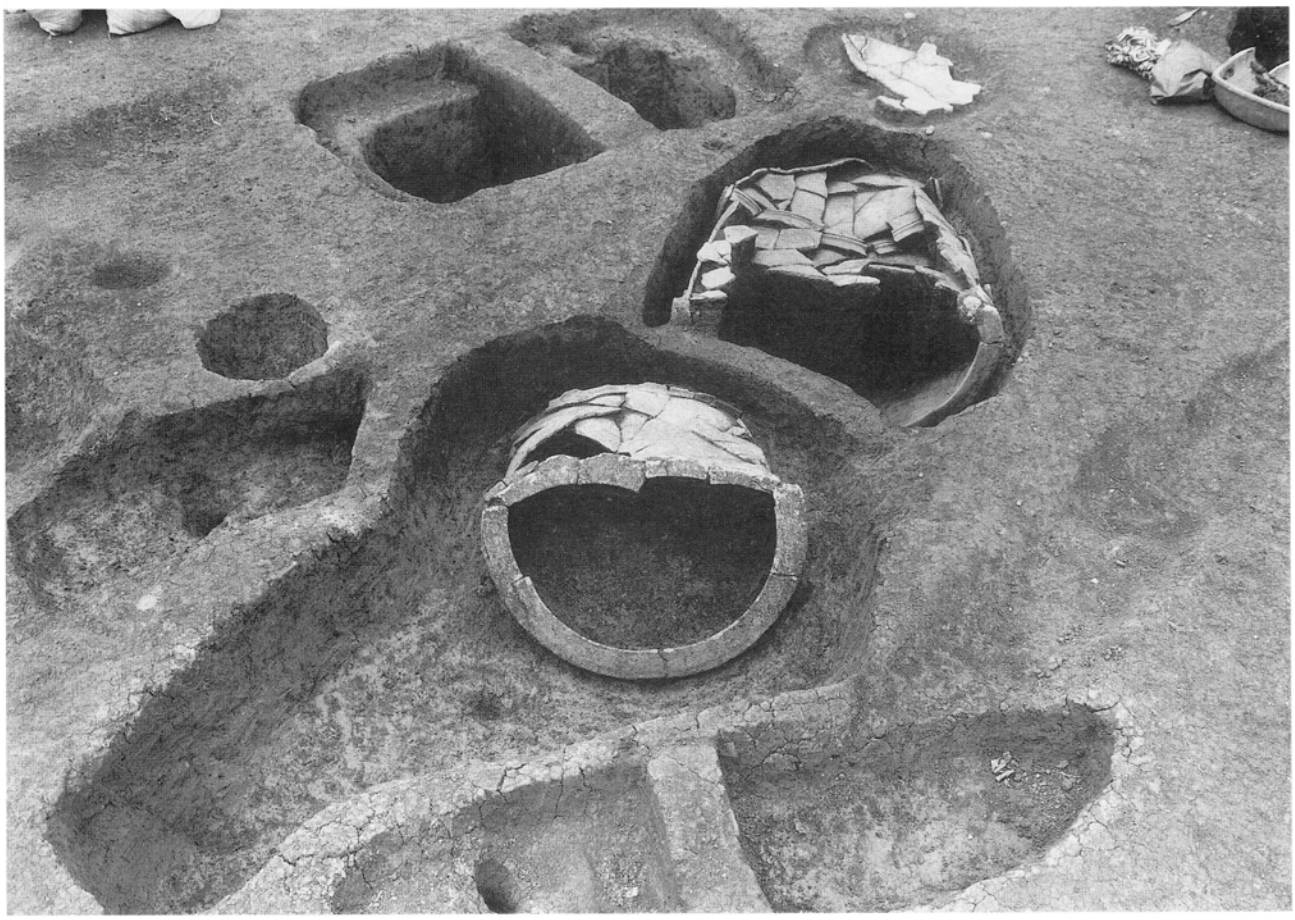
1．第38次調査区全景（東半区　北から）　　2．調査区全景（西半区　北から）



1．甕棺墓群（1）
（北から）

2．甕棺墓群（2）
（北から）

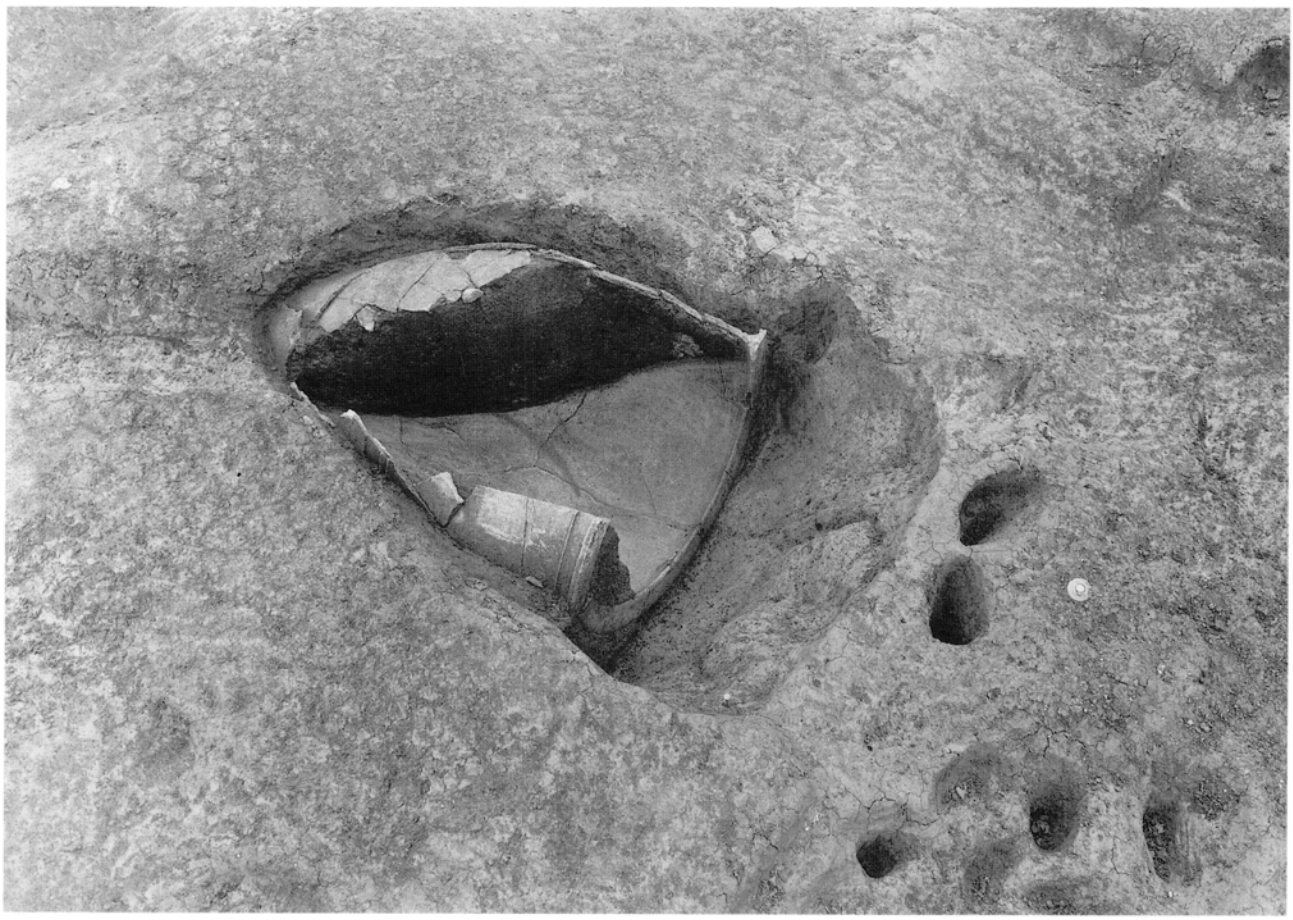
1



2

1．甕棺墓11、12（東から）　　2．甕棺墓13（東から）

1



2

1．甕棺墓14（東から）　　2．甕棺墓18（西から）

1

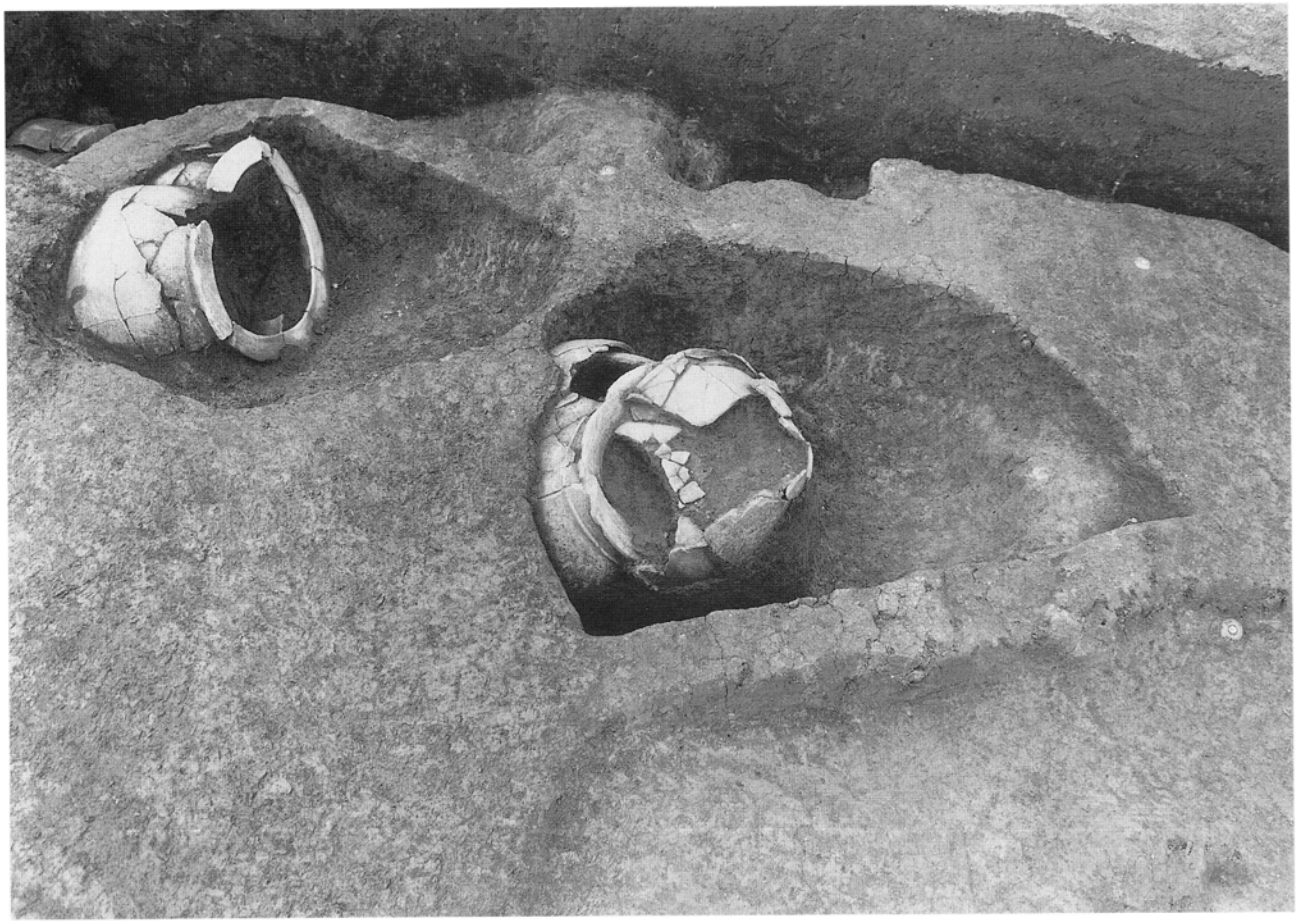
2

1．甕棺墓45（西から）　　2．甕棺墓20（東から）

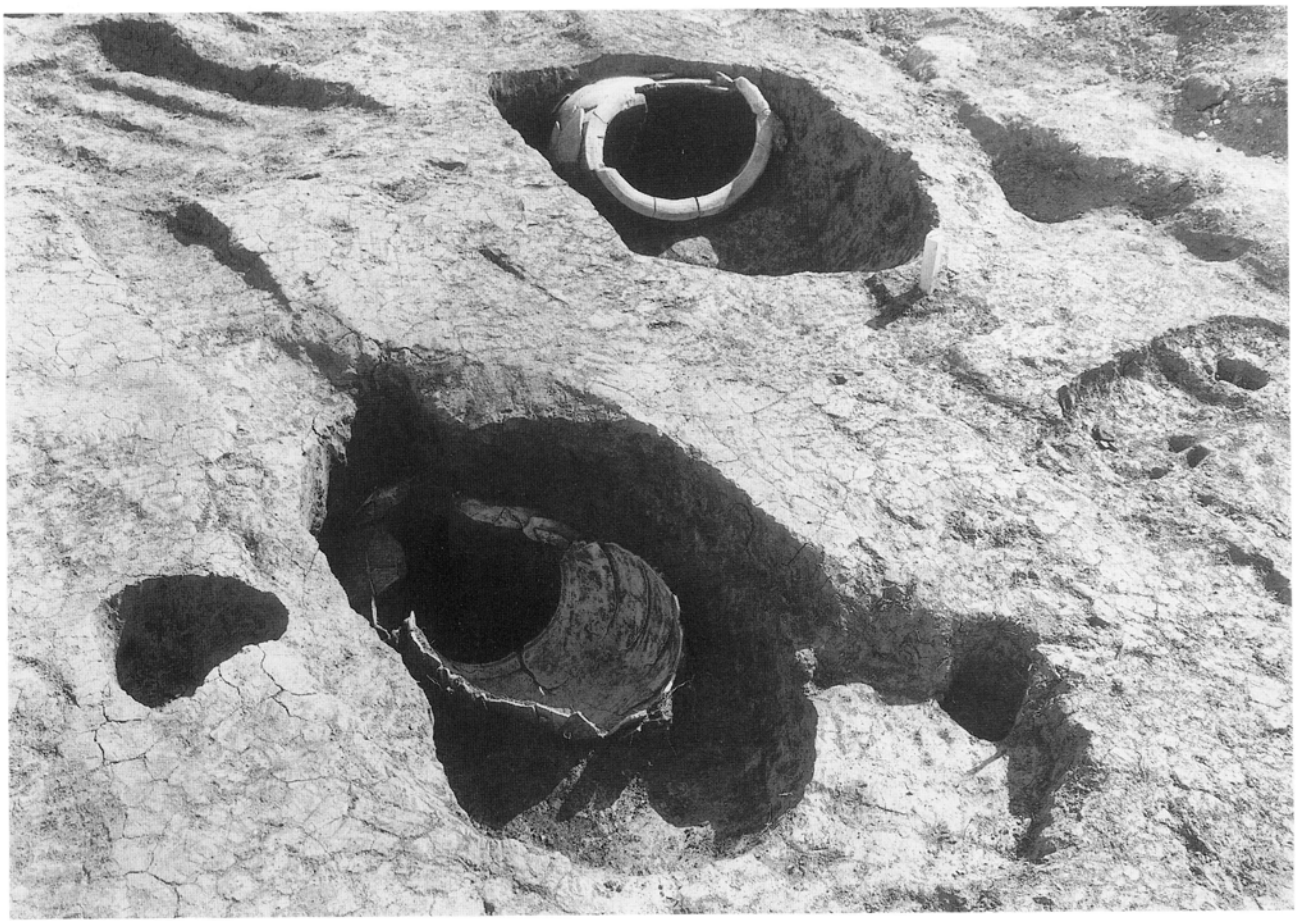
1

2

1．甕棺墓19（北から）　　2．甕棺墓21（南から）

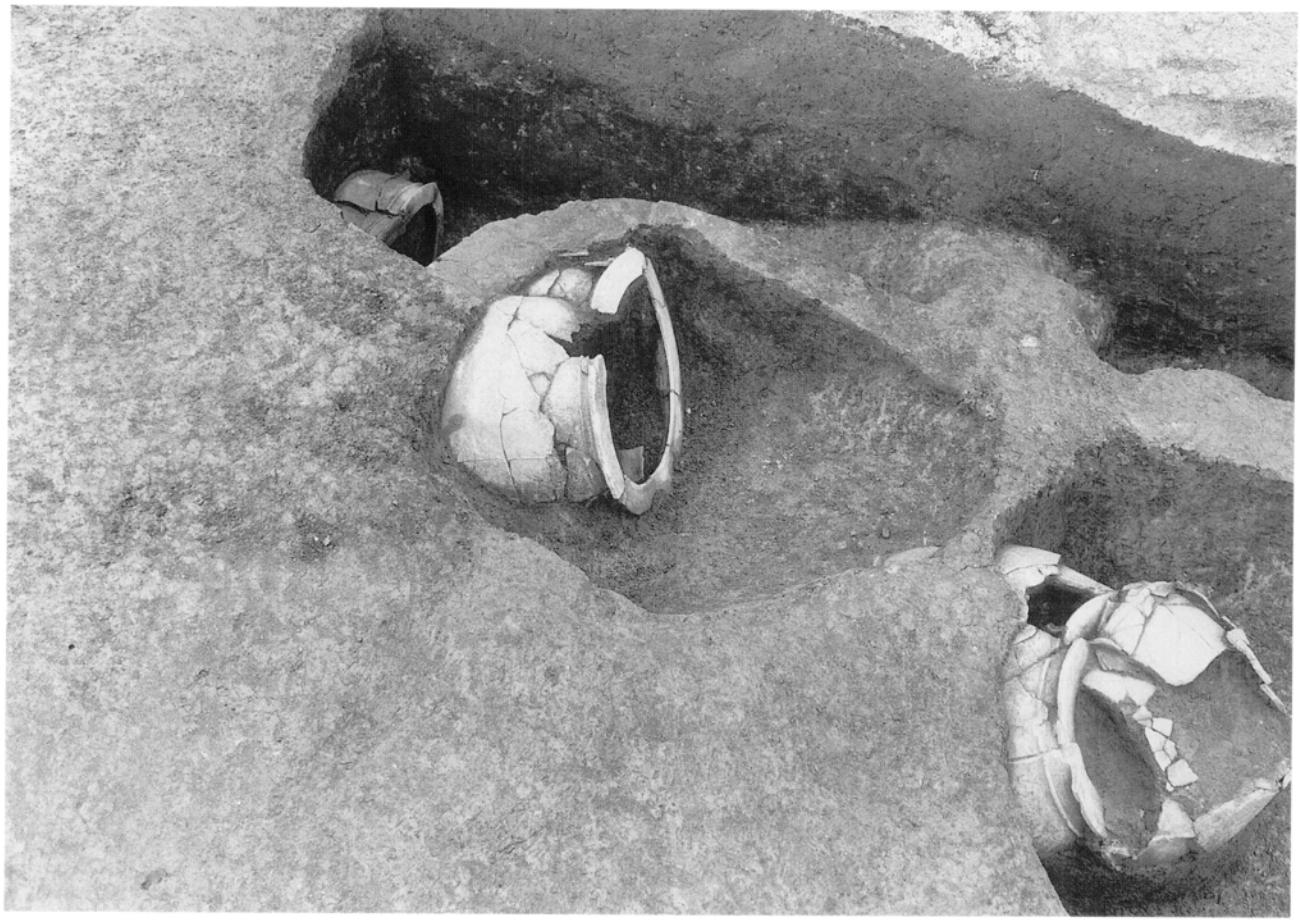


1

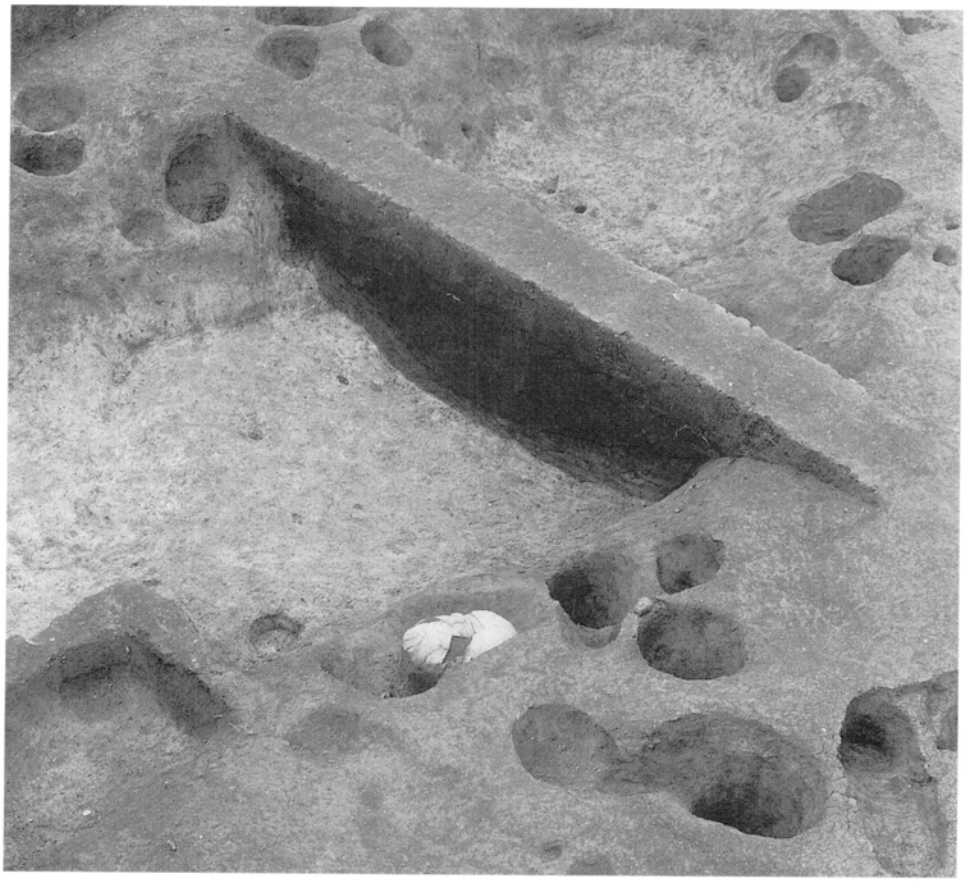


2

1．甕棺墓22（南から）　　2．甕棺墓46（西から）

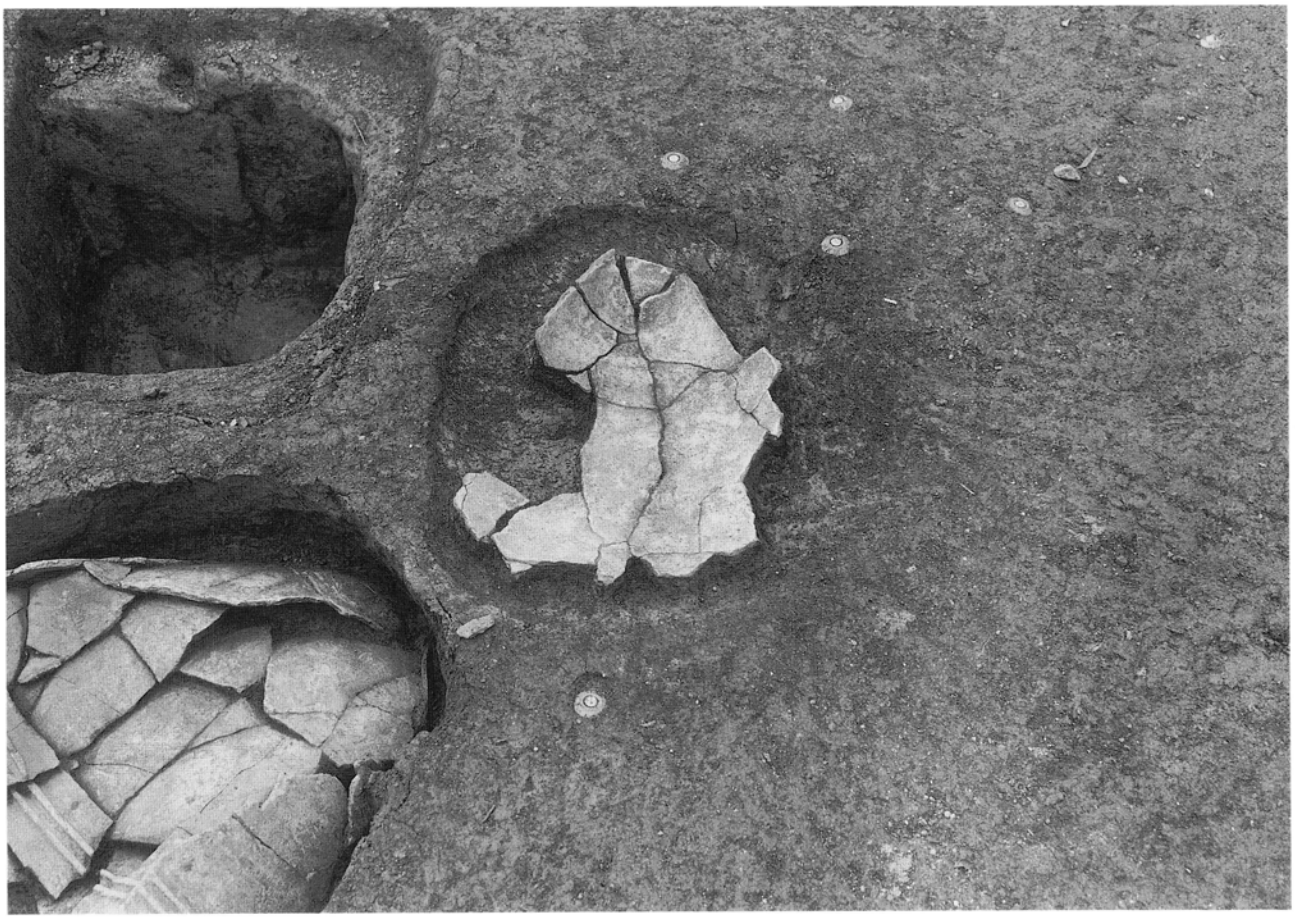


1．甕棺墓16（南から）



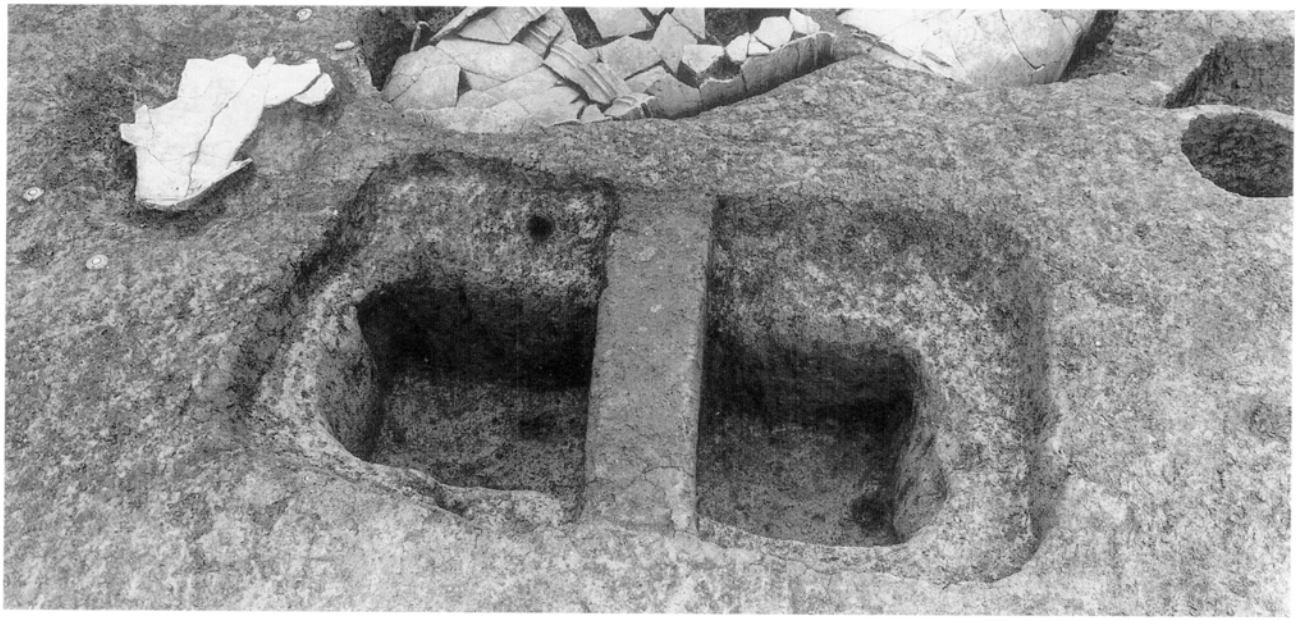
2．甕棺墓24（西から）

1

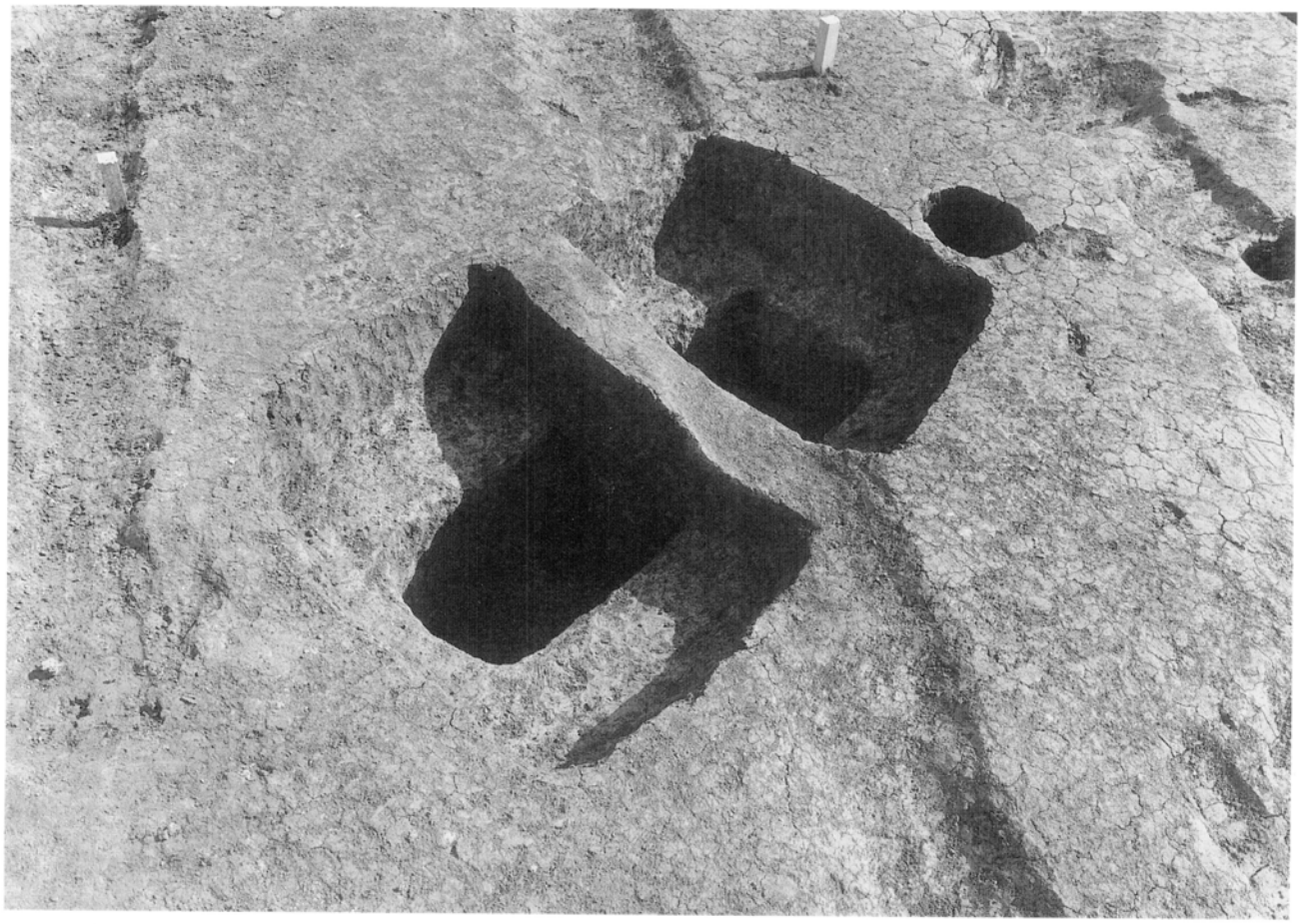


2

1．甕棺墓13、14、15（西から）　　2．甕棺墓15（東から）



1



2

1．土壙墓９（西から）　　2．土壙墓44（南から）

1

2

1．褒棺墓17（西から）

2．住居跡25と褒棺墓群

1

2

1．住居跡4（西から）

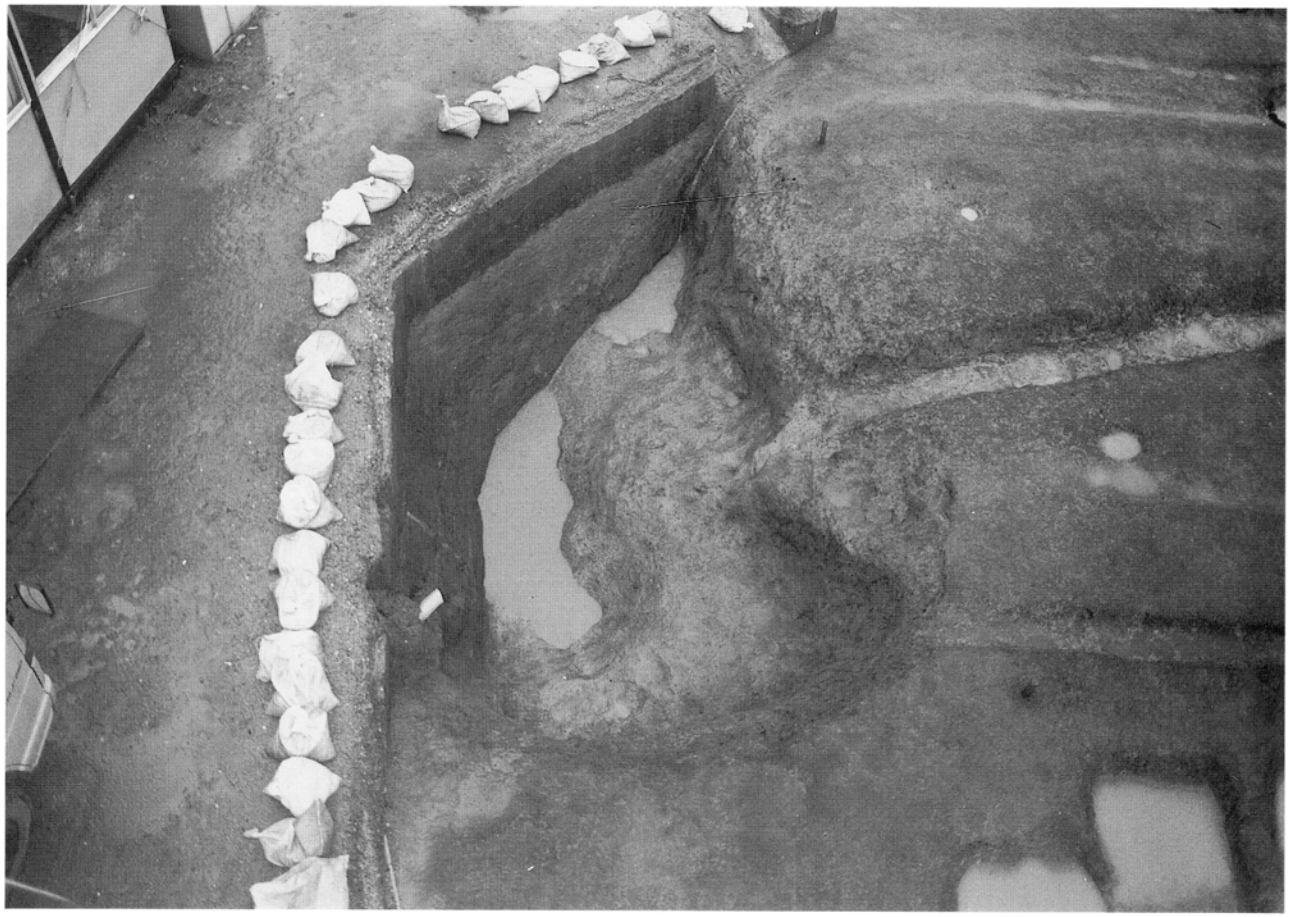
2．住居跡4カマド痕跡（南から）

1

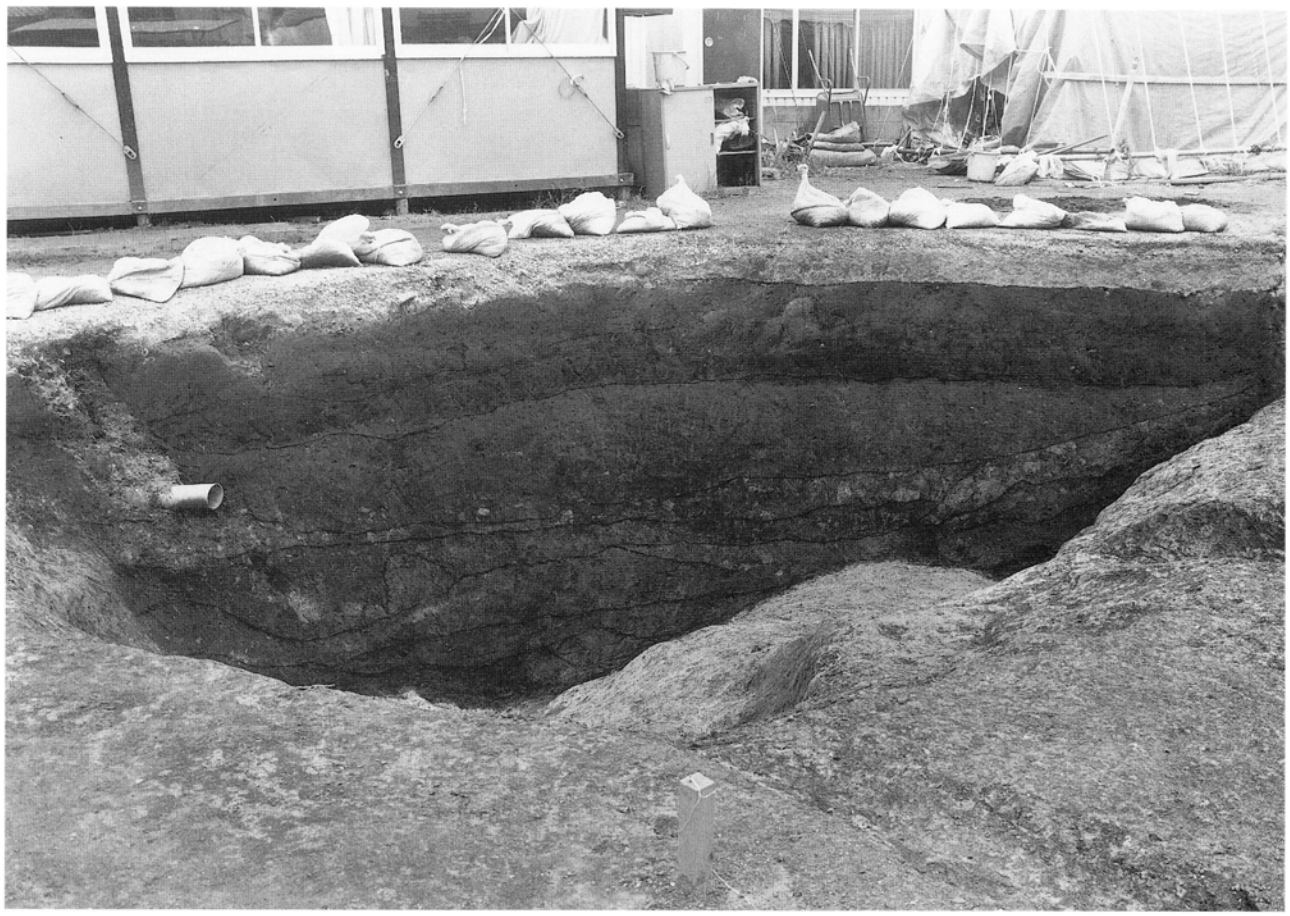
2

1．住居跡25　　2．土壙28と甕棺墓群

1．土壙１（東から）
2．土壙１土層
（北から）



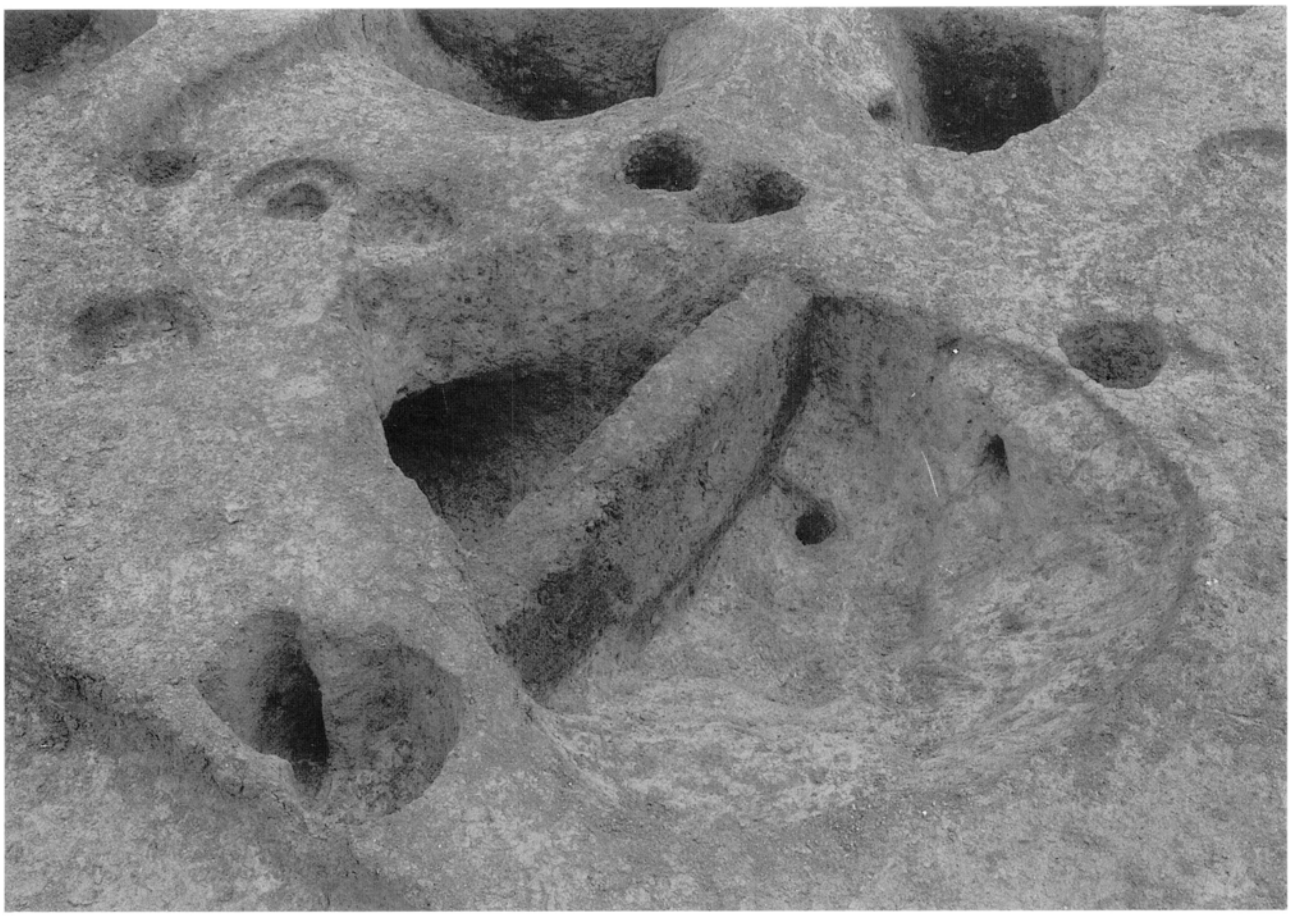
1



2

1．土壙28（西から）　　2．土壙28土層（南から）

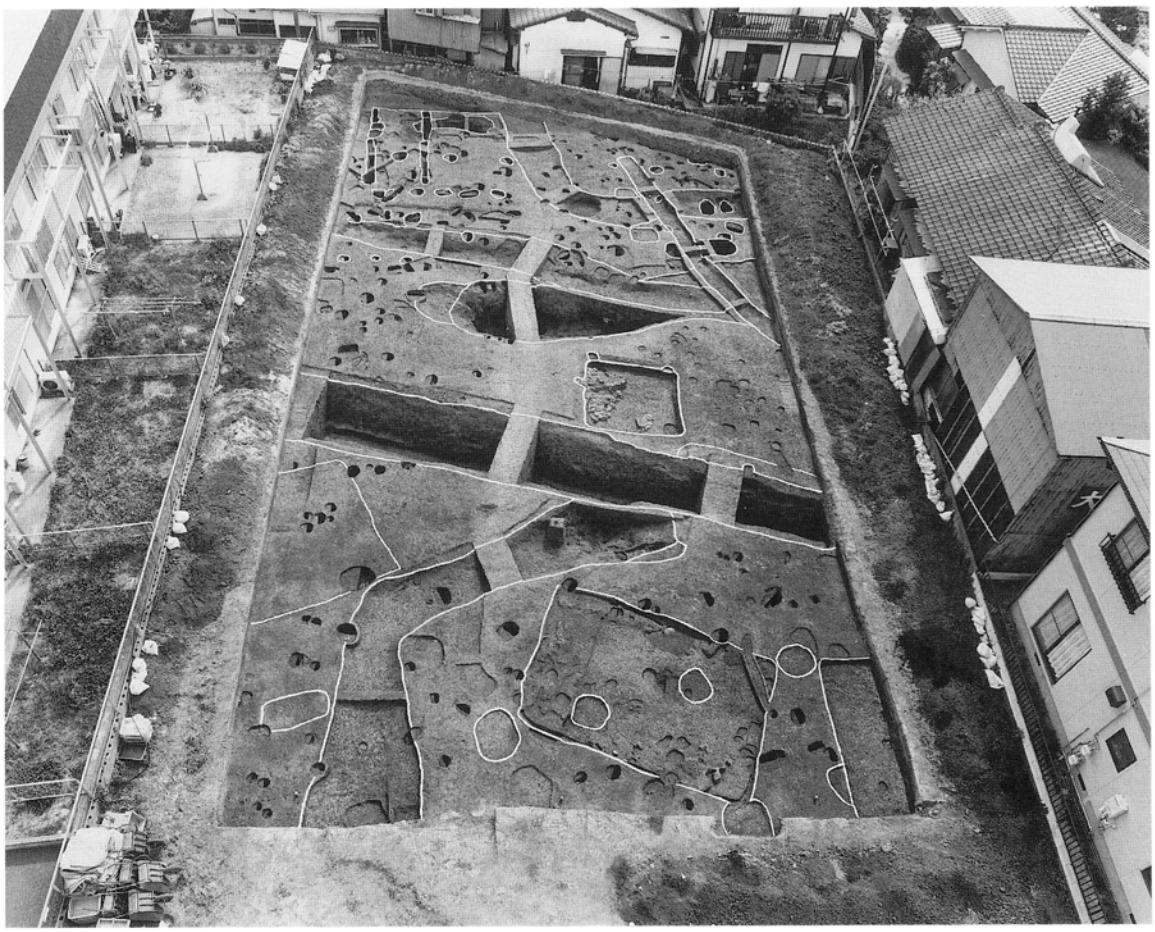
1



2

1．土壙6遺物出土状況（南から）　　2．土壙7（南から）

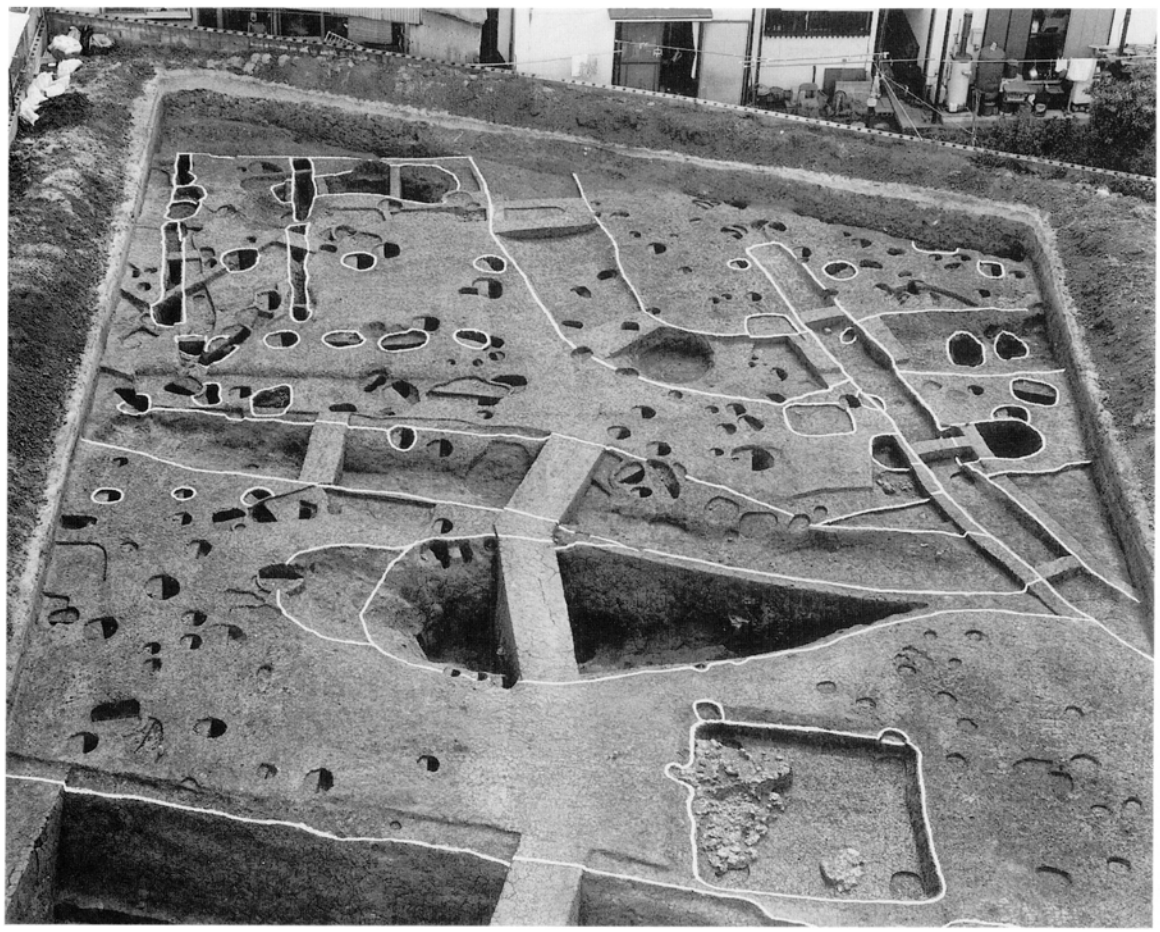
1



2

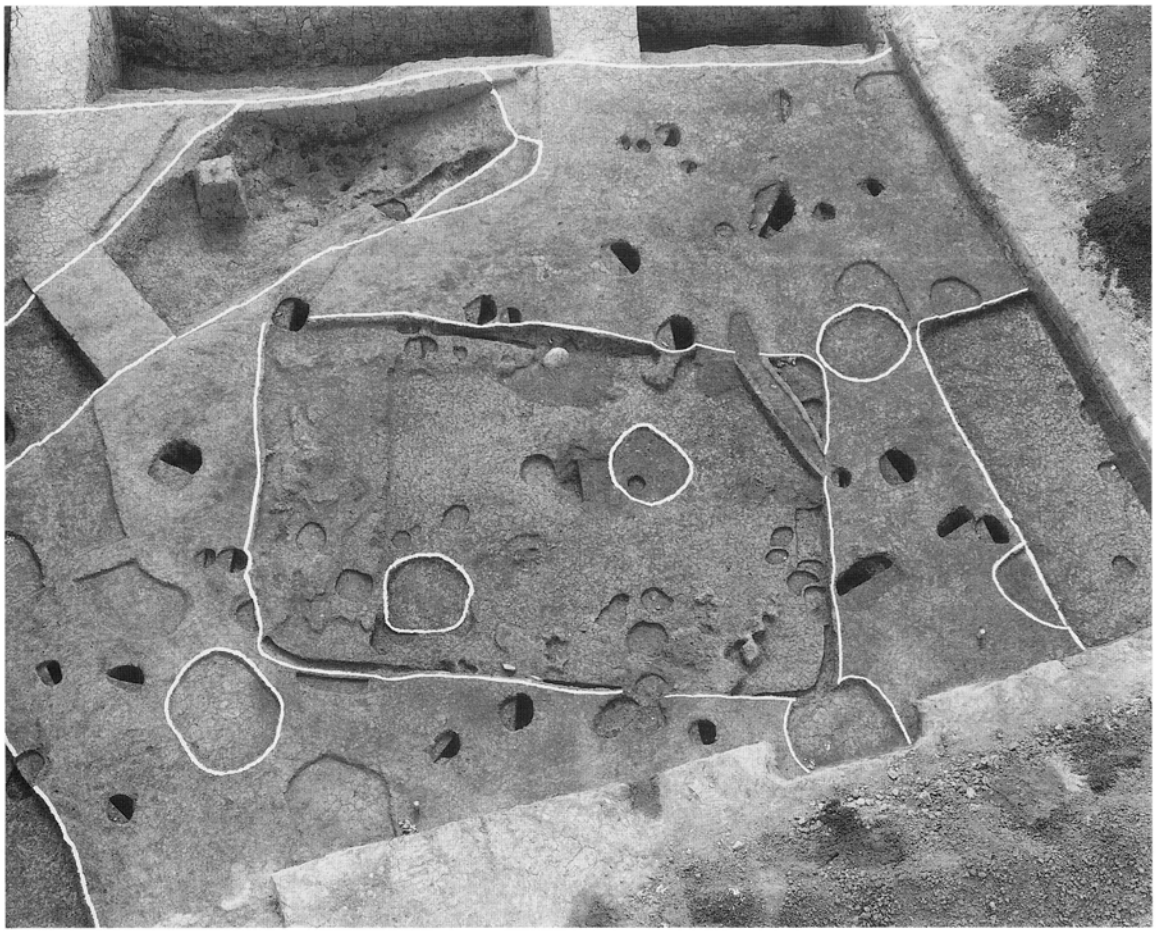
1．第41次調査地点から見た那珂八幡古墳、剣塚古墳（南から）
2．第41次調査地点（南東から）

1

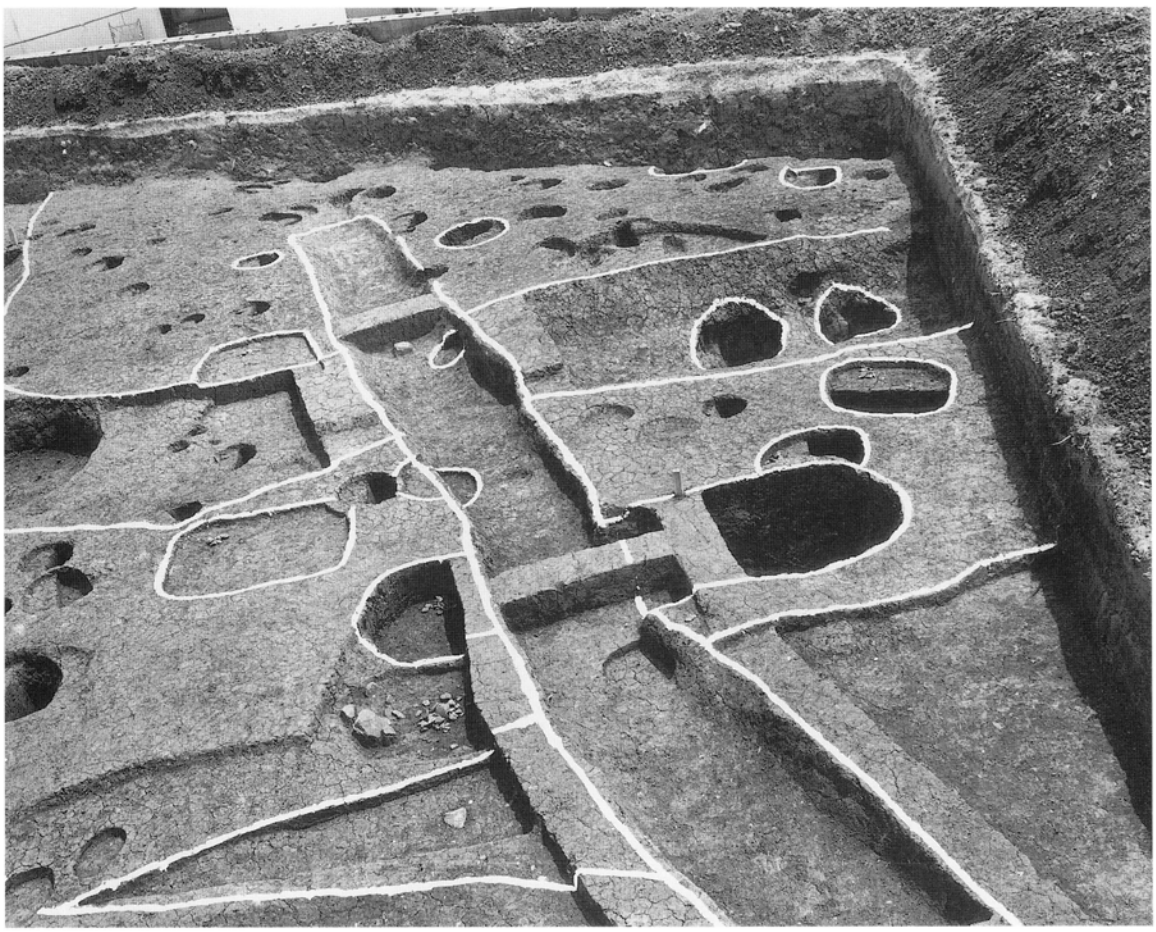


2

1．第41次調査地点全景（西から）
2．第41次調査地点東側全景（西から）



1



2

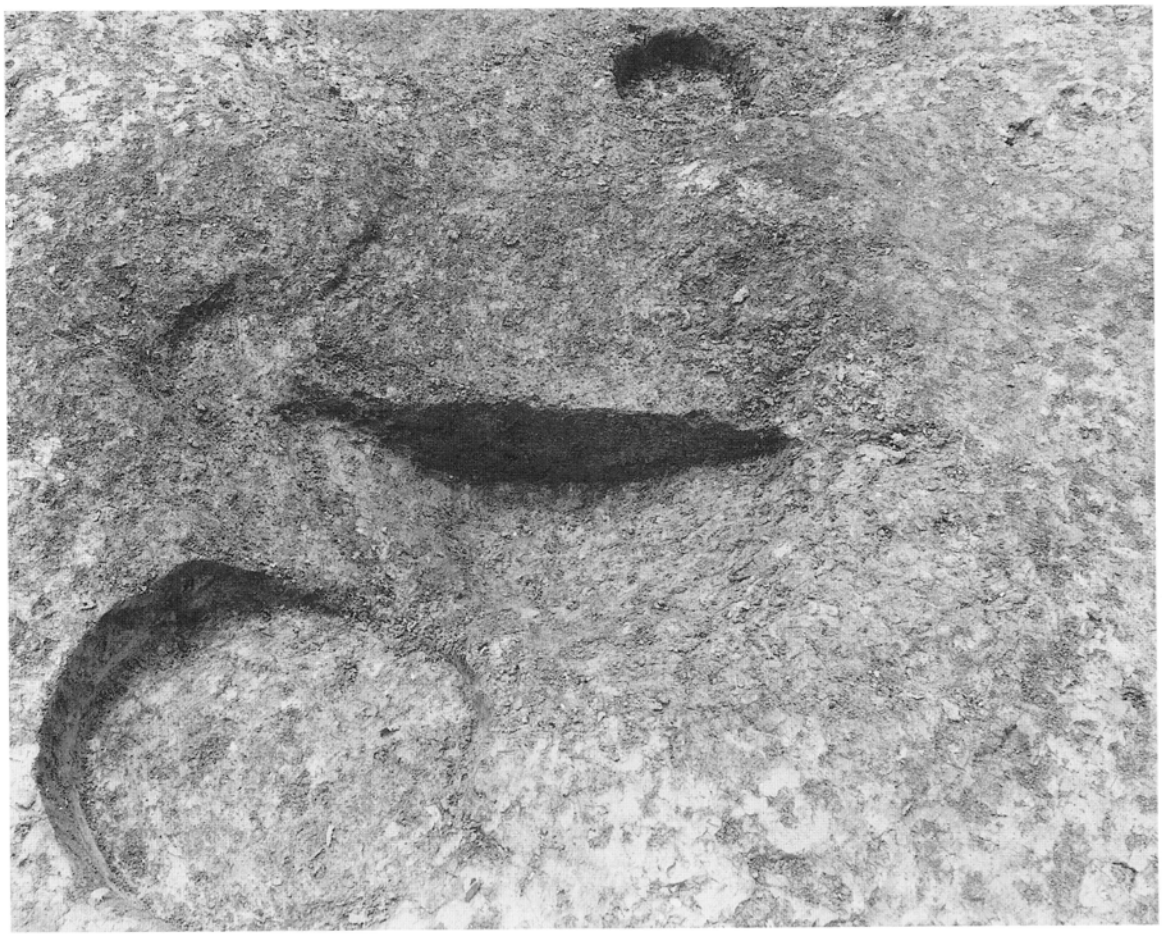
1．SB－019 検出状況（西から）
2．SB－035、036 検出状況（西から）

1

2

1．SB－013、022～024 検出状況（西から）
2．SC－009 完掘（西から）

1



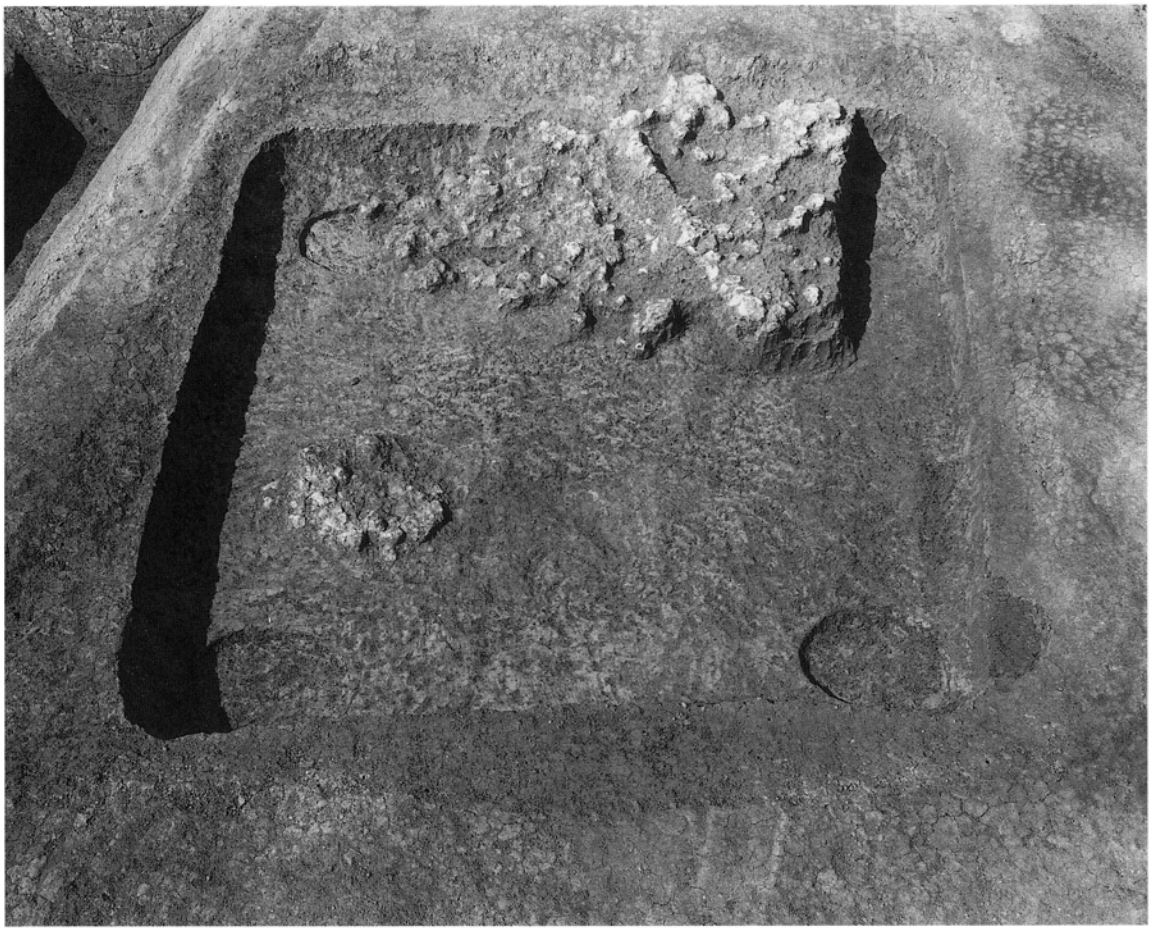
2

1．SC－009遺物出土状況（東から）
2．SC－009中央炉（南から）

1

2

1．SC－010完掘（西から）
2．SC－021完掘（南から）



1

2

1．SC－009竈検出状況（南から）
2．SC－009竈遺存状況（南から）

1

2

1．SE－016上層遺物出土状況（南から）
2．SE－016下層遺物出土状況（南から）

1

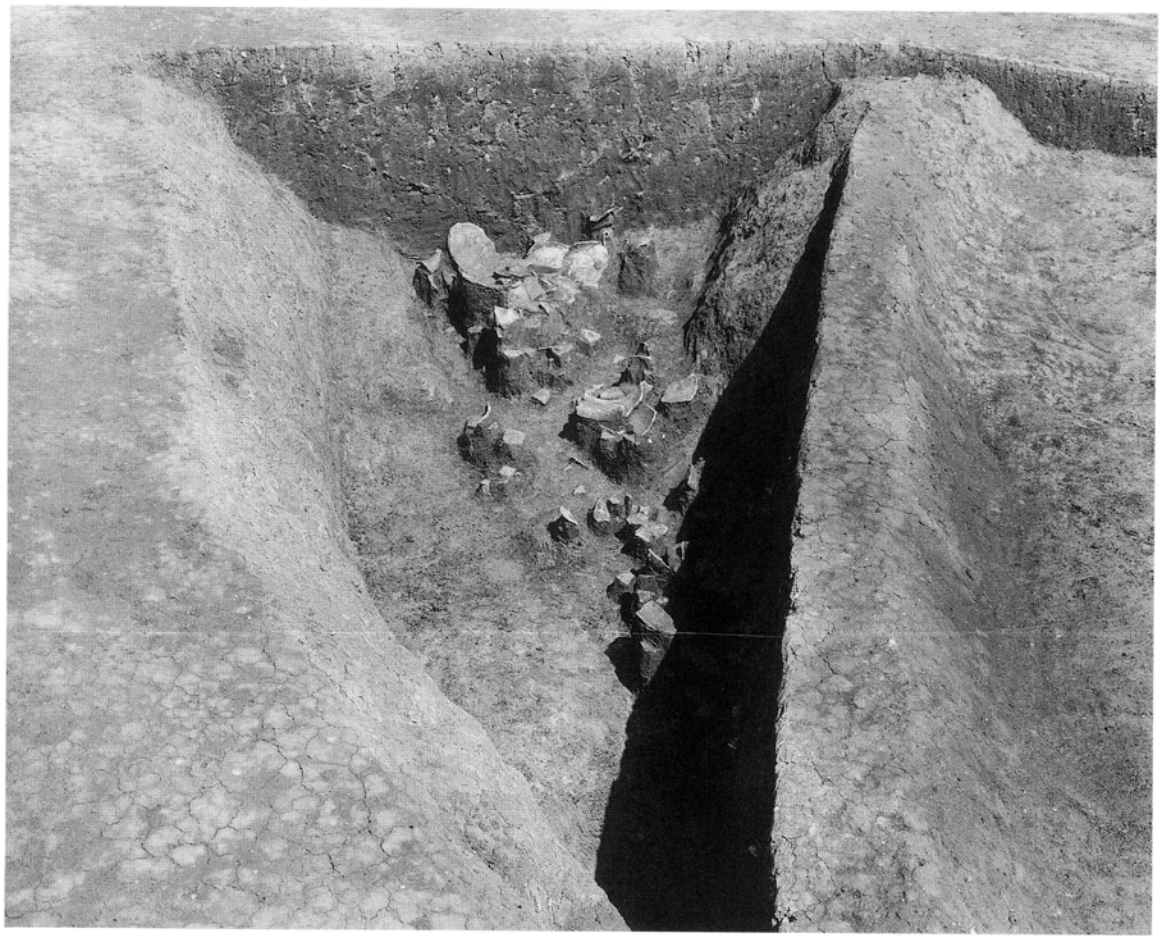
2

1．SE－029完掘（東から）
2．SE－029遺物出土状況（東から）

1

2

1．SD－004土層堆積状況（北から）
2．SD－004、２トレンチ第２層下面遺物出土状況（南から）



1

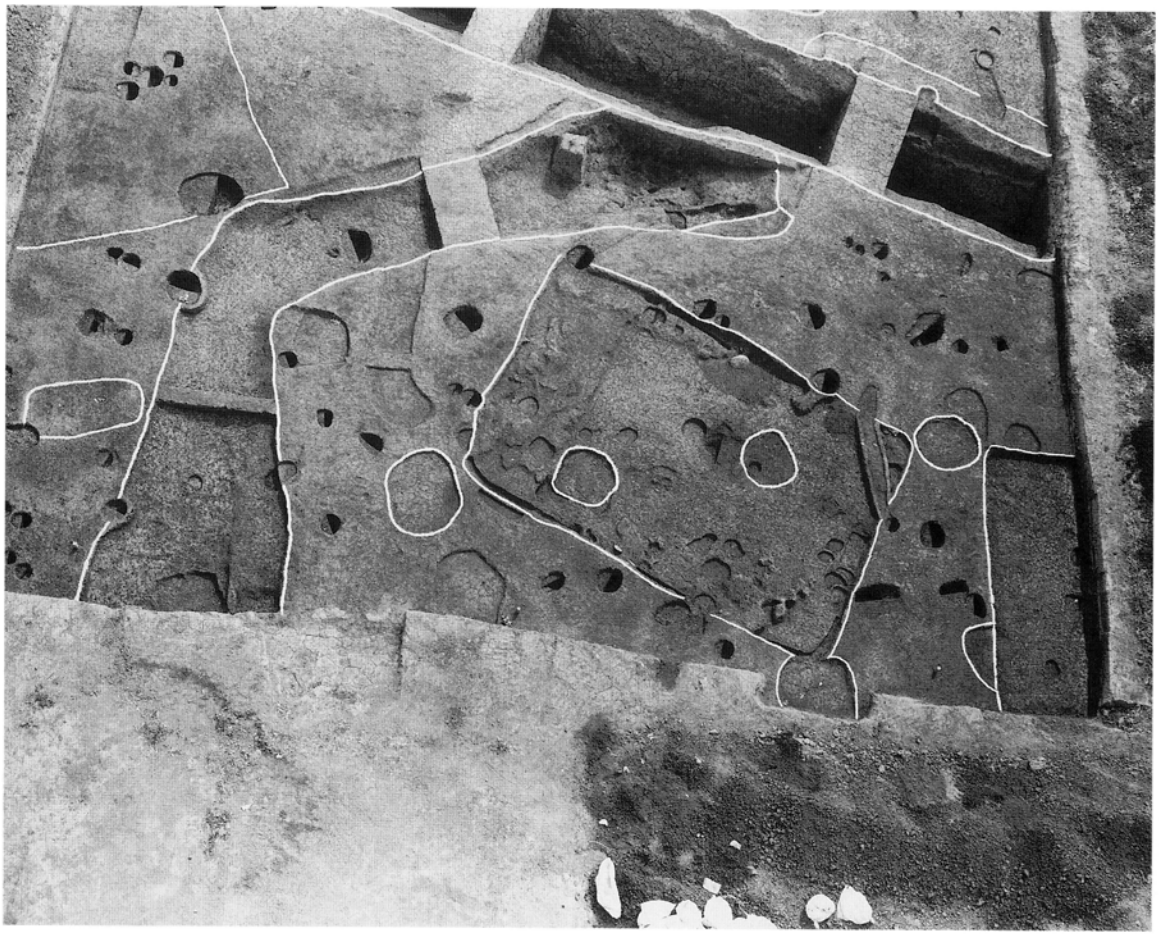
2

1．SD－004、２トレンチ第３層遺物出土状況（南から）
2．SD－004、３トレンチ第２層下面遺物出土状況（北から）

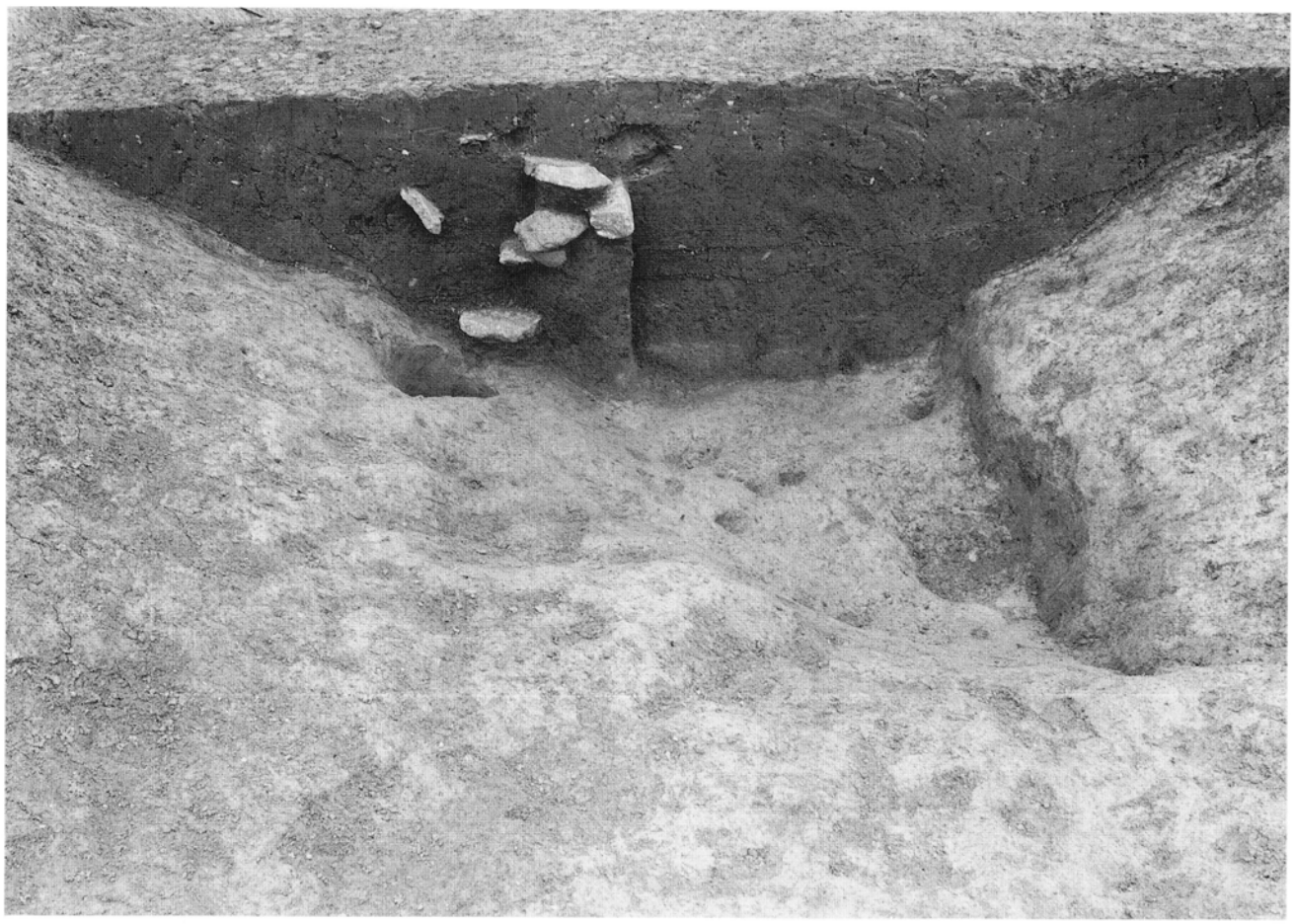
1

2

1．SD－004、3トレンチ完掘（北から）
2．SD－002完掘（西北から）

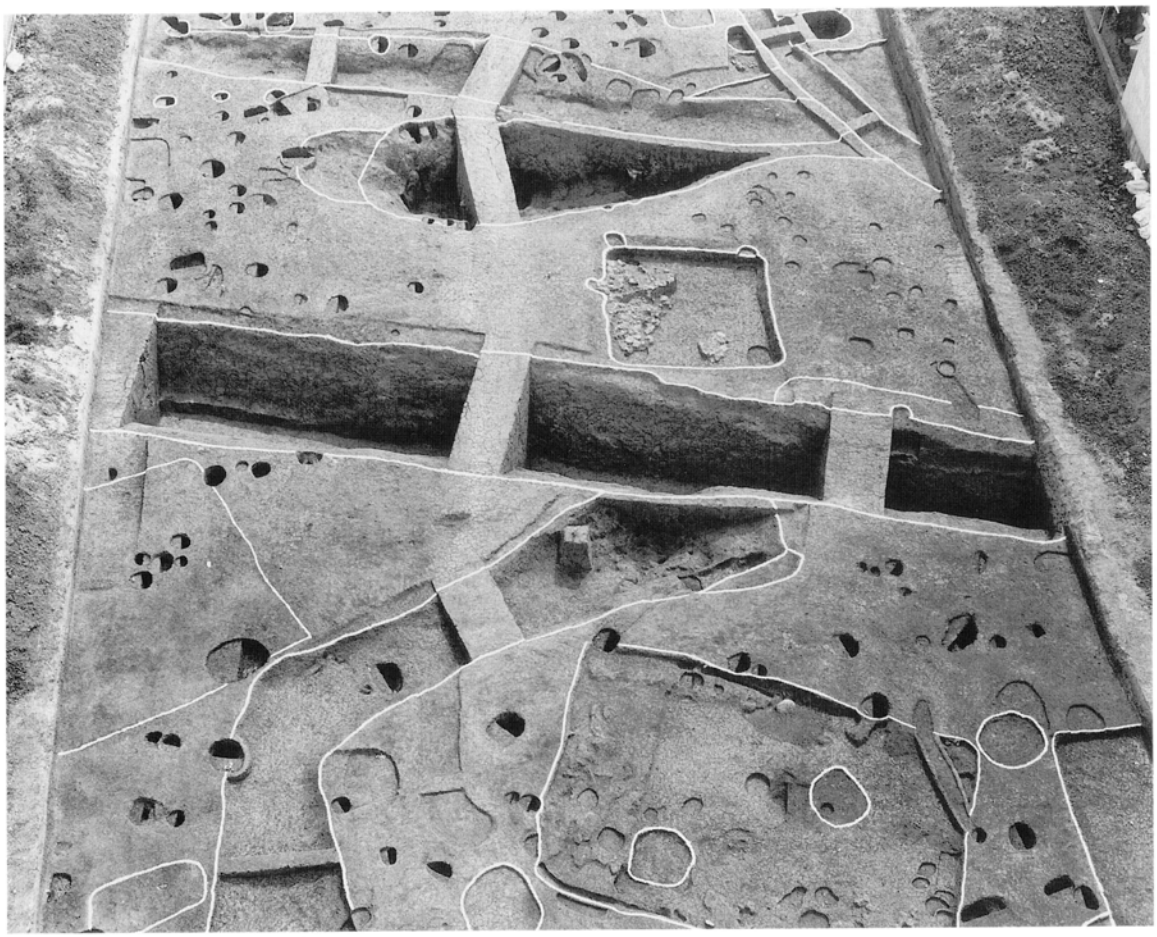


1



2

1．SD－007完掘（西から）
2．SD－007土層堆積状況（西から）

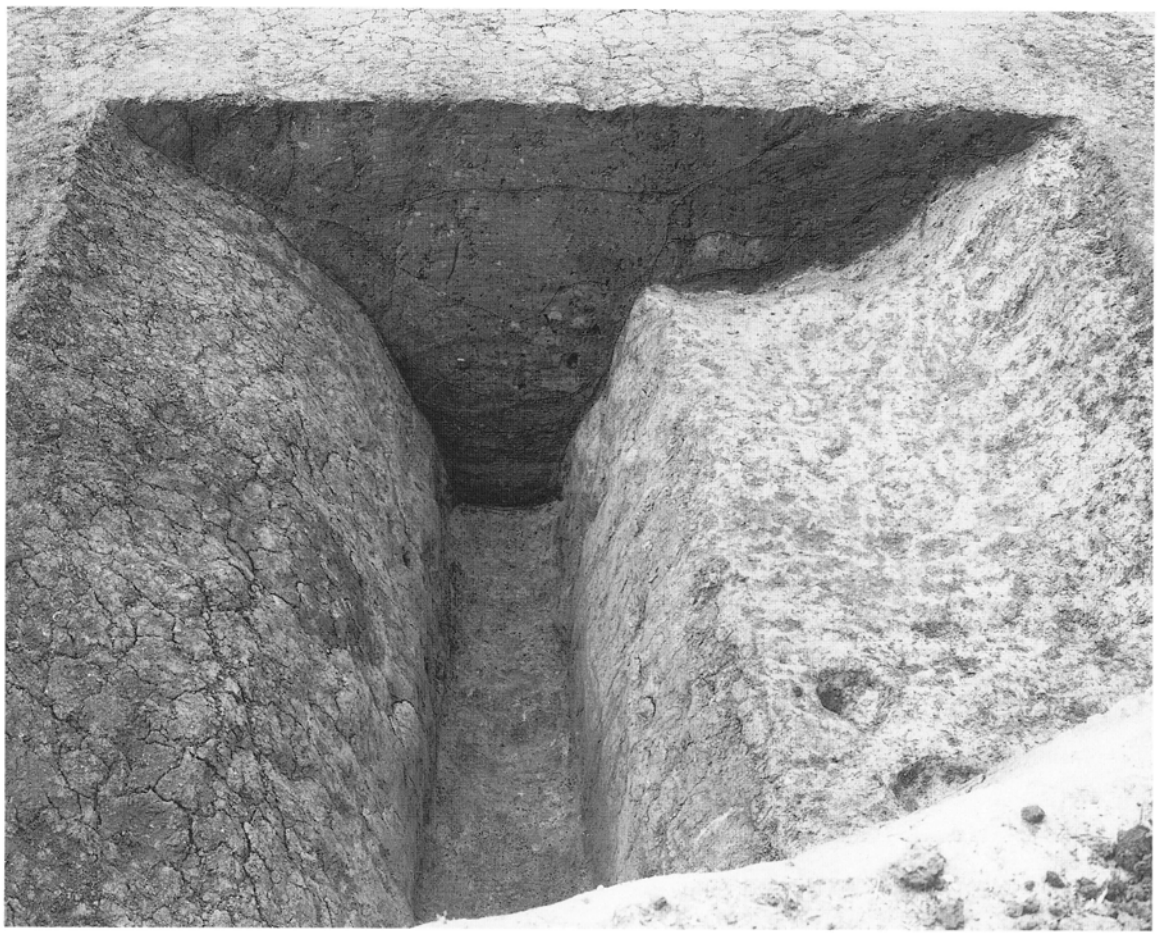


1

2

1．SD－006完掘（西から）
2．SD－006、１トレンチ土層堆積状況（南から）

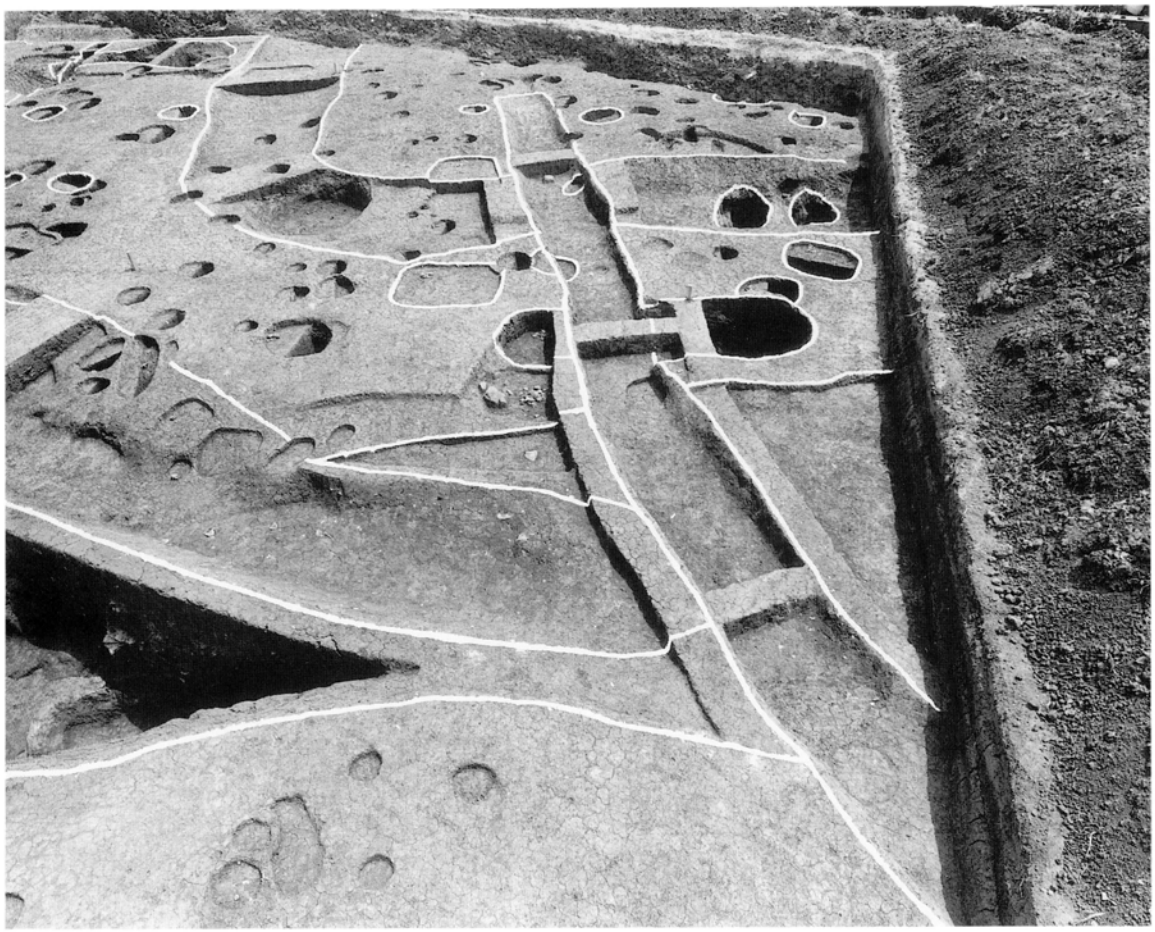
1



2

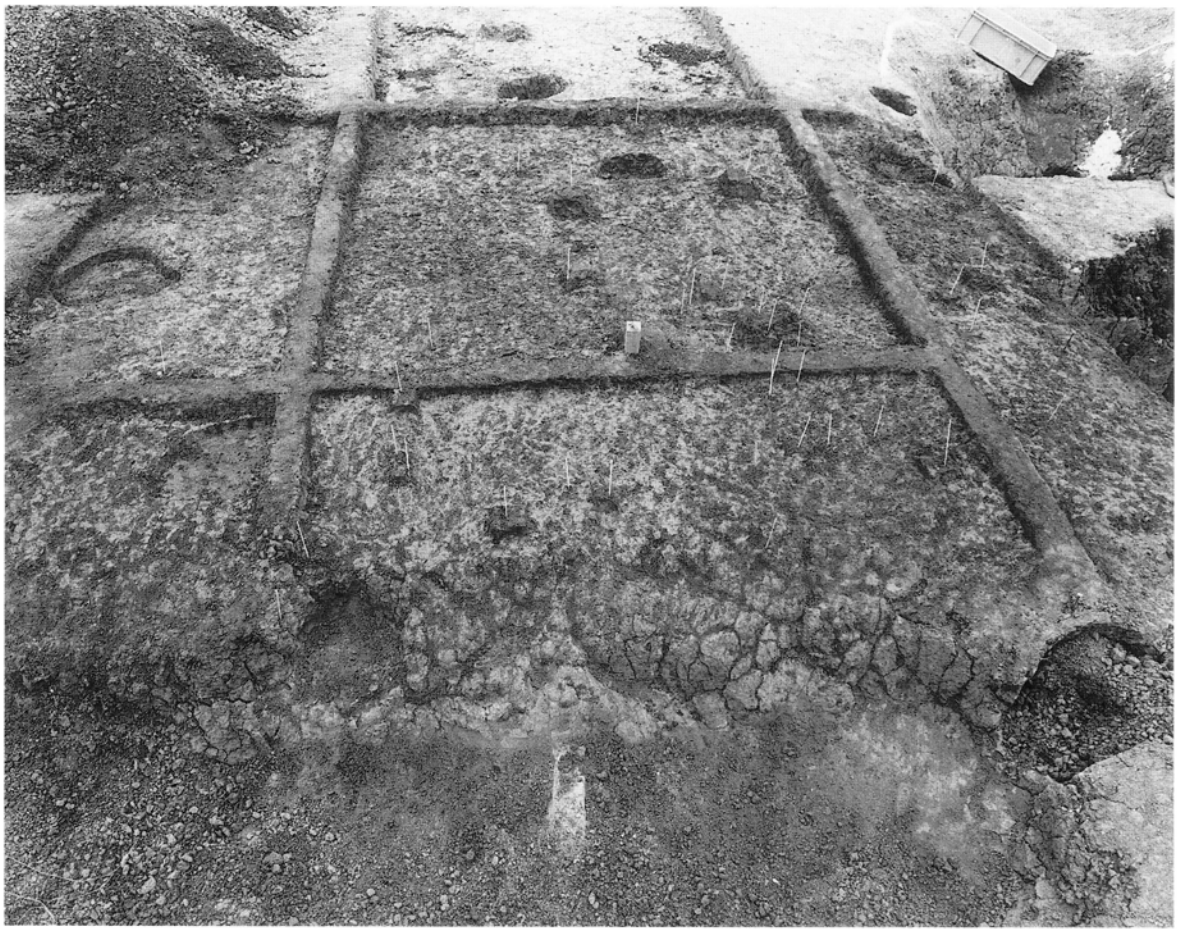
1．SD－006、2トレンチ土層堆積状況（南から）
2．SD－006、3トレンチ土層堆積状況（南から）

1

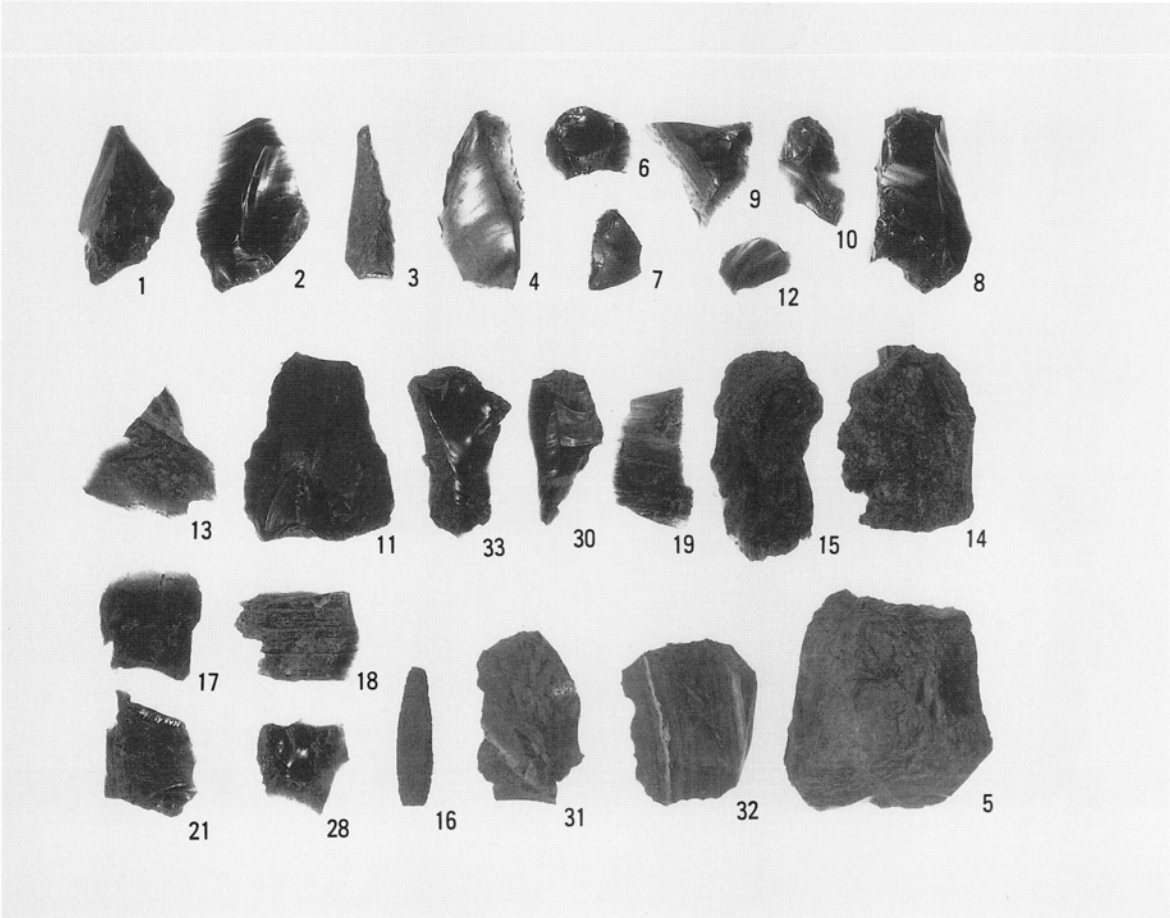


2

1．SD－003完掘（南から）
2．SD－001完掘（西から）

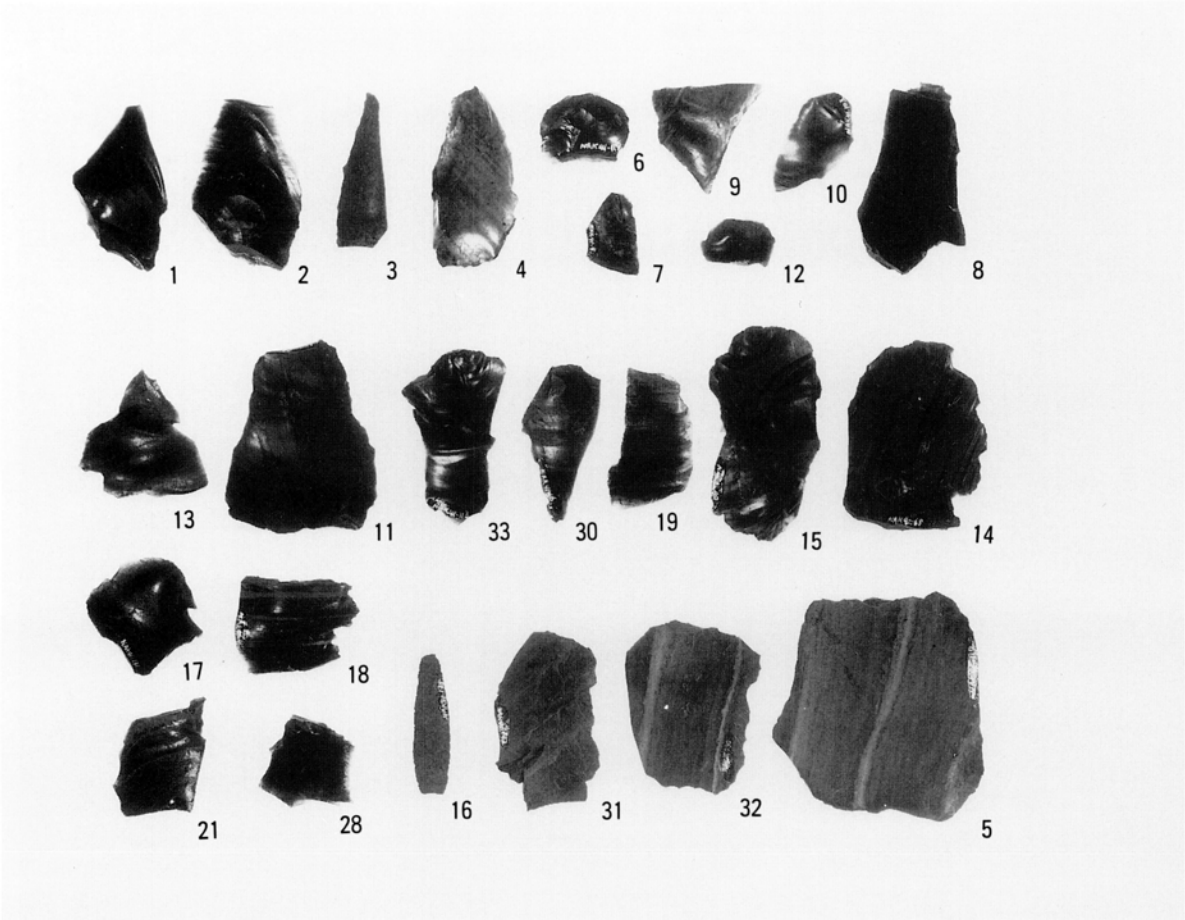


1

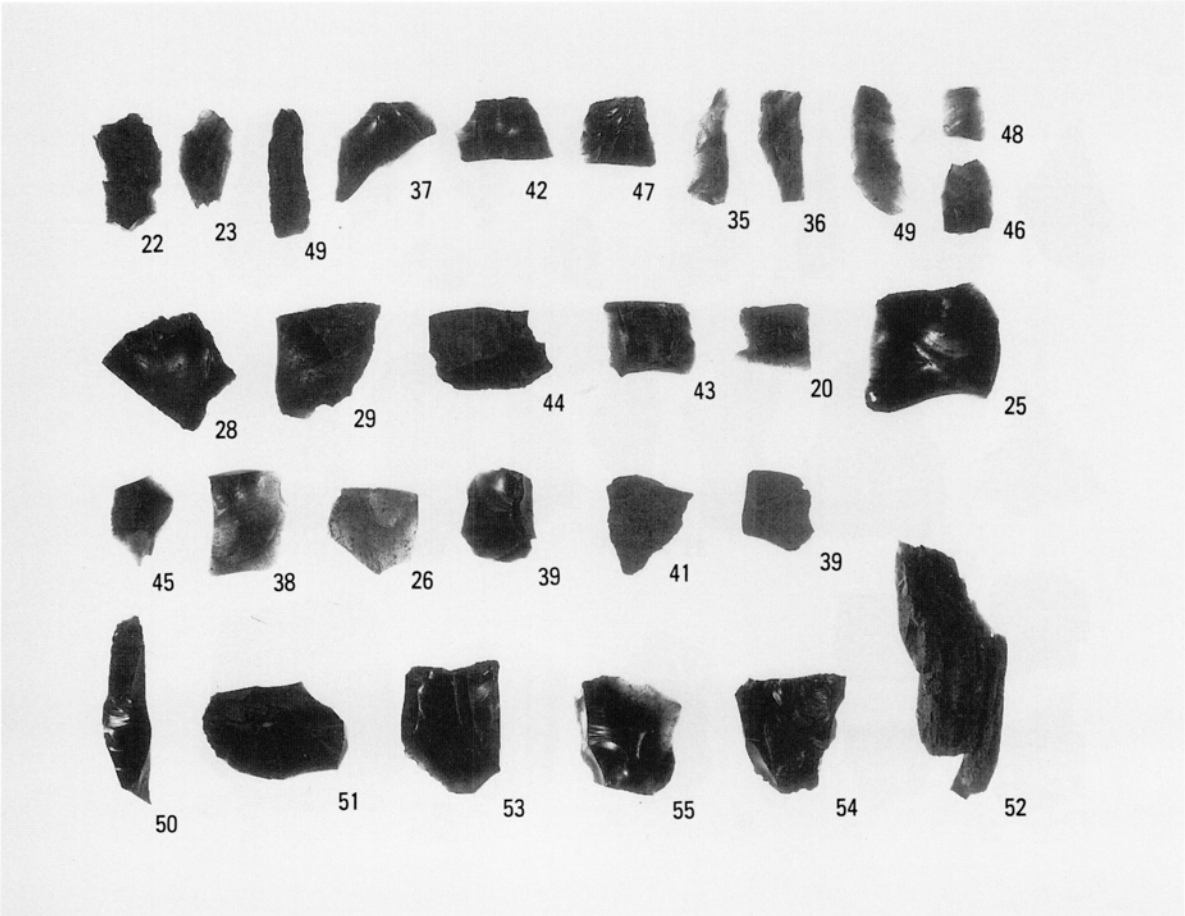


2

1．旧石器出土状況（南から）
2．旧石器時代の遺物１（表）



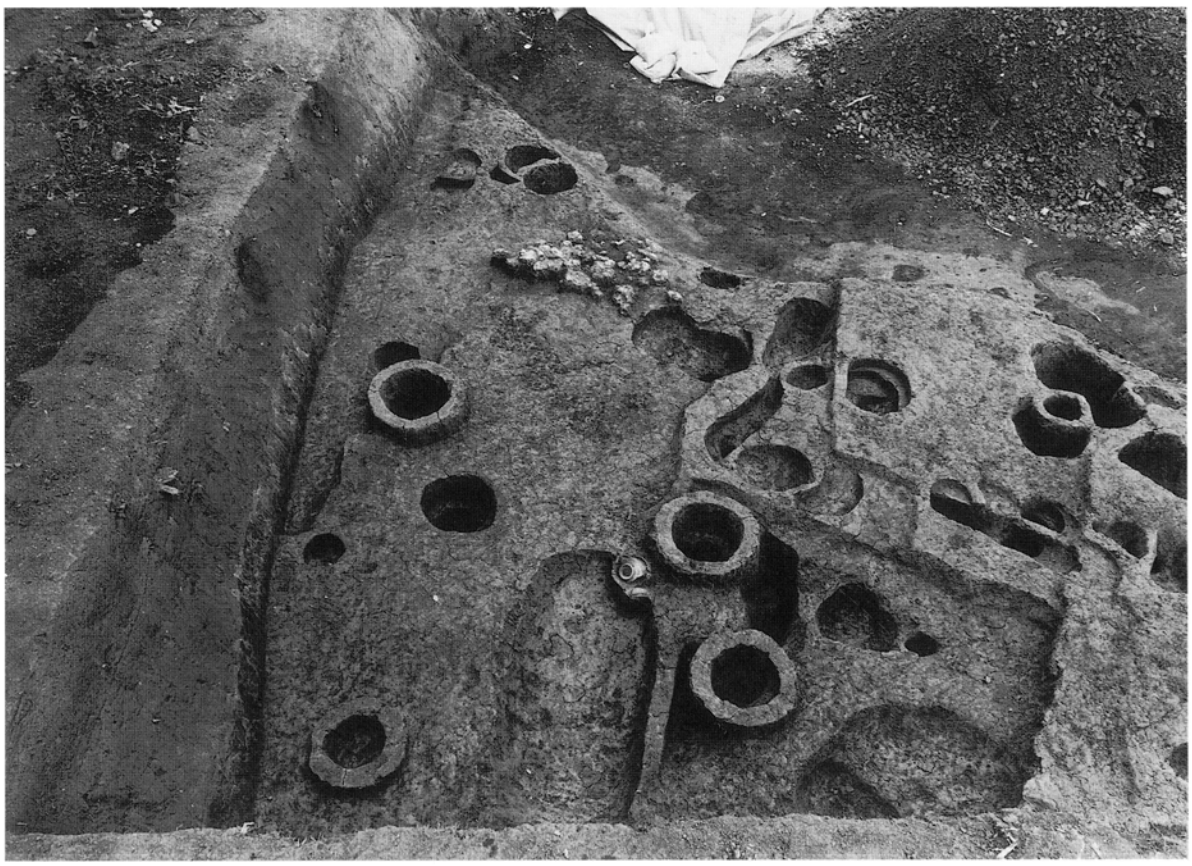
1

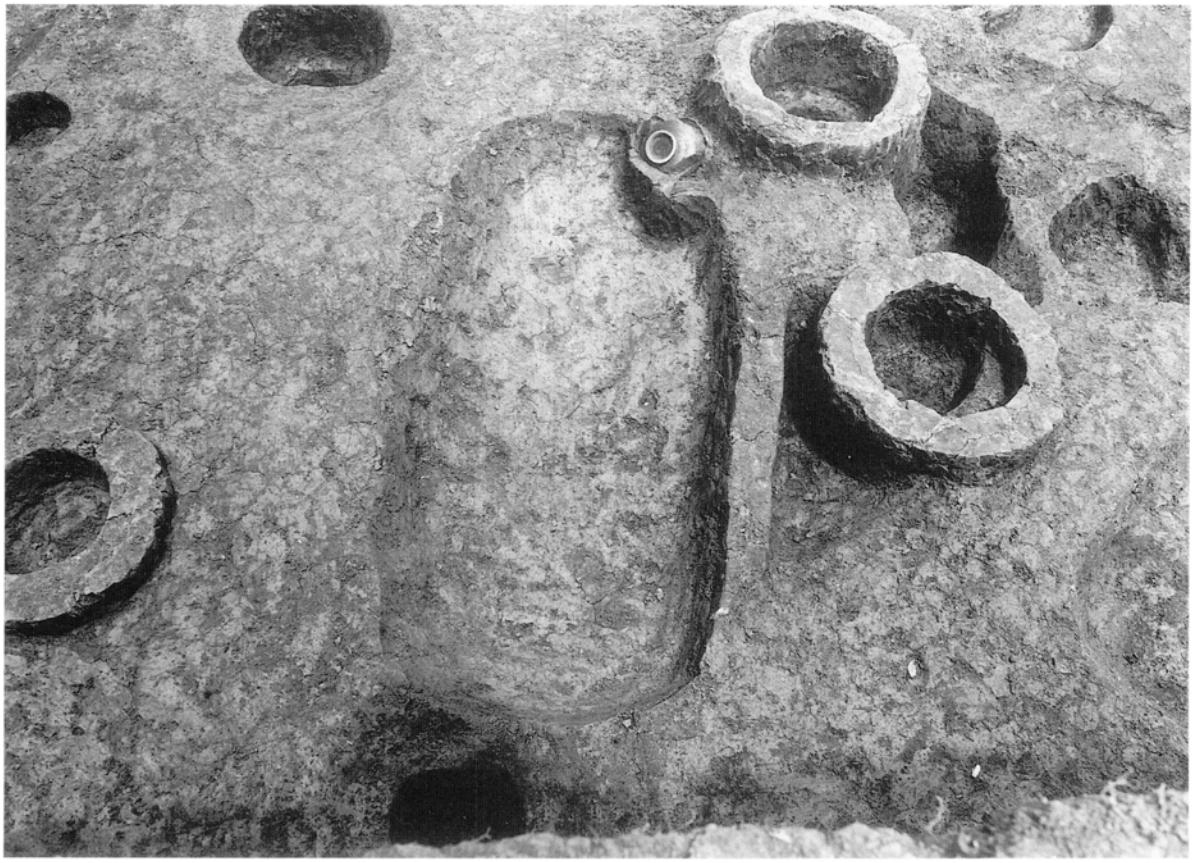


2

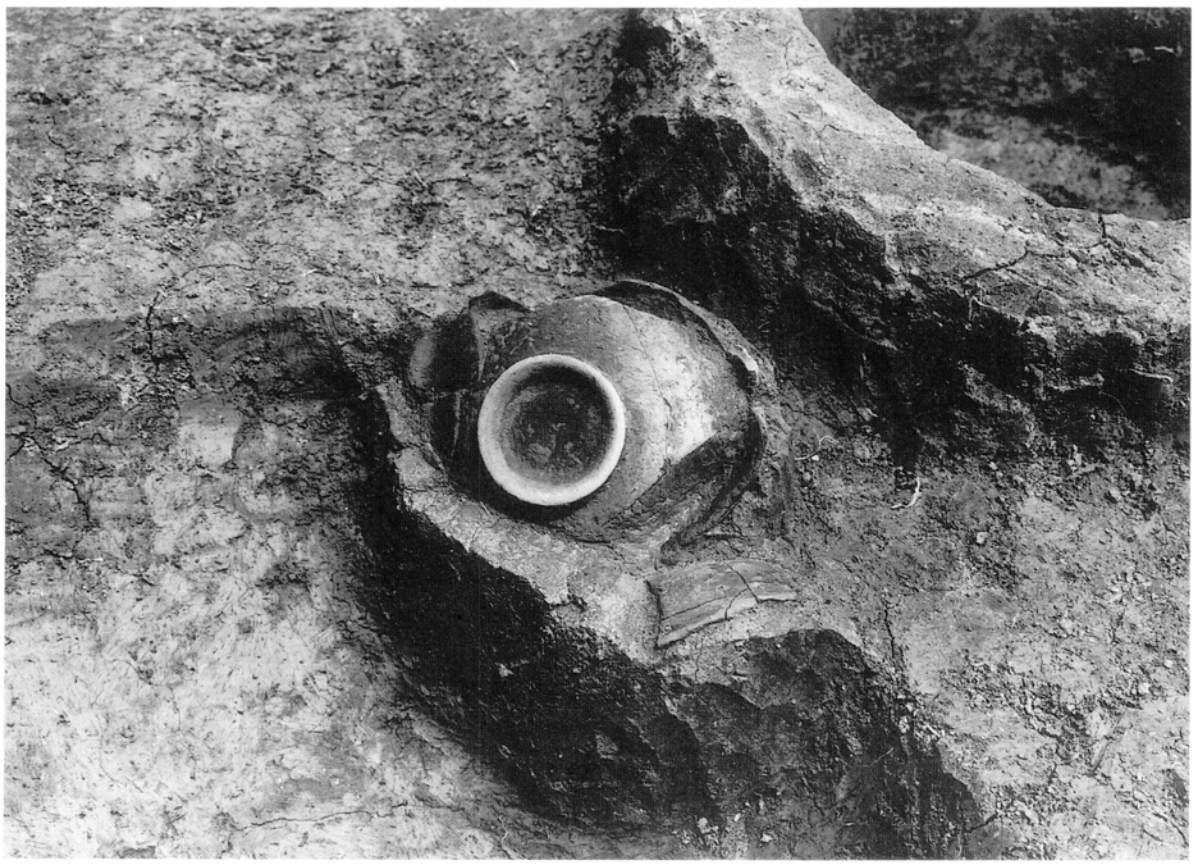
1．旧石器時代の遺物１（裏）
2．旧石器時代の遺物２

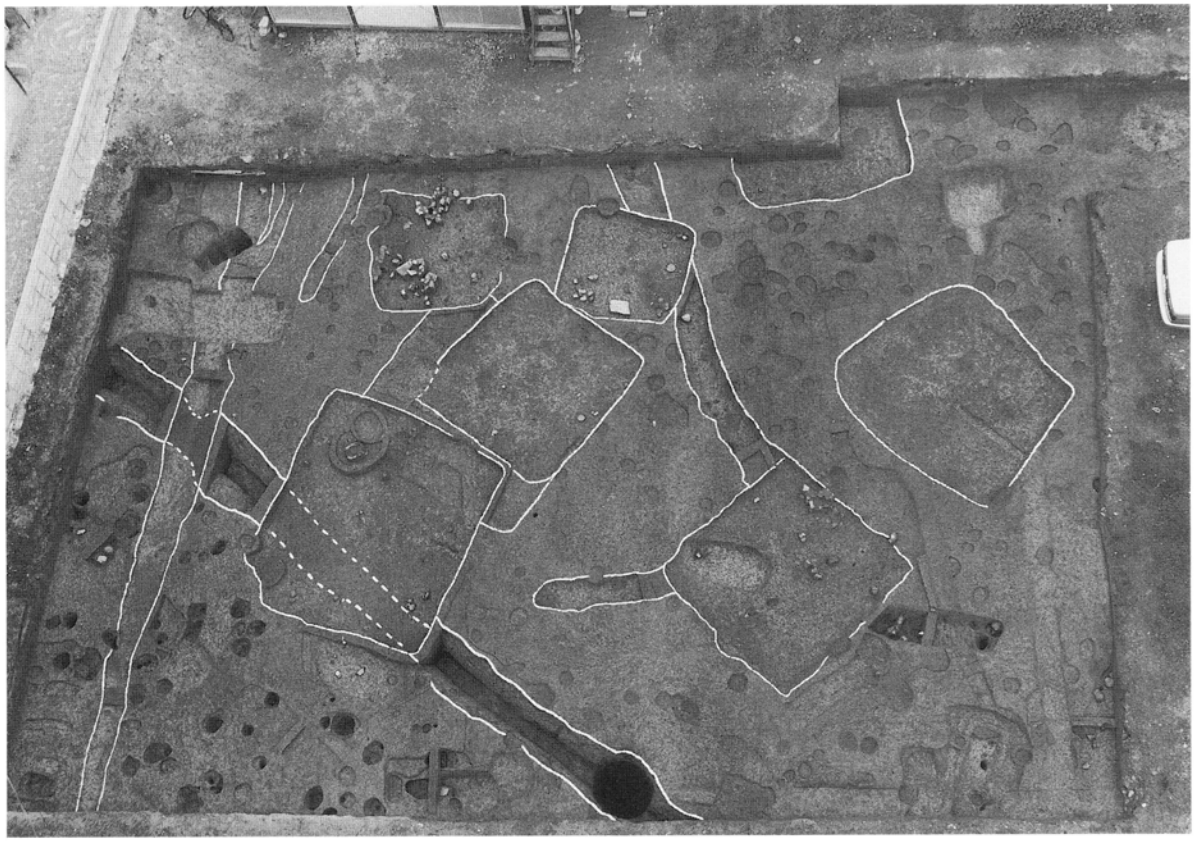
▲ 1．調査区全景（東から）　　▼ 2．SC01・02 出土状況（南から）



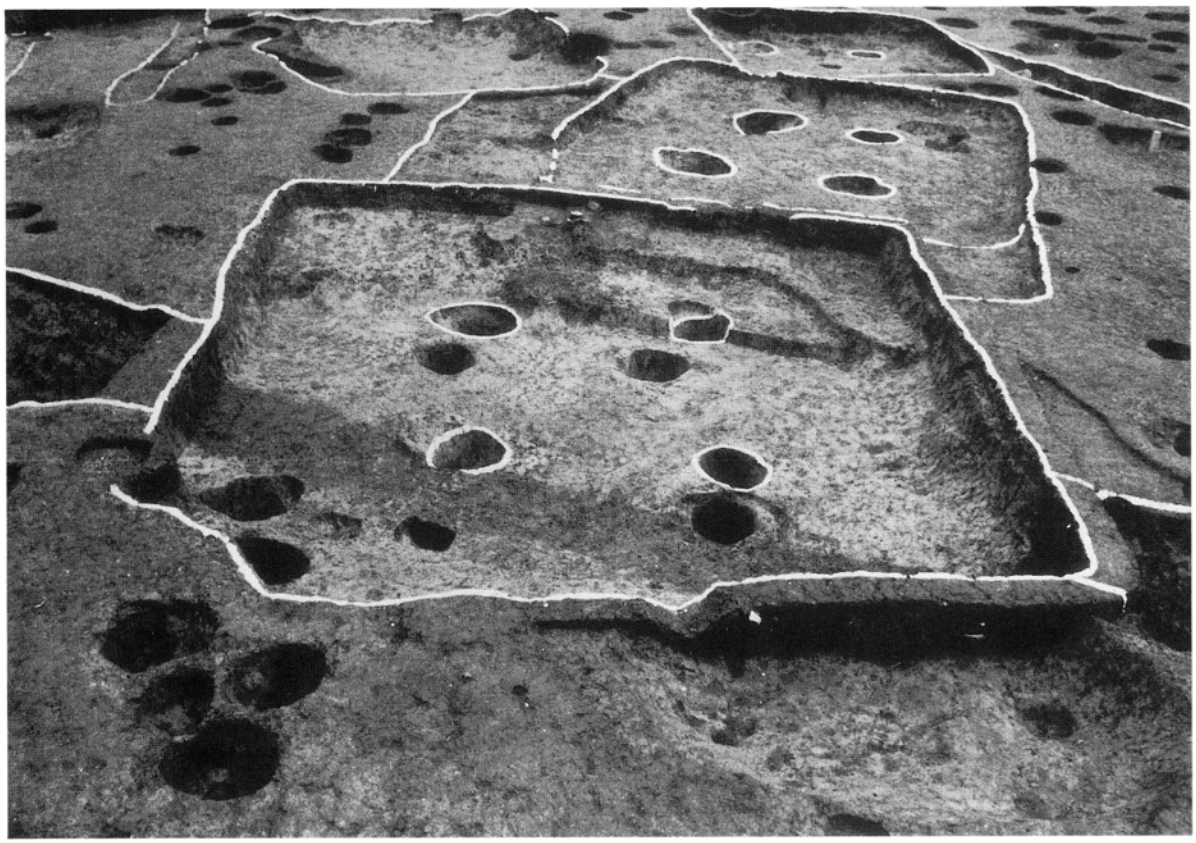


▲ 1．SK04 出土状況（南から）　　▼ 2．SK04 遺物出土状況（南から）

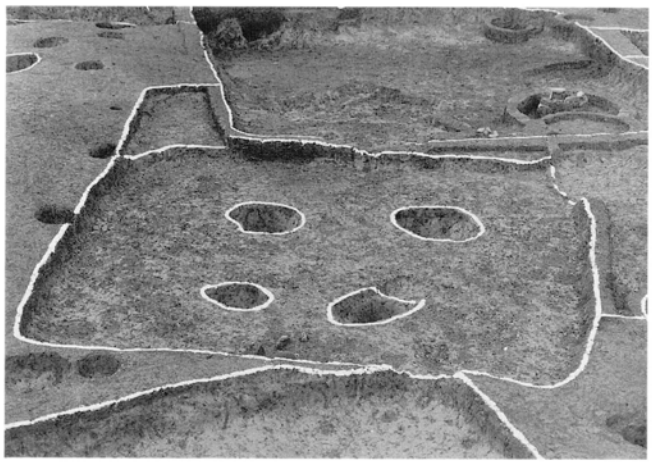




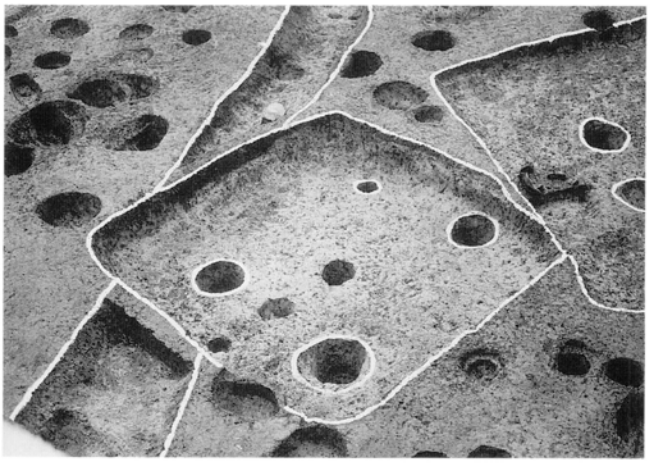
1. 第46次調査地点全景（南から）



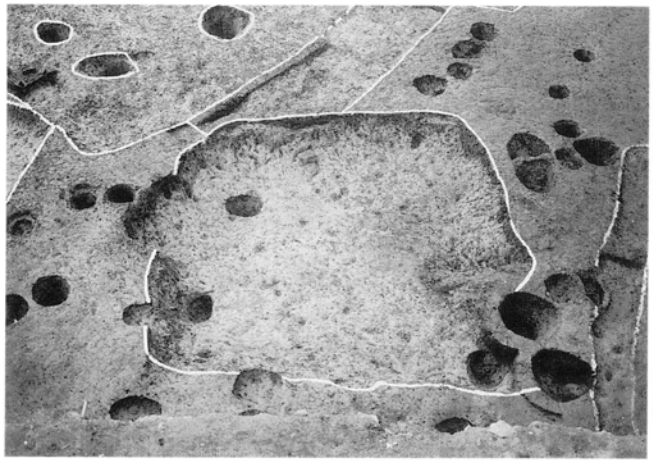
2. SC－01・SC－04完掘状況（南から）



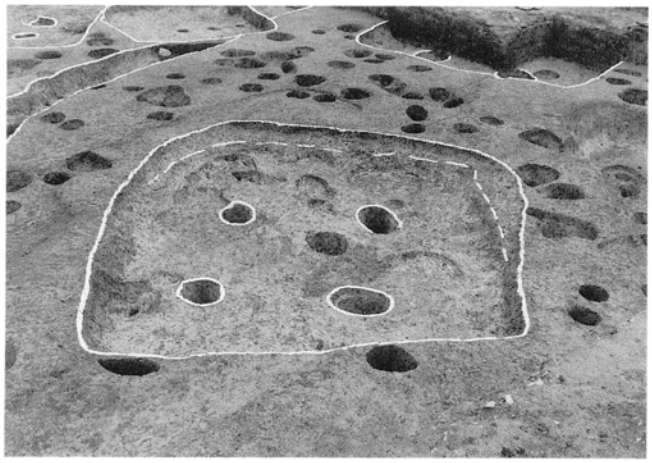
1．SC－02完掘状況（北から）



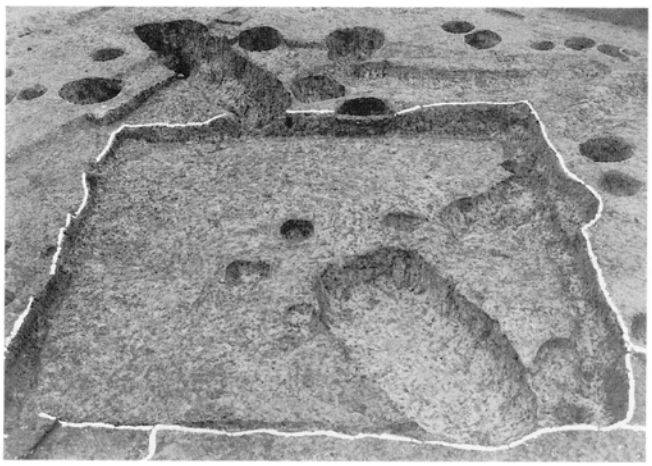
2．SC－03完掘状況（北から）



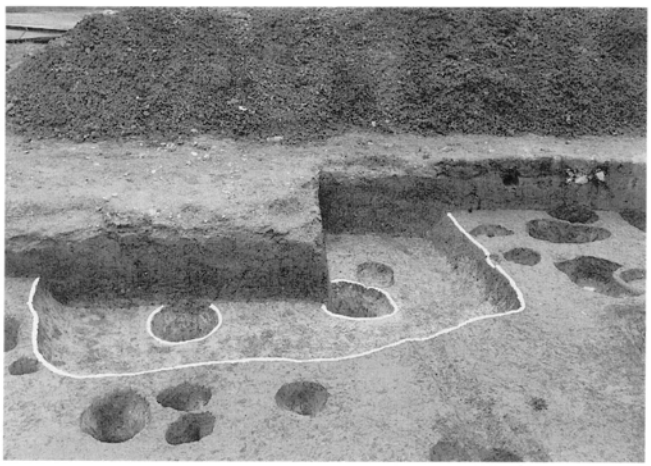
3．SC－05完掘状況（北から）



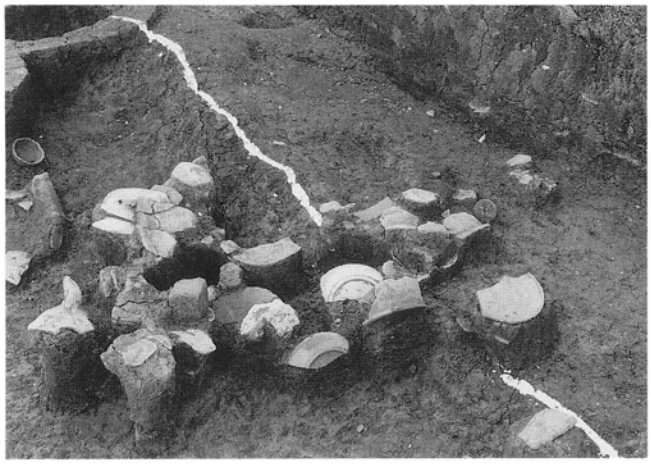
4．SC－13完掘状況（東南から）



5．SC－14完掘状況（北西から）



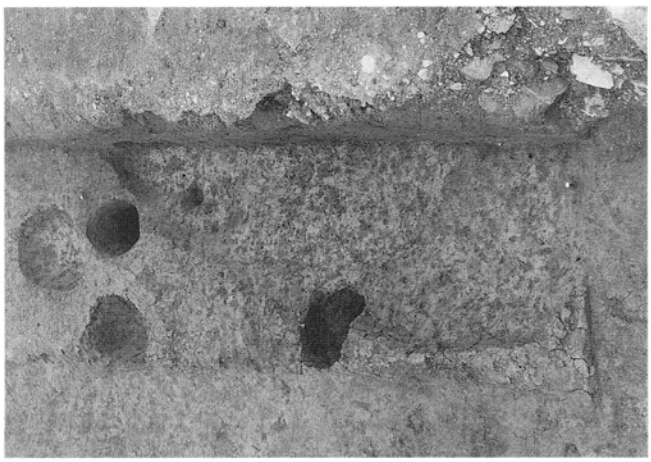
6．SC－18完掘状況（南から）



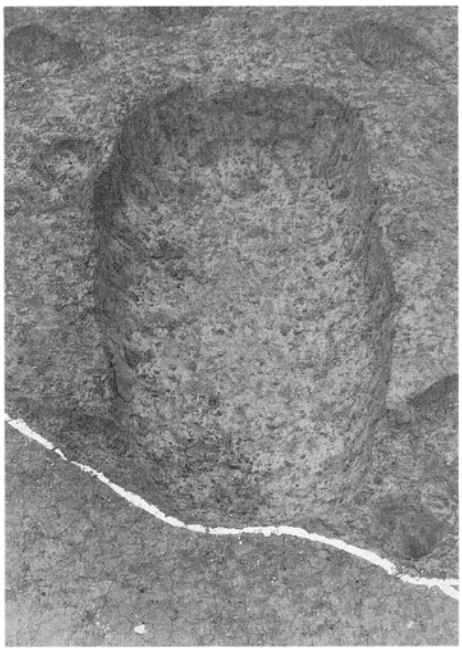
1．SC－05遺物出土状況（東から）

2．SC－03遺物出土状況（北西から）

3．SE－16完掘状況（北から）



4．SK－12完掘状況（西から）

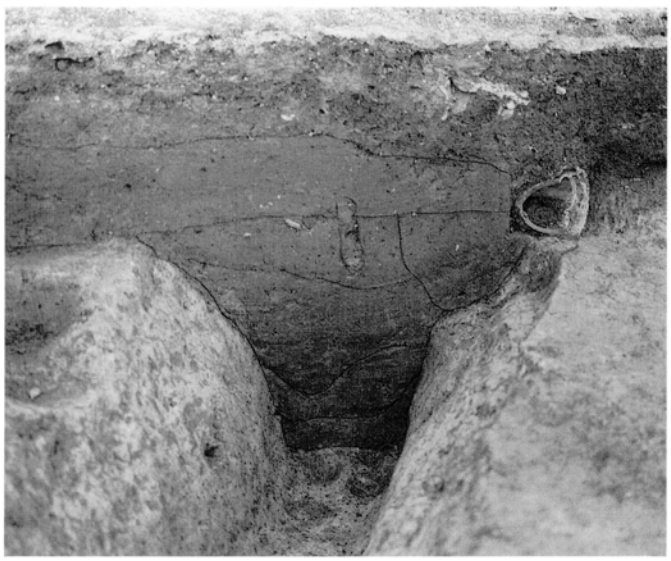


5．SK－17完掘状況（西から）

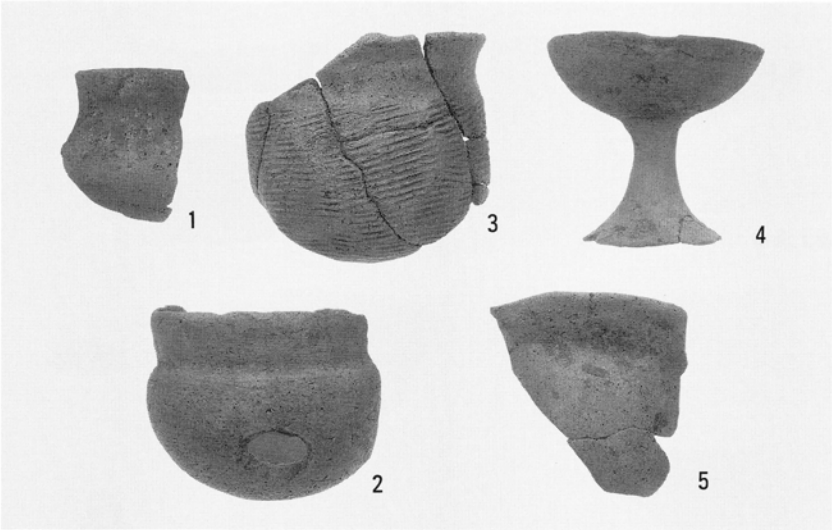
6．SK－22完掘状況（西から）

1．SK－19完掘状況（南から）

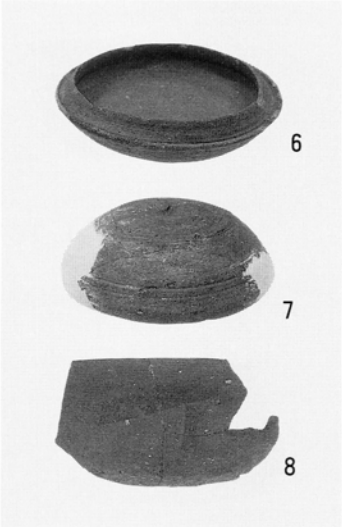
2．SK－25完掘状況（東から）



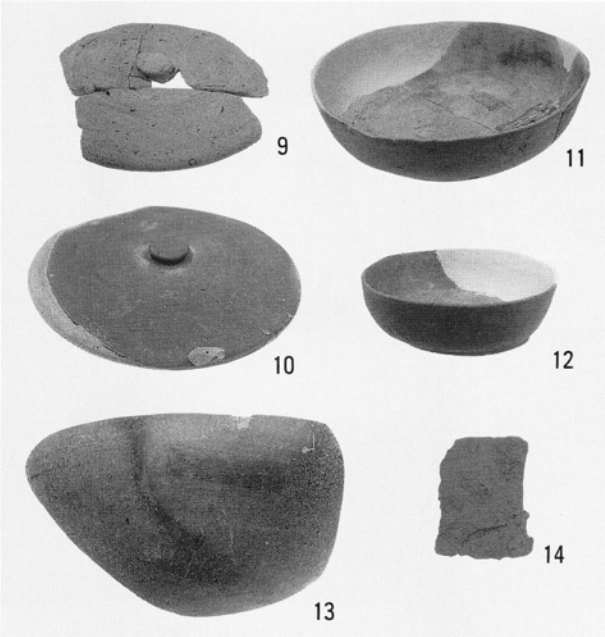
3．SD－08断面（東から）



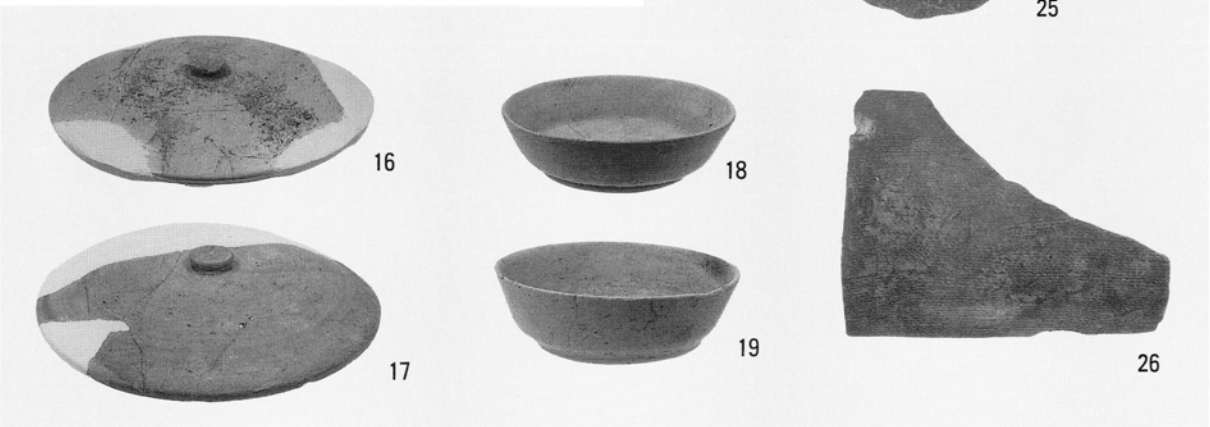
1．SC－01出土遺物

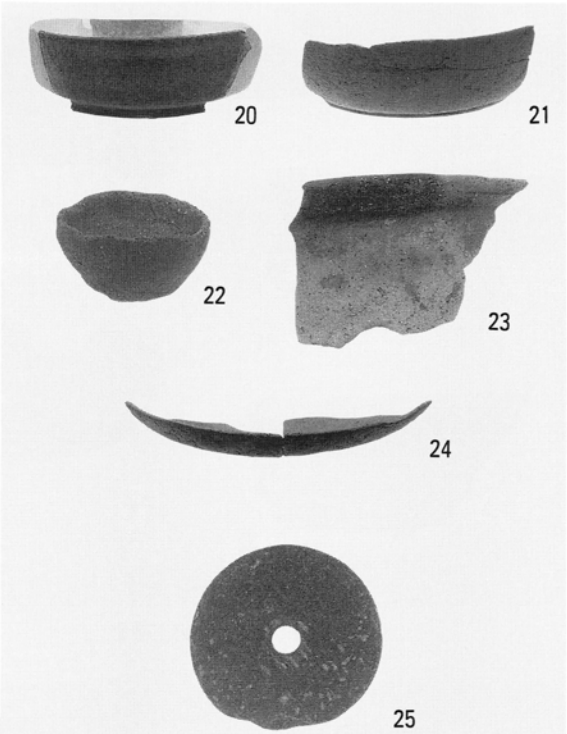


2．SC－02出土遺物

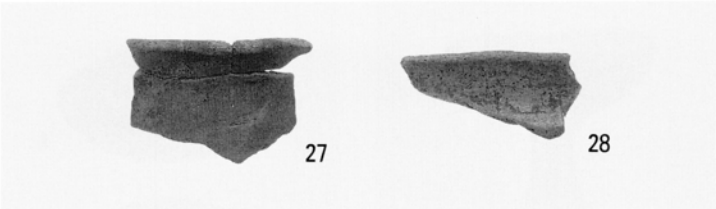


3．SC－03出土遺物

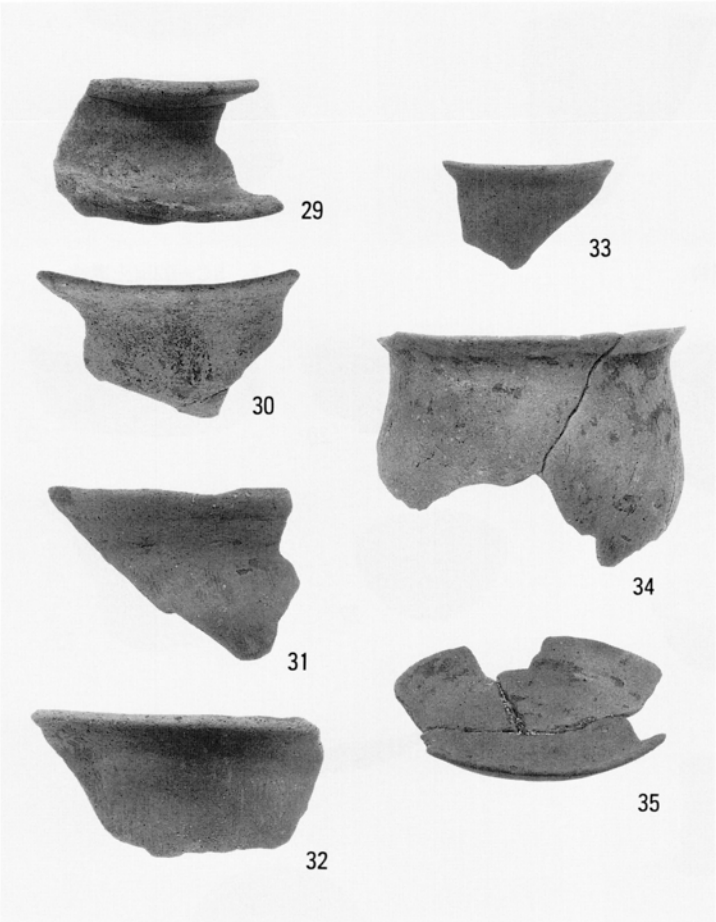




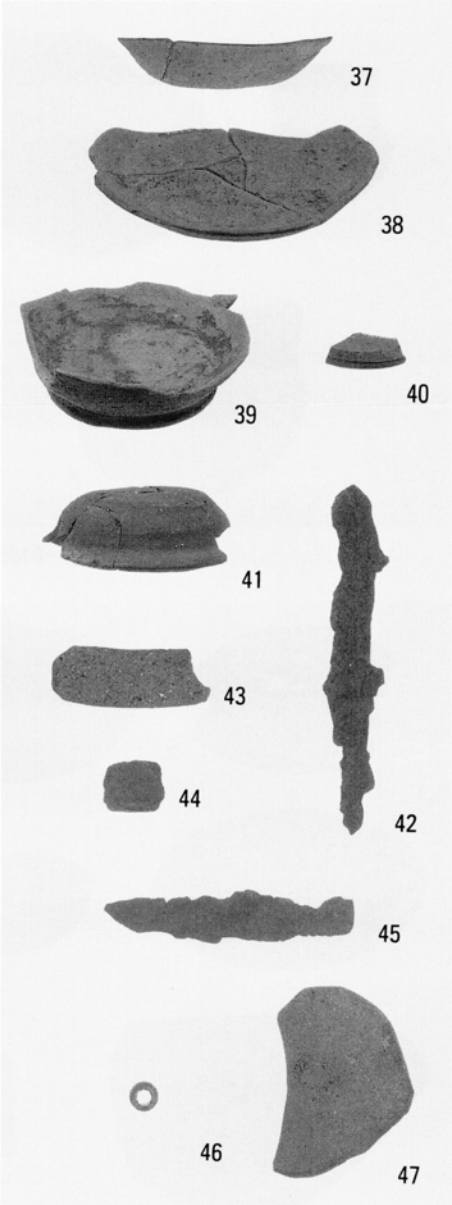
4．SC－05出土遺物



1．SC－13出土遺物

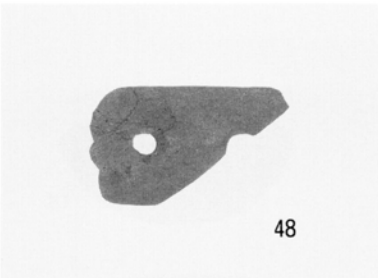


2．SC－14出土遺物

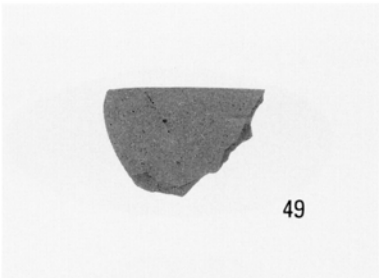


4．SK出土遺物

3．SE－16出土遺物



5．SD－08出土遺物



6．遺構面出土遺物

那 珂 14

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第399集

1995（平成７年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
☎（092）771－4667

印　刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区松田一丁目９－30
☎（092）611－3838